

松島十湖の人生と句の風景

俳人十湖讃歌

秋童子



十湖の姓は松島、本名は吉平である。

俳人として名のるときは「松島十湖」で通しこの俳号で呼ばれる。

この名で彼の歴史と生涯を辿った。

俳人十湖讃歌

松島十湖の人生と句の風景

姨	息	活	二	東	昆	尊	曲	郡	管	議	戸	雷	吉	追
捨	子	命	俣	北	虫	徳	松	長	鮑	員	長	大	平	憶
紀	の	料	南	漫	翁	の	の	異	の	活	の	江	直	
行	戦		北	遊		遺	別	彩	交	動	重		訴	
	死		騒			品	れ		わ		責			
			動						り					
190	179	167	151	128	95	78	64	47	40	33	28	18	10	1

芭蕉忌	216
養女つぎ	222
出雲の風	226
二人の貧乏神	234
俳句の盟友	240
十湖の事件帳	248
俳人の礼	263
鳴門の旧知	284
再会	292
芭蕉の道	306
雨の訪問者	322
遠陽市場大火	335
石楠花の人	341
十湖不器	351
あとがき	369

追憶

市立のサナトリウムは東京郊外の小高い丘にあり、病院というより病人の安息所という方が適しているかも知れない。

昭和十一年、四十七歳になる鷹野つぎはこのサナトリウムいわゆる療養所の新館二十六舎に入った。

病棟は白壁の清らかな天井、白布のベッド、日光の降り注ぐベランダ、見下ろせば新緑の庭園が広がっている。病室には六台のベッドが二列に並び、向かい側のベッドにだけ少女の患者が一人いた。

寝巻姿のつぎのそばには夫弥三郎が珍しく見舞いに来ていた。

弥三郎は相変わらず精悍な顔をして、女性には好かれそうなタイプである。最近、仕事に忙しいとか言って来なかったが久しぶりの対面だ。つぎの背に格子縞の入った赤い半纏を羽織ってやろうとしていた。

「子供たちは元気になっているかしら。それともあなたが手を焼いているのかな」

つぎは、甘えたような声で弥三郎に囁くように云った。つぎの結核が再発して、すでに半年になる。十三歳になる三男の三弥だけが同じ病院に入院しており、隣のベッドに休ん

でいる。

ほかの兄弟三人はそれぞれ親戚に預けていた。

このころまでに、つぎは八人の子どもを産んだが、既に四人は病気で亡くしていた。つぎ自身は作家活動をしながらか結核の療養をしている。

「先週は信州の実家に行ってきた、真弥に会ってきたよ。元気だった」
弥三郎はベッドの端に腰を降ろして静かに云った。

「そう安心したわ。真弥が心配だったから」

「子ども心配もいいけど、再発で入院したのだから気を付けないといけない。病院にいれば安心だけどな」

「そうね。うちにいると子どもの面倒でつい無理をしてしまう」

「それがよくないのさ。子どもにもうつってしまう」

いつものように弥三郎はつぎの手を握りながら注意した。

「こうしているとなんだか、今迄お世話になった人で亡くなっていた方を思ってしまうの」

「そういえばお前が十八の頃、娘として入籍してくれた人がいたね」

弥三郎は二人に共通する人物を思い浮かべながら、優しく言葉を返した。

最近の弥三郎は自分に気を使って話すことが多くなつたとつぎは心苦しくもあつた。

「私が忘れるとでも思っているの。だって、あの人がいなかったら、今の私たちはこうし

ていなかったもの」

あの人とは、義父松島十湖のことである。

つぎがはじめて会った時は十湖が既に六十五歳の頃で、二十歳代で県会議員、三十歳代の郡長時代には二宮尊徳の報徳仕法を実践し、その普及に走り、一方では俳人として名を馳せていた頃である。四十歳以降は俳諧師の宗匠として全国を行脚し俳句の振興に努めていた。

十湖の家を初めて訪ねたのは、つぎが二十一歳のときで長男を抱いていった。明治四十四年のことだった。

「あのときは義父に逢うのが怖かったわ。だって屋敷の奥からいかめしい顔をして現れたからどんな話ができるかしらと思つたわ」

「君は優しいから、そんな心配はいらなかったのに」

弥三郎は笑いながら、その時の十湖の顔を想像していた。

「今を思えば、当時の義父は本当に俳句に熱心だったわ。通された書院には揮毫用の毛氈が敷かれ、机、硯、筆がきちんと揃えられていたわね。几帳面な性格だったかしら」

「夕食のときは話が弾んだかな。義父は酒を飲めば饒舌で調子が良くなるはずだった」

「そうね。子どもの話を始めたら、爛々とした目が下がり始め、白い長髯の義父が厳めしい顔から人懐こそうな笑顔に変わったわ」

「そうか、過ぎてしまえばいい思い出が残るってわけだ。夕食のときはつぎの嫌いな

ものが出たと云っていたが」

「私って嫌いなものが多いの。あのときは出てこなければいいのにとハラハラしていたわ。そしたら大根の酢の物が出て、うつかり箸を付けてしまったわ。後から後悔したわね」

他所では嫌いなものが出ては小言もいえないが、どこの家でも食作法があり一旦箸をつけたものは食べなければいけないのに余してしまった。俳諧の行脚客などの場合は決して許されないことだった。

「あの時は子供のようなものだから義父も見えないふりをしたのさ。やさしいところもあるんだよ」

二人の会話が幼く、患者でいると甘えて人に優しくなってくるのだと弥三郎は感じていた。

「こんなこともあったわ。義父は機嫌がいいと、書くものがあれば揮毫をするといっていたわ。私にとってはどうでもいいことだけど汚されてはいかんと思い、手ぬぐいを差し出すと直ぐに腹の底をみすかれ義父の顔が曇ってしまったわね」

「それは義父の機嫌を損ねてしまったのだ」

「私も若かったしね」

つぎは自分のした失敗を年齢の所為にしたかった。でも今から思えば義父との懐かしい思い出であった。

「硝子戸をあけてくださらない」

つぎは弥三郎に頼んだ。夫は黙って、きしむ戸を労わりながら開けた。

爽やかな風が病室内に流れ込んでくる。

「僕が浜松へ来て直ぐにやった仕事は義父の伝記づくりだった。よく中善地の家へ行ったが多くの人が入り出して賑やかだったな。義父は俳人としてはたいした器だよ」

つぎは弥三郎の言い方が気に入らないのか、口を尖らせて言い返した。

「私は俳人としての義父より、村の人たちのために私財を投げて貢献していたことが立派だったと思うわ」

ふたりの話が途切れた時、弥三郎はかつての十湖とのやり取りを思い出したのか、にやりと笑いながら十湖の回想を懐かしく語り始めた。

十湖の祖先は代々遠江国浜名郡豊西村中善地（現浜松市東区豊西町）に居住し、いわゆる旧家であり、この地域において長く続いている家系を持つ家柄である。そのためそれなりの社会的地位を古くから維持してきた由緒のある家であった。代々農を本業として、時には商いを営んでいた。姓は藤原、松嶋はその氏である。父は幼名を藤吉と呼び、のちに源左衛門と称した。

源左衛門十九歳の時、遠江国浜名郡蒲村（現浜松市東区上新屋町）本田平八の長女りうを娶り、嘉永二巳酉年三月十七日長男が生まれた。この子が後の十湖である。

幼名を吉太郎と呼び、また吉兵衛と称し、次いで吉平改め、号は十湖をもってとおった。

弟妹二人あり。

十湖も嬰兒の頃はただよく泣き、いたずらによく乳に縋る。しかし、その裏には自ら聡明なところがあった。四、五歳の頃になると一見他の子供らとは違っていたという。六歳にして家を出て、隣村羽鳥村（現豊町羽鳥）の瀧雲山源長院住職西尾蕙全の門に入り、専ら読書習字等を学び、六年後家へ戻った。

十二歳になって小笠郡横須賀町の撰要寺に預けられた。

住み込んで寺の雑役をしながら書法及び漢籍を修得し、その傍ら仏典の教えを受けた。努力の結果ようやく古文真寶義を読むに至った。

「吉太郎、読むだけではだめだ。全編を写書しなさい」

師は全編を書き写せという。吉太郎（のちの吉平）は嫌な顔をすることなく実行し、数日後全てやり遂げた。

とうとう全編を講習したと師が認めた。

吉平が学び始めたのは嘉永七年六歳の頃だというから、日本の歴史から見ると幕末にあたり、この前後には我が国を騒がす事件が勃発している。前年の嘉永六年にはペリーが浦賀に来航し、安政三年にはハリスが下田に来航している。

当時の教育は江戸時代の寺子屋中心で庶民は専ら読み、書き、手習いが中心であった。吉平も同様の教育を寺に住み込みで受けることになったので、庶民の日常に必要な実用的、初歩的な教養は身に付けることができた。

そればかりか齡を重ねるごとにその才が認められ、書法や漢学を修得し、仏典の教えも受けた。

漢学は当時の武士が藩校で学ぶものの一つで、儒学中心、一般的には経、史、漢文をいうが、儒学の孝経、四書、五経である。幼年期を過ぎると自らの実生活と絡めてその教養の必要性を感じることにになり、一段と勉学の道へのめりこんでいくのである。

ある日、吉平がいつものように勉学に励んでいると、師から呼ばれた。

「お前の父親が病氣のようだ。一度会いに行つてきなさい」

と師から告げられた。一旦家へ戻つてみると父源左衛門が病氣に遭い、ついで末弟も病んで亡くなっている。

これでは勉学をしているどころではなく家へ帰ることを余儀なくされた。

十五歳の少年にはあまりにもむごい出来事だった。

この不幸に日夜思い出しては泣き、室に籠つてはじつと座ったまま

——人の天寿は是れ天の命なり、今に於て徒に之を悲しむは却りて孝悌の道に非ず

と。母を慰め自ら勉学に家業に励んだ。吉平は幼年時代において早くも親族との別れを知り

——子養わんと欲すれば親亡し

の格言に涙し、母への孝養がますます深まっていった。

やがて、どんな辛苦にも耐え新たな生き方を求めていこうと決心し、俳諧の道を志して

俳人栩木夷白の門をたたいた。夷白は既に七十に近い老人だったが、遠州では名立たる俳人だった。

吉平は学ぶと、たちまちにして頭角を現し、十湖という俳号を号するほどになった。僅か二年で俳句判者披露（俳句選者）となった。十七歳でこの地位を得たのは異例中の異例とあって遠州では知らない者がないほどであった。

俳句の批評を頼っていつも机の上には郵便が山となった。だがいつまでもそのままにすることなく、速やかに批評して寄稿者に返送した。

そうこうしているうちに既に老境に入っていた師夷白に死が訪れる。

——未だ俳諧の奥義を極めていないのに、これからも学ぶしかない

落胆する間もなく佐野郡の俳人伊藤嵐牛の門に入り俳諧の道を歩んだ。だがここでも嵐牛の没するのに遭遇する。

——なんと巡り合せの悪いことか、自分には俳諧に進む道はないのか

自問自答しながら、自らの欠くべきところを求めた。既に多感な年頃であり詩趣も常に充実してきた。俳諧はますます上達の境地に入ったと思っていた。

——何かが足りない、それは何か

吉平は自ら答えを出した。東京の俳人橘田春湖に隨身して教えを受けること。それと合わせて自らの足りない部分である国学を修め、和歌を学び漢学を修得しようと決した。

浜名郡有玉村の有賀豊秋について国学、和歌を学び、赤佐村高橋月査、恒武村小栗松露

の二師からは漢学及び詩文を修得、独学で仏典をも研究した。

しかし、吉平の修得することはこれだけではとどまらず、国を修め、家を興し人身を善導に誘導することに目覚めた。それは幼年期の頃にたびたび起こった天竜川の氾濫で家を失い、田畑をつぶし家族を亡くすという地域の現状に対し出した答えだった。

十九歳になって小田原の報徳学者福山瀧助につき報徳法をきわめた。以誠心為本、以勤劳為主、以分度為体、以推讓為用の言を知ると、これこそまさに報徳の根本主義だと悟り、ひたすらこのことに集中し万事控えめに努め、信じて心から尊敬した。

世の中を利するためには報徳法を研究実践して行く事だと気付いたのである。

さらには先に独学した仏典についても難解なる部分の教えを乞うため磐田郡の可睡斎住職、引佐郡奥山半僧坊方広寺管長、富塚村法林寺住職等に就き、先に独学した仏典の難解部分の教えをうけた。

話は戻るが、いくら勉強に熱中しているとはいえ、十八歳ともなると周囲で、「妻を娶れ」という声が聞こえてくる。親戚の勧めで近隣である蒲村の伊藤平六の次女と見合いをして、四つ下の伊藤佐乃と結婚した。俳人伊藤嵐牛に師事しながら青年時代の吉平は俳人として、報徳主義者として、夫として、歩み始めたのである。

吉平直訴

慶応四年、長かった徳川幕府の終焉を迎え、年号は明治となった。吉平このとき二十歳である。

この年は近年まれなる大雨で天竜川があちらこちらで決壊した。中善地村中島で百間、倉中瀬村百二十間の被害であった。

万延元年の決壊の教訓として村民で築きあげた堤が見る見るうちに崩れていつてしまった。

「彦三よ、せっかく築いた堤がいとも簡単に壊れてしまった」

吉平は、隣村の彦三に、崩れて流れ込む田畑の様子を見ながら言った。

「何度造っても自然にやかなわねえ。荒地になつては食う物にも困る。何とかしなけりや」

彦三の村には家を流出した者もいた。明日の食物を心配する者もいた。あまりの惨事に為す術がなかった。

「彦三ついて来い」

何を思い立ったのか吉平は走りだした。走った先は自分のうちの倉だ。天竜川から走っても五分とかからぬ距離にあり、幸い倉には水が届いていなかった。

「今から倉の中の米、麦を出すんで手伝え。村の衆に分けるぞ」

吉平は怒鳴って彦三に言った。

「お前のとこの分はどうするだ」

心配になり吉平に訊ねたが、それも全部出せという。

「困った者がいる以上何とかしなきゃいかん」

吉平の意志は固かった。村の衆を呼び集め全てを分け与えてしまった。この様子を見ていた母親が心配して

「吉平、自分たちの食べる分はとってあるのか」

「そんなことは後から考える。まず困っている者に、ある者がやるのが報徳の精神じゃ」
母は呆れ顔で何も言わなかった。

やがて、倉の中の食物があらかたなくなつたとき、自分らの食べる分は買いに行くといつてその場を去つた。

中善地の決壊による切り込み口は池になり、のちに吉平の俳号である十湖を付けて「十湖池」

と呼ばれるようになった。吉平が自らの資産を供出して村人を救済してくれたことへの地元からのささやかなお礼だったに違いない。

この事件以来、近隣では

「吉平はええ奴だ。みんなのために自分とこの食いもんを分けてくれた」

うわさはさらに四方に広まっていった。だが、吉平にはそんなことにはいつころにお構いなく、日夜、川の決壊を防ぐ手立てはないものかと考えあぐねていた。

そんな矢先、浜松県庁から呼び出しがあった。

——松島吉平に営繕司御用係を命ず

あまりにも突然の事であったが、吉平にとっては願ってもないことだった。営繕司御用係はその年の十一月で終わったが、実績が功を奏し明治四年以降六年三月までは中善地の百姓代を命ぜられた。

百姓代とは庄屋のようなもので村の公職を歴任してきた。十湖は体格強健にして、一見異人のようで同年代の青年たちとは風格が違っていた。言い方を変えれば態度は傲慢、口ぶりは頑固であるが、正義感の強い快男子であった。

俳句はもちろん報徳仕法や法律にも精通し、修めるべきものは修め、為すべきことを為し公務要職を勤めた。

この年の十一月八日長女るめが生まれた。吉平にとって村人のために尽くすことに一段と熱が入った。

「吉平も百姓代になったか。村の衆からいろんな頼みごとがあっただろうな」

彦三が吉平の顔色をうかがいながら聞いた。

「ああ云ってきた。渡船の許可はもらえないだろうかな」

その頃天竜川には未だ橋がなく、村人は東西の交通に不便を痛感していた。せめて渡し

船があればとの思いから、百姓代になった吉平に期待を寄せていた。いままではその橋渡しをする人物がいなかったのだ。

「俺も手伝うので、どうだ、ひとつ県へ直訴でもやってみんか」

彦三が協力するといふのである。だが吉平は納得しなかった。

「村の衆から出た願いだ。みんなで一緒に組みまないと意味がないではないか」

吉平の云うことに一理あった。村の皆が一緒に行動すべきはずである。

「村の衆はお前の力が未知数なので、云つてはみたが本気ではなかったようだ」

彦三のことばに吉平は薄々勘づいていた。仕方なく請願書は自分が作った。村人は誰もそれに異議を唱える者はなく、力を貸そうと申し出る者もなかった。吉平の親戚筋の者でも吉平が一人実行に移すことを危ぶんでいた。

「やるなら、わし一人でやってやる」

吉平は今、県庁へ直談判してみようと思っていた。営繕司御用係を務めた経験から少しばかり県への対応には明るくなっている。それだけに妙な自信が無謀な行動へと駆り立てていた。

明治五年二十四歳のときである。いまだその世界を知らない若造のすることであつた。

浜松懸庁へ来るとそのまま県令室を目指そうとしていたが

「待て、待たんか」

最初の日には県官に腕づくで止められた。仕方なく出直すことにした。

次回は事務室へまっしぐらで向かい

「豊田郡勾坂村に通じる渡船開通の件の請願に参りました」

と大声を発した。事務所へ来られては県官も趣旨を聞かねばならず、その場で吉平に話を続けるよう指示した。

前回相手にされなかったことを反省し手を変えてきた吉平の思うツボである。差し出した請願書を集まってきた県官に見せながら大きな声でしゃべり始めた。

「わが村を流れる天竜川は源を諏訪湖に発し、流積四十四里の大河にして、沿岸の村落その利を蒙らざるなく、貨物の運搬田畝の灌漑悉くこの水に依らざるはなし。されば沿岸の村民皆この水をもつて天地となし、これによつて産を営み、妻子家族を養う、その数幾千の多きに及ぶ。

然りといえども、もとよりこの川は急湍矢の如く、平水の時その流れに随いて下るものなお破船の憂い有り、為に生命を存する者古来頗る多し。いわんや一朝水潦の秋至れば濁流こんこん岸を浸して暴流となり、沿岸の人民皆治水の策を得るに術なし」

朗々と説く吉平の態度に対し、県官たちは若造の大言壮語と誤解し侮蔑の眼で見ている。「どうせ口では大きなことを言つても、実行が伴わないだろう」

県官たちはお互いに顔を見合わせ冷ややかな言葉が囁かれた。

浜松県庁に往復すること四十数回、二日おきに請願するも県官の耳に入らず、挙句に吉平を狂人呼ばわりする始末であつた。

だが繰り返し県庁を訪ねて大声で説く吉平の様子が、扉の向こうの県令に聞こえないはずがない。

人の一念は岩をも徹り、精神いたるところ実に何事か成らざらんと吉平の想いが通じたのか、県令はとうとうこれを受け入れることとなった。ここでのいう県令とは県の代表責任者であり今の県知事である。

このころ浜松県ができたのは明治四年十一月である。新任県令林厚德が着任したのが明治五年十一月だとすると、このとき県令室には誰がいたのか。

石黒副県令が県令より少し後に着任したので石黒であるはずがない。実は林の腹心に事務官の大江孝文がいた。県令よりいち早く着任していたのはこの男であった。林は浜松県に赴任する際、石黒のほかにもう一人、腹心とも言える人物を、一緒に着任させていた。権典事（こんてんじ）大江孝文である。

大江は、林の幼い頃から付き合いのある徳島藩士で、年齢は林より一歳年長。儒学一筋に打ち込んだ根っからの教育家で、十四で家を継いだ後は藩主蜂須賀斉裕に仕えて、世子茂韶を教導したほどの逸材であった。彼もやはり林に乞われ、額田県に続いて、この浜松に赴任、学校教育行政に携わったのであった。

大江は雷典事とあだ名がつけられるほど、態度が威圧的な人物だったが、このときは吉平の請願理由に納得し自ら渡船の許可を下したのである。

相手の人物はともあれ、こうして渡船の便を開くことができたのである。天竜川を日に

往来する者は数百人におよび、吉平の行動を狂人扱いにしていた村民もこの快挙に大満足であった。

今回の渡船許可を巡る吉平の活動は後に橋の架設へと導いていくのである。

「彦三、これまで村の衆の意見を聞いてその実現に努めてきたが、幸い運がいいのかその都度解決できた。だが、わしも二十四歳の戸長で今後も思い付きだけで事を進めて物事が解決するとは思わん」

吉平は隣村の彦三に今の心境を語った。

「吉平の行動が思い付きだとは思わなかったな。それでも何とか解決へ向かうのだから、お前の素質だよ。そんなに深刻に考えんでもなんとかなろうぜ。悩まれてしまうと俺もどうすればいいのかわからん」

彦三は吉平でも悩むことがあるのかと一蹴したかった。確かにことはいい方向へ解決してきたはずである。それも吉平の運の強さだけではなく奴がそれだけ悩みぬき考え抜いた成果なのだと解釈していた。

「わしは二十歳の時、小田原の福山瀧助に就いて報徳法を学んできた。以来常にこの精神を貫き人のため村のために実践してきたつもりだが、今のままでは不十分だ」

「じゃあ、どうすればいいのだ。俺には分からんが」

「そりゃ、みんなで力を合わせてやるしかない」

「村人もお前のように報徳法の実践をするというのか」

「そうだ。村の衆を募り報徳社を組織化するのだ」

「できるのか。そんなことが」

「やるしかない。無理にとは云わん。有志の集まりでもいい」

「うむ、それなら集まるかもしれない。俺が一番乗りで組織に加わる」

彦三は吉平の説得に理解を示した。

——それにしても大それたことを考えている

彦三は吉平の考えには際限がないと感心した。同時に自分も最後までついていこうと腹を決めていた。

この年の十一月吉平は中善地村の人々を勧誘して、福山瀧助の教えにより三才報徳社を組織化した。

地域には天地人三才の徳に報いることを説く報徳思想を实践する遠譲中善地支社を設立し自ら社長となった。

雷大江

吉平の活躍は村内外にも知られ、明治六年戸長役場の制度が公布されると初代中善地村戸長を命じられた。

報徳社の活動とともに戸長としての職務も忠実に果たした。と云っても別に事務所を設けて事業をするわけではなく、庄屋のような役割を担い村民の意見に耳を傾けていた。

そればかりか、いまでは宗匠であり十湖の俳号をもつて句会に招かれることが多々あった。

自宅内の大撫庵にも全国から旅をしながら一宿一飯の宿を乞いに名だたる俳人たちが句会に訪れていた。

大撫庵とは吉平の邸に隣接した建物を俳人や門人、弟子たちを住まわせて自由に句会を開く場を提供しているところである。

吉平にとって全国の情報を得るまたとない機会の場でもあった。若い吉平にとっては唯一心が安らぐのは俳句の会であった。

ある日地元の商人たちが集まる句会に招かれた。終了後に宴を催したとき俳人十湖こと戸長としての吉平に意見が求められた。

「わしは浜松の織維問屋だが、笠井に店を出したいと借家を探していたところ、何処も貸してくれん。どうしたもんかと俳句仲間に相談したら、他所もんには貸さんと云う。こんなことがあってもいいのだろうか」

目じりの下がった気立ての好きそうな初老の男が、おだやかな口ぶりで吉平に訊ねた。「その件はわしも知っています。これは笠井の伝統だとかと云って、他村の者が商売をすることを排除しているようです」

吉平は地元では周知の事実だと説明し、自らも何度か注意を促したが、聞く耳を持たないと云う。今のところ解決策も考えていないと答えた。

「戸長様までそんな臆病風を吹かしていたら、笠井の町は浜松から取り残されますよ。この際戸長様のお力で、この笠井の悪習を断ち切ってくださいませんか」

「ご意見は拝聴しました。早速、地元の連中と手立てを考えてみましょう」

俳人仲間からの意見は聞かねばならない。しかも内容は地元の悪習打破であり、民の懸案事項なのだ。戸長が解決しないで誰がするのか、自らを奮起した。

次の日、彦三を自宅へ呼んで

「実はこういうわけだ。笠井の有力者で話の分かるやつはいるか」

吉平は幼馴染の彦三に事態の説明をして協力を求めた。

「金に関わる話は一筋縄ではないぞ。それが商人の新規参入となると俺らの出る幕ではないわい」

彦三は自分らが関わる事件ではないからあきらめよと云わんばかりである。

「うーむこりや困った。そうはいつでも悪習を見逃すわけにはいかないな。手を変えればどうか」

「手を変えらだど。どんなふう」

「たとえば新聞に投書するとか」

「その方法はいいかもしれない。だが誰が解決してくれるのか」

「それはわしにもわからん。すくなくとも笠井の悪習を新聞読者が知ることにはなる。投書の意見が、どう一人歩きするのか見守っていればいい」

「おいおい、吉平にしては気の遠くなる話だな」

彦三は笑いながら吉平の顔を見て脈を確かめていた。

「そうと決まったら戸長として投書するか。いや待て、それでは地位を利用した意見になつてしまう」

「それじゃ吉平の俳号十湖名で投書してみたらどうか。多くの読者は十湖がまた吠えていると面白がるだろう」

「それもそうだな。よし早速書いてみるか。わしに任せよ」

吉平は笠井の悪習を打破せんと、その実態を浜松県に具申する内容で地元紙に投書した。投書の詳細は次のとおりである。

——由来、地方には偏狭極まる悪習慣あり、これを矯正せんと欲する心ある人、往々あ

るも却々に成す能わず、彼らはその悪習を確然たる一法則たるがごとくに信じ、容易に脱却せんとせず、いわんや一家営業の利害盛衰の如何に關係あるものに於いてをや。これらの悪弊は今日にありてもなお止まざるもの多し、されば明治初年にして国政すべてに幕府の手を離脱したるのみにて、未だまったく幕府時代の習慣にとらわれているが、この笠井村の悪弊も隠然一法則のごとき觀を現したり。そもそもこの笠井村は戸々連庇として一小市街を為し、加えるに月六回の定期市場を開き、遠近の商売衆が集いし百貨輻輳するところなるをもつて、毎戸皆商業を営み、市街は北より南に向かい、南方を古屋敷と称し、北方を新屋敷と称して、新屋敷に新たに商店を開かんと欲する者は必ず古屋敷に一戸を所有する者にあらざれば為す能わざると云う如き、今より考えみれば実に愚にもつかざる悪弊あり、もつてありやとして進歩せんとする同村もかかる束縛のため、その道を閉ざるのと甚だしき、慨嘆に堪えず。

以上をもつて投書には松島十湖と署名した。このとき浜松県への具申書も添付した。数日後地元紙報知新聞に掲載された。

浜松県の県令室では大江孝文事務官がこの日の新聞を開いていた。

——これは投書の形をした告発書だな。

大江はひとり呟きながら文を読んでいた。このとき県令室の扉をノックする音がして若い県官が一人入ってきた。

「ただ今具申書が届きました。見たところ新聞登載の記事と内容は変わりありません」

と云いながら県官が大江に具申書を手渡していた。

「署名は松島十湖とあるが、知っている人物か」

大江は県官に訊ねた。

「浜松の俳諧師の一人です。なかでも十湖はこの地域では若いのに宗匠格だと聞いています。住所は戸長の松島吉平宅と同じですが、弟子たちの居住する建屋ではないかと思われます」

「そうか、直ぐにも松島十湖を呼び出せ。同地区の戸長に責任をもつて出頭するように通知せよ。十湖を同道せよとな」

県官に対し大江は冷ややかな声で指示した。

——どうするかは会ってからの話だ。

大江は今の段階では結論を出していなかった。事情を整理する必要があるが、あまりにも裏付けの資料がないことに苛立っていた。

中善地の吉平の邸には今月の初めに咲き出した桜が満開になっていた。隣村の彦三が縁側に座り上機嫌で桜を褒めていた。

「穏やかな日が続き桜ものんびり咲いていら。それにしても吉平はそんなに忙しいけえ」
吉平の妻佐乃が出してくれたお茶をすすりながら、佐乃に訊ねた。

「そうなんです。戸長になった途端、書き物が多いようで、こうして書院に籠ったまま一日が過ぎてしまうことがしばしばです」

「せっかく桜が満開だというのに俳句でもひねらんと体がもたねえのになあ。吉平よ」
書院に届かんばかりに大きな声で彦三は呼びかけた。

「待て待て、すぐに行くよ」

廊下を隔てて吉平の返事が返ってきた。

「なんだよ。来いと云うのでわざわざ用を作って来てやったのに・・・」

彦三は少々気が短いようだ。ぼやきに変わっていた。

「待たせたな。さっきに郵便が届いて、ほらこれだ」

吉平が封を切った手紙を差し出した。差出人は浜松県令とある。

「ほう早速県令からの呼び出しか。反応が早かったな」

「いやそうでもないだろう。まだ事態がつかめないので聴き取りをしようと云うのではないか。県の早い対応は投書のせいだ。読者が知ってしまったからはおつてはおけんだろう」

「すると俺らの先手勝ちというところか」

「確かに二段構えで訴えるというのは効果的だった。だが、まだ勝負は決まっていない」

「戸長松島吉平は責任をもって松島十湖を同道せよとある」

彦三は通知の中身に不信感を持っていた。吉平も十湖も同一人物なのに県はそれがわかっていない。

「彦三、お前が十湖になってわしに同道するとうのはどうかのう」

「それでもいい。だが本論に入ったときは俺では答えられんからまずいぞ」

「しかたがない。わし一人で行くか。きつと県令は驚くはずだ。本論の話が反れてしまいうさだ」

吉平がそこまで云うと、二人で大笑いをしていた。

満開の花びらが春風に心なしか散り始めたような気がした。

吉平は浜松県庁を目指していた。高町の坂はもう何回となく往復していた。

先だつての渡船の許可の件だけでも四十数回も足を運んだ。おかげで実現にこぎつけたが、百姓代になって最初の公職との戦いだつた。

——今度は戸長になつての初仕事、地元の悪弊を立つ正義の戦いだ。たかが県だ。こつちは何も悪くない。県だつて悪いことをしているわけじゃないが、ようするにどちらも正義だ。ただそれぞれ立場の誇りがある。そのためには議論が必要だ

吉平は歩きながら自らに問い、自分を励ましていた。

県令室の扉を叩いた吉平の前に県官が顔を出し、事務室の中を通過し県令の部屋まで吉平を誘導した。

これまででは事務室内で事足りていたが、今回は様子が違つたと少し緊張の面持ちになつた。県官が再び部屋の扉を叩くと、中から大きな声が響いてきた。

「よし、入れ」

「戸長の松島吉平を連れてまいりました」

県官が一言いうと扉を開け中へ押し入れた。

「わしが県令事務取扱の大江である。お前が戸長の松島吉平だな」

「はい、中善地の松島吉平です」

と名刺を差し出した。

大江は吉平が請願で何度か来たのは覚えているが、顔を見るのはこの時が初めてであった。

「それでは十湖なる者を同道したか」

大江は扉の方を見ながら吉平に問う。

「いえ私が十湖です。具申書を書いたのは十湖こと私です」

「なんと、つまり、吉平は二つ名を持つというのか」

「そのとおりです。具申書はあくまでも地域の要望であつたので、それを代表して書いたものです。よって戸長である自分ではなくて俳号の十湖としたのです」

「吉平、署名のことは理解した。戸長としての職務をではなく、住民代表として書いたということだな。このこと公職を担う者として当然のことだ。さて、投書の件だが」

大江は吉平の毅然とした態度に業を煮やすどころか感心してしまった。

常なら雷大江とあだ名があるくらいなのに、あっさりと話は先へ進んでしまった。

吉平も肩透かしを食らったようなものだった。

「投書の詳細は既に新聞報道のとおりです。しかし、この報道により私は明日の命が約束されていません。いわゆる笠井村の古屋敷の者らは私を暗殺せんとして、狙っている者もあるやと伺っています。本日はぜひ県令の御助力によりこの命奪われようとも笠井の悪弊を絶つようお願い申し上げます」

吉平の声は普段とは違い、少し上ずっていたようだった。

さすがに県の上役、しかも理論派雷大江を相手では齒が立たない。ここは泣き落としこそ勝利を呼び寄せる。吉平の仕組んだ演技が効を奏すはずだった。だが大江は吉平の態度は芝居だと見抜いていた。

「お前の話はよくわかった。吉平の誠心を見たようだ。よって県は側面から助成しよう。ただし、古屋敷の輩とは、吉平、お前が対応し悪弊の習慣を打破しようではないか。困ったときは県がいつでも助け舟になろう」

大江は雷を落とすどころか、まるで赤子をなだめるごとく吉平に云った。

帰り際、吉平はひとり呟いた。

——結局わし自らで解決せよということか。つつい大江に乗せられてしまった。一枚上手だったな

数日後、村中を東奔西走し誠心をもって努めた。県が背後で助成していることを知った頑固な古屋敷の輩も、ついに吉平の誠心に動かされ悪習慣をやめることに承諾し、和解の

好結果を得るに至った。

終わってみれば県の助力と云うより投書の効果が、吉平こと十湖の名を世間に広げ得るのに一役買った顛末となった。笠井村にとつては停滞していた商業の繁栄も、これを機に将来に向けて好機となったことは事実であつた。

戸長の重責

政府は明治五年十一月九日に改暦詔書を出し太陰暦を廃止し、今後太陽暦を用いるよう全国に通達した。

「明治五年十二月三日を以って、明治六年一月一日とする」
要するに、この年は十一月で終わり、十二月一日は太陽暦の一月一日となった。

しかし太陽暦が何なのか知らない者は、これまでどおりの習慣の太陰暦に頼っていた。なかでも、もっとも深刻だったのが、百姓だった。従来の慣習によらないと種まきから収穫まで、さっぱり見当がつかなくなってしまうのだ。

また季語を命とする俳諧にとつても混乱を招いていた。

—— されば暮の餅撞くこともあわただしく、あるは元旦の餅のみを餅屋に買ひもとめて、ことをすますものあり。

—— 俳句を作るにも初春といひ梅柳の景色もなく春といわねばならず、桃、櫻も皆夏咲くことになって、趣向大ちがいとなれり

吉平は、どうしたら村民が太陽暦に馴染んでいけるのか思案中であった。改暦が施行されて既に一年となる。

そこで思い浮んだのは翌明治七年より年々一月二日をもつて中善地村の住民を自邸に招き、正月を喜び一同で年頭の挨拶を述べ、それぞれ自宅へ帰り年賀の行事をしたらどうだろうか。

これを皆で続けることによつて一村よく親睦することになろう。

この計画は見事に当たり、何処の村よりも早く太陽暦に馴染んでいった。

戸長としての役割も曲がりなりにも果たせ、それなりに恰好がついてきた明治七年十一月浜松県より第一大区三十小区中善地戸長を命じられた。

これまでと違っていたのは区割り変更によるもので、責任も村長並みになった。

吉平はこれによりさらに辣腕を発揮し、村の改良に取り組み、その理想の実現に努めた。だが、天竜川の流れはいつもと変わらず、この年の秋の大雨ではまたしても氾濫の危機が迫っていた。

この日も自宅に中善地の村の衆が集まつて対応を検討中であつた。ただ今回はこの地域の堤防の決壊はなさそうだ。

「今見てきたら、こっちの方は心配ないが隣村の倉中瀬の堤防が危ない。もう時間の問題だ」

監視をしてきた者から報告があつた。

「だが隣は何も言つて来んぞ。自分らだけでできるのだらう」

「そうだ、そんならわしらは家へ帰つて自分の田畑やうちを守らなくてはならねえ」

「それじゃあ少し様子を見るか、川の監視は交代でやれ。異常があればすぐにもここへ一報せよ」

吉平はみなにそう云つて解散した。

夜半になり雨も子安状態となつたところで吉平は仮寝をし始めた。わしも戸長となつたが変わらぬのは天竜川の流れだ。暴れ天竜はいつになつても雨が降れば氾濫する。なんとかする手立てを考えねばと思いつつ眠りに入つていった。

「おおい吉平さ、起きてるか」

どんとんと玄関の戸を叩く。雨脚はだいぶ遠ざかつたようで玄関を叩く音だけはよく響いた。

「誰だ。何かようか」

吉平は戸を開けながら聞くと

「すまん俺だ。うちんとこの堤防が破られそうだ。皆で土嚢や蛇籠を積んでいるが、もはや力果て気力も失せてしまった。なんとか助けてもらえないだろうか」

訪ねて来たのは隣村の戸長大橋だ。背後に若い者二人が顔を覗かせた。隣村では士氣が低下し、皆体力が失せていることを吉平は察した。

「それじゃ誰か酒屋へ走らせよ。ついでに警察にも出張を乞いに行かせよ。お前とわしは急いで現場へ向かうぞ」

倉中瀬の堤防からは暗くて川の流れは見えないが、まだ堤防が氾濫するには至つていな

いようだ。九月とはいえ水に濡れれば肌寒い。しかもこんな夜中に飲まず食わずで作業してもはかどるはずがない。いつそ夜明けを待つて動く方が賢明なはずだ。戸長大橋にはその判断ができず、この異常事態には少しでも早く対処することが良い結果を生むとして、指揮だけが空回りしていたようだ。

間もなく警官が来た。その後を追うように酒の四斗樽数本と肴が届く。

「腹が減って寒くては動けないだろう。皆の衆、さあ飲め、食え。戦はそのあとだあ」

吉平は腹の底から声を出した。これだけでも彼らを鼓舞するには充分であつた。その間警官が堤防の警戒を怠らなかつた。

やがて酒肴が空になったのを見届けて吉平は自ら指揮を始めた。

「よしこれから作業を開始する」

「おー」

吉平の指揮に、車座になっていた人夫たちから一斉に掛け声がかつた。休むことで元気が甦つたようだ。

「それから、わしの指図通りやつて呉れる者はひとりに二人分の金を出す」

金の事まで云われて人夫は大いに意気を挙げた。これこそ吉平の思うつぽであつた。

指図は各自に的確にした。蛇籠を投げ入れ、杵を入れ堤を添えた。もはや堤の修復は時間の問題となつた。

白々と夜が明け始めたころ川に大きな渦が逆巻いていた。だが今やっている作業で堤が

壊れる心配はないとわかると吉平はさっさと自宅へ戻った。

戸長の大橋は結局目標とした時間の半分で、辛くも洪水の危機は免れたのである。

その日の昼近く、玄関で横になっていると大橋が訪ねて来た。

「昨夜は本当に助かった。人夫が動かんで困っていたが吉平さんの力で甦らせてもらった。おかげで洪水の危機から免れたよ。それに自前の金で酒肴や人夫の給金まで出してもらって申し訳なかった」

大橋は申し訳なさそうに両手をこすりながら頭を下げた。

「まあ結果がすべて良かったから云えることだが、酒はそちにつけておいたから。給金はわしの立替だから後から届けてくれ」

吉平は口に楊枝を加えたまま涼しい顔で大橋に云った。

翌朝、川の様子を見に行った吉平は濁流となつた天竜川を臨み

——川との闘いだ、どんなに時間がかかってもいずれは勝つてやる
戸長としての決意を新たにしていた。

同年、十湖の俳句の師柿園嵐牛より白童子の号と印鑑を受ける。

議員活動

明治九年、吉平は浜松県公選民會議員として第二大区二十九小区より出て弁論家として名を挙げていた。十湖は議席番号六十番なので議場六十番、松島吉平としていかなる時でも快弁の起こらないことはなかった。

まさに他の議員の追隨を許さず、注目されるところとなった。

その年八月浜松県が廃置となり静岡県に合併されると、九月一日から同会も遠江国公選民会と換わり一段と盛んになった。吉平の名声は一層高まっていた。

十二月二十四日今度は静岡県より県會議員を命ぜられ、議員活動は吉平にとってまさに水を得た魚の如しであった。同日県会の開場式があり祝辞を述べた。

以後、議員として発する言葉は誠意をもって県民のために尽くし、人間不義のためには死すとも屈せずと心がけ、正義のためには堂々と議場に立ち懇切な説明をした。

中でも遠江、駿河、伊豆三国諸川の堤防費に関する案件では率先して他議員数名とその現地調査をし、わずか数日で正確な調査結果をもたらし、そのため県会は事実をもとに政府あて建議し、相当の額を国庫に請求することができたのである。ここに吉平にとって川との戦いの初戦の一部を実現したのであった。こうした活動は彼を政治家として着々と

成長させていたのである。

当時の県内の政治状況を振り返ってみよう。

吉平が子供の頃、駿遠豆三州はいずれも小さな藩で、もしくは代官の分割区制によって、それぞれ政令を異にして、統一的制度にはなっていなかった。明治二年、版籍奉還になり旧藩主の官職が免ぜられ、徳川亀之助（家達公）は駿府国府中城主から静岡藩知事となった。明治四年、廃藩置県の令が発せられて静岡県、浜松県、韮山県が設置された。その後、まもなく韮山県は足柄県に合併されるが、管轄を離れて駿遠豆三州一体となって静岡県ができた。以来、一体となった政治が行われてきた。

明治十一年には郡政所制が發布し、県内に十三ヶ所の郡政所を設置統治するも、郡長となり手には各地方の豪農もしくは名望家を網羅して郡長を任じた。地方の有力者は県郡吏に任命し政治の円滑と県民の心を治め、政治に目覚めさせる手段とした。

翌年一月、全国的な自由民権運動の高まりは静岡において政治結社「参同社」を誕生させた。その社名が示すように駿・遠・豆三州の有志が親睦を深め一致協同することを目的とした組織であった。

——演説を起こし、一切人民の知識を開達するに在り

という主旨を掲げ、演説などを通じて県民啓蒙の先導を進めていた。中心的役割を担っていたのは駿河の磯部物外、平山陳平ら遠江では岡田良一郎ほか、伊豆の依田佐二平など県下で著名な官吏、士族知識人、豪農商であった。

同じころ浜松でも結社が誕生した。「己卯社」である。主唱者は吉平のほか近藤準平、竹村太郎ら遠江の名望家である。吉平はその副社長となった。

社の主旨は

「自家の保安より経世済民の大事に至るまで各自の思想を吐露し討論琢磨を以て一般の便益を謀らんとするにありこの明時に遭際しては是正に諸忽すべからずの要点なり而して議論憤慨に流れて政府に抵抗せず法律に触れることなくまた因循姑息の弊なく、かつ論旨高尚に渉るなく又文飾の譲弁を好まず只至当公平を旨として時期に適切ならん事を要請するにほかならず勤めて冗費を省き、該社を永遠に保存し益盛大を致するの日に方りて」とあり。要するに

——自家保安の事よりもって経世済民の大事に至るまで、およそ社会万有の事理に就き各自思想を述べ、討議を尽くし、もって社論を協定しあるいはこれを官府に献じ、あるいはこれを新聞社に投じもって官民の便益を助けるとしていた。

遠江初の民権結社は、国会開設運動において静岡の参同社とともに口火を切るはずであった。

吉平は十年二月開会の初県民会においては四十一番議員としてその論法はなはだ明晰に、しかも単独で建議書を提出して自己の理想を悉く披歴した。予算の削減、収税のありかた、区長戸長らの職分など多岐にわたった。

予算の削減についての主なものは次のとおり

民費減少の該目

- 一、公布要件以外は一時を省けば一費を省くのもと理あれば可なりの省略を懇願すること
 - 一、区戸長の減員は冗費を省く第一にして事務挙行は却つて至便たるべきこと
 - 一、各村常使を廃し一区中常使一名を置き担任せしむること
- ただし一区内にして距離一里外にわたるものは地勢便宜により二名三名置くも妨げないなどである。

明治十二年三月、「府県会規則」にもとづき第一回静岡県選挙が実施される。

議員の定数は各郡の戸数五千戸ごとに一人とされた。総計は四十二人、議員の任期は四年で二年ごとに半数が改選されるものであった。

吉平の住む豊田郡は人口が一万二千八百十二人のため議員定数は三人となる。吉平はそのうちの一人として初代静岡県議会議員に選出された。

同年五月十日、三十一歳になった吉平は府県令規則による最初の県議会に臨んだ。

第一回通常県会が追手町の県会議事堂で午前八時開場し、その日のうちに抽選で席順を決定した。松島吉平は三十八番となる。

五月十二日、出席議員三十一名欠席十一名の中で投票が行われ議長、副議長が決まった。

同月二十日定刻午前八時、開場式。大迫県令の演説を行い、議長が答辞を朗読、議員の一人が和歌を朗詠しその後各議員が祝辞を朗読した。このとき吉平は祝句を披露する。

今日やそのふじの笠雲とれにけり

初議会はこのあとも議員の祝辞が続いた。まさに初議会での登壇は祝辞あり、和歌あり、俳句あり、主張ありの議員ひとりひとりの個性あふれる発言が聞かれたのである。明治という時代の成せる業だったのである。

一方、吉平は議会活動の傍ら地域の問題で悩んでいた。

事の発端は明治十年静岡県より中善地村戸長を命じられた頃に遡る。

——この年はこれまで数度の洪水で辛酸を舐めてきた吉平が地方自治にも関わり、県の公職の傍に数度流出した家財をようやく回復することができてきた。そのうえ次男藤吉が生まれ、少しばかり目出度くもあった。

吉平自身の努力とも言えるが、もしかしたら母親の力かもしれないなかった。

母親は主に農事養蚕等で働いており、吉平も共に地方改良のため、国のために努力し家においては寸暇を惜しんで母親、妻子を助けてきた。

母親とも一緒にささやかな商売も営んだ。

これを見た居村の者は吉平らに続けとばかりに養蚕の業を始め、戸々で飼育し秋になれ

ば諸国の商人がこれを買って行くことで、村にはまた新しい仕事が生まれた。蚕が村の主要産業となったのだ。

ところが、ここに質の良否を問わず暴利を貪る輩が現れた。

「蚕が商人に買い叩かれている。これではいかん」

吉平は憤慨して、急ぎその弊害をただした。厳格に品質の精査良否の判別を図り、さらに等級を付して売買の法を定めたのである。これにより養蚕を営むものは皆競って精励した。だがこれだけではない。養蚕の取引を一步進め上武信等の諸州へ販路を広げる道を開き、誰もがその恩恵を受けることができたのである。

しかるに長続きはしなかった。横浜に送る繭の荷を積んだ船が折からの激浪のため伊豆沖で転覆した。登載の繭はもちろん乗組員七人のうち四人が海の藻屑となった。吉平の損害額は千五百円あまりに及んだ。

「せっかく品質改善もして生産したのにこれでは中止せざるを得ない」

吉平はどうすれば損害を取り戻すことができるのかを苦悶していた。

「今は銀行からの借入金頼るしかない」

浜松の銀行に損害額の整理をすべく借入金の申し込みをしたのである。

一年が過ぎ二年が過ぎ、いっこうにその回答が銀行側から来ないのであった。

明治十三年が明けて吉平に県官として静岡赴任の命が下った。

静岡県十六等出仕に任ぜられたのだ。吉平の県会議会における名声が大迫県令及び石黒

大書記官に認められた結果であつた。

——この地を離れる前に何とか解決しておきたい

静岡赴任前日になつて、急きよ浜松二十八国立銀行へ行く。かねて申し込んでいた借入金を受け取りにである。だがこの日は銀行の休日である。

「いつまで待ってもわしの申し込みに対する回答がない。どういうわけか」

吉平は役員を呼び出し、来店の理由を告げた。

「その、おっしゃる額が大きいので、近く開かれる株主総会後にお答えしようと思つていたのですが」

と役員は恐る恐る切り出した。

「銀行があるのは何のためだ。殖産興業を援け、金融をして円滑活発にすることだ。しかるに今日わしが頼みに来たのにそれを拒絶するとは甚だその意を得ん」

吉平が筋を通して詰問すると、怖気づいた役員はついに承諾して金五千円を渡したのである。

この頃の五千円は決して少額ではない。ことに銀行の休日をもつて談判した結果だけに満足を得たのである。吉平の信用の厚きを知るべきであらう。

管鮑の交わり

一月十三日吉平は予定通り静岡への赴任をする。家の事は一切母に委ね、自分は妻と次男藤吉を連れて静岡西草深に向かった。

この頃県議会は自由民権運動の拠点であり、大迫県令率いる行政当局とは軋轢が甚だしく様々な妥協策が講じられていた。

そのため議員でありながら県役人という異例な待遇で調査課詰十六等出仕に任命された。吉平は事務処理においてもさほど苦痛とは感じず、淡々と成績を修めていた。同時に俳諧の道も怠ることなく、静岡吟社なるものを設け風韻雅流の同志を集めて吟詠を楽しんだ。職務の疲れはここに忘れることができたのである。

県官としての仕事は例のとおり、建議書を長官に差出し自らの意見を論ずることである。早速、各区長を招集して各自の意見を聞いた。

「此度出仕した松島である。この際、県に対して述べたいことがあれば聞きたい」
吉平は併せて自らの意見も述べた。

一、郡長を集めそれぞれの意見を聞きそれをもって県会に臨むなら議案編成の参考と

なる

一、県会に今ある火鉢は粗悪であり、火災の危険と景觀を損ねる

一、各課から代表を出して委員会を開き、事務の改善を図る

一、戸長を毎月又は隔月、郡役所へ招集し活動状況、調査結果を交流し民情に配慮するこれらをまとめて建議書として長官に差し出すと、さすがに理が貫かれた内容に長官は何も言わなかった。しかも次々と建議書が提出されるので閉口してしまったのである。

さらに郡長を集めた会合を開催したいと自らの経験を含め意見を申し立てた。

「郡治の大勢を概観して、その必要あるときは毎年二月と八月の二回県下各郡長を招集して郡治の状況を聴きたいと思います。郡長の職掌は上意下達の県政の取次所となつて、昔日藩政のみ醜弊を讓出せしものでは人民は世間に気兼ねしながら暮らすことになります。民治利益を優先し細事に至るまで民情理解していくことが重要であります。ついてはまず、毎年両会の会議を開き自体の利害得喪を切磋あらば自然施政も一途に帰し、上下円満方悪習を取り除き、人民の利益に貢献することなりと確信するものです。」

同会が早晚開会されることは誰もが予想し得ることであるが、吉平はそれを率先して論じたのである。先見の明あるというのか、時宜に適したことをいうものであった。

これは県官吏としてなす一部であり、以後在職中には県令の目に留まる事項が多々あった。

明治十四年県下の引佐有玉の二郡は未だに幕末時代の習慣に囚われて新しい世に遅れつ

つあった。

しかも初代郡長気賀半十郎は改革するだけの意欲がなく、他郡へ異動させられていた。県は新しい郡長を誰が適当か迷っていたのである。

県庁県令室では二人の男が密かに話している。

「気賀を異動させたのはよかったが、その後をどうするかだ。気賀の奴、散らかすだけで去ってしまったでろう」

県令の大迫は腕組みをしながら苦虫をつぶしたような顔で、石黒大書記官に向かい合って立っていた。

「他郡から異動させるとなると、そこも後が大変です。この際新たに任命したらどうかと思います」

石黒は手を後ろで組みながら、背筋を伸ばして実直そうな物腰で答えた。

「適任な候補者がいるか」

「県令がよくご存じの男はいかがかと存じます。中でも松島吉平が適任だと」

「十湖とかいう俳諧師の吉平か、少々癖のある男だが確かに職務は正確に熟している。こやつに託すか」

大迫は自分が静岡就任してきたときを思い出していた。

廃藩置県によって駿州は静岡県となり、県政の第一頁はここに開かれたという。当時は数千の幕臣が各地に散在して封建時代を偲び、なかには中央政府と県官の施政とを非難す

る傾向があつた。全国的ではあるも、静岡の地も御多分に漏れず中央政府もこの難局をいかに乗り切るか、静岡県令に相応しい人物の人选をしていたところ、大久保内務卿が勝安房の提言で薩摩の大迫貞清に決めてしまったらしい。

薩摩がなぜに静岡でと疑問に思うところであるが、江戸城攻めでは薩摩の態度に譜代の幕臣をして好意を抱く者もあつたという。果たして新任大迫は勝安房の推薦どおりの実績を残したのだ。在任十年と云う長きにわたり静岡県政上に大きな貢献をし、のちに警視総監に栄進して静岡を去った。吉平はそんな男に見込まれたのである。

——五年前、県令就任歓迎会が浜松の旅館大米屋で開催されたときのことだ。あいさつに立った大迫が

「私が静岡県令として運営する以上、県政の公平無私を目指したい」と語ったそのときであつた。

「そんな月並みなことは聞きたくない。お前の政策を云え」

突然一人の若者が立ち上がると大声で怒鳴り、主催者をハラハラさせた。これが吉平との最初の出会ひであつた。

以来、県で揉め事があると必ず吉平が首を突つ込み、解決の方向へ誘つてくれた。大迫は蔭ながらこの男を知り尽くしていた。本当は郡長の職ではなく、最も相応しい働き場があることを想ひ、出し惜しみしていたといつていい。だがこの際仕方がない。彼に期

待することが県にとって一番望ましい選択だと決断した。

吉平は大迫県令や石黒大書記官が自分の信任を益々厚くしていることに感謝して、明治十四年七月二十六日両郡長就任を拝命した。

同二十八日有志により盛大な送別会が開かれた。このとき静岡裁判所の判事吉岡弘は吉平とは特に親密の間柄であって送別会の主唱者となっていた。

もちろん大迫県令も出席している。席上、吉平に送る詩歌俳句など甚だ多く、吉平が職務の傍ら地元で俳諧を指導し、静岡吟社なる団体を組織して県人との文化交流をしてきたことが送別会に反映していたのである。

多くの祝吟に返す十湖の句は、引佐細江のほとりに行くに臨んで、これまで過ごした静岡の地に別れを惜しんで詠んだ。

涼しさに立ちさりかぬる木かげ哉
十湖(松島吉平)

すると友人である判事吉岡弘が

わかれ路や秋をも待ぬ虫のこえ
星秋(吉岡弘)

と返すと、吉平はこれでは収まらず断腸の思いで一句

虫の音に嘶まぎらす別れかな
十湖(松島吉平)

親友吉岡弘も、とうとう涙ながらに大きな声で、頓馬野郎か向う見ずに走るを送ると題し

四海なみ静岡たちてゆくか馬鹿

引佐細江は風かあら玉

星秋

と風刺して会場を湧かせた。

「行くか馬鹿これをしてゆくか君」と改めれば単に友を送るの語りとなり無味であること明白である。

しかし、ここ一番奮つて馬鹿と云う、まさに吉平と吉岡の友情は厚くして、「管鮑の交わり」の交友関係を見たようであつた。

「管鮑」の「管」は春秋時代の斉の管仲、「鮑」はその親友の鮑叔のこと。

管鮑の交わりとは、互いに理解し信頼し合つた、きわめて親密な関係をいい、親友であつた管仲と鮑叔が共に商売をしたときに、貧しかった管仲は自分の分け前を余計に取つたこともあつたが、鮑叔はそれを知つても一言も責めなかつた。

それどころか、二人の友情は深まるばかりで、鮑叔は斉の宰相に管仲を推薦したり、管仲は「我を生みし者は父母、我を知る者は鮑叔なり」と語り、二人の友情は生涯変わることなく続いたという故事に基づく。

のちにそれらを集めて「細江風集」と題する小冊子にまとめていた。

二日後、妻と二男藤吉を自宅に残し、単身赴地に入り郡役所所在地たる引佐郡氣賀村に居所を構えた。

その寓居を山色水楼と名付けたのである。

郡長異彩

吉平三十三歳にして引佐龜玉二郡の長として赴任してきた。

今の浜松市北区細江町気賀である。奥浜名湖の湖畔を前に田畑が広がり、農業と漁業の盛んな町であつた。市中の街道は姫街道と呼ばれ旅人の往来も多く、江戸時代から関所が設けられていた。

明治十四年八月五日、暑い盛りである。郡役所の入り口で新任郡長松島吉平は職員たちの拍手で迎えられた。吉平は出迎えに立つ列の顔を端から端まで見渡した。

その最前列で代表してあいさつをしたのが郡長書記の河野鎗次郎であつた。今後吉平の良き話し相手となる。居並ぶ職員の落着かない様子を見て、吉平は一縷の不安を感じていたが郡役所の門を入ってみるとその不安が的中した。

郡役所の吏員とはいえ、公務と私事とが混同し名ばかりの吏員たちであつた。

吉平は早速河野を呼び

「勤務評価はどうなっているのか」

と問いただした。河野が云うには前任郡長からは指示がなく、職員任せで事務処理をしてきたと淡々と説明した。自分はいくら注意しても改善されず困っていたという。

赴任しての初仕事は彼等に「公務員とは何か」を教え込むことから始まり、吏員の精神的改革だった。

職員全員に誓約書を作って署名をさせ、その不言実行を目指し指導した。

その結果、地域にも影響を及ぼし目に見えて役所の改革は進んでいった。

「河野君だけに苦労はかけないが、わしはこれから一年、郡の仕事にはいつさい口を出さないつもりだ。いいかね」

河野は吉平が何を意図しているのかわからなかった。ただ郡長の一存には逆らえなかった。

少なくともこれまでの自分のしたことは認めてくれているようだと思った。

吉平は赴任して直ぐに外向きの事業の執行等には沈黙を通し、郡内の民情を知ることには専念し、郡長としての通常内部業務を実践した。その中で両郡を巡視した時は奥山半僧坊にも顔を出して、名僧松久禹門と譲の二氏に会い親密になっていった。

二年目になると、河野からの提案を聞き本格的に欠けている事業を推進した。独断専行型ではなく書記との両輪の施策進行はこれまでになく順調であった。

その手始めは農業の振興だった。具体的には農業研究団体を組織していくために「西遠農学社」を創設。これは後に農業会となったもので本社を気賀に置き、吉平郡長自らが社長になって活動した。

各村には支社を設け、社員は毎月集まって農業知識の交換、技術研究、道路、用水路の

改良等を図った。社員への表彰制度を設け、授賞式を盛大に行った。

さらに二宮尊徳の報徳の教えを普及するため「報徳遠譲社」を作り各村に設立された。奥山方広寺境内には、寄付を集めて尊徳の石碑を立て社員たちの追慕の象徴とした。

引佐の地場産である琉球蘭草と養蚕の普及にも乗り出した。

公共工事での実績は

——枚拳の頬に耐えぬほどであり、歲月流れるがごとく、快刀乱麻の敏腕は一頭地を抜いて郡民に崇敬されたと報道されるほどであった。

ちなみに、新架設の橋梁三十五 延長三百八十一間余 費用六千七十一円、道路の改修三十九里一丁五十八間 費用一万九千四百十円であったが、この全部をことごとく地方の有志の義捐金で賄い、県費には一厘一銭も頼らなかった。

こうした事業推進の原動力は「報徳法」にあったと云ってもよい。吉平は就任以来「報徳法」を管内に普及させようと、その方法を模索してきた。

その結果自らには公職があり公然と活動することを憚り、異体同心ともいうべき松島授三郎、野末九八郎らを主唱者とした。吉平は郡長として陰に陽に力を支え、やつと西遠農学社を組織した。

後に三遠農学社と改称し、組織されたものは数百社、その社員二万余人の多きに及んだ。

思えば吉平が報徳に目覚めたのは二十代であった。

一八四七年（弘化四年）安居院庄七とその弟浅田有信が隣村の下石田村に神谷與平次を訪ねてきたことがあった。このとき既にこの地域では水害や凶作が重なり、疲弊していた状態であった。庄七は、数日とどまり、救貧の道、復興の法を説き、また農事の近代的手法を紹介したところ村人は感激し、この地に下石田報徳社を創立した。庄七五十九歳のときであった。

吉平は彼らの行く先々で篤志家らが競ってその説を聞くことを風の便りで知っていた。この地に來たらぜひ聞いてみたいと思っていた。だが安居院庄七は文久三年（一八六三年）に旅の途中七十五歳で客死した。遠州地方の村々では広まった報徳の組織が、しだいに衰退に向かっていた。そこで新たに赴任してきたのが福山滝助五十一歳である。慶応三年（一八六七年）のときであった。

彼らの説く報徳思想は至誠、勤労、分度、推譲の四綱領を柱としていずれも実践を通じて救貧と農政改革を目指したものであった。聞いた者は続々と共鳴しその門に入っていた。

「一度聞いただけではその手法の手順が理解できぬ」

吉平が十九歳の時深く心に期するところがあり、直接その学者自身に聞き、道を究めんと思ひ立ったのである。

「そうだ、相模へ行こう」

人づてに知った相州小田原の報徳学者福山瀧助に就いてみようとその門をたたき一箇年その道に励んだ。

帰つてきた時には徳川幕府の時代は終わり、明治新政府の下で新しき時代へと変化していた。

「いくら時代が変わつたつて天竜川の洪水が無くなつたことにはならない」
吉平は学んだ報徳仕法をいつかは役に立て、村の農民を救つてやりたいとの決意がいつそう強くなつた。

吉平二十歳の明治元年五月、またしても遠州中善地村の居村に豪雨が襲来し、堤防決壊して自宅も大部分を失つた。村全体の被害は甚だしく、食べるものなく飢餓に瀕した。この時吉平は学んできた報徳の精神を貫き、自家の貯蔵の米麦七十余俵と金を抛出し救済に率先した。

以来ますます以誠心為本 以勤勞為主 以分度為體 以推讓為用の尊徳の根本信義に接したことが今後の自分の生きる道であることを確信していった。

吉平は嘉永二年の生まれで、六歳で隣村羽鳥村の源長院において読書、習字を学び、十二歳に家へ戻り他の仏門によつて教典漢籍を学んだ。

十四歳にして、俳諧の栩木夷曰の門に入り詩文国学を修め日夜勉強に励んだ。俳諧は父母がいずれもその道の先駆者で号で呼ばれており吉平にもその素質が芽生えていた。

どれをとつても理解力があり、しかも行動的で以後災害救済を通じて報徳法に心酔し民

の心をひとつにし、農政家として民心を一身に集めていくことになった。

明治五年二十四歳のとき、中善地の人々ともに三才報徳社を福山滝助の教えを守り実践し、「遠譲社中善地支社」として設立した。

主旨は

一、天地の化育に人の賛す是れ三才なり。天地の間に生じたる財宝を私するは慎むこと、されば貧者を救ふべし。是の差出金を元怨金と称ふ。

二、三才報徳の元怨金拝借を元怨金以つて家業精出し、家業立ち直りしは元怨金差し出し、即ち三才の恩沢に報するに誠心なること。

三、親親の者何ほど元怨金を差し出しこれあり候とも、子孫の者親の志に背き、心掛よろしからざるに於いては、相助不申間敷候。改心の時は格別のこと。

四、富者の貧者を恵むの道至誠なりとも、その者に益なく助からざる時は捨てるに同じとも先生（尊徳）に相伺い候、拠つて衆評の上能々善人を選びて助くるが肝要のこと。右の条々永久堅度相守可申候

この三才報徳社を組織した人々は、根本信義を良く守り成果を上げて、以来組織を二十五年間継続した。

その初めの頃は吉平がそれぞれの社員の家へ行つては激励した。

「元怨金を払うほど収獲がないなら、毎晩縄をなつたらどうか。」

「それでよければ簡単なことだ、毎晩でもやる。」

と社員は同意した。吉平は自ら筆頭にたつて、毎夜縄集めに各戸を廻った。集めては安価で売り、社員中の救貧費に当てていった。

こうした吉平の仕方は各地に知れわたり、営繕司御用係、中善地百姓代等を勤る傍ら、かねての地域住民の念願であった中善地と勾坂村とをつなぐ渡船の便を開いたりした。

明治六年戸長制度が実施されると、吉平は浜松県より中善地戸長を拝命した。

地域における諸問題を解決しながら、制度の改革にもつとめた。その実績を買われ大迫県令の奨めで県官に奉職し、県会議員等の公職を歴任、三十三才にして引佐あら玉郡長に就任し、さまざまな事業を遂行していった。

中でも天竜川の治水にあつては金原明善の事業にも協力し、自らは念願の豊田橋の架橋を図ったことは後世に知られる事実である。

——遡って明治五年、対岸へ行くにはさらに南下して池田の渡しを利用するしかなかった時代である。もっと近くで渡してもらえぬかと、他でもない吉平二十四才のとき浜松県へ何度も足を運び願い出た。その回数や四十回にも及ぶ。その労あつてかやつとの思いで天竜川の対岸勾坂村への渡船が許可され実現した。

それから十年後、既に渡船の時代を過ぎ、下流に架かった天竜川橋を見るにつけ、橋の必要性を感じていた。明治十五年九月十四日吉平三十五歳のとき發起人となり、天竜川兩岸の有識者と連携し架橋の運動を展開したところ、翌十六年二月十八日早いもので資本金も集まり完成し、橋は長さ千四百七十m幅三・六m、豊田郡末島村（現在の豊西町）川岸

から対岸の豊田郡匂坂村（現匂坂中）に架けられた。有料の橋で「豊田橋」と名づけられた。

当時の橋づくりの工法は人力で川の中に杭を打っていくもので、一本の杭を打つのに綱を引く綱子衆三十人から四十人が関わった。今に残る天竜側の歌に「ザンザ節」というものが伝えられているが完成までの間、この歌が風に乗って吉平の耳にも届いたのではないだろうか。

ザンザ節

・ ・ ・ 天竜川原で昼寝をしたら（ヤレザンザ、チョイトザンザ）

鮎に瀬上り夢に見た（ドッコイショ）

お茶はお茶でも見付のお茶は（ヤレザンザ、チョイトザンザ）

海を渡ってアメリカへ（ドッコイショ）

芋がうまいと褒めてはみたが（ヤレザンザ、チョイトザンザ）

三っ日続けばママほしいドッコイショ）・ ・ ・

橋が完成するのを待ち望んでいた吉平（当時は引佐麿玉郡長）は、豊田橋開橋式で万感の思いを句に認めた。

春風もふき渡なり橋あらた

郡長として赴任して以来、公務の傍らさらに報徳法を広めようと有志らで西遠農学社を創立した。明治十五年八月のことである。

この時の主旨は「農会の利益たるは例えは棒にて担ぎしものを車に換えれば凡そ人の力を増し、資金は千円なるも千人にて出金すれば一円にて千円の値を得るが如し。この手段は労苦にあらずして安楽の種なり。」と。

郡長としての公職にあるうちは自らが主唱者になり行動するのは憚れた。

自らと異体同心とも言うべき腹心の友である松島授三郎と野末九八郎らを報徳法の提唱者として、吉平自身は郡長としてその後押し役に徹した。

後に三遠農学社と改称し、引佐のみならず三河方面や駿河方面にも広がり、組織されたものは数百社に、その社員も二万人を超えた。

時代が組織を必要としていたのだった。先に創立した報徳遠譲社とともに日増しに実績を上げていった。

その後滝助系の報徳法による分社は遠州だけで二百余社、三遠農学社一系分社、三重、愛知の両県に七十余社を数えるにいたった。

こうして相州柏山の尊徳出身地より発した芽は、岡田系の遠江報徳社派の隆盛をも合わせて遠州においてもつとも花咲き実ったというべきであった。

因みにこのとき十湖らが起草した「西遠農学社主義」を下記に記す。

西遠農学社主義

人のこの世に生息するは各その分に応じて自由を求め幸福を祈り安樂世界に住居する事を望むものなり。その望みを全うするの道を策め身を修め業を務めて子孫の繁栄ならん事を希望するは人の天性進んで止めざるの通情なり。その望みを得ざれば広き天地の間に居ながら自ら束縛せられたるがごとく人類の快樂を全うするを得ず、これ人の憂のもつとも甚だしきものなり。その憂を去りその希望を達するは人智を開き家を富し国を富すにあらざればこれを全うするを得ず。その富を求むるに天地に向かい求めんかそれ人に向かい求めて求めず必ずや造化の無尽蔵に向いてこれを求むこれ本社の大主義なり、人に向いて求むるも全国分業の職を尽くして利を得るは天地に向かい求めて求めるものとす。ここに我が西遠農学社を開設するもの農事の精理を探り互いに智識を交換し己を利し国を益し専ら経世の事務を諮じゆんするにあり。天下の事業大別すれば二種となる、即心を勞する者と身を勞するものなり。方今心を勞する社会には愛国の議論盛んなるも身を勞する社会の振りわざるがゆえに富国の術全うからず。これを全うせんがためにこの社を開く者なり。かつ富国とは全国の事にして我事にあらずと誤想するなかれ、国人相互の便利を計り共同の福利を得るを富国というなり。人々の貧富を問わずこの社に進んで共同の福利を得べし。しかれども自然富める者は自ら足れりとして怠るなきを保せず。また富者は財産の維持保護を国に受けること貧者よりも厚し。ゆえに国に尽くすの義務もまたしたがって重し、深く思わざるべからず、凡そ富者財産の相続をただ単に金力にのみ依頼して子孫に譲ははな

はだ危し。必ず道理を添えて譲るべし。本社は道理を談話研究するところなり。ひそかにこれみるに国力と万国対立するの力足らざるは全国の不幸なりこれを希求の秋といわざるをえず、よつて人民またこれを償うの義務を負担せざるを得ず、退いて因循せんかむしろ進んでこれを償うの術を謀らんか、進んで国に尽くすべきは当然の通義なり、富者進んで貧者と和しこの社を盛大ならしめよ、我日本全国の地位は四方海にして運送の便といひ土地の豊饒といひ富みをもつて万国に誇るに至るも困難のことにあらざるべし、全国營業数多の内最大数なるは農人にして全国貧富の権を預かるものごとし、ゆえに人々報国の義心を奮発して各々国家を富し愉快安樂に終身を修め子孫の繁栄を計る事を希望す、論ずれば妄に奮発躁急国のために我労苦を増すものなりと誤解することなかれ、農会の利益たるは村中利益のために道を作り棒にも荷いしものを車に換えれば凡そ四人の力を増し身体の労大に減ずれば楽しんで倦まず、その工業の入費は千円なるも千人にて出金すれば一円金を持って千円の道路を買うがごとし、全国を持って論ずるもまた同じ道理ならずや、ここに農事の大目的を定める談話にあたり甲乙二論に別れ甲は理学者にて農事は天地の開かるところにして人は傳守なり、天地の性質を側算せざれば傳守たるもの職を尽くすことを如何せんと言ひ、乙は腕力者にて農事は人のなすところ天地は古今替わらぬ天地なりといひは目的は大に懸隔せり、天下の輿論は本末始終輕重是非等を有形無形の間に正して平均順序を得るため改め進むが如きのみなるを保てず、世間に目的を誤り不幸に陥る人少なからず人智の優劣は限りなきものなり、然るに千人会して智識を交換すれば千人の智識一人の

所有となる、この手段は労苦にあらずして安樂の種なり、農会は例えば全国開闢以来天地の間に捨てある物を拾うの会あり、その捨てたる物目をもつて見るべからず道理をもつて見るものなり、ゆえに衆人会して得業及び智識を交換し道理のあるところを探り策めてこれによって見るときは初めて目前に宝の山はあるをみるなり、これ天下の人の争つて希望する安樂世界の寶宝なり、いただくは有志の諸氏来会入社してその寶宝を取り我家の所有となし幸福の本源を固ふし報国の義心を振起し国の安寧を計り、富みをもつて万国に誇り我家を安全にし子孫の永續を計らん事をこのこと難しきにあらず、我勞力社会よ（勞力社会とは貧富を不論国産を繁殖ならしむる身分に居る人を言う）勞苦を去つて安樂に就かんことを思欲し進んで智識を交換し極樂世界の市場繁盛ならんを謹んで希望する。

以下規則の第十九条までをもつて十湖の報徳に関する主張を窺い知ることができる。

明治十八年四月、またしても数日の霜雨に続く強風のために天竜川が危険に瀕した。だが沿岸の村人が必死になつて堤防を守り大事には至らなかつた。しかし、この日は雨の余勢は強く、数日後とうとう河水が氾濫した。

村民たちは防災で既に疲弊しており、氾濫後は集中力もなくもはや成す術がなかつた。

古老の一人が

「もう万事休すじや。吉平郡長に知らせ、助けてもらわまいか」

と村民から若い男を選び、馬車をとばして氣賀村在任の吉平のもとに急を告げた。

「吉平郡長様、天竜川の氾濫で村は壊滅的です。どうか一緒に来てもらえませんか」

「わしは郡長の公職にあるゆえ軽思の行動はできぬ」

と吉平はいったんは思いとどまったが、危難の甚大なるを知って傍觀しがたく、直ちに郡長辞職書を作成し机の引き出しに入れ置いた。

村民の用意した馬車に乗り込み帰村すると、使いを村中のみならず遠近に走らせ、有志、人夫合わせて三百人を集め、自ら叱咤督励した。結果五日間で水防を完成させ、西河岸五十余村の貴重なる田畑を救い多数の人心を安堵させることができたのである。

道理からいえば公職にある身が独断で他郡に出張するなど非常識ではあるが、吉平の報徳精神よりすれば自らの責務の軽重を識別していたというほかなかった。

この事態に書記の河野は郡長に事故のないことを一心に祈っていたことは云うまでもなかった。

これは一例にすぎないが、独断で河水を防いだときは人夫費四十円を自費であてがい、当時のこの金高は郡長の一ヶ月俸給にも値していた。

総じて吉平の仕方は郡長時代の事業においても軽きを抑え、重を進めた。冗費奢侈を極度に抑え、公的な施設改良には出費を惜しまなかったのである。

一方、公務の傍らでも俳諧の道の研鑽を忘れることはなかった。郡長就任地の気賀村では俳句の結社西遠吟社を興し、月一回の例会を開き集まるものは毎回数十人であった。句作のうちにも報徳精神が強く流れていたようだった。

こうして、常に激務の中を突き進んできた吉平郡長だったが、風流の道は怠らなかつた。

吉平は県吏として静岡に在職中は「静岡吟社」という俳句団体をつくつたが、引佐へ郡長として来てからは「西遠吟社」をつくり公務の傍ら、行つた先々で祝辞の後などは俳句を詠み、筆をとつては残してきたのである。

この俳諧西遠吟社は地域文化の高揚にも貢献し農業振興とも重なり、住民不在の行政から住民主体の行政への足がかりとなつた。

まさに仕事以外では俳句の普及が農業振興の思想的背景としての報徳の精神を併せ持ち、地域振興・文化の隆盛に役立っていった。

ちなみに当組織の社則を抜粋し見てみよう。

一、社員は地域に居住する人

二、本社活動は毎月第一日曜日、社中輪番で開会する

三、社員は同等の権利で社長を定めない。幹事四名を社員より投票、一年ごと改選

四、親睦、節約を旨とし品行正しく俳諧の大道を維持

五、社員は毎年一円二十銭を積金とする

六、毎回各自弁当持参

七、会日は発句の提出は自由

八、入退者は社員二人以上の保証で許可

以上をもって組織し一時は社員数百名に達した。

社則はどこかしら報徳社の社則と似ているふしがある。

報徳の精神がこの中にも息づいているようだ。

引佐龜玉郡長の公職にあつた明治十五年の暮れ、この年は地元竜川に住民待望の豊田橋が着工した。吉平が発起人となり、まさしく出身地にとって悲願とも言える橋が出来るのである。

さらに宮口村には五反田橋、引佐川名村にはにも新橋着工、花平村には三花学校が新築を予定した。

郡内の村道は改修もしくは新築するなど土木関係の政策は次々と着手実現していった。後に吉平が道路郡長とまで言わしめた成果の列挙であつた。

地方財界はこの運の強い、やる気の男を見逃すはずはなく地域の産業振興にと担ぎ出そうとしていた。

吉平は地域経済界の実力者で敷地・長上・浜名の三郡の郡長竹山謙三と諮つてビール製造会社「酪醸社」の設立を計画した。

同年十二月二十二日地元函右新聞によれば資本金五万円、一株十円にて五千株発行、取締役は十株以上、役員の任期は一年、毎年六月十二日株主総会を開催など会社の詳細が伝えられていた。

実際、発起人には三十人が名乗りを上げ、いずれも吉平の社長を希望した。だが如何せ

ん前述のとおり公職にあり無理な相談である。

しからば他の者ではどうか、残念ながら出資間の不和を生じ、この計画は泡と消えてしまった。

わが国のビール製造はこれより以前に遡る。

最初の出会いは江戸時代鎖国政策下オランダ人が、ビールを持ち込み、それを蘭学者達が飲んだという。

以来日本において初めてビールが作られたのは、ノルウェー生まれでアメリカに帰化した醸造技師ウィリアム・コーブランド（1832～1902）によって、横浜で製造された。これが日本発のビールとなった。明治三年のことである。

明治四年欧米の文化視察に出た岩倉具視一行は、イギリスでビール工場を見学し、醸造から貯蔵までを学び、日本人の技術で自信を持ってビールを作れると確信した。帰国後、実現したのは明治二十一年より「キリンビール」、明治二十二年「札幌麦酒株式会社」今日のサッポロビールに至った。大阪でもビール醸造会社が、「大阪麦酒株式会社」という名称で設立されブランド名は「アサヒビール」であった。

もし明治十五年の時期、吉平等発起人が出資者間の不協和音を解消できていたならば、日本人初のビール会社が出来たはずだったのに。夢と消えた出来事だった。

明治十九年七月二十七日吉平は思うところがあり部下を呼んだ。

「三遠農学社の事務所を作り、農業の振興に役立てたい。協力してもらえんか」
指示するが、あまりの唐突なことに部下たちは怪訝に思った。

ただ、上司から言われたことは絶対であるから従わざるをえなかった。部下たちにしてみればこの提案は地域にとつて不満が残るところか、待ち望んでいたことであつた。吉平から言われたことでむしろ弾みがつき直ちに建設に着手した。

当時の新聞によれば、

——号令疾風の如く役夫の事を執ること防火夫の火事場にありて奔走する如き有様なれば迅速にして八月十日には早五十一坪余の二棟の家屋が出現したとあつた。

同月十六日突然静岡縣より吉平に郡長非職の辞令は發せられた。吉平にとっては既に予期していたことであり、自ら郡長辞任を届け出ていたのである。

二十二日を期して吉平は故郷に帰ることになる。既に家族は帰っていた。

。

曲松の別れ

夏の朝、奥浜名湖は鏡のような穏やかな湖面が広がっていた。だが、西の空には不穏な黒雲が垂れ込めている。

漁師の太助は今に雨が来ると直感した。ほどなくして閃光が見えたかと思うと雷鳴轟き、湖面をバシバシバシと大粒の雨が叩いた。

丸刈り頭の太助は、急いで舟を岸へ括ると家の中へ駆け込んだ。

太助は気賀の飯屋の俵で漁師をしている。

年の頃は二十歳を過ぎたばかりで、飯屋は専ら両親が経営し、太助は食材の準備係だ。夜中に浜名湖に舟を出しては漁をし、釣れた魚を早朝の飯屋の肴に間に合わせる。この日は既に魚籠にはセイゴが数匹収まっていた。

店の奥では、たすきを掛けた母親が洗ったばかりの米を手際よく釜へ運んでいる。

土間では父親の伝助が筵を広げて太い筆に墨を浸けていた。

「太助早く手伝いに来んか」

黒々とした頭に手ぬぐいを巻いた小太りの父親は、家の中に飛び込んできた太助を見ると大きな声で怒鳴った。

太助はいつもと異なる父親の行動をいぶかしげに見ていた。

「筵の端をつかめ」

太筆を手にした父から指示され、しびしび筵の端を押さえこんで父親の書くのを興味深く眺めていた。

「お父う。これはそのものずばりの文句だなあ。上手なものだ」
太助の口から褒めことばがこぼれた。

同じ頃、気賀村を見下ろす峠の邸には、一台の人力車が滑り込んだ。車夫は菅笠を被り蓑を着けていたが、全身すぶ濡れの状態だ。

雷をとまなう激しい雨は軒先の夏ツバメの飛び立ちをも阻止していた。

邸の主である野末九八郎は紋付袴に身支度を済ませ、軒先で老妻とともに雨の上がるのを心待ちにしていた。

既に顎鬚は白く垂れ下がりに、腰は心持ち前屈みで、かつての苦労を体型で物語っていた。

「旅立ちだというのに、不味い天気になった」

野末は老妻の顔を見つめながら呟いた。

「いいえ、雨降って地固まると昔の人の口伝にもあるように、きっと今日は良い日になるでしょう」

夫の不安を和らげようと妻が笑顔で返した。

だが、雨は一向に上がる気配はない。車夫は軒先で煙管を取り出し一服していた。

一方、気賀の東岸に近い尋常小学校の講堂の腕木庇には、緋の着物を着た大勢の生徒たちが雨宿りで横一直線に並んでいる。

彼らは空を見上げながら嬉しそうに笑い声が絶えない。

やがて、大粒の雨は小降りとなり、庇から雨垂れが時を刻むように落ちて来る。生徒等は今か今かと教師の指示を待っていた。

「全員、整列」

教師の声が響き渡ると、生徒たちは一斉に校庭に飛び出した。

その数五十人を超える。

雨は、子らの飛び出すのを待っていたかのように突然止んだ。

明治十九年夏、浜名湖北岸の気賀村は早朝からの雷雨が時々驟雨となった。

そのぬかるんだ道を午前八時頃から、大勢の人が都田川を見下ろす細江神社の境内に続々と詰めかけていた。

境内には新築されたばかりの農学社の建屋があり、その前の広場に集まっていた。前列には制服姿の郡役所の者が数十人居並び、白い紋付袴に麦藁帽子を被った血色良いなまず髭の男と向かい合っていた。

男は松島十湖こと引佐・龜玉前郡長である松島吉平である。

三十八歳にして農家出身者がこの地位まで上り詰めた。

「わしの在任中の六年間は、郡役所の諸君や村の人たちには随分と苦勞をかけた。この別れの日に皆の顔を見て去ることができるとは、わしはなんと果報者よ」

いつものいきり立つような口調とは違い、一語ずつ嚙締めながら話し始めた。

「郡長殿、我々こそ多くの事を学ばせていただきました。過ぎた日々が昨日のようであります。皆を代表してお礼申し上げます」

声高に言い放ったのは郡役所の重役たちの一人だった。

その背後には部下たちが神妙な顔付きで直立不動のまま頷いていた。

吉平は口元をほころばせながら、すぐに言葉を返した。

「諸君とは同じ釜の飯を食ってきた仲間だ。別れるのは辛いが、いずれまた会う事もある。君たちにはこれからの未来がある。必ずや住民を守る官吏であることを忘れるなよ」

云い終わるや否や、何処からともなく拍手が沸き起こった。

吉平の顔が感激のあまり紅潮し、眼は居並ぶひとりひとりの顔を見つめていた。

「用意してきたものを皆に分けてやってくれ」

吉平は部下だった書記の小山に向かって、筵の上の数え切れないほどの包みを指差した。それらは自ら揮毫した色紙やら半切などの書や、多くの親友、知人からもらった贈り物であつた。

「皆、郡長殿のお気持ちだけで十分です。そんな大切なものをいただけません」

小山はきっぱりと配るのを断った。

しかし、吉平はその言葉を無視して、自ら、見送りに来た人々に残らず配った。大半がなくなつた頃には、礼を述べて去る見送り人の数も徐々に減つていった。だが、それに替わるように新たな見送りの人々が集まつてきた。

見送り人の人力車が農学社前に数十両並んだ頃になって、吉平は近隣の家々へ一人で回り始め、丁重に別れを告げていった。

最後は役所を見下ろすように建っている東林寺の住職を訪ねると、待ちかねたように住職の方から惜別の挨拶をされた。

「いやこちらからお礼を言わなきやならぬのに、先に云われてしまった」

吉平は首をすくめて恐縮した。

「それにしても良くぞ決意してくれた。豊西村に住むお母上の介護のために辞任とは。残念だがやむをえないことだの」

和尚は笑いながらこれまでの郡長としての活躍に敬意を払いながらも辞任を惜しんだ。地元にとって突然の辞任は皆驚きを隠せなかったが、吉平自身にとってはさんざん考えた末の結論であつた。

吉平は若くして父親と死別し、現在の地位で活動する根源には母親の存在があつた。母親は養蚕をしていたが、その技術は未熟で収入も限られていた。ある日新技法を甲斐

米沢から持ち込み、生糸販売から脱却した。日夜養蚕と製糸の行程に励む母親の姿は吉平郡長としての公職推進の原点でもあった。

引佐・亀玉郡長として、故郷中善地から気賀まで引つ越してからは、行政の長として多忙な毎日を送っていた。吉平にとって唯一忙中閑有れば東林寺へ足を運び、住職と語り合うのが楽しみであった。

かつて、気賀に流れる夏の都田川の夕景を、寺の境内から眺めながら住職と語り合ったとき

「向こうに見えるチラチラした明かりは何ですか。まさか鵜飼ではないだろうが」

吉平は明かりの方を指しながら唐突に訊ねたことがあった。

岐阜の長良川には一度行ったことがあるが、その篝火とは規模も違う。ぼんやり見える舟の大きさも小さい。

「そのまさかです。河口で鵜飼をするのです」

住職とはこれだけの事でも世の中の動きを議論するきっかけになり話が弾んだ。口ではないつも吉平が負かされた。

「和尚、鵜飼のかがり火程度では後の世を照らし出すことはできないだろう。やはり修行を積んだあなたの力、御仏の教えをもつてしなければ」

話の最後は吉平が折れた。

「一度皆さんと呼んで、気賀のこの川で舟遊びでもしたらいかがですか」

和尚から勧められ、二年前の夏休暇には寺に親しい者を招き、夜は都田川に舟を浮かべ観月会を催した。

この時はその幽玄さに惹かれ一句認めていた。

後の世の闇はてるまじ鵜のかがり

吉平は再び境内の広場に戻ったとき、見送りの人々を前に別れの句を披露した。

刈り跡を立ち去り惜しむ案山子かな

午前九時、鐘の音を合図に、吉平一人が歩き始めた。その背後には村の戸長や総代が乗った人力車が静かに後を追った。

伊平の野末九八郎翁の顔もその中であつた。

吉平の前には送別会の三字を大描きした旗を三本立てて先導する者がおり、俳句仲間の西遠吟社の社員たちは別に社名を書いた幟を掲げその後に続いた。

道の両側には、見送り人が立ち並び別れを惜しむ。吉平がその前を通過すると、見送りの人たちはその後続いた。

たちまち長い行列となり、しめやかだった雰囲気は祭騒ぎの行列と化した。

町中をゆつくりと進みながら、見送り人が道の端に立っているのを見ると、吉平は帽子を取り丁重に別れの言葉をかけた。

落合橋の辺りには気賀小学校をはじめ、伊目、井伊谷の学区の生徒・役員・教員らが学校名の入った紅白の旗を立て、勢ぞろいして吉平の来るのを待っているのが遠目にもわかった。

その旗の影に「とろろ郡長万歳」と書かれた筵の幟が見え隠れしている。持っていたのは飯屋の夫婦だった。

とろろは吉平の大好物であった。

在任中はとろろを飯にぶっ掛けて食べていた。

近くの宿屋に顔を出したときなどは、わざわざ自分のためにとろろを作っては出してくれた。

その日に山芋がないと宿屋の主は飯屋へ走って用意した。

いつの間にか吉平には「とろろ郡長」と言うあだ名がついていた。

吉平は子供の頃から山芋は嫌いではなく特別気にして食べていたわけでもない。

物心ついて尊徳の教えを知った時、少しでも報徳の思想に近づきたいとの一心から、とろろを口にする機会が多くなったのだった。

二宮金次郎こと尊徳が小田原藩主の大久保忠真公から分家の桜町領の財政再建を頼まれた時のことだ。米の生産高を十年で二倍にするという目標を立てて実現した。

約束の十年目に尊徳は大久保忠真公に会った。

手土産にヤマノイモを携えていた。

「そちは如何様にして桜町の再建をしたのか」

大久保公は仕法を尋ねられた。

「山芋掘は、山芋のつるを見て芋の善し悪しを知ります。鰻釣りは、泥土の様子を見て、鰻がいるかいないかを知ります。良農は草の色を見て、土が肥えているか、やせているかを知り、みな同じであります。これが「至誠神の如し」というものであつて、永年刻苦を経験して、初めてわかるものであり、技芸にこの事が多く、侮つてはなりません。荒地には荒地の力があります。荒地は荒地に力で起こし返しました。人にもそれぞれ良さととりえがあります。其れを生かして村を興してきました」

尊徳は落ち着いてこう答えた。

「そちのやり方は論語の「徳をもつて徳に報いる」であるな」

大久保公が尊徳に向かつて云つたという。

以来尊徳はこの言葉に感激し、自らの仕法を「報徳」と呼んだ。吉平は郡長として社会に取り組む時、常にこの報徳の仕法を忘れなかった。とろろを食べるたびに、その思いは強くなつていった。

（今日あるのも、とろろ芋様のおかげだ）

飯屋の夫婦の持つ垂れ幕の字を見上げながら一人ほくそ笑んだ。

既に真夏の太陽は頭上に近く、その眩い暑さの中を総数二千七百四十人余が数十町の間、行列となって吉平の後に続いた。

道筋には西瓜売り、氷売、饅頭売など臨時の露店が軒を並べ、先頭が長坂あたりに着いても後の列は気賀の市中にあった。

長坂を登る途中、村の端々や小高いところから振返れば、引佐の田園風景を背後に実に見事な行列だと吉平は感心した。

老ヶ谷の常夜灯を過ぎ、竹やぶを背に六体の地藏尊が並んで居るのを右に見て、松林を抜けると曲り松に着いた。姫街道と庄内往還の交差点であり、曲松を中心に庭となつて街道に沿うように広がっていた。松の木の下では夫婦が茶店を開いていた。

吉平はここを訣別地と定め、一旦休憩をとることにした。

後に続いていた見送り人たちの行列も順次止まり、日陰を探して休みかけていた。

茶店の小さな藤棚の下も見送り人で埋まり、井戸は清水で喉を潤していた。

吉平は枝ぶりの良い老松の陰に腰を下ろし、夏空を垣間見た。白雲が一つぼっかり浮かんでいた。

見たことがある形だと思いながら、

「そうだ。静岡からこの地に赴任してきたときも同じ雲の形をした空だった」

大きなため息をつくとき郡長時代の六年間が走馬灯のように駆けめぐっていた。

吉平は曲り松の木蔭で休み、浮き雲の行方を追っていた。

「長い行列になりましたなあ。郡長殿との別れを惜しんで皆去り難いようです。六年間という短い期間であつたにもかかわらず、多くの事業を成し遂げられ、その功績が今日の行列になつてゐるようです」

部下の小山が周囲の様子を気にしながら、吉平に告げた。

「うーむ、この暑い中を皆ご苦勞じやのう」

吉平はまんざらでもなさそうに口髭を撫でながら周囲を見渡した。

藤棚の下に人力車に乗ったまま休んでいる野末九八郎がいた。

「野末翁、今日はご苦勞だった」

近寄つていった吉平は親しそうに笑顔で挨拶をする。

「吉平郡長、わしこそ随分世話になつた。村の衆が幸せになつたのもあんたのおかげだ」
翁と呼ばれた野末は謙遜してことばを返した。

野末は吉平にとって地域の農業を改革していくうえでは重要な存在のひとりであつた。その立役者のひとりが野末九八郎であつた。

今、こうして面と向かつてみると、かつて黒々としていた口元の髭が心なしか威厳がなく、老体に鞭打つていたのかとその苦勞の程が偲ばれた。

吉平は別れを告げ、心で涙した。

吉平は行列の先頭へ戻り、見送り人たちに振舞つた西瓜の片割れを美味そうに一口食べると

「そろそろ行くか」

吉平が立ち上がったのを機に、それぞれの場所で休憩していた見送り人がどつと周りに集まってきた。参集した中にはそれぞれの村の戸長、総代のほか、既に帰ったかと思われた学校の教師や生徒、父兄も含まれていた。さらに三農学社の社員らは持ってきた幟を掲げ、曲り松付近が式典会場さながらな様相となった。

今朝方の出立の際は雨も降っていたのに、今はまさに暑い盛りである。その中を見送りの列は延々と町境から東へ一里続いた。誰一人として帰る者はなくここまでやってきたのだった。

曲り松の地は、江戸時代、気賀の領主や街道を通る行列を送迎した場所といわれ、樹齢数百年の枝ぶりのよい松があったことから、この名が付いたという。

地元民にとっては別れの場所として知られていた。吉平も郡長在任中は何度か視察に来る客の送迎で来ていた。

曲り松には事前に薦被りを三樽用意してあったが、まさかこんなに女、子供まで行列してくるとは嬉しい予想外であった。吉平はこの道中に見た臨時の売店の西瓜や氷、饅頭を全て買占め、女子供を含む見送りの人々に配った。

用意してあった薦被りを三つとも空けて決別の宴としたのだった。

送迎の一人ぞ月の友

吉平は一同に挨拶し句を披露する。傍にいた気賀町戸長太田佐平がさらに続けた。

樹々草々に置き余る露

再び吉平は背後にいた書記の小山から短冊を受け取ると、墨を付け直し一句認めた。

別るゝは又逢ふはしよ月の友

決別の句を披露したところで一同に頭を下げ、風呂敷包み一つを手には歩き始めた。目指すは自宅邸へ、これより六里余の先にある浜名郡中善地である。

曲り松からはちょうど東へ東へと向かつていけばよい。しかも、ずっと下りで上がり坂はない。夕方までには十分着くだろうと思っていた。

とその時、見送り人の列から真新しい人力車が一台飛び出してきた。

「十湖さまあ、乗って下せえ」

背格好のがつしりした人力車の車夫が叫びながら後を追って来た。

「松五郎ではないか。こんなところまでよく来たな」

吉平は何事かと振り返った。

「この日が来るのを六年待っていました。さあ乗っておくんなせえ」

松五郎は吉平に声をかけられたことの喜びを隠せないらしく、ニヤニヤしながら人力車を下げ急ぐ様に言う。

吉平がしぶしぶ乗ると人力車は踵を返して見送り人の方を向いた。まだ立ち去りがたい多くの見送り人の顔があった。吉平は再び礼を云い、手を大きく振った。

これで本当に地元引佐との別れである。

人力車は生まれ故郷の中善地を目指して矢の如く走り始めた。背後に見送り人の拍手や歓声が徐々に遠ざかっていくのがわかった。

「松五郎そんなに急がなくても良いぞ。今日はどこへも行かん。家へ帰るだけだからのう」

「十湖様、家じゃ奥様と坊ちやまが首を長くして待つてますぜ。それにたくさんのお弟子さんが十湖邸で十湖宗匠帰庵の句を披露しようと今か今かとお待ちかねでつせ」

松五郎は風に負けないよう怒鳴り声で云った。吉平は少しの間をおいて「そうだ。俺には俳句があったな。明日からは月並の棟梁で十湖宗匠だ」

突然想起して大きな声で返した。

夏の太陽は既に西に傾きはじめ、吉平は大きな背伸びをした。

その夜吉平は夢を見た。

夢に入る秋や引佐江引佐山

尊徳の遺品

背丈ほどもある門松が、十湖邸の玄関の両脇にでんと坐している。

軒下には大人の握り拳ほどもある橙のついた正月飾りがぶら下がり、その下を次々と年始の客が通り抜けていく。

早いもので郡長の職を辞してから十年の歳月が流れた。

あれ以来伸ばしてきた顎鬚はそれなりに伸びてきた。

今はもっぱら月並みの棟梁として、俳句作りに余念がない。

月並とは、江戸時代から続く俳諧を、明治に入り正岡子規が侮蔑的に言い放った言葉である。

従来の俳諧が、文字通り月ごとに句を作っては点を付けていたので、それを月並調と称していた。そのまとめ役が宗匠であり、棟梁だったのだ。

快晴の上穏やかな正月の朝である。

「おめでとうございます。本年も相変わらずお願い申し上げます」

玄関先に神妙な顔つきで念頭の挨拶にきたのは、十湖の旧友松島授三郎である。廊下の奥から十湖が顔を覗かせた。

すこぶるご機嫌が良さそうである。

授三郎は挨拶を済ますと、さっさと敷居をまたいで奥へと入っていった。

「ちようどいいところへきたな。話し相手がほしいところだった」

十湖は羽織姿で授三郎を迎え入れ、屠蘇の支度がされた小部屋へ通した。

床の間には、十湖の直筆の掛け軸のほかに、大きな鏡餅が供えられていた。

十湖が群長時代に組織した三遠農学社を辞任して以来、今では顧問として名を残しているが、その功績に対し元旦には三遠農学社から鏡餅が届けられている。

「毎年この日に来るが、直ぐに屠蘇をご相伴になれるのは初めてではないか」

授三郎は皮肉を込めながら云い、腰を降ろした。

「そうかのう。まあ今年は大した課題もないので、まずは一献いこう」

授三郎の前に盃を差し出した。

既に十湖は手酌で飲んでいたらしく、顔はほんのり赤みがかかっていた。

「今年の勅題は梅花先春か」

床に掛った掛け軸を見ながら、授三郎が聞いた。

十湖は床の間を指さして

「白梅や春待かほに咲き匂ふ」

と声を出して詠んだ。

「めでたい句だ。何かいいことがありそうな春を予感しておる」

授三郎は酒の勢いで褒めた。

十湖はもつともだと云わんばかりに頷いていた。

明治二十七年正月五日、十湖の庵は年始の客でごったかえし、一年で最も騒々しい日である。

十湖は四十五歳になっていた。

玄関には三遠農学社の創業に関わった弟子たちが年賀に訪れ、そのまま鎮座し来客をもてなしている。

ただ玄関の様子が他所と違うところがあり、床に松竹梅で飾られた白木の箱が置かれていたことである。

大きさは畳一帖ほどで、一人一人が入るのには十分である。

「ごぞんじかな。門松を正月に立てるといふ風習の起こりは」

奥から十湖の大きい声が、年始の客に訊ねていた。

両人とも屠蘇が入っているせいかな、頗る機嫌がよい。

「年が新まり、歳神に家へ降りてきて貰うための目印として、始まったではないかの」

授三郎は十湖に理屈よく応えた。

授三郎の歳は十湖より十二歳年上だが、顔に張りがあり同じ年頃のようにも見える。早くから二宮尊徳の報徳手法に目覚め、十湖とともに農民の組織化に関わってきた。

「そのとおりじゃ。だが一方で正月に門松を立てることは、死へと近づいていく。死出の

旅の始まりだと仏教用語では教えている」

そう云いながら十湖は手に持った杯を飲み干した。

「ほう宗匠は博学であるな」

授三郎は徳利を手にして、空いた十湖の杯に屠蘇を注いだ。

「あの一休禅師はシャレコウベを掲げて、こう詠んだそうな。」

門松や冥土の旅の一里塚　めでたくもあり　めでたくもなし

正月だからといって、只只浮かれていまする人々に警鐘を与えたのだ」

十湖は得意そうに云い放し、玄関に置かれた白木の箱の棺桶を指差して、松島授三郎に愛想を振り撒いていた。

さらに続けて

「この際、正月を祝って一句披露しよう」

棺桶をうしろにうける御慶かな

二人の饒舌と笑い声は玄関の外へとこぼれていた。

その様子を垣根の影から、じつと窺っている初老の男がいた。

やっと玄関まで辿り着いた善右衛門は、庵が忙殺している様子に息を呑んだ。

それに玄関に置かれた棺桶は、誰かが死んだのかと不審に思っていた。

恐る恐る腰をかがめながら、玄関先から声を放った。

「ごめんください。あけましておめでとうございます」

善右衛門は接客に出てきた男に向かつて、あらん限りの声であいさつをした。

あまりの騒々しさに、聞こえないだろうと思つたからだ。

「おめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます」

弟子が腰を落として、笑顔で丁寧に挨拶を交わした。ふと見ると、男が旅装束のまま大きな荷物を背負っているの、旅の途中かと不審に思つたらしく

「さて、どちらからのお方でしょうか」

そう云いながら弟子は筆と紙を出し、書き記しを願おうとした。

一瞬、客の流れが止まったが、後に続く来客は別の弟子が受けていた。

「私は小田原から来た岡部善右衛門と申します。十湖様にどうしてもお渡ししたいものがあり、持参いたしました。どうか十湖様にお会いしとうございます」

岡部は真摯に名乗った。

「この度は遠くからわざわざお出でください、さぞお疲れでしょう。暫くお待ちください」弟子は、急ぎ奥へ十湖を呼びに行った。

取次ぎを受けた十湖が、そそくさと怪訝な面持ちで玄関へ出てきた。

それもそのはず、訪ねてきた人物の名に心当たりがない。しかも手土産まであるという。怪訝な顔になるのも致し方がない。

玄関には相変わらず年始の客が止切れることなく出入りして中には酒樽を持つてくる者があり、廊下に所狭しと並べられていた。

十湖はその隙間に足を入れながら、玄関で待つ岡部と面会した。

岡部は繰り返し名を名乗り、ここへきた経緯を説明した。

この様子を傍で見ていた十湖の一番弟子の大木隨處が、何やら曰く付きの話のようだと直感した。

「宗匠、ここではなんですから奥の間が空いていますので、そちらでお話を承ったらいかがでしょうか」

「そうだな。遠くから来られてお疲れのようだから、そうするか」

十湖は、岡部を奥へ招きいれた。

部屋が空いているとは云つても、そこにも年始客へのお返しの書が幾枚と無造作に置かれている。

妻の左乃が氣を利かして、盆にのせたお茶を差し出した。

向かい合った岡部と十湖は、茶をすすりながらお互いの顔を改めて見つめて

「十湖様、この度は突然の来訪で大変ご迷惑をおかけしました。私は居ても立つてもいられなくて行動に移してしまいました。本来なら、手紙にてご了解を得てから参上するのが筋だとは思いましたが、その余裕を持ちませんでした」

岡部は繰り返し来訪の無精を詫びたが、十湖は氣にかけることなく頷いていた。

「鶴髻をご存知でしょうか。二宮翁の遺品のひとつですが」

「存じて居る。翁にとつては家宝であつたはずだ。江戸時代の鶴は將軍や大名の専有物であつたから、その羽毛で作つた外被、つまり、鶴髻は大変格調が高く、普通の人では目にすることもできなかった」

「そのとおりです。その鶴髻をお持ちしたので十湖様に受け取っていただきたいのです」
「何ですと、それが今日来訪の理由だったのか」

十湖にとつて、それは夢のような話だと思つた。

恐れ多くも自分の尊敬する人物の遺品である。

なぜ、ここに持つてきたのさえ理由がわからないのに、そう簡単に受け取れるしろものではない。本物かどうか不明だつた。

一七八八年に起きた天明の飢饉は、相馬藩の人口が三分の一になるといふ壊滅的な被害をもたらした。

四〇年を経て以来藩の財政の立て直しは未だ達成できないでいた。

ところが相馬の窮状とは相反し、周辺の諸藩は既に二宮尊徳の指導を仰ぎ、六〇〇の藩で復興が成功している状態にあつた。

この手法を地元では御仕法と呼んでいた。

これを見た相馬藩主は、新たに藩の中枢に尊徳の仕法を知る富田高慶等を加え、一八四五年から相馬中村藩で『二宮仕法』の導入で改革を始めた。

やがて、御仕法は相馬藩の理解のもと、藩の一大事業として積極的に推進していった。

だが、二宮尊徳自身は相馬の地を訪れることはなく尊徳の弟子であった富田高慶が二宮尊徳の代理として指導にあたった。

その結果相馬家には巨万の債があつたにもかかわらず、それを償い、財を成すことに成功した。

結局、改革は遅かったが諸藩の中でもっとも理想的に導入し、効果をあげたのは相馬藩だったのである。

相馬侯は折に触れて尊徳に褒章を与えようとして、その機会を企てていた。

褒章の品は衆目の的である鶴髦と決めていた。

一年後古希以上の臣下を集め、宴を開くことになった。

相馬侯はこの時とばかり、自らが愛用していた羽織の鶴髦を尊徳の前に差し出し、これまでの尊徳の功労こそ持つに相応しいとして、皆の前で与えたのである。

「その鶴髦が本日持って参った遺品です」

岡部善右衛門は畳まれた鶴髦の羽織を十湖の膝元へ丁重に差し出した。

色はやや青みがかった灰白色で、思わず十湖は格調の高い存在感到感動していた。

「これはすばらしい。だが、なぜに尊徳翁が貰ったはずのものを、岡部善右衛門殿の手元にあるのか」

「私のところに鶴肇が来たのはずっと後の時代で、祖父岡部善右衛門の手に渡ったのが最初です」

「すると今の善右衛門殿は同じ名で三代目ということか。何をして生計をたてていたのか」
「初代の岡部老翁は土地では名高い算学者でして、尊徳翁の壮年時代に於ける算学の師でありました」

「それが尊徳翁と岡部善右衛門殿との接点なのか」

「そうです。祖父が云うのには相州足柄に戻った尊徳翁は、菩提所である善榮寺に詣でて、累代の墓を清掃したといひます」

「出世した人物に限ってやることだ。まあ何処にでもある話だ」

十湖は鼻を鳴らして云ったが、岡部はそんな態度は気にもせず、話を続けた。

「尊徳翁が故郷に飾る錦にふと思いついたのは、相馬侯より献上の品鶴肇でした。早速肩に掛けていた両掛から恭しく取り出し、着ていた羽織と取替え、鶴肇を身につけ再び墓を清掃した時でした」

十湖には翁が錦を飾るとはいえ、何も鶴肇でなくてはならぬことではないはずだがと疑念を抱きづつ、いつの間にか話しに聞き入っていた。

しばらくして十湖が、ふと我に立ち返ったとき、庵の騒々しさが戻ってきたのを覚えた。

岡部善右衛門は積もる話を続けた。

「二宮尊徳翁はかつての師である、初代岡部善右衛門に礼をしようと思ひ立ちました。墓

を清掃後は直ちに両掛けに戻し、元の羽織を着たそうです。後に尊徳翁は故郷栢山の里にて岡部善右衛門を招き、再び相馬公から恩賜の鶴氅をとり出し、そのいわれを詳しく述べ、永く家の宝として欲しいと贈られたのでした」

「すると岡部家ではこの後から家の什宝となつたわけだな」

「そのとおりです。しかし、時が移り三年前の明治二十四年、早くも岡部家三代を経て祖父の名をそのままに襲用した私、善右衛門に不思議なことが起こりました。一夜の夢に一人の異人が現れました」

「なんと異人が夢に現れたというのか」

「なんだか作り話のような話になってきたと、十湖は机の上に頬杖をついていた。

「夢の中の異人とは、髪を振り乱した白装束の老婆で

——この家に久しく保管されたる鶴氅があろう。何ゆえこの家にあるのか。このままでは祟りがあろう。速やかにしかるべき人の手に譲るべし。その人はこれより彼方にあり、ゆめ忘れるなよ——と西方を指差したところで、夢から覚めたのです」

「夢の中の異人とは、まさか鶴の化身ではないだろうか」

一段と怪しい話になってきたので、十湖は冗談を交えて云ってしまった。

そろそろ話を切り上げたほうがよいかなと思つた。

「それが私の代になりました、以前から重なる不慮の禍に、家運は昔のように豊かになりません。果てはその日の家計にも窮するあまり、心ならずも家宝の鶴氅を金に代え、一時

の困窮を救おうとしたことがありました」

「それはいかん。尊徳翁が怒って夢枕に立つかもしれない」

「ですが譲るべき人は西の方というだけでは、一体どの誰だかわからないし途方にくれておりました。それで親族と相談したところ人から人に夢の話が伝わって、西に松島十湖ありと思ひ当たったのです」

「今、目の前にいるのが当の本人だが、いったい何処に鶴肇を譲られる資格があるというのか」

十湖は先ほど来、冗談半分で聞き入っていたものの、自分の名が口にされて狼狽した。

「十湖様の報徳の教えに功労が多く、二宮翁の終焉の地たる野州今市、半生の活躍の地相州原に於ける報徳二宮神社の創建をはじめ、自費をもつて肖像を刻し遺訓を彫り、誕生の地には建碑も予定していました」

「この程度のことは、報徳社の社員なら多かれ少なかれ実践しているはずだ」

「それはご謙遜というものです。これまで風の便りで十湖様の偉業が伝わってきたのです。俄かに旅装を整え箱に秘めたる鶴肇を携え、さらに先先代から伝わる二宮翁直筆の紙数通と

ふる道につもる木の葉をかきわけて

天照る神の足跡を見ん

と詠じられた翁の三十一文字を添え、十湖様の七十二峰庵に向かったところ、浜松の地へ近づけば近づくほど、ますます報徳の偉業の数々が聞こえてまいりました。ぜひ受け取っていただきたいのです」

十湖は受け取れば後の世まで大切に保管しなければならぬし、今の自分が持てる立場にあるのか不安があった。

十湖は頑なに辞退を申し入れた。

「待て待て、譲るべきはわしではなくて掛川の岡田良一郎ではないのか。この男の方が相応しいと思うがそれは調べたか」

「もちろん、調べさせていただきました。現在、遠江報徳社の社長として活躍しています。ですが彼の業績は、事業経営に着手し農業振興のためにはなつたでしょうが、純粋に農民を組織し、報徳仕法をもつて農事改良を果たしてきた十湖様等の活動とは違います」

「そう云って頂けるのは嬉しい。だが遠州の報徳運動の元祖は岡田らだ。わしは彼等をおいては居ない。だから受取るわけにはいかん」

「いやそれは困ります。是非に受け取っていただきたい」

岡部は頭を疊に擦り付け、繰り返し懇願した。

十湖は相変わらず頬杖をついたまま、じつとして岡部の云つたことを反芻していた。しばらく二人の間に、沈黙が続いた。

明治二十四年、尊徳に従四位が追贈されたことをきっかけに、報徳社の人々の間に、尊

徳を祀る神社を創立しようという動きが高まり、十湖もその一人として運動を始めた。

そうした中でも、いち早く相模の国報徳社社長福住正兄、遠江の国報徳社社長岡田良一郎、駿河の国東報徳社社長牧田勇三の三氏は、遠駿相報徳社社員総代として、野州芳賀郡物部村櫻町へ報徳二宮神社建立を実現させようと、国に対し請願をした。同年十月のことである。

運動の盛り上がりもあったせいか、すぐさま同年十一月には許可が出た。

ところが各地の報徳社員は、この案では地理が不便であつてよろしくない。しかも、報徳社員の幹部連中の一存で決めて出願したことに不満を表明した。

その先鋒が十湖その人だった。

今度は自らが七カ国の報徳社総代を集め協議をしたところ、翌年三月に今市と小田原の二箇所神社を建立しようと決定した。

しかし、既に櫻町への創建が許可されているため、この指令を取り消す必要に迫られた。

同年八月十五日、十湖は報徳社員一万人の総代として内務省に取り消しを願ひ出た。

時の内務大臣は品川弥二郎、辞任間直の接見であつた。

このとき、併せて「報徳二宮神社創立願書」を提出した。

各地の総代とともに、岡田社長の筆頭名で出願し、直ちに許可を得たのである。

五年後の明治三十年十一月十四日、懸案だった今市の報徳二宮神社が落成、鎮座式が行われる。

鎮座式に臨んで十湖は

大御代の光りぞ今日の宮遷し

と句を認めた。

落成式終了後、十湖は宮司の関根友三郎宅に宿泊し、夜を徹して二宮翁を語り合った。

十湖は短冊に一句を認め差し出したところ、それを読んだ関根氏がいたく感激し、あらためて句碑の建立を要請された。

無上の光栄と感涙した十湖は

明安し我も一夜の御墓守

と大書してして奉納したのだった。

十湖邸の年始の客もだいぶ減ってきたようで、弟子たちの会話だけが室内に響いている。善右衛門と十湖の二人は押し問答のあと、ずつと黙ったままであった。

この様子を見ていた報徳社の松島授三郎は、見るに見かねてそばから口を出した。

「今の世を見るにつけ、誰が尊徳の遺品を守るといふのだ。宗匠を捨てては他にはいない。

霊夢のお告げこそ二宮翁の言葉であり、どうして断ることができようか」

いっになく厳しい口調で十湖を説得した。

授三郎は十湖とともに遠州に報徳社を創設した同士であり、かつ報徳活動の先輩であった。

もはや十湖には辞する理由はなかった。

結局、十湖は岡部善右衛門が持参した尊徳の遺品のすべてを、譲り受けることを承知した。

以来、松島家の什物となったのである。

年始の客が帰ったあと、十湖は少し心細くなった。

とんでもないものをもらってしまったと、後悔したところで後の祭りである。

いくら自分が尊徳の偉業を後世に伝える努力をしているとかいっても、岡部から貰ったとなれば単なるたらい回しで手に入れたに他ならない。

その夜、十湖は不思議な夢を見た。

岡部が言ったのと同じ白い着物を着た人物が夢に現れたのである。

姿は老婆のようだが表情は全く見えない。

「お前はいったい誰だ。なんの用がある」

十湖は夢の中で問いかけた。その人は何かを訴えているようにもみえた。

何度か十湖がおなじことを繰り返し問いかけた。

返事は聞こえてこない。

翌朝、授三郎に夢の話をした。

「昨夜は妙な夢を見たぞ。岡部善右衛門が言っていたような、髪を振り乱した白装束の老婆が現れた」

十湖は眠そうな眼で、授三郎に説明した。

「大体こういう話は、そんなところがおちさ。思いつめて寝るものだからそんな夢を見る」
「わしもそんなはずはないと思っていたが、譲られた品物が気にかかっていた性もあろう」
「ううむ」

授三郎は腕組をしながら唸った。

突然、何かが閃いたと見えて、腕組を解き十湖の顔を仰いだ。

「預かった以上大切にすると保障がないから、異人が出てきたのではないか」

「確かに今の時点では何も考えておらん」

「そうだ。だから夢に出てきたのさ。さすがに尊徳の遺品だな」

授三郎は自分で答えを出し、力んで云った。

「何かよい手立てでも思いついたのか」

十湖は心配そうに聞いた。

「宗匠、こういうことにすれば良い」

「こういうこととは」

「それには自らに条件を付け、後の世まで大切に保管することだ」

授三郎はそれ以上云わず、十湖に考えるきっかけを与えた。

三年後の明治三十年九月、十湖の自宅敷地内に小さな祠が建った。二尊堂である。

尊徳の遺品を納めて祀った。

二尊堂には、普段から香の煙が立ち上っていた。

その後二宮翁の三代の嫡孫である二宮尊親氏が、布教により十湖の庵に立ち寄ったことがあった。

鶴篁はじめ二宮翁の遺品を示したところ、尊親氏はこれらを拝して、いたく因縁の浅からんことを感じて云った。

「これは世が初見参の品、なお曾祖父に見ゆるがごとし、永く子孫に伝えて曾祖父の霊をつぶすことなかれ」

昆虫翁

私の名は岡田忠男と申します。

昆虫翁名和靖先生発行「昆虫世界」の創刊時からの通信員です。

住いは静岡県浜名郡知波田村で農業を営んでいます。

昆虫翁名和靖（敬称略）をご存じない方が多いと思いますが、名和は出身地の岐阜山中で「新種の蝶 岐阜チョウ」を発見したことで世間に、いや世界に知られる人物となりました。

私どもはこの発見のみならず、一冊の昆虫誌を世に出したことから、稲作の害虫退治に大いに貢献していただけたことで関係を持つことになりました。

まさか、この世界に俳人の松島十湖宗匠が関わってくるとは思いもよりませんでした。物語の初めにその経緯を紹介しようと思います。

我が郡は静岡県の西部に位置し、中央に浜名湖、西に愛知県渥美郡に接し、気候温暖にして実に昆虫の生息によいところです。

しかし、静岡県西部地域はこの研究に従事するものは少なく、ただ害虫の何者たるを考えずして傍観するばかりで作物の被害は増える一方、神仏に祈り、お札的駆除と祖先伝来

の駆除法に依拠しているのが農民一般の有様でした。

昨年の明治三十年には全国いたるところでウンカの害を被り、我郡も非常に繁殖してその被害額は百十六万円余の多さにのぼり、農民は疲弊し外国米の輸入は増大するばかりでした。

ところが渥美郡は害虫被害があつても、二割以上の増収を見るに至りました。まさに害虫駆除の方法などを心得た成果だつたと言えます。

静岡県西部地域は全国同様の惨状を見るにいたつて、害虫駆除に立ち上がったのが我郡の三遠農学社の農民たちで、その先頭を走つていたのが十湖その人だつたのです。

浜名湖北岸に注ぐ都田川は両脇に青田が開け、そろそろ稲の花が咲く頃を迎えようとしていた。

その田畦に、農民とは不釣り合いな男の姿があつた。

男は白の羽織袴に麦藁帽子を被り、涼しそうな装いである。

時折、しゃがみこんでは稲をつかみ一人呟いた。

「困つたものだ。久々に稲田が不作に陥つてしまった」

男は元引佐・亀玉郡長の松島吉平こと十湖で、四十九歳のときである。

明治三十年七月、浜名郡長から十湖のところへ突然、招聘の手紙があつた。

自ら郡長の公職を退いて久しい。今は浜名郡会議員の一人として、悠々自適の政治活動

を展開しながら、俳句を主としていた。

若いころなら事態が急を告げれば、その対象に向かってまっしぐらに解決をめざし邁進していったものだが、そんな性格は時間と共に影を潜めてきたように思えた。

議会が開かれなければ引佐の地を踏むことはあまりない。だが今年に限っては米の作柄が気になっていた。

全国的にウンカが大発生をしているとの便りもあり、農民にとっては死活問題となってしまう。その心配の種をもぎ取ってしまおうと、中善地と引佐の稲田の生育状況を比較していた矢先のことだった。

「やあ久しぶりだな。どうだ、仕事はうまくいっているかね」

開け放たれた郡長室を訪ねた十湖は、気安く青沼にあいさつをした。

「よく来てくれました。おかげさまで順調に事業は展開しております。前任者がきちっと企画しておりましたので助かりました。宗匠も相変わらず俳句に、農学社の活動にお忙しいようで。今日は無理を承知でお願いして申し訳ありません。ところで、いかがですか。そちらのウンカの被害は」

浜名郡長である青沼は真新しいグレーの制服を着込み、短い口ひげの下に笑みを浮かべながら、立ち上がって十湖に椅子をすすめた。

十湖は腰を下ろし、懷から扇子をとりだすとパタパタと扇ぎ始めた。

「今年のウンカの発生はものすごい。稲作にかなり影響を与えているようだ。このままで

は言うまでもなく村の米は全滅だ。それなのに気賀村の地主などは、虫の湧くのは天災だから仕方がない。無理に手を下すまでもないなどとぼざいていたが、わしはそうは思わぬ」「私も同感です。ですがウンカを撲滅する有効な手段を決めかねて、手の打ちようがありません。どうしたらいいものかと、今日は元郡長である吉平殿に、いや失礼、十湖宗匠にお出ましをお願いしたものです」

「そう言われても、駆除の方法をわしは知らん。捕まえて燃やしてしまえばいいような気もするし、もっといい方法がありそうな感じもするが確信がない」

十湖は氣落ちしたような顔をして云った。

「先日、山本郡農会副会長と老農袴田鹿太郎を滋賀県に派遣し、うんかの性質、駆除の方法を調査させたのですが、その帰り岐阜に立ち寄り、名和昆虫研究所を訪問し所長と面談をしてきました。これが大いに得るところがありました」

十湖を呼んだ今日の用件はこれだと云わんばかりに、青沼は手元に置いてあった本を手にとって、十湖に差し出した。

「最近役場で用立てたのですが、ウンカのこと詳しく書いてあります。これを見て岐阜の名和昆虫研究所へ訪問をしたのです」

手渡された本は「薔薇ノ一株昆虫世界」とあった。

十湖はウンカの記事のあるページを繰って、目で文字を追った。

（カメムシ目ウンカ科の昆虫の総称。形はセミに似るが、はるかに小形。口吻で植物の汁

を吸い、またウイルスを媒介する種類もある。後肢はよく発達し跳躍する。大群をなして移動することもある。農業害虫でイネの大害虫。又の名をこぬかむし。さねもりむし」

「生態のことは書かれているが、駆除方法などはどこにも載っていない」

「そうなんです。我々が知りたいことは残念なことに記載されていません。それで直接会って聞いてみようと岐阜へ立ち寄ったのです」

「なるほど、その結果は大いに参考になったというわけか」

十湖は腕を組みながら相づちを打った。

「ウンカの駆除法ではありませんが、有害虫の他村の取り組み法を具体的に教わりました。ウンカについては、その後駆除法の前にすべきことがあると謎をかけられました」

「謎か、それはいったい何だ」

「つまり、しかるべき時にいつせいに予防するか、それとも駆除するのかということですが、それではあまりに抽象的でわしには理解できません」

「まあ要するに一人が駆除をやりだしても自分の回りしかできないから、そのうちほかからウンカが進入し瞬く間に広がってしまいます。根本的な解決法には程遠いということですよ」

「言い換えれば被害を受ける地の者が、一斉に何かをすれば解決の光が見えるということだな。それなら、わし等も一度聞いてみるか。何かいい駆除の方法がわかるかもしれない」
十湖は青沼に呼ばれて久しぶりに引佐の地を踏んでみたが、わざわざ来た甲斐があった

というものだと言を納得させた。

ちょうど昼飯時となり、十湖は氣賀街道沿いの飯屋へひとりで足を運んだ。

郡長時代の十湖がよく昼を食いにいった伝助の営む飯屋で、立ち寄れば必ずトロロの飯を注文するため「トロロ郡長」とあだ名を付けた曰くつきの店である。

「おい居るか伝助、わしだ吉平だ」

十湖が店先の縄のれんをかき分けながら入ると、店の奥から前掛けをした若い男が手もみをしながらかし訳なさそうに出てきた。

「へい、お久しぶりです。親父の伝助は年で少しばかり耳が遠くなつてしましまして、口は達者ですが店は息子の俺が切り回しています」

「そうか太助といったけな。跡継ぎがいて親父も氣樂だ。嫁は貰ったか」

「おかげさまで、今役場へ注文の品を届けに行つてます」

「まず飯だ、トロロの飯をくれ」

「かしこまりました。郡長様の頃はいつもお世話になりありがとうございます。今でも役場の衆とはお付き合いさせてもらつて、何とか息を繋いでいます」

「それはよかった。実はまた舟を出してもらふことになるかもしれないが、その時は頼んだぞ」

「お安い御用で、なんなら女房も一緒に連れていきましようか」

「それがいい。だが、若い二人に当てられて用が足さんわ」

十湖は出てきた冷酒をなめながら軽い口を叩いて高らかに笑った。

帰庵後、十湖は名和昆虫研究所へ照会を出すことにした。当地のウンカの被害状況から書き出し、対策法を伝授してほしいと結んだ。

差し出した手紙は、そう時間がかかることなく返事が返ってきた。

「今年は既に田植えも過ぎ、今更駆除をするといっても到底全滅させるのは至らない。よって来年の田植え前に対応を検討したらどうか」

名和からの誠意ある回答を受け、十湖はそのことばどおりに従おうと決めた。手紙文の末尾には名和靖と達筆な字で署名がしてあり、それをながめながら

「この男に一度会ってみたいものだ。わしと話が合うかも知れん」

十湖は今回の騒動が、やがていい方向で解決していきそうな予感がしていた。

だが十湖の思いとは裏腹に、九月八日から九日にかけて、全国的に大暴風雨が発生し各地で浸水家屋が続出した。

雨後は再びウンカが活発に動き出した。

浜名郡は静岡県の西部に位置し、中央に浜名湖、西は愛知県渥美郡に接し、気候温暖にして実に昆虫の生息には都合のよいところだという。

もはや今年は害虫被害で万事休すであった。

例年なら稲穂が垂れ下がり、葉が黄金色をしている田がどこでも望めた。十湖はここで怯んでは来年に繋がらない。

まず今年の被害状況を自分のところだけでなく、県境まで足を運んで確かめてみようと思ち上がった。

気賀の飯屋の太助に助太刀を頼んだ。十湖にとっては店主の親父の代からの馴染みで、気兼ねがいらない。

「太助、舟を出してくれ。目的地は県境の知波田まで岸沿いを行ってくれ」

太助は十湖の頼みにも気安く応じ櫓を漕ぎ始めた。

奥浜名湖の波は穏やかで、舟は滑るように進んでいく。

「いつもならこの時期は、どこの田んぼも黄金の稲穂が靡いているはずなのだが、そんな様子は見当たらない。とても俳句の詠める情景ではないな」

十湖は舟縁に頬杖を突きながら、迫り来る岸の田んぼの様子をじっと見つめていた。

「そうですか。この景色では宗匠でも句は詠めませんか」

「風雅風流は自分の目で感じて心で詠むんじや。この場合は景が悪すぎる」

「それじゃ舞阪の弁天島はいかがでしょう。最近海水浴を始めたとか評判ですよ」

「お前の耳にも届いたか。わしは行ってきたぞ、その海水浴場に」

「十湖様はもう五十になるでしょうが。そんな年で海水浴とは隅に置けんなあ」

「舞阪の小松島はまさに東海無二の絶景だ。しかも舟の煙は松に沿って龍と化し、車の煙は白雲と合して峰をつくっている。実に仙境というに相応しかった」

「ということは当然、句も沢山詠めたということですね」

「もちろんだ。」

涼しさや海と湖とをまえうしろ

と吟じてみた。よかった。それに引き換えこのあたりの景色はどうだ。稲穂の光どころか枯れ穂ばかりが靡いている」

「着きましたよ。浜名郡知波田の浜に。あれちよつと話が違いますか、この景色は」

「おう。これは見事な黄金の稲穂の群生だ。気賀沿いの岸の田んぼとは天国と地獄の違いだ」

十湖は着岸を命じ、あわてて浜へ飛び降りた。

「太助ここで待っておれ。わしの知り合いがこの近くに住むので行ってくる」

浜を駆け上がり、目指す農学社の社員の屋敷に向かった。その途中、田畦に腰を下ろし休んでいる十湖と同年くらいの農夫が見えた。

「久しぶりだな。山本十四郎さん」

「吉平郡長殿お久しぶりです。元氣そうで何よりです」

「今は郡長ではないので氣を使わずともよい。俳諧師十湖だ。今日は各地の稲穂の様子を視察しておる。良かったら話を聞かしてもらえないか」

「そんな恐れ多い。ともかく十湖様と呼ばして頂きましょう」

「それでよい。実は気賀から舟を出して田の様子を見てきたのだが、浜名郡内はウンカで全滅しておる。ところがここはどうだ。いつもと代わらぬ実りの秋だ。いったい知波田だけは被害がなかったのか」

十湖は思いのたけを山本に話した。

山本はこの地域の篤志家で農漁業者の一人である。

なかなかの勉強家であり、十湖が舌を巻くほどだ。

「実っているのはここだけです。少し外れると浜名郡と同じ、被害は甚大です」

「なぜだ。秘策でもあったのか」

「さらに西方の渥美郡はことと同じく見事なものです。知波田には郡農会員の岡田忠男がおり、村の被害を極力抑えようと努力していただいた結果がこれです。それ以上に隣郡の渥美郡は被害がありません」

「なるほど岡田忠男といったか。やはりそうか。渥美郡は害虫被害があっても、二割以上の増収を見るに至ったと、風の便りで聞いていたが」

「岡田は名和昆虫研究所の通信員でして、全国の情報に常に把握しているようです。そのことで害虫駆除の方法などを得た成果だったのではないかと思います。詳しくは本人に聞いてもらうのが一番です。家は正面の屋敷です。今日いるかどうかはわかりませんが」

「ぜひ本人に会って話が聞きたい。間に入ってくれ」

「いいですとも」

十湖の熱心な申し出に山本は、岡田邸へ十湖を案内した。

運のいいことに岡田は庭で鍬を洗っていた。

「岡田さん、今日は珍しい方をご案内しました」

山本は妙に緊張して岡田に十湖を紹介した。

岡田は頭に巻いた手拭いを取りながら、日焼けした赤ら顔の中に白い歯を見せた。

岡田は十湖の問いかけに、被害が少なかった理由を名和昆虫研究所から教わったとおりに実践した結果だと説明した。

「このやり方を地域に広げようとしたのですが、残念ながら大勢は否定的でした」

話の最後に岡田は申し訳なさそうに付け加えた。

「なぜ地域は否定的なのか。それは昔からの慣例による駆除法に従ったからではないのか」
「そのとおりです。虫送りといって神仏に祈り、お札的駆除と祖先伝来の駆除法に依拠しているのが農民一般の有様だったのです。仕方なく自らの田んぼだけでも実践してみよう
と思い立ったのです」

「なかなか勇気が要ることを成し遂げたな」

「おかげさまでごらんのとおりの結果です」

「よくわかった。つまり一人が駆除を実践しても自分だけしかできないから、根本的な解決法にはならないということか」

十湖は青沼郡長から示された「昆虫世界」のことを想起し、自分に問い答えを導き出し

もつと駆除方法の詳細を知りたいと思っていた。

翌年五月、十湖は再び引佐の地を踏み稲田の比較をしてみた。

稲田は例年どおりの成長を果たしていた。

どちらも同じ程度の生育状況であるもののウンカの被害はこれからというところか。

十湖は農学社から三人を選び、名和昆虫研究所へ派遣した。

その結果は十湖を満足させるには十分なものだった。

「本田の害虫の親虫が苗代田の内に胚胎しているので、苗代田において一斉に駆除が必要だ」

ということが判った。

しかし、この研究に従事するものは少なく、ただ害虫の何者たるを考えずして傍観するばかりで、作物の被害は増える一方だった。

昨年は全国いたるところでウンカの害を被り、浜名郡も非常に繁殖してその被害額は百十六万円余の多さに上がり、農民は疲弊し外国米の輸入は増大するばかりだった。

今年のウンカの発生は、昨年同様全国規模であり、自分たちの村だけの問題ではない。周辺地域が一斉に駆除対応しなければ解決しないということは明白だった。

田植えを前にして十湖は、名和昆虫研究所で聞いた話を農学社内で検討し対策に当たった。

十湖は今では三遠農学社の顧問という立場だが、浜名郡の三遠農学社の代表を集めることは容易である。

郡長就任中の頃は農業生産を上げる為には、農業者それぞれの研鑽と学習が必要だと個々の農業者に図ってきた。

具体的には農業改革に繋がるいわば尊徳の報徳精神の実践と技術改良こそが皆がまとまる力になると、各地を回り農学社の組織化に務めてきた。

本来なら自らが社長に就任して推進すればいいのだが、郡長という要職を兼ねるとそれはできない。

そこで自分の代わりに報徳社の同志である松島授三郎を社長に推薦した。だが、授三郎は一年前に亡くなり、組織はその意志を継いで現在まで脈々と活動をしてきている。

十湖は代表者が集まる機会を窺っていた。そのときこそ農学社の組織の力が試される。それまでには自らの考えをまとめておく必要がある、郡長時代の正義が想い起こされた。

数日後その機会はやって来た。

代表者が集まった場で、十湖は名和昆虫研究所で指示された十か条の駆除方針を熱く説明した。

十か条は次のようなものだった。

- 一、害虫駆除を理想的に行うには第一昆虫とは何か、おおよそを知るべし。
- 二、害虫と益虫との区別を明らかにし、害虫を駆除すると同時に益虫を保護すべし。

三、害虫の発育の仕組みとその習性を詳しく知り、初めて都合よく駆除実行し得る。

四、単独で駆除することは効果少なく、これに反し共同駆除すれば効果大なり。

五、害虫駆除は一人前の男子のつとめとするよりも婦女子のつとめとすべし。

六、害虫駆除をするには簡易で有効な機材と確実で値段の安い薬品を選べ。

七、誘蛾灯は用いてもよいが、悪いこともある。注油法も同じだ。

八、天然駆除を第一として人工的な駆除は避けるべし。

九、害虫駆除は、いわば枝葉末節だ。平素から予防に注意すべし。

十、予防の一刃は駆除の一貫目刃にまさる。

だがこの十ヶ条は、そう簡単に実現できるわけではなかった。

十湖が引佐の田んぼを巡回していた時だ。

「今年はウンカの湧きが多いので、田植えは延期をして駆除をしようと思うが協力してくれ」

「そりゃあいくら十湖様の頼みでもできない相談だ。害虫はお天道様のことだから、人間が下手に手を出すとたたりがあるだ」

そうかと思うと、田んぼの中に神社の御札が挿さっているところがある。ここでも十湖が駆除の話をすると

「わしのところは秋葉山の魔よけのお札を挿してあるので大丈夫だ」

迷信と神様の御利益がまかり通っている地域もあった。

来る日も十湖は時間があれば地域内を東奔西走し、名和昆虫研究所で教えられた駆除と予防の方法を説いて廻った。

渥美郡の県境には知波田の岡田とともに各戸を訪ね、あるときは集会を企画した。

岡田の説明は名和研究所の特派員とあつてわかりやすく、説得は十湖がした。

その結果、農学社が中心となつて周辺町村を巻き込み、一斉の駆除に動き始めた。

郡長も十湖らの行動に賛同し、いよいよ郡長の指示で田植えを延期し、捕虫器その他万端の用意を整えて浜名郡全域に実行することができた。

捕獲したウンカは三十八俵五分（四斗二升入として計算）にものぼった。

一方、郡役所ははからずも十湖らの活躍でウンカ駆除が達せられたことを教訓に、今後は昆虫研究会を発足させたいと云い出した。まさに朗報である。

同年七月名和昆虫研究所長が県内志太郡へ講話のため出張してくることを知り、帰途本郡での二日間の講話を本郡農会が依頼した。

同時に今後の害虫共同駆除及び害虫の調査などのため昆虫研究会を起すに至った。

七月十七日、十八日の両日郡役所内に於いて発会式を予定した。

七月十七日は未明より各村代表者二名のほか愛農家の人々、農学校の生徒が来会した。午前八時には郡役所内の会場は立錐の余地なく盛会となった。

第一席 静岡県農事巡回教師農学士伊藤悌蔵氏「農事の改良より害虫駆除についての演説

第二席 岡田忠男氏「ウンカの卵に寄生蜂の有無についての試験成績報告及び赤ダニのウンカを害する次第についての講話」

第三席 岐阜県害虫駆除取調嘱託昆虫研究所名和靖氏「昆虫に関する講話」

同十八日、会場が昨日よりも愛農家の参加が非常になるのを見込んで、浜松町の報徳館に移す。

この日の演題は

第一席 袴田鹿太郎氏「肥料と害虫との関係」

第二席 岡田忠男氏「某学校に於ける昆虫の志素養成の実況」

第三席 鈴木伊作氏「藍の螟虫（ずい虫）飼育の実況」

第四席 名和所長前日に引き続き講話及び質問応答

特に名和所長の熱心な講話は盛況で、参加者に昆虫の性質を研究し、熱心に駆除対策を高めれば今後数年は発生することはない。そのためにも研究会の発足は意義のあることだと強調していた。

「わしのやってきたことは正しかった。災い転じて福と成したのだ」

会の成り行きを見守っていた十湖は、自らの努力が報われたと感じていた。

閉会後、名和は十湖をたずね自らの駆除の有効性を実証してくれたと大いに喜び、十湖を評して句を披露した。

来てみれば聞くより高し富士の山

その際十湖は抱えていた硝子瓶を名和に手渡した。

捕獲した「ウンカ」の一部を標本にしたものが入っていた。

名和はこの後三河国渥美郡の巡回だといひ、此の瓶を各所で示して大いに愛農家を感じさせた。

岐阜の研究所へ戻ってからは人を奨励する好材料として標本陳列所に備え付けた。

瓶の中は「ウンカ」でいっぱいだが、名和の眼には十湖の誠心が瓶に満ち溢れ、昆虫研究所を輝かしているようにも見えた。

ウンカ騒動から九年後の明治三十九年五月、日本の鉄道が五千マイルに達したとして名古屋で盛大な記念祝賀会が催された。

このとき全国の報道記者の取材を受けた隣県の岐阜は、これを機に取材陣を長良川鵜飼に招待して市の発展ぶりを紹介した。

同月十二日、招待者の中の一人大阪朝日新聞の記者土屋大夢が突然名和昆虫研究所を訪れ、名和所長の説明を受けていた。

土屋は昆虫標本陳列棚を一巡し、名和に云った。

「数々の標本は本当にすばらしい。所長の所蔵品というだけでなく日本の宝ですね」

土屋は所長の顔をじっと見て称賛した。

「お褒めいただきありがとうございます」

名和は自分よりも若い記者のことばに恐縮した。

「ですが、この陳列棚では地震や火災が発生したら一溜りありませんね」

土屋の口調がきつかった。

「おっしゃるとおりです。研究所の経営も私個人に関わることで、残念ながら資金も乏しくとても建て替えはできません」

所長の名和は大きなため息をつきながら応えた。

研究所は明治二十九年に岐阜市内に設立したもので、市の意向により八年後岐阜公園内に移転したものだ。標本陳列棚は当時のままであった。

土屋は帰社後、ある想いに達していた。

三年前、フランスのパリで万国博覧会が開催された折、土屋はその取材で現地を訪れていたが、日本から出品の昆虫標本が、どれも名和の製作で展示されていたのを記憶していた。

今、その貴重な名和の標本が、粗末な建物の中で、しかも災害には無防備な場所に陳列されているのか。

土屋はペンを執って大阪朝日新聞紙上でこのことを訴えた。

一方、浜名郡中善地の十湖は六月で浜名郡会議員三期目を終えた。

これで一切の公職から離れ報徳の教えを広めながら、俳諧に専念しようとしていた。早朝いつものとおり新聞を広げ、自分に関係する記事は出ていないかとパラパラとめくり始めた。

——名和昆虫研究所・・・

という見出しに眼が引かれた。読み進むうち一番弟子の随處を呼んだ。

「何か御用ですか」

たまたま句会の準備で早くから来庵していた随處が何事かという顔をして応えた。

「ここに名和所長のことが書かれている。ちよつと読んでみよ」

十湖は随處に新聞を開いて渡した。

「昆虫研究所が建替えをするのですか。要するに建設資金の寄付募集のことですね」

「そうだ。これまでの付き合いで名和のところに寄付をしてやりたいが、何とか金を工面できるか」

——いつものようにお金の無心か

随處は呟きながら朝から嫌な思いがした。家計の現状をいまこそ十湖に言わねばならぬい。

「お金はありませんよ。こちらが貰いたいくらいです。どうしてもと言われるなら、われわれには同志がいます。この人たちに協力を申し出れば、なんとか調達できるはずですが」まさにそのとおりである。十湖は今俳諧で身を立てているようなものだ。その取り巻き

には画人もいれば書家もいる。

「そうだな。一回りして一人半切百枚でどうだ。売れば一枚二十銭ぐらいにはなる。十人で二百円分だ」

十湖は頭で計算し自ら納得して隨處に頼んだ。

十湖は金が入用な時はこの手をよく使う。旅先で持ち金がなくなってくると自ら書をしたためて金に換えてもらうことがあった。

「それでは皆で手分けしてお願いに行ってきます。理由は名和昆虫研究所の建て替えの寄付だということでもいいですね」

隨處は念を押して言い放ち、仲間を呼びに廊下を走った。

一ヵ月後、十湖の元に地元の画人等から寄付の目録が届けられた。

一小画仙紙半切書 百枚 司馬老泉

一同 同 山下青厓

一同 同 松島十湖

一同 同 大木隨處

を含め二十人の書き物だった。ほかに一人二十円の現金があった。

明治三十九年十二月名和昆虫研究所発行「昆虫世界第百十二号」に特別広告が掲載された。

「大阪朝日新聞社の同情により国宝とも称すべき特別昆虫標本を永久にしかも完全に保存

し得べき煉瓦石造の標本室は悠々不日建築に着手し明年五月を期し落成の筈なり尚世の趨勢は第二期の拡張を促すや切なり願わくば同情者諸君幸に相当の期間を与えて一大活躍をなさしめられんことを切望す 岐阜市公園内名和昆虫研究所」

さすがに大新聞のすることだった。

紙上で記事が掲載されたとたん約五千円の寄付が集まった。すかさず工事に取り掛かり、翌四十年六月には立派な標本館が研究所の前面に姿を現した。

同紙の隣のページには下半分を割いて

——名和昆虫研究所維持拡張金品寄付者芳名

左に掲ぐるは静岡県松島十湖宗匠の取扱にかかるものなり——

小画仙半切書百枚司馬老泉殿」ほか二十名の氏名と寄付物品が掲載されていた。

さらに次ページには「昆虫俳句懸賞大募集 選者七十二峰庵十湖宗匠 課題 昆虫」とあり以後「昆虫世界」機関誌の一部を担うことになった。

まさしく名和所長にとって十湖の協力は何にも増してありがたかったのだろう。

「行って会って御礼をいわねばならぬ」

研究所の桜の蕾がしだいに膨らむのを見ながら、日本のファールとまで言われた昆虫翁名和靖がふとつぶやいた。

「今年はどうなことがあっても三遠農学社大会に出席する。田中君もついてきたまえ」
「えっ、私もですか。わかりました。出席に同行させていただきます」

とはいったものの、名和からの指示に田中周平は少しばかり気が進まなかった。

明治四十二年三月、まだ春浅き岐阜の研究所でのふたりの会話である。

田中は研究員として名和の部下にあたり、研究所の事務も担当し研究熱心な男で名和は信頼していた。

一つだけ難点を云えば学者肌のところがあり融通が利かないところである。

この性格が十湖とのやり取りを難しくしてきていた。

これまで何度か三遠農学社から出張講話の依頼があったが、忙しさにかまけて断つてきた経緯があった。

遠州三州の報徳運動は駿州以東にも尾州以西にも影響を及ぼし、三遠農学社の社員の誠心を發揮させ各地で活動している。

要するに三遠農学社の組織は既に自力で行動ができたのである。

いまさら出張講話に多忙な所長まで出向いていく必要があるのかと思った。

今回浜名郡方面だけ特別に出向いていくとなると、他県から叱責される恐れがある。

それでも所長自らが行くとなれば日程を確認しなければならぬ。

田中は程なく往復五日間の旅程を立てたが、気が進まなかった。

行こうと思ひ立つてからはや一ヶ月が経つた四月十一日、田中は所長とともに午前六時五十五分岐阜駅発に乗車、十時八分豊橋駅に着く。ここで随行の者が加わった。

全農協会長石田利三郎と同氏の友人内藤末吉ら含め四名である。

田中は今回の出張はいつもとは様子が違うと感じていた。

四十分程度で鷺津駅に着き全員が下車すると、改札の外に見える人ばかりは何か。

改札を出ると三十人以上の出迎えを受けた。その中の一人が突然駅構内に響くような大きな声で叫んだ。

「名和先生御一行様の歓迎に参りました」

名和所長は恥ずかしそうに俯いていたが、歓迎者の中から知波田の篤志家である山本十四郎が進み出て顔を出した。

「皆さん、どうもお迎えありがとうございます」

名和は風格のある山本に対して精一杯の謝辞であった。

「何のなんの遠いところをご苦労様です。ここからは船で参ります。この船は今日のために特注で作ったものでして、安心して乗って頂ければありがたい」

隣にいた豊田が名和一行に乗船を促した。

足下に注意しながら乗船した田中は、それまでの不安を払拭し所長に云った。

「嬉しいですねこんな歓迎は。でもこの船は、いったい誰が金を出して手を廻してくれたんでしょうね」

船には出迎え者を含め四十余名が乗船した。田中はこの様子を目の当たりにして、今回の出張の主役はいったい誰なのかわからなくなってしまうと思った。

浜名湖の湖面は穏やかで、岸辺の桜が舞い散って船べりに漂ってくる。

田中は余計なことは考えず、春の風情を満喫しようとして自分に言い聞かせていた。

一ヶ月前、十湖から研究所に手紙をあり三遠農学社の大会への出席を頼んできた。

再三の依頼にもかかわらず、事務方の田中は「所長は多忙のため地方までとても出向いて行けない」との断りの返事をしていたが、出張講話を願い出ても悉く断ってしまった。

だが、このくらいのことで怯む十湖ではない。

所長あてに

——県内に来られる時には是非自宅へも立ち寄って欲しい旨、手紙に認めて送ってきた。

田中は返事を無視していた。

四月に入って知波田の農学社山本十四郎から十湖の元に手紙が届く。

近く名和所長が本県の大会に出席するので、自分が接待をすると伝えてきた。

十湖は急ぎ返事を出した。

——粗相のないように丁寧に迎えてくれ。ついては自分のところにも立ち寄ってくれるよう伝えて欲しい。

そんな十湖の心配をよそに、山本の接待は見事であった。

知波田までの船は四十人以上が乗れるよう小船二杯を並べ、ひとつの屋根を張り安定を保った。

初日の講話会場は自分の邸を当てていた。

やがて、船は正午には知波田村に着岸した。

所長以下八人には昼食が用意されていた。

随行の田中は所長が箸も持つよりも早く、飯が口に入っていた。

所長が料理を眺めてから食べ始める頃、あまりの美味さに誰が調理したのかと、誰かれと言わず声が上がった。

「女房の舎弟が作りました。舎弟は御油の駅前で暖簾を出している玉寿司の息子でして」
山本は自慢そうに皆の顔を眺めながら応えた。

玉寿司といえば街道では名が通っており、一同は納得した様子で喜んでいた。

山本邸の大広間には既に聴衆二百余名、田中周平と名和所長が講話をする。

本日の費用はすべて山本の私財によるものであった。

「本日は遠いところを来ていただき、すぐにも講話をしていただいて御礼申し上げます」

山本は講話を終えて戻ってきた名和ら一行に礼を云った。

「なかなか盛況でしたね。気持ちよく話をすることができました」

「そうですか、それは良かった。ところで、十湖宗匠より手紙で事伝てがありました」

山本は、にこやかに笑いながら名和らに云った。

「私にですか。それはどんな用件でしょうか」

名和の顔が一瞬曇ったようにみえたが、すぐに聞き返した。

十湖からの言伝てとはいったい何事か。

山本は、名和が既に機嫌を損ねてしまったのかと不安になった。

「大したことはありません。講話が済み次第自分のところに寄ってほしい、ついては来れる日を教えてくれとのことでした」

「今回こちらへ来た大きな目的のひとつは十湖宗匠にあつて御礼を述べることです。何とか都合をつけたい。だが、またしても新たな講演箇所が増えてしまいました」

「それはうれしい限りではないですか。ぜひ実現させてやってください。遅れることあれば私が責任をとって謝りますから」

「いやいいですよ。ご迷惑をかけたくありません。十四日の午後には何とかなるかも知れません」

「わかりました。そのように伝えておきます」

翌十二日は快晴。名和等は知波田尋常小学校で講話し、その後猪鼻湖を経由し西浜名村三ヶ日の港に安着した。

ここでの歓迎振りは言うまでもなく、講演終了後も去りがたかった。

十三日、快晴。名和は三ヶ日の旅館千鳥屋に泊っていた。

午前七時には馬車に乗り、気賀町で開催される三遠農学社春季大会に向かっていた。道の右方に湖水を眺め、左方に山を見て一時間余で会場へ達した。

ここでの聴衆は老農及び青年等およそ四百名、皆社員にして顧問十湖とともに力を尽くして組織された人々であつた。

社員は各自自弁をもつて公益を図り、誠心を持つて事を執ると報徳の教えのとおり、この日の聴衆としても立派な態度であつた。

名和所長等一行はその行動習慣を垣間見て、世に稀なところだと感嘆した。

十四日晴れ。大会会場に泊つた一行は三遠農学社の社員の習慣を再び目の当たりにした。つとに起きて二宮尊徳先生の影前に額づき、報徳訓を唱えていたのだ。

こうして社員等が誠心を持つて事を執られることをあらためて知つた。

この日、名和所長あてに十湖から電報が届いた。

——ハヤオイデヲマツ マツシマジツコ

と打電されていた。

手紙では笠井町の旅館山形楼にて待つとあつたが、これまでの恩を思うと一刻も早く十湖の元に行かねばとの気持ちが行先した。

だが、昨日の講演で引佐農学校長から講話を懇願され、今日午前に行く約束をしてしまつた。これも約束を破るわけにはいかない。

かといつて十湖との時間も守らなければいけない。

時は既に過ぎており、厳格な十湖がいつまでも待ち合わせの場所にいるはずがない。

引佐農学校のある金指町には豊西方面への馬車の便はない。

しかたなく随行員の田中等三人は馬車で一旦浜松町を廻り笠井を目指した。

所長は小さな一人乗りの人力車である腕車を走らせ、金指で講演したのちは笠井へと向かった。

「宗匠は待つて居てくれるだろうか」

名和は一抹の不安を感じた。

正午過ぎにはどちらも同時に山形楼へ着いた。

初めてやって来た笠井の町は、気賀とは比べ物にならないくらい活気を帯びていた。待ち合わせの場所山形楼は笠井街道のほぼ中心にあり、車夫はすぐにもわかった。

「十湖翁はいらっしゃいますか。名和です」

恐る恐る玄関の戸を開けて中をのぞきながら声を掛けた。

奥から主と思われる色白の女が出てきた。

「名和先生の到着を今か今かと待つておりましたけど、先ほど自宅へ戻りました」
女は申し訳なさそうに答えた。

「十湖翁のお屋敷はどちらになりますか」

「そうですね。これより東へ歩いて五、六分の距離です。川の堤が見えたら右の方に見える垣根囲いの大きな屋敷です」

一行は山形楼の主に云われたとおり、歩いて程なく邸へ辿り着いた。

「よく来てくれましたなあ。ここまで来るには大変でしたでしょう」

迎え入れた十湖は、怒っているどころか大いに喜んだ。

名和と田中が十湖にあいさつした。

田中は以前十湖から何度か催促の電話を受けたことを思い浮かべた。

——ここは丁重に挨拶しておかないとまずいなあ。

声に出さずとも自分に言い聞かせた。

「この度は一行には随分お世話になりました。まさかこんな田舎まで来てくれるとは思っていませんでした」

十湖は立ったまま名和らに言葉を返した。ここまでは社交辞令である。

「一緒に来られた方は、名を何といったかな」

「はあ、田中です。良く十湖様からご案内をいただきましたが、名和の都合がつかず講話依頼をお断りさせていただいたものです」

田中は静かに応えた。

「君か。わしのたつての依頼に、いつも話をぶち壊したのは」

「そんな、壊すなんてしていません」

「おかげでそのたびに予定を変更し、報徳社の仲間たちにも迷惑をかけた」

「申し訳ありません。遠くにいますのでこちらの実情までは察しがつきません」

「たとえ相手の様子が分からなくても、紋切り型で門前払いの応え方はよくない。次の案を示せばいいではなかったか」

「十湖様、こちらも全国からの依頼で毎日忙しいのです。一地方の事だけのお世話をして
いるわけではないのです」

「一地方だってそれなりに事情がある。相手の身になれば分かるはずだ」

「それに所長も忙しく、いずれにしてもできないものはできないのです」

十湖は田中の返答にいらいらし、徐々に怒りが高まってきた。

大柄な田中だが、このやり取りで田中が少しずつ小さくなっていくように見えた。

だが十湖はそれでは治まらない、随行者にも厳しい言葉が待っていた。

「いいか、名和先生の偉業は世人の認知するところなるが、その高德に至っては平素側に
侍する者の想い及ばざるものがある。君たちは先生に誠意をもって接し、その高德を感じ
て補佐すべきだ。わしはそういう人物になつて欲しいと君等に期待して云うんだ」

田中は自分の行動がたしなめられていると感じ

——心配していたとおりだった。とうとう爆発して説教されてしまった

この先が思いやられる。

だがこれだけでは終わらなかった。十湖は彼らに聖徳太子の肖像と、二宮尊徳の遺墨を
見せ智徳の事をとくとくと説教し始めた。

今日の講話の開会は三時だというのに、その時が迫っていた。

豊西小学校の会場は、四百人の聴衆が集まりはち切れんばかりである。

しかもこれだけの聴衆が集まったのは、今福校長が近傍の町村の学校職員をも勧誘した

ことによるばかりか、主催する十湖の信用の厚いところがそうさせたのである。

定刻になり開会の辞を豊西小学校の今副校長が口にする、それまでざわめいていた館内は静まり返った。

講話は粛々と進み、名和所長の紹介は十湖が行った。

それに対し名和はこれまでの経過を得々と語り始めた。

「私がこの度御地へ参りましたのは、我が日本の偉人たる松島十湖先生にお目にかかつて、お礼を申し上げるために参りましたのでございます。

それは何事のお礼かと申すに、十湖先生が私の事業をお助け下されたことが多大でありますから、それに対し厚くお礼を申し述べなくてはならぬのでございます。

十湖先生は故二宮翁の遺志を継がれて大いに人心を改良せられました。その徳によりまして御地はもちろんのこと、他地方におきましてもこの偉人の感化を受けまして、農業も進歩し、村政も整頓し従って私の畢生の事業にしておる害虫駆除にも良き成績を上げた村が多くあります。

その結果私のところに昆虫標本室ができました。しかし、貴重なる国家の宝物である標本を永久保存すべき建物がなく憂慮していたところ、十湖先生の誠心によつて害虫駆除の効果が現れてから私の集めた標本にも世人の注目を浴び、明治三十九年大阪朝日新聞社の主導により、同情者の譲金をもつて煉瓦造りの標本室一棟新築し、四十年の夏落成式を挙げて研究所へ寄付してくれました。これに対し私のよろこびは、感極まって泣くばかりで

ありました。

これらの事をもって十湖先生が直接、あるいは間接に私の事業をお助けくださいましたということが明らかに自分かりになりました。

本年三月には十湖先生の元へお札に参ろう、又、渥美郡野田村なる三遠農学社東三支社大会に出席いたそうと存じていました。

この大会に出席すれば十湖先生に会うことができるだろうと楽しみにしておりましたところが、三月十五日東三支社の大会当日は、偶然にも私にとりまして未曾有の光榮たる出来事が生じまして、野田村へ参ることができませんでした。

その光榮ある出来事とは、同日に於いて日本赤十字社総裁閑院宮殿下には、岐阜支部の役員並びに特別社員総会に出席の折、我が研究所にも御成り遊ばされることが確定になりましたのでございます。

今回氣賀町で開かれる三遠農学社大会にはぜひ参ろうと決心しましたが、氣賀町へ参る前に本郡知波田及び引佐郡西浜名村の二カ所にて講話をなすこととなり、さらに氣賀では引佐農学校で講話をいたし、やっと十湖先生の拝顔を得てお礼を申し上げた次第でございます。

名和所長の長い冒頭の挨拶だったが、十湖はこれでこれまでの経緯、講演の依頼がたびたび断られた理由を知ることになった。田中には少しつらく当たったかなと思ったが、内心ほくそ笑んでいた。

午後六時閉会し、すぐに笠井町小野田楼に於いて有志懇親会を開いた。席上それぞれ出席者の演説があつたが、十湖は静かに聴講していた。

こんなことは珍しかった。

旅館山形楼に戻った名和所長一行は、明日は必ず帰宅すると決心した。

このとき既に他より講話を申し込むものあつたが、遺憾ながら応諾することができぬと断っていた。遠州滞在の日を一日経過していたのだつた。

次の日、十湖らに送られて駅へ向かう名和所長らを乗せた馬車は、初夏の風を切り、颯爽と遠州を後にして行つた。

郡長の職を辞して以来十九年の歳月が流れていた。

五十三歳になった十湖は、地方俳人として押しも押されもせぬ筆頭の地位にあり、県会議員、引佐・鹿玉郡長の要職を歴任し、いまや悠々自適の俳句三昧の日々を過ごしている。春とはいえ冷たい風が刈田を抜けて邸に届く。

明治三十四年三月の初め、いつにもましてこの日の朝は爽やかに目が覚めた。

東京行きの往復の旅費が何とか工面ができ、今日は出立の日である。

旅に出るといえば誰しも日程、宿泊場所を事前に検討し、掛かる費用の金も用立てておかねばならない。

十湖の旅は、上京するだけが目的とあって、とりあえず東京までの旅費があれば十分であつた。

玄関前には人力車が到着し梶棒を下ろした。いつもの車夫が長いキセルで紫煙を燻らしている。その煙が時折忙しく揺れる。

「いつもすみませんね。すぐに出かける用意が整いますから」

十湖の妻佐乃が、外で待つ車夫に氣遣って、柔らかな物腰で声を掛けた。

「へえい、毎度の事ですから気にしないでくださいえ」

車夫の松五郎は笑いながら頭をぺこりと下げと、佐乃は申し訳なさそうに笑顔を返した。まもなく、白い髪を顎にたくわえた十湖が黒い茶人帽を被り、杖を握って弟子たちに見送られながら出てきた。

この日天気は快晴、まさに良い日旅立ちである。

「行くぞ。松五郎」

一人用の人力車にドンと腰を降ろし車夫に声をかけた。

人力車はまっすぐ南に向かい冬枯れの田んぼの畦を走り抜けていく。

邸から東海道本線の天竜川駅までは、人力車で一時間とはかからないだろう。

駅は金原明善が木材の輸送を行うため東海道線に停車場の設置を申請していたものだが、明治三十一年七月になり天竜川駅が設置され旅客輸送も行われるようになっていた。

やがて東海道の松並木が見えてきた。車夫は車を右に切り、中野町街道に入る。

中野町の名の由来は、江戸と京のちょうど真ん中に在るから名付けられたというが、そのせいもあってか商店の家並みが続き立派な土蔵も見える。

天気がいいのも幸いし十湖の機嫌を一段と良くした。

けいせいの道中ならで草鞋かけ

茶屋に途絶えぬ中の町客

まるで都都逸でも唸っているように大きな声を上げた。

「十湖様そりゃあ誰の唄ですかい」

松五郎は十湖の調子がいいのにつられて訊ねてみた。

「こりゃあ十返舎一九が東海道中膝栗毛の中で詠んだ歌だ。わかるだろう、中の町の茶屋の賑わいさ」

十湖は車上から大きな声で松五郎に語りかけていた。

間もなく町家が切れた辺りで、それまで話しかけていた十湖の口が、急にへの字に曲がり寡黙になった。

松五郎は十湖が自分の応え方に癪でも触ったのかと氣になり、怒られては損だと知らぬふりをして車を進めた。

ほんの短い時間だが右折をした時に見えた豪邸に、なにやら曰くがありそうだと思った。豪邸の主は金原明善、天竜川治水事業で財をなし、政界、財界でも一目おく人物である。

十湖とはこの地域の龍虎の間柄だといわれている。

二十年前「龍虎の会談」だと地方新聞におだてられ、二人が会ったときのことを思いさしていた。

「松五郎、わしと明善はどっちが龍で虎だと思うか」

「そりゃ誰が見てもはつきりしていますぜ」

「大体どっちが龍で虎なのか。ひげを蓄え、とぐろは巻かずとも酒を飲んだら、くだを巻

く。人気もうなぎのぼりで、天に昇る龍のごとしだ。たぶん、わしが龍だろう。そうだろう」

十湖は当時を振り返りながら、一人で悦になっていた。

「へい、ご名答です。巷ではこんなことも云っていますぞ。ご存知ですか」

「ほう、それはどんなことだ」

二人とも話しに夢中になり、車のスピードも緩くなった。

駅近くに来ると、肉眼でも弟子たちが見送りに来ているのがわかった。

十湖が旅に出るときは、世話をする弟子を二、三人同行者として選ぶのだが今回は一人旅である。

「道中は退屈でしょうから、これを」

十湖が改札口を入ろうとすると、弟子の一人が手に持った駅弁と酒の入った包みを差し出した。

「悪いのう。それじゃ行ってくる。帰るのは気分しだいだが、留守を頼む」

十湖は弟子等に札を言いながら汽車に乗り込んだ。

汽車は天竜川の橋梁をリズムカルな音を奏でて通過し、掛川、菊川、金谷の茶どころを走り抜けていく。

このころには朝が早かったせいか、十湖はうとうと眠りに入ってしまった。小一時間も寝ただろうか、橋を渡る列車の音で眼が覚めた。

既に富士川を通過中である。目の前に屹立する富士を見て大きな伸びをすると喉の渇きを覚え、弟子の用意してくれた酒を飲みながら霊峰の眺めに放心していた。

今回の旅の目的は、東京に移り住んだ地元財界人の鈴木藤三郎に会いに行く予定である。東京の小名木川にある私邸の新築祝いに顔を出し、句碑を建立する手筈になっていた。東京駅に降り立つと、背広姿の鈴木藤三郎が改札口で手を振っていた。鼻の下のなまず髭が目立った。

「せっかく東京まで来たのだから、どこか行きたいところがあれば案内するが、どうかね」と藤三郎が誘う。もちろん社交辞令のつもりで言ったのだが。

「天気も良いようだし、ぜひ鎌倉へ行ってみたい」

十湖は、はしやぐようなそぶりですれしように応えた。十湖には遠慮と云う二文字が念頭にはなかった。

「鎌倉なら自分の別荘がある。それなら私も一緒に行こう」
費用は勿論言い出した藤三郎が負担するつもりだった。

この日は藤三郎の私邸に泊まり、翌日、彼に案内されるまま鎌倉へいく。

鎌倉八幡宮につづく参道は賑やかで、十湖の頭には次々と句が浮かんでくる。

最初は並んで歩いていたにもかかわらず、いつしか十湖は数歩先を歩いていた。

吟行の際のいつもの癖か、立ち止まっているかと思えば、次の地点へ突然移動する。動きが頗るコミカルだが早い。

後についていく藤三郎が八幡宮に差し掛かった時、先に歩いて行つた十湖の様子がおかしいのに気付いた。

みすぼらしい着物を着た十一、二の娘が、産まれてまだわずかし日立ちせぬ子を負ぶつてゐる。十湖はこの小娘に言葉をかけてゐるようだ。

「お前には親はいないのか。どうしてここでそんなことをしているのだ」

「母ちゃんがゐるけど、病気で寝てゐるんだ。だからこうして奉公に出て金を稼いでゐるのさ」

「父ちゃんはどうした。母ちゃんの病氣は治るのか」

「父ちゃんも去年死んじゃつた。母ちゃんの病氣は胸の病だといつていたけど。弟が母ちゃんの側で看病してゐる」

「それはかわいそうに。お前たちはいい子だ。これで、せんべいでも買つて食べなさい。母ちゃんに孝行せえよ」

十湖は目に涙を貯めながら、屈託なく話す小娘に懷中から五円紙幣を出して渡した。菓子を買えといつて五円を差し出すとは、小娘にとって法外な額だったに違いない。

藤三郎は涙脆い十湖の姿に、意外な一面を見たようであつた。

二人がその場を立ち去ると、近くの店先ではその様子を一部始終見ていた店主らの顔があつたことを十湖らは知らない。

「またかい。あのふたり人助けでもしたと思つてゐるけど、なんだい子らの態度は」

「まったくだよ。芝居がかっている」

店主らは口々に呆れた様子で、どちら側にも同情はなかった。

「よりによつて、あんな子供に五円もくれてやるなんて、初対面だというのに大人が手玉にされているとは思わないで、ばかだねえ」

「それに子供の母親らしき女がその金をすっかり巻き上げちゃつてね」

「ほんとだねえ。髭の爺さんもお人よしだよ」

一方、鎌倉見物を終えた十湖と藤三郎は楽しい吟行となつたことに気をよくしていた。「来る時に、子守をしていた小娘に同情して、持っていた金を全部呉れてやつてしまった。

悪いが帰りの旅費を用立ててくれんか」

十湖が、歩きながら申し訳なさそうに鈴木にせびるのだった。

東京で泊まって三日目、鈴木藤三郎私邸での新築祝式に出席した。

さすがに出世した男の邸である。

東京小石川の工場隣地七千坪の広さの中に新築した。

祝辞の席で十湖は、この東京の地でなぜ自分が句碑をあちこちに建てるのか力説した。

その理由として自分が芭蕉の後継者であることを世間に知ってもらふことだ。

二つ目は、二宮尊徳の報徳精神を今に生かし自らが信奉することを、世に残していきたいとの想いを披露した。

ところで、今日の主役鈴木藤三郎は十湖とはいったいどういう接点があつたのか話して

おく必要がある。

祝辞の中で報徳精神をとうとうと述べていた十湖だったが、鈴木との出会いはこの報徳の運動にあった。

この時、鈴木藤三郎は十湖と七つ違いの四十五歳、遠州森町の出身で報徳社の社員である。

氷砂糖の発明で財を築き、報徳仕法を実践し実業家として成功し明治二十八年には日本製糖株式会社を設立した。

これから台湾へ進出し社長として活躍する矢先のことである。

報徳を早くから学び実践した苦労が、この実業家として成功する結果をもたらした。

時代は遡って安政二年（一八五五年）十一月十八日、遠州森町太田文四郎とちえの末っ子として誕生した。

幼名を才助といい、四歳にして同町菓子商鈴木伊三郎の養嗣子となる。

好奇心が強く勉強好きで家業の菓子製造を手伝っていたが、十九歳の頃友が独り立ちしていくのを見て、自らを奮いたて一獲千金を夢見ていた。

明治七年、家督を継ぎ藤三郎と改名し製茶貿易を目指して開眼した。

この時、報徳に出会い、以後その精神を貫いていくことになる。

だが長続きはせず持つて生まれた好奇心から、菓子作りの道に再び歩もうとする。そこで氷砂糖の製造を思いつき、二十八歳にして氷砂糖の製造法を完成させた。

明治二十一年事業化に成功し、待望の東京へ進出したのである。

話を戻そう。

十湖は式典出席者に対し句碑建立をすることで、自分が蕉風の引継ぎ者であると声を大にして説明していた。

しかし、俳句界には芭蕉に対する批判者として正岡子規が登場し、風雅風流の俳諧は説明的で俳句じゃないと批判して一世を風靡していた。

世は正岡子規による自由律の俳句へと変貌しつつあったが、十湖は社会の風潮などお構いなく蕉風俳諧を貫いていた。

ところで、十湖が鈴木 of 私邸に建立した句碑には何と記されていたのだろうか。

短夜やされど確かに夢ひとつ

明治二十三年ころに詠んだ句で、出世した今の藤三郎の境遇を表しているものを選んだと言ってもいい。

同時に十湖自身をも例えており、藤三郎ともに報徳運動を貫き、夢が実のつたことを表現した句であった。

十湖は、藤三郎には句碑のほか二宮尊徳生誕の地の樟苗百株、観音菩薩の石像一体、自吟の碑石一基を寄贈した。

「鈴木氏が十湖翁からの贈り物を溺愛してくれれば、いつか翁の祠殿を造る時には木も大きくなり、きっと役立つだろう」

出席者の一人山本湛翠が短い祝辞の最後に語り、会場の失笑と拍手を招いた。式典のあとは宴会となった。

十湖は気を許してぐびぐびと酒を飲んでいた。

「それにしては随分と式には人が集まったものだ。藤三郎の人徳じゃ。わしだって自分の門人が万人いるから、東京まで出てくると、どこにいても門人等に会うことができる」いつもの負けん気で鼻を鳴らした。

宴がたけなわとなったころ、一人の若い男が十湖の前に徳利を持って現れた。

波瀾が起ることを予感していた鈴木だったが、まさか今度は東北まで旅をしたいと十湖が言い出すとはいささか呆れ顔であった。

昨日の式典後の宴会で、宇都宮の日日新聞記者と意気投合してそんな話になったようだ。十湖が言うには明日、宇都宮駅前の白木屋旅館で日日新聞記者の石倉翠葉氏と会う予定で、この旅館を中心に東北を吟行するという。

だが、着の身着のまままで上京してきてしまったので着ていくものがない。ついては何か貸してくれと十湖にせがまれた。

翌日、宇都宮駅前の白木屋旅館に、真新しい着物を着た十湖の姿があった。

白木屋旅館といえど東北本線が開通し宇都宮駅が開業した日に、初めて駅弁を作ったこ

とで世間には知られていた。当時の駅弁はおにぎり二個にたくわんを添えたものだったが、評判はすこぶるよく経営上り調子の旅館であった。

待ち合わせの会場へ新聞記者石倉がやってきた。二十八歳になるが背広姿が落ち着いて見え、記者にしては眼が優しい。

昨夜宴会の席で、十湖に今回の旅を提案してきた男である。

今日は隣に連れが一人いるようだ。

「吟行には文章の書き手も必要だが画家も入用でしょう。そう思って画家の青木香葩（こは）さんはさんを同行してきましたが」

石倉は初老の男を紹介した。

男は六十歳に手が届く年齢かと思われる。髪は短く刈上げ所々に白いものが目立った。和服姿で手に画帳を提げて少しばかり腹が出て恰幅がいい。

十湖にとって青木は初対面である。

石倉が言うには画家としては地元で知らない者はなく、俳号を池畔亭葩笠といい俳句にも精通しているという。

青木香葩は上州館林に生まれた容斎派の画家で青木翠山の養嗣。松本楓湖の弟子である。小林古径に歴史画を教えた画伯でも知られ、後に古径は文化勲章を受章している。

「旅は道連れ、これといって断る理由もなし」

十湖は上機嫌で明日から三人で旅することに決めた。

「それじゃあまずは出発を祝って酒宴でもあげますか」

石倉がそういうと、酒が来るまで車座になって部屋で待った。

「明日からの行程ですが、一応確認をしておきたいと思います。社の方で示された内容を紹介します」

石倉は十湖の顔色を見ながら云った。さらに続けて

「今回の吟行は、仙台での句会と書画会での取材を中心とするもので、後日新聞社の企画記事として扱う予定です。予算はここより仙台までの旅費及び宿泊費を社で負担します。いいにくいのですが、十湖宗匠が向いてきているのをこれ幸いと社が便乗するようで申し訳ありません。社の示した範囲内の予算で行くのでご協力をお願いします」

石倉は恐縮して云いながら、行程表をポケットから取り出した。

「こちらでどう云うことではない。君に任せるよ。それより酒はまだかな」

別段異議なしと言わんばかりに十湖は、酒の催促をした。

酒が入ると青木は砕け話が弾んだ。

得意の画で節分の鬼を描くと、十湖がほめて自ら俳文を書こうという。なんやこれやで話は尽きず、一同夜を楽しく語り明かした。

夜明け方近くになって十湖がおもむろに石倉を起こして言い出した。

「おい、今日は松島見物に行かないか。仙台まで行くのだからちよつと足を伸ばせばいい」
「社の予定は仙台市内です。行きたいのは山々だが、残念なことには我ら両人は貧しく贅

沢な遊びをするほど金は持っていないせん」

石倉が怪訝な顔で返す。

「兩人で三十円くらいはできよう。足らるところは自分が出すから、たのむ」

十湖は少し譲って、何としてでも行ける算段を掛け合った。

兩人はどうしたものかと思案していたところ、

「こんなに朝早くからどうしたんですか」

白木屋の主人がやって来て、寝巻き姿の十湖に訊ねると

「今日は天気もよさそうだし、せっかくここまで来ているのだから芭蕉の足跡を訪ねてみたいと話していたところだ」

白木屋は既に大きな声で三人が言い合っているのを聞いていたが、あえて記者の石倉に小声で尋ねた。

「宗匠が芭蕉の足跡を訪ねたいというけど、皆さんは否定的なのですね」

「実は取材の金は知れている。見物するほど社は金を出してはくれないし、まして自分たちで工面せよといわれても困ると言ったのだ」

石倉は白木屋の仲立ちで正直に会社の実情を話した。

「分かりました。それならせっかくここまで来たのですから、皆様ぜひお出かけなさい。旅費は私が全部持ちますから」

「それでは白木屋さんに迷惑がかかる」

石倉は遠慮する仕草をした。

「いやいや申し訳ない。それじゃあ、お言葉に甘えて行くことにしよう」
十湖はすかさず礼を云い、相談がまとまったことにして喜んだ。

春嬉し旅から旅のこの首途

まったくもって調子のよい十湖であった。

同行の二人は後の不安を感じながら顔を見合わせていたが。

この日のうちに宇都宮から仙台に移動。当初の予定どおり散策吟行する。泊まりは駅の近くの陸奥ホテルに決めていた。

仙台へ着けば

仙台に待つ春の夜は明けにけり

翌日は白木屋の言葉に甘えて予定を変更し松島へ向かう。松島観月楼に三日間滞在して、松島を残りくまなく遊覧していた。

石倉の案内は上々の首尾であった。

友三人松に千歳の契りかなし

さらに海辺の海老屋に宿を換え、朝餉に出た魚を題に三人代わる代わる句を作った。

同行者の不安をよそに、至極呑気に周辺を見物した。

次の日仙台へ戻る。先日と同じ陸奥ホテルに泊まる。

元来酒好きな十湖は旅館に着けばすぐ酒だ。ぐびぐびと引っ掛けては気炎を吐く。

「酒の相手が居ないわい。わしの知り合いを呼んで来い。この近くのはずだ。旅館の者に聞けばわかるはずだ。一つ走り行つて来い」

この日は酒が過ぎたのか記者の石倉に向かって命令した。まるで小間使いのごとく扱われる始末に、石倉はどうとう怒り心頭に発する。

「僕は今回取材で同行して来ている。これでもれっきとした著述家だ。十湖がどれくらいえらいか知らぬが俺に向かって小僧扱いや小間使いとしかみていない。馬鹿にするな。そんな命令をするなら今夜は宇都宮まで歩いて帰る」

石倉は立ち上がるなり、十湖の面に杯の酒を引っ掛け言い放した。

「ともかくも十湖翁は俳句の大先輩なのだから辛抱しろよ」

画家青木がなんとか仲裁に入ろうと石倉を別室に連れて行き、肩をたたきながらなだめた。

石倉が再び部屋へ戻ると、赤い顔をした十湖が徳利を掲げながら声を荒げた。

「呼んできたか」

石倉は十湖の強情に負けて、しかたなく呼びに行くことにした。

事前に来てくれるよう頼んであったのだが、松島へ行くことになり日程がずれてしまった。相手はもう忘れてしまっていたのだろう。連れてきたのは、この辺では名の知れた俳人の来仙という。

その夜は旅館で俳席を開くことになった。

三月だというのに名残の雪が降り出してきた。

俳席は大いに盛り上がった。

十湖は酒を追加注文し、飲みだしては、またしても気炎を吐き始めた。

矛先は青木画伯である。

「わしの荷物を持って先に部屋へ帰っておれ。俳席は我らだけでやる。画家には用はない」

「何だと。画家のわしに向って邪魔だというのか」

青木も酒が過ぎており、売り言葉に買い言葉になってしまった。

「そうだ。画家の分際で俳句の席に居るのは邪魔だ」

「まだ云うか。わしはれっきとした画人だ。分際ではないわ。青木様と呼べ。この俺に向かって失敬千万だ」

もはや石倉の仲裁には入る余地がなかった。

「様を付けろとな。様をつけるのは人に付ける尊称だ。ほんとに後の世まで呼ばれる人は

世界広しといえど数指の人にすぎず。その中におまえは入るのか」

「そんな意味で云ったものではない。ただ呼びづてにするなというのだ」

手が震えている。青木は持っていた茶碗を、思いつきり庭先へ叩きつけた。

十湖がさらに続けて云う。

「いまだに後の世まで呼ばれる人物は、かのお釈迦様とか孔子様とかの数指の人にすぎず、これは他国のことだが。我が国においてはお大師様とか、芭蕉様とかはその数指に数えられる」

「うーむ」

青木は大きくため息をついてうなづいた。十湖の説法は留まることを知らない。

「かつて井伊直弼が横浜のために尽くしたことで、横浜の豪商大谷喜兵衛が銅像を建設しようとしたことがあった。ところがこれを邪魔する輩が現れて、建設をやめれば勲四等に叙するとか甘い言葉で誘ってきた」

「それがどうしたというのか」

怒りが収まりかかった青木が言葉をつないだ。

「云うまでもないが、大谷は少しも志を変えず、建設の業を終え故人の徳を称えた。だから大谷様とか嘉兵衛様とか言われたのだ」

傍で聞いていた石倉も腕組をしながら聞き入っていた。

「同じ横浜の人で巨万の富を貯えた平沼専蔵という男がいたが、何ら徳もなければ金だけ

がすべてという人物だった。人呼んで平専という。いかに社会的地位の異なるを見よ」

そのうち左手を腰に付け、右手は宙をつかんだ。まるで自由民権運動の壮士の演説さがらである。

「悪かった。つい感情で尊称をつけよと迫ったが、そんな意味はなかったのだ」

少しずつ酔いが醒めてきた青木は小声で呟いた。

「くどいがもう一度云う。古きより虎は死して皮を残し、人は死して名を残すという。されどその名も清く、死後も多くの人より様なる尊称を付けられることこそ人としての本望なり。徳をつみ努力すれば誰しもその域に達することができはずだ」

酔っていても理路整然とした十湖の話に青木は舌を巻いた。

「なるほど、要するに人は財産を独り占めしないで、勤勉であれ、しかも公益になることは共同で一致して実践するというならば、徳をつんで努力すれば後の世で様の尊称で呼ばれることもあるということですね」

酒に酔って詰まらんことでお説教を食らってしまったと、青木は頭を搔いて自らをなだめていた。

翌日は仙台一の料理店對橋楼で書画会が催され、十湖が招待を受けて出かける事になった。

地元紙に十湖が仙台に居ることを紹介した記事を載せたことで盛会であった。ところが、行った筈の十湖がいつの間にか会場から消えてしまった。

書画会側の接待方が癪に触り、その席をはずし勝手に外へ出ていったのである。名物の芸者のハットセ踊りを見物しながら、すでにご酩酊であった。

仙台は記者石倉の案内で古跡を巡り、それなりに吟行を重ねることができた。

「もう行くところがないか」

十湖が石倉に訊ねると、すぐに返事が返ってきた。

「江戸末期の政治家林子平の墓があるがどうしますか」

「それはここから遠いのか。歩いていける距離かな」

「駅前から歩いて十五分ぐらいのところですよ。あまり訪ねる人もありませんがね」

同行の青木も同意し、三人揃って旅館から歩いて向かった。

ホテルは駅前にあるので、そこまではさほどの距離ではない。

この三日間は、十湖のご機嫌ひとつで随分悩まされた石倉と青木であった。

しかし、このころになると十湖の人となりがわかったようで、きつい言動にも尻おじずることがなくなった。

ふと、空を見上げると雲行きも怪しくなり、今晚は再び雪が舞うかもしれないと思われた。

「墓のあるところはこの辺のようですね」

目的の墓所に着いたと思われたが、どこが林子平の墓なのか。枯れススキなどの雑草が生茂り、墓が判然としない。

「どうも墓守もいないようだ」

不安そうに青木は十湖に向って云った。

江戸時代の政治学者林子平といえ、世に先んじて開国を叫び海防の必要性を唱えた人物で、鎖国の時代に言ったばかりに罪人となった。一七九三年五十三才で幽閉されて病死し、当時は罪人のため墓は作らなかつたが、やがて罪をとかれ甥によって建てられたという。

十湖は墓が当然あるべきもので、静かに安置されているはずだと思つていたらしい。

ところが、この墓の荒れ放題を見て怒り心頭、持つていた杖で地を叩き、泣きじゃくつてしまつた。

「どなた様か存じませんが、何をそんなにお怒りになつていらつしやるのですかな」

この様子を遠くで見守つていた八十歳を越える老墓守が、つと近づき言葉丁寧に声をかけた。

「林子平の墓を訪ねてきたが、あまりの荒れ放題に言葉がありません」

石倉が十湖に代わり頭を下げて事情を話した。

「それはごもつともです。時代が変わり、もはや林子平には民衆は目も剝れないのです。参拝者もほとんどなく線香代も事欠く始末です。私は子平を尊敬しているので、こうして毎日墓守をしておりますが。もう年ですから」

老墓守は年のせいで墓の掃除もままならないと言いたいらしい。

しばらくは三人揃って老人の話を聞いていた。

「これを香料の足しにしてくれ」

側で聞いていた十湖は懷中に手をやり、財布を取り出し渡してしまった。

「これはお前が着ろ」

十湖は墓守のみすばらしい格好に、自らの帯を解き襦袢一枚と腰巻だけになった。

脱いだ紋付袴を老墓守に差し出し立ち去ってしまった。

雪が降りだしそうな気配だというのに、十湖は身震いしながらホテルへと舞い戻った。

この着物は十湖が東北旅行に行くのに着替えがないといって、鈴木藤三郎から借りたものだった。

翌日の地元の新聞は「松島十湖翁素裸体となる」との大見出しで、この奇行ぶりを紹介していた。

三月十三日、一行は仙台滞在五日にしてやつと宇都宮に戻ってきた。いよいよこれで十湖との吟行も終わりである。

石倉と青木の両人は、十湖への礼心で大宴会を開くことを決めていた。

場所は十湖との歓迎送別を兼ねて、市中第一の武蔵屋という茶店である。

十湖が東北行脚をしていることは新聞で報道され、いまや地元仙台、宇都宮では話題となっていた。それに「十湖宗匠素裸」の見出しの記事は、奇行奇人ぶりで一躍脚光を浴びてしまい送別会を開くとの広告に、会する者は市中の名望家や、市会議員、弁護士ら百余

名集つたのは当然の結果であつた。

ここで十湖は堂々たる俳諧演説を試み、そのあと大連座会となつた。いずれも拍手しないものではなく至極上々首尾である。

ところがである。出席者の一人が宗匠に対しちよつと無礼の口を利いたのだ。

子平の墓における十湖の奇行振りを笑つたものだつた。

十湖にとって尊敬する人物は一に芭蕉翁、二に二宮尊徳、三に渡辺崋山、四に中江藤樹、五に林子平である。尊敬する人物を傷つけられたのである。

これにはさすがに十湖は頭に血が上り、武蔵屋の宴果ててなお、約三時間も林子平の人物論に怪氣炎を吐き続けた。

石倉と青木の兩人は夜中の二時近くになつて、やつと十湖を白木屋へ送り届けた。

後で知つたことだが、白木屋には実業家鈴木藤三郎から滞在費として一千円の仕送りがあつた。

それにしても、鈴木藤三郎と比較すれば、実に十湖の強情我慢には驚くばかりと石倉は述懐している。

聞くとところによれば、この性格は母親の影響が大きかつた。母親は非常に負けじ魂の強い人で、小間物類を背負い、商いをしては一生懸命稼いでいた。

この境遇の間に育つた十湖にとっては、貴賤の差別が甚だしかつた時代である。微々たる小間物屋の倅に生まれたため、村の者から軽んぜられる。それをしので仕事の

合間には書物を読む。知らぬ文字は相手を選ばず聞いた。

石倉は今回の旅で十湖の強情、この我慢、この利かぬ気は母親からもらった負けじ魂があつたがために、この松島十湖翁ができたという事に考え及んだ。

だからむしろ、美しい記念物として、貴み残しても良いと思つた。

後に石倉は記事掲載にあたり

——偉人にして俳名高く門人の数も万を数え、常に人の意表に出て常人に外れた行動が多い十湖を、人呼んで奇人という。まさにこれが十湖翁の翁所以なりと感慨に耽つたのであつた。

十湖の東北行きは帰路、東京の芭蕉ゆかりの地二箇所に句碑を建立し、同年四月下旬、東北旅行を終えて無事帰庵した。

当時の新聞によれば次のとおり報じている。

——東北漫遊帰庵されし松島十湖翁の慰労会は、去る五月六日浜名郡笠井町不老館において、政治家、報徳家、俳諧家連有志主唱者となつて開会せり。主催者総代丸尾秀敏が開会の趣旨を述べ、長田豊西学校長らの祝辞演説があり、次に松島十湖翁は漫遊の概況を兼ね答辞を述べ主客十二分の歓びを尽くし散会せしは午後十時頃なりしが

地元での慰労会の参加者は三百二十余名、十湖は句を扇子に書いて渡した。

旅勞れ雨の若葉にわすれけり

二俣南北騒動

天竜川の支流にあたる二俣川の河川敷には、折からの朝靄が寒煙迷離のごとく寂しくたち込め、何処からともなく、かっぱでも現れそうな気配だ。

その中を男女二つの影が見え隠れさせている。

男は寺の住職らしく、坊主刈で袈裟が透けて見え腕組をしていた。

「こうなったら、あの人に頼むしかないだろう。このままでは解決の糸口が見つからないから」

男は強い口調で女にいった。

「そうですねえ。十湖先生なら何とかしてくれるかもしれませんわ」

もうひとつの影は年増だが目鼻立ちの整った女で、着流しの着物がよく似合っている。

二人は一睡もしないで地元民との話し合いに、やっと見切りをつけて川の畔で休んでいた。

女の名は天竜二俣町の俳人烏帽子園蓮台、本名は大隅みねという。

二俣では女流俳人として名が売れている。

十年前に十湖の門に入り、その弟子として二俣で句会を開催しては自分で仕切っている

が、地元では師匠でもある。

男は六ヶ寺の和尚である。既に坊主頭には白いものが見え、額の皺も深い。十湖よりは若く背が高い。一見しておとなしそうな人物であるだが二俣町の合併六ヶ村の寺の僧侶の中では一番信頼されている。

明治三十四年九月十一日早朝、蓮台は二俣から馬車を飛ばして十湖の住む豊西村中善地へと向かった。

まだまだ残暑の季節だが、朝が早いせいか風を切って走る馬車の上は心地よく、時に睡魔に襲われたりもした。

蓮台が小一時間で大川端の十湖の邸へ着いた時、十湖は縁側で毎朝の習慣どおり朝刊に眼を通していた。

既に公職を辞めて久しい。五十三歳になっていた。

「お久しぶりです。何の前触れもなく来てしまつてすみません。今日は十湖様のお力を借りたくて急いでやってきました」

息せき切つて蓮台は理由を告げた。

蓮台から言われるまでもなく、十湖は二俣で起こっている事態は十分察知していた。

「先生、ぜひ助太刀をお願いしたいのですが」

蓮台は玄関からあがると畳に頭をすりつけ頼んだ。

「助太刀とは穏やかでない。自分が仲裁に出て行くべきか迷っていたところだった。たか

が学校の建設であり両者の利害関係が、はっきりしているはずなのに。子供側に立てば両者で和解の道もあるうと思うのだが」

十湖が淡々と云う。

「それがそうならないのが世の常で、どこで狂ってしまったのか先が見えません。どうか紛争の收拾に乗り出してくれませんか。馬車を待たせてありますので」

蓮台はすかさず頼み込んだ。その顔には何が何でも連れて行くという意気込みがにじみ出ていた。

「話はわかった。どうせ、たいした用もない昨今だ。ひとつ骨を折ってみるか。蓮台の頼みとやらでは断わりもできんからのう」

蓮台の申し出にまんざらでもなさそうに、一つ返事で十湖は応諾した。

この時はまだ事の深刻さは理解していなかった。

十湖を乗せた馬車は、二俣の六ヶ寺へやって来た。

すでに和尚が山門の前で待っていた。

「昨年春より二俣町の学校建設の土地問題がこじれまして、未だに收拾できずに困っております。朝早くから無理を云ってすみませんが、解決の糸口を見つけるため十湖宗匠の仲裁をお願いしたい」

和尚は馬車から降りる十湖に軽く会釈をした。

庫裏に案内し、和尚からことの経緯が詳しく説明された。

蓮台に十湖を迎えに行かせたのは自分の指示で、かつ蓮台の意向でもあったこと。

今回の紛争を憂いているのは六ヶ村の寺の僧侶も同じで、皆地域を心配しているが、住民たちや議員は中立的な立場で解決を図ろうとしているものがないため、十湖にお願いすることになったという。

蓮台は十湖の弟子でもあり、蓮台自身が十湖の出番を待ち望んでいたので迎えに行かせたとも付け加えた。

「事の起こりは、二年前に鳥羽山トンネルが開通したことに端を発しております、学校建設の土地問題から二町で紛争になっております」

「そのようだな。新聞には詳しく書いてなかったが、学校ができると言うのに、なぜそんな紛争になるのかが理解できん」

十湖が出されたお茶を一口すすると、自分の疑問を和尚に投げかけてみた。

「そこなんです。山の南側にある鹿島地区の学童は、トンネルの開通で山の北側の二俣小への通学が可能となりました。鹿島分校の学童にとっては多くの学童と交流して学ぶことができ、そんないいことはないはずです」

「それをどうして大人は気に入らんと言うのか」

「鹿島分校の学童が二俣小へ行くようになれば、鹿島分校は廃止され二俣に統合されました。当然二俣小は生徒が急増しました。その結果、校舎を増築するのか、現在の学校のあ
る清滝寺から校舎を移転し新築するのかの選択を迫られたのです」

「それなら町に任せて、大局的にどちらにすればいいのか決めればよいのではないか。大
人が挙つていがみ合うのは、何か理由でもあるのか」

「もともと二俣小は、清滝寺の本堂を借りて授業が行われていました。明治八年頃から学
生数が増加し、仕方なく町は寺の境内に新校舎を建設しました。それから十五年後寺側が
町の土地借用期限が切れたので町へ学校敷地の返還を求めたのです。町は寺と交渉しさら
に十年借用をすることになりました。しかし、トンネルが開通したことで鹿島の学童も二
俣小へくることになる、いよいよこのままではいけない。町は重い腰を上げたのです」

「それで校舎を増築するのか、移転するのか、という問題に発展したというわけか」

「町としては寺にこれ以上迷惑をかけまいと他への移転を議決し、皆原か金谷の地を候補
としていました。すると議会は皆原案を採択し、これで全て丸く収まるかと思われたので
す」

「そんなに難しい問題ではないのに結果は収まらなかった」

十湖が納得したような顔をしているのを見て、それまでじつと側で聞いていた蓮台が口
を出した。

「ところが世の中そう簡単には終わらせないですよ。このとき町長が病氣辞任したもんだ
から、新町長の選任を待つことになってしまったんです。それで今年、新町長に見付警察
署長だった河野光三郎が就任し、前町会の議決を了承して進めるんですけど、建築経費の
不足分を一般町民からの寄付で賄うことを改めて提案したのです。要するにこの案では経

費がかさむというので、住民負担を求めたんです」

すこしばかり蓮台が感情的になっている。代わって和尚が続けていった。

「ところが二俣南部の議員が猛反対し、それなら金谷案も再考せよと迫りました。だが町長は、既に前町長の決めたことで用地買収が済み登記も済んでいる。と言って撤回しないのです」

「二俣南部の議員は金谷の推進派ということかな」

「そうです。町長の言い分に怒った南部の議員は議場を退場し、以後校地問題の審議は応じないという態度を固持しました。仕方なく町側は寄付案を撤回、校地問題も再検討を約束しました」

「それならば、これで収束に向かうはずだが。なぜだ」

「こちら立てればあちらが立たずで、町会が南部の言い分を通したので北部の出身議員は猛反発。またまた町会は流会し、学校敷地問題が暗礁に乗り上げた事態に陥ってしまいました」

「どうも大人たちの感情が先行していて、解せんところがある」

十湖は和尚の話で十分理解できたと応えたが、成り行きはいかんともしがたいと頭を傾げていた。

その夜、十湖は和尚の紹介で南部の関係者と北部の関係者の言い分をそれぞれ聞くことにした。

双方の言い分を聞けば聞くほど、この騒動は「二俣の南北紛争」に発展していくと十湖の気持ちは憂鬱になってきた。

だが、つぎの日は何もせず、酒を飲んで町内の様子を窺っていた。

そのまま滞在し、月が変わり再び蓮台らを伴って各方面の話を聞いてまわったが、まったく解決の糸口が見えず、纏れた糸は容易には解けないと苦難の心境だった。

我もその渦に卷かれつ秋の水

秋の野のもつれも解かず暮れにけり

八重雲をはや追ひ払へ秋の風

二俣に滞在し一ヶ月余が過ぎたある日、蓮台の仕切りで句会を開催した。

「鹿島の渡し」を主題に地元俳人仲間と句を詠んだ。

十人程度が旅館の二階に集まり賑やかな句会となった。

十湖にとって久しぶりの句会とあって、酒の味も五臓六腑に染み渡り少々酔いが回った。

玉とちるのきの雫や月の雨

秋風といふ風の吹く夕べかな

聞くことは思ひもよらず小夜砧

自らの句はどうにもしよぼくれているなと反省していると、どこからともなく、三味線の音が川風に乘せて聞こえてくる。

十湖は暫くして心が落ち着いたのか、この苦境を乗り越えなければ、俳句も詠めなければ酒もまずいと決意を新たにしていた。

同じ頃、二俣町内の街道筋は、数軒の居酒屋が軒を並べ提灯に明かりを点け始めていた。そのうちの一軒おかめやには数人の常連客が寄り、既に話が弾んでいた。

「この頃は賭場にも秋風が吹き出したのか、客も減り財布の紐も硬い」

「集まる顔ぶれがいつも一緒じゃ、あがりは知れている」

博奕打ちと見られる若造二人が手酌で飲みながら話している。その様子を先輩面の男が黙って聞いていた。

「今に町内で大きな工事が始まれば県内外から人が集まる。そうすりや賭場も賑やかになるんだが」

先輩面の博奕打ちが杯を舐めながら口を出した。

「そうは云つても兄貴よお、今のところ何ら動きがない。面白くねえな」

若造の一人が応えた。

「だから俺たちは校舎の新築移転に肩入れしてるんだ。だが、どっちの町も引かんからこ
うなっちまう」

兄貴と呼ばれた男が不味そうな顔をして言い返した。

「いい加減に議会は決着しないのか。俺たちはどっちでもいい。早く解決してくれればそれで町は賑やかになる」

「そうだ。誰でもいいから双方の言い分の中に入って、仲裁すれば解決しそうだ」

若造の二人は酒の回りが速い。話がぐどくなってきた様だ。

「いっだったか姉御が爺を連れてきたが、何とか云ったな俳諧師で名が思い出せん。そいつが町議会へも大きな顔を出すそうだ」

「爺が来てもう一ヶ月近くになる。俺の知っている範囲では議長にも顔が利くらしく、なかなかの野郎だそうさ。だが、相変わらず両者の考え方に隔たりがあり、こう着状態のようさ。毎晩、タダ酒をあおっているとのうわさだ」

兄貴が若造らに知ったかぶりの噂話を手振りを交えて話していた。

句会の帰りは月が足下を照らし、灯はなくても歩けそうさ。久しぶりに酔った十湖にとつて、歩く姿は覚束なかった。

蓮台に付き添われて寺へ戻る途中のことだ。

唯一明かりが点いて開け放たれた居酒屋の前を通りかかったとき、店の中から撚れた浴衣を着た三人の男たちが威勢よく飛び出してきた。

十湖を取り巻くと

「この老いばれ爺、タダ酒飲んでいつまで二俣にいる気だ。学校紛争の助太刀に来たなん

て調子のいい事云って、なんら解決もしねえじゃないか。そんな野郎は用がない。いい加減にこの町から出て行け」

若造のひとりが凄むと、ほかの二人も着物の裾をたくし上げた。

「目障りなんだよ。じじい」

「よそ者は出て行け」

口を合わせて怒鳴った。

蓮台が十湖の背に一瞬身を隠した。

「おやおや、河童が現れたか。出るところが間違っていないか。俺はじじいといわれるほど年はとっちゃいない。お前等はどこのどいつだ。初対面の人間に向かってそんなことを云われる筋合いはない」

十湖は怯むことなく、彼らよりも大きな声で云い返した。

やくざな三人を河童に仕立て、案外落ち着いている。この二俣川には昔から河童が出たという言い伝えがあり、川下の油が淵あたりに出没し、子供を隠してしまう。ところが、それを助け出すのが、白髪を長く垂れ、身には白い衣を纏った翁の諏訪明神だったというのである。

「あら、清助じゃないか。そんな態度をするんじゃないよ、私の師匠の諏訪明神様だよ。わざわざ問題解決のために二俣まで仲裁に来てもらったのに」

十湖の背後から、蓮台の切れ長だが涼しい目が清助を睨み付けた。

清助とは堀部清助という博奕打ちで、きつぷがよく正義感が強い。中肉中背で女には好かれそうな甘い顔立をしている。河童とは似ても似つかぬ姿である。それにしては、やぐざ言葉がどうに云っている。

蓮台とは子供のときからの知り合いである。今回の学校土地問題でも蓮台と同様北部側に属していた。

今宵は連れの若造らと博奕打ちのあがり酒を飲んでいたが、話が未だに解決しない学校問題に触れたことで自棄酒になってしまった。

そんな時、折り悪く十湖らが店先を通りかかってしまったのだ。

「何だ、姉御も一緒か。それじゃしょうがない。今夜のところは蓮台の顔に免じて見逃してやろう。だが、問題の解決もしないのに、いつまでも二俣の町を歩かれちゃ俺の立場もない。十湖先生よう、ここはひとつ賭けをしないか。もしあんたがこの件を仲介して解決させたならほうびに三十円をやろう。それを持つてとつとこの町をうせろ。だがよ、できなかつた場合は俺にきつちり三十円よこせ。町の者みんなに手を突き、謝つてこの町を出て行け。期限は年内中だ」

河童に仕立てられた清助は、酒の勢いを借りて一気にまくし立てた。

「清助とやらの云うことはわかつた、約束しよう。乗りかかつた船だ、いずれにしても解決せねばならんことだからのう。それに三十円の礼金までくれるとあつては、こんな美味い話はない」

酔いが覚めかかっていた十湖は鼻で笑った。

月が変わり十一月二日、町議会に何度も顔を出し、口入をする十湖の姿があった。

議長は十湖の提案には前向きで、議長室を訪ねればお茶の接待があり充分時間を潰した。だが議員の側は一向に十湖案を検討する兆しはなく、もはやこれまでかと十湖は諦めかけた。

北部も南部も住民側は手をうてる事は全てやってきている。

それにも増して風評やらで外部からの人間が入り込み、住民等を煽っていることが十湖には癪に障った。

これまで十湖が双方の聞き込みや調整の中で知ったことは、二俣は全町民を巻き込み、町は南北に分裂して学童不在の校地騒動に発展してしまったということだった。

南部町民（金谷派）は杉浦亀吉ら四名が代表し、町民四百三十人の署名を集めて請願書を町当局に提出したら、北部議員も負けじとばかりに皆原案を支持する町民らと一緒になつて同じ事を展開する。正に泥仕合の様相となつてしまった。

議会はもめるだけで結論が出せず、町長は議長の職権で強行採決を図り、五対三（議員数十二人のうち四名欠席）で原案どおり北部側の皆原案を押し通した。

このとき南部の議員がなぜ欠席だったのか疑問が残るが、当然この結果には南部関係者は猛反発した。

「町長及び北部議員の不信任」を求める署名を郡長に提出し、南部議員五名と鹿島区長は

辞任した。

そのため五月には町会議員の補欠選挙が行われたが、南部は候補者を立てず、当選者は全員北部出身者で占めてしまった。

このことが町外で批判され、新聞でも取り上げられ、各地から壮士やらが乗り込んで町民を煽り、町政批判の演説会を開いた。

事態を憂慮した県知事は、池田郡長や郡会議員その他遠州地方の有力町村長らに調停の斡旋を依頼していた。

十湖は既に公職を退いていたのでその依頼はなかったが、郡長時代の功績を見れば誰もが十湖の出番を待っていた。

しかし、十湖はもうこれ以上何もできない、こう着状態の有様に幻滅していた。

旅館から眺める二俣川の流れは、今は穏やかに下流の天竜川に合流していく。

この川でもかつては何度も暴れたことだろう。そのたびに住民は立ち向かい解決してきて今があるはずだった。

江戸時代には、代官に願い出て川口村地先天竜川堤を築き、二俣、川口両村を水害から救った男がいた。

二俣村の名主川島重喜である。

この男、俳号を鶏明と号し十湖と同じく嵐牛に師事していたが、明治三年に没し七十二歳の生涯を終えている。

十湖は窓辺の柱に寄りかかり夕日に照り輝く金色の川面をながめながら、ひとり静かに俳諧師鶏明に思いをはせていた。

我はただ帰りばもなし霜の道

二俣川沿いの宿に寝泊りして幾日が経っただろうか。二階の窓を開け川の流れを見つめていると、無性に中善地の我が家が恋しくなった。

——わしがやらなくても誰かがやるだろう。問題は二俣の住民のことだ。たかが女から頼まれて軽く尻をあげってしまったが、無理なものは無理。どっちへ転んでも正義は正義だ。

——騒動の仲裁を諦めて、中善地の庵に帰ろう

ふと口から弱音を漏らしていた。

眼下のせせらぎまでも十湖の心境に同情しているかのように静かに流れていく。

「先生、お客様ですよ」

階下から宿の女将の呼ぶ声が聞こえた。客は役場の中堅の職員だった。

「十湖先生の幹旋案を議会が受諾したので、お知らせに参りました」

「そうか、そうか、やっと俺の案を呑んだか」

十湖の顔に笑みが溢れた。十湖が仲裁に乗り出し、南北双方の言い分を聞いて作った妥

協案は

①新二俣小学校の敷地は、金谷と皆原から長円山（現市民会館の位置にあった小高い丘）へかけて延びる丘陵及び清滝寺南端部とし、低地は丘陵部の土砂で埋め立てをすること。

②工事費は町の基本財産を取り崩して捻出するとともに、県からの借入金、町債で賄い増税や町民からの寄付金募集は努めて避けること。

町会は十湖のこの妥協案に基づいて、二俣小学校の敷地を正式に金谷に決定した。残暑だった頃に仲裁に乗り出したが、既に町には秋風が吹き十一月になっていた。

町議会側の合意を機会に天長節を期してさらに仲裁に入り、いよいよ住民側も納得し一挙に和解が成立したのだった。

翌三日、二俣町が平和回復大祝賀会を開催した。

二俣小学校庭へ郡長・郡会議員・調停関係者のほか町会議員・南北町民代表等が顔を揃え十湖も招かれた。

会が終わわり、夜の宴会は町内の福田屋、角屋で行われた。

校地問題の功労者だと紹介された十湖は、嬉しさのあまり夕暮れの替え歌を即興で独吟して祝った。

夕暮れに眺め見はたす天竜川　月に風情を烏帽子山
帆あげた舟が見えるぞえ　あれ鶴が啼く鶴が啼く

壬生に祝ひがあるわいな

さらに二俣町に平和克服として句を披露した。

美しや野分のあとの月の色

翌日、十湖は思いがけなくも仲裁の礼金として銀行頭取から三十円いただいた。

「さすが十湖様だね。まさに河童から子供を助けた白髪の諏訪明神の化身だよ」

蓮台は、十湖を諏訪明神と褒めたたえた。

一方、博打ちの堀部清助からは賭けに勝って三十円を巻き上げ、この金で和解の祝賀会を開催し、双方の住民関係者が集まった。その中には蓮台と清助も含まれていた。

頭取からの礼金三十円のうち十五円は町の子供たちに菓子配り、残りの十五円は町の困窮者に分けた。

十湖にはいつもの結末だが、名を残して、懐は一文なしで帰庵した。

十湖とともに騒動の解決に奮闘した烏帽子園蓮台は、この結果には大いに喜び、数日後、礼状とともに十湖の庵に蓮台の句が届いていた。

結ばれも解けて小春や壬生の里

明治三十四年十一月十二日、二侯紛争の仲裁で庵を離れていた十湖は、久しぶりに我が家へ戻っていた。だが庵では弟子たちが慌しく動き回っている。

「今朝は皆どうしたんだ。わしがやつと自宅へ帰ってきたと言うのにうるさくて寝ていれぬ。随處はいないのか」

十湖は寝巻のまま不機嫌に弟子へ声をかけた。弟子が返答に困っていると襖の向こうから妻佐乃の穏やかな声が返ってきた。十湖の怒鳴り声には慣れている。

「すみませんね。今行きますから」

「何が起こったのだ。随處の仕業か」

弟子が持っていた書留の郵便物を取り上げて、十湖はすぐに事態を察した。

「いえ、今回は私が弟子の皆さんと話して決めたことです」

佐乃がそう言えば、十湖はさからわず何も言わなかった。金の事は弟子と妻に任せている。

口出しする気はなかった。一ヶ月の間、天竜二侯に出かけていたので邸は食い扶持の金がなくなってきた。常に蓄えを持たないのが信条の十湖邸では、句会が開かれなかったり

すると、すぐに収入源が途絶えてしまう。それ以外は郵送で選句の収入が送金されてくるが不定期だ。

それでもこれまで何とかなっていた。

ひとたび十湖が宗匠として動けば、新たな入門者が増え、庵には食い扶持が殖えていく。支出はいっこうに減るどころか増えていく一方なのだ。

一番弟子の随處が外から戻ってきた。若干十八歳で十湖の門を叩き入門して、十二年目の暮を迎えようとしていた。十湖の顔を見るなり

「お氣付きでしたか。今、弟子たち皆で、活命料の寄付を全国の弟子や関係者に送ろうとしていたところです」

随處は笑顔で得意そうに話した。

「ふふーん、活命料か。よく考えたものだ。活命ということばは活命茶とか呼ばれているので知られるが、活命料となると、こんな名詞は世の中に存在しない。これで相手に通じるとなると、十湖の存在は世間ではお見通しということだ。生きるためには金が必要とな」

十湖は長く伸びた顎の白髭をなでながら鼻で笑って感心した。

「こちらは俳誌に掲載する広告文です」

随處が筆書きの文を大事そうに手にとって十湖に渡した。

「我が師翁、七十二峰庵十湖の清貧は、天下の人の知る所なれど近來貧に貧を重ねて、赤貧洗うが如し、されど生きている間は着て食って行かねばならず、偕、同人の活命料と

して、十湖を知る諸君は金壹円宛寄贈ありたし嫌ならばよすべし、又多きも少なきも謝絶す。但し三千名を限る、三十五年一月締切、右のための報酬、十湖生きている限りは同人のでき得る限り、何でも御用は辞せずといふ、且つ直ちに領収書を添へ、尊徳翁及び芭蕉翁肖像（半切）加ふるに、十湖書一葉宛拝呈すべし。松島十湖門人等一同敬白―

読み進むうち、十湖の顔がしだいに紅潮し始めた。

「自分は赤貧洗うがごとしか。そのとおりだ、貧乏でいつでも財産は何も残っていない。だが一口に赤貧というが、わしは赤貧ではないぞ。清貧だ」

十湖は広告文を見て声を荒げた。

「どういうことですか。赤貧ではないと」

隨處は自らが書いた広告文を、十湖にけなされたと思い聞き返した。

「貧乏にもいろいろある。簡単に云えば赤貧ということばと、その反対に清貧と呼ぶものもある」

「ならば宗匠は、赤貧とはなんですか」

「きわめて貧乏なことを云う。衣食にも困り、身も心も卑しき者を云う」

「それならば今の宗匠と対して変わりませんね。要するに真面目に働くわけでもなく、怠けて文句ばかり云うような者ですか」

「そうだ。人に迷惑がかかるのも気にせずにな」

「もう一つの清貧とは？」

「赤貧とは反対に、常によく働き公共等のために尽くし、毎日営々として居る人にして不幸、天才、地震に遭って不遇、落蔭に暮らす者もいる」

「多くの民はこれに近いですね」

「これは同じ貧乏でも、人事を尽くして心に疚しいところのない者であつて、清貧という」
「貧乏にも二つあるなら、富者にも同じことが云えるのではないですか」

「さすが随處だ。かつて、わしが報徳の会合で云ったことがあるが、富にも色々あつて、濁福ものと清福のものがある」

十湖のことばに熱がこもつてきた。

「・・・・・・」

隨處はことばを抑えて、十湖の次のことばを待った。

「勤勉推譲の道を守りて、よく働きよく勤め、分度を守りて富を致し、基金を学校のため道路のため、その他公利、公益となることに推譲使用することは、いわゆる清福じや。富貴の下に貴字の付く人で富貴の人という」

「富貴の人も我々の周りにいます」

「それはそうじや。人は富んでも人格を備えなければだめだ。人格を備えるということは、身は健全に、心は清潔にして一方は労働を厭わず、一方に慈悲にして世のため人のためにならねばならぬ。このようにして金持ちになつた人が眞の富貴といえる」

「それではもう一方の福とはなんですか」

「富貴とは反対にただ欲のみと書いて、悪事もかまわずに金を貯め、人の迷惑をも何も顧みず、何が何でも金さえあればよいというものじゃ」

「これでは人は殺さずとも世の中の悪党と同じではないですか」

「そうだ。僥倖を贅え投機を成し、果ては不正品の商売を為して国辱を思わぬような成金もある。これらがいわゆる濁福者といい、決して羨むものではない。国家をも害毒を流す富者だ」

十湖は強い口調で隨處に説いた。

「もういいじゃありませんか。猫の手も借りたいくらいですから。この場での議論はやめにして手伝ってください」

妻佐乃が側から口を出した。手は手紙を折りたたんでいた。

「議論をしているわけではない。清貧について、わしの想いを伝えたかったのだ」

十湖は言訳の矛先を妻に向けたが、隨處がそれを躲わして云った。

「宗匠、そのまま続けてください。作業は私たちがしますから」

「うーむ、わしの想いとは二宮翁のことばである報徳精神のことじゃ。一体金がなくて人の世話になるのも困るが、金を貯めすぎて揉め事が起こるのも困るもんだ。そのためには真に報徳の道を守って、貧富の外に超脱して、人の人たる道を尽くしてもらいたい。かつて二宮翁は、貧乏人は金持ちにとつては福の神であると言ひ、即、貧富相和して財宝生ず、富者も賢者も道德を守って私欲に走らず、世のため国のために働かなければならないと云

った」

十湖の話に周りの者は聞き入っていた。隨處もうなずいていた。

十湖はさらに続けた。

「翁のことばに――有樂分外に進めば貧賤その内にあり。有樂分内に退ければ富貴その内にあり――とある。つまり何でも分度を守って働くときは富に達することができる。富者でもただ金があるだけでは何にもならぬ。公共のためにして富の下に貴の字の付くようになさなければ直打はない。わしは貧乏が善いと云うわけではない。貧乏はしていても清貧を心掛けている」

淡々と述べた十湖の話に隨處らは納得顔で頷いた。

活命料のことは怒鳴られるかと隨處は覺悟したが、思いのたけを述べた十湖の顔を見ると安心した。

「よくわかった。わしが命の変わりに筆を持てと言うことだな。何百、何千枚か書けば命を繋ぐということだ。これによれば三千枚か。よかろう」

未だ五十三歳の宗匠だ。その気になればやれないことはない。すぐにでも書き始めると云つて動きだした。十湖の性格のいいところでもあった。

自室へ戻り筆をとる。十湖の俳人仲間に手紙を書き始めた。俳誌には手紙文を紹介するとともにこんな句まで添えた。

秋風や死で行くなら今時分

尾張の知多郡加木屋町宗匠久野襦鶴が十湖からの手紙を開封していた。

——またまたご面倒申し上げ候

老生、活命料の儀今一切ご尽力願い上げ候

風交会や銀行や鹿島やその他、猫でも杓子でも遊女でも芸者でも何でもかんでも金さえいただければ

其れでよし、後日返礼黄金をつまん、これは出来過ぎたり失敬、年の坂越す事覚束なし、平にひらに

ご尽力願い上げ候

この頃近江の義仲寺の翁忌に詣でるやら……中江藤樹先生のお墓に詣でたりして、無い錢を遣い

申訳無の事に御座候

これが即ち僕の病なり。嗚呼——

「十湖宗匠らしいのう。呑気なもんじゃ。庵には食客がいつでもゴロゴロしているし、周りは大変なことだろう」

襦鶴はそう一人つぶやきながら弟子を呼び寄せ、一円札を渡し手紙の主へ返事を出せと伝えた。

十二月十二日俳諧評論に十湖が耕雨宛へ送った手紙文が掲載されていた。

——雑誌毎号御贈付かたじけなく御礼申し上げ候、

迂老の事何かとお書き下され喜び入り候

この頃義仲寺の翁忌に文台奉納として出頭それより藤樹聖人の墓に詣で候
足下も東海道を御待申居候

来年の初め頃如何にや 耕雨老兄机下 十湖拝——

年内はこうして静かに暮れようとしていた。

金が無ければさすが十湖も動けなかった。

妻佐乃が取立てに来る酒屋や米屋に笑顔で対応し、年越しの野菜だけは近所で調達していた。だが、気がかりは年始の際の来客接待と、年賀の行事の諸費用である。

十湖宅では郵便物を一日三回、妻佐乃の指示で弟子らが郵便局に取りに行く。

「すみません。郵便取りに来ました」

弟子が局内へ声をかけると、若い局員が忙しそうに郵便の束を持ってきた。

わざわざ取りに来る客は局では知らぬ者はなく、預かる郵便物も切手が貼ってなかった

りする。それを局では立替えて切手を貼って出しているのだ。

十湖のものではないと、有る時払いの催促なしでまかり通っている。日々配達される郵便物は数十通を下らず、切手の購入や小包の発着数は笠井局の取り扱いの三分の二以上を占めていた。

暮れも押し迫り、わずかだが近隣の弟子たちから活命料が届いた。

晦日午後になり、雲行きも怪しくなり風花が舞う。

十湖の邸に隣接した庵では、弟子たちや食客らがそれぞれ背を丸くして、火鉢にあたっていた。

火鉢の中の炭火もいつまで続くやらと、弟子の口から愚痴が漏れた。

十湖だけは自室に籠もり、半紙に向かつて筆をとっていた。

俄かに邸の玄関先が賑やかになった。

一台の人力車と荷を積んだ大八車が横付けされた。

「何事か」

十湖はそう云うと、自ら玄関まで廊下を足早に行く。

玄関に控えていたのは、他でもない天竜二俣の女流俳人烏帽子園蓮台と、博奕打ちの清助だった。

正月用に頭を整えた晴れ着姿の蓮台が、人力車から降りると開口一番早口で言った。
「二俣の騒動ではいろいろお世話になりました。今日は郡長と銀行頭取からのお届けもの

です。勿論、私たちからの分も含めての、いわば年末支援物資です」

「そうか、それはありがたい」

色気たつぷりの蓮台の着物姿に見とれながら、十湖は大八車に向かい、清助に荷紐を解かせた。

荷台には薦被りの酒一樽、味噌樽、撞きたての餅、塩鮭、鮎の乾物、それに炭俵までが積まれていた。

「暮れにこちら様から活命料名目の寄付のお願いが届いたけど、私らも同様金欠病です。それで二俣の銀行頭取にその旨話したら、郡長様まで話が行き、用立ててくれました。あの時の御礼にしては少なすぎるが気持ちだと伝えてくれと郡長様がおっしゃって、こうしてお届けに至ったというわけですよ。持つものは友ですねえ、十湖様、宗匠」

蓮台が調子良く喋っている。

横から清助が俺にも言わせよと言わんばかりの眼で、鼻の下を撫でながら口を出す。

「宗匠も頭は良くても金には弱いかな。まあいいや、とりあえず二俣の借りは返した」

と大見得を切ると、蓮台が肘で清助の脇腹を突きながら

「何を威張ってんだよ。お前さんは十湖様に負けたんじゃないのかい。賭けた金まで巻き上げられてさあ」

「あの時はあれで決着済みだ。事態を解決してくれたんだからな。俺は宗匠にその解決手段を教えて貰ったから、その借りを今回の労働で返したのさ」

清助はきつぱりと蓮台に言い返した。

十湖は二人のやりとりを聞きながら、この二人仲がいいなと少しやきもちを感じた。「まあいい。遠いところをこの暮れにきて貰ったのだ。どうだ一杯飲んで行け」

十湖はふたりに勧めた。

側にいた佐乃が後ろでじつと中の様子を伺っていた人力車夫に声をかけた。

「松五郎さんも良かったら、一緒に中にお入りなさいな」

十湖の馴染みの車夫である。佐乃は良く気が利く。

おかげで暮れも、金はなくても口に入るものは手に入った。

蓮台のいう「持つべきは友」かと、つぶやきながら、近くの寺から響く百八つの鐘を聞きながら、年を越した。

邸に隣接する庵でも、弟子たちが貰った酒で盛り上がっていた。

年明けて勅題は新年梅

新しきものなりふたつ年の梅

一月四日年中行事の年賀は忘れなかった。

七十二峰庵の年賀とは、農学社と報徳会の初講座を邸内で開催し、参会者には必ず二汁

五菜以上の食事を供応することである。

午後には正式俳諧を開く。最近では各自野菜、魚、酒を持ち寄って参加するようになった。佐乃が旨く立ち回って呉れていた。

昨年暮れに発した「活命料」寄付募集の反響はすこぶる大きかった。

締め切りを一月三十一日としたため、月末は全国から続々と申し込みが殺到した。中には句会の賞にするので芭蕉像に十湖の句を書いたものを別に注文してくるものもあった。弟子たちは大わらわであった。

一方、一部の新聞では十湖の活命料のことを面白おかしく記事にして、資産家金原明善と比較していた。

ところでこの時代、新語が生まれたとき、辞書に掲載されることになったのだろうか。

活命料―生きることに必要な金、別名世渡り料金、清貧の俳諧宗匠を養う寄付金のこと

息子の戦死

明治二十七年に開戦した日清戦争が翌年四月に勝利すると、日本はさらに軍備を拡張し日露戦争へと突き進んでいく。

ロシアとの戦争は文字通り国の総力を挙げての戦いで、戦費だけでも約十八億円、これは戦争前の日本の国家予算の六倍以上になる。国はそのため増税、次に国債を発行した。

この戦争で従軍した日本の兵士は百九万人と言われ、およそ半分が男性だとすると男子二十二〜二十三人に一人という計算になる。

そのうち、およそ八万八千人の兵士が亡くなり、傷病者になった兵士は四十万人を超えた。出征した兵士の半数が何らかの犠牲を被ったことになる。

明治三十七年二月八日、陸軍先遣隊は仁川に上陸を開始、連合艦隊は旅順港外のロシア軍艦を攻撃し、翌九日には仁川で軍艦二隻を撃破した。国内は戦勝に沸いていた。

同じころ、浜松駅停車場では多くの出征兵士の見送り人でごった返していた。

一方、出征・帰還の将兵を接待する施設も駅に備えられていて、日夜にわたり送迎接待にあたっていた。

愛国婦人会という会員四十五万人を擁す団体が、兵士たちに慰問品を送ったり、出征兵

士の家族を励ましたりと盛んに活動していた。

市内の学校でも戦争に協力することが求められ、出征兵士の見送りや戦況が有利に展開している時は祝賀行事を開催した。

当時の状況は同時代に浜松が生んだ女流文学者鷹野つぎの自著の中で、詳しく回想されているので引用しよう。「娘と時代」の一節に日露戦争と題し

——ああ、それは明治三十七年といふ、記憶すべき重大な年の元旦を、私たちは迎へた。

私は数へ年十五歳になった。実に、この年の紀元節の前日、二月十日は、露国に対する宣戦の詔勅が下されたのである。

「号外、号外！」

と連呼して街路を鈴をならして走って行く声。

二月二十四日には、旅順港口に閉鎖作業を開始し、三月二十六日には、旅順港口にての軍神廣瀬中佐と杉野兵曹長の戦死があつた。

心のさだまらない、少女期の私の心にも、これらの戦報にて、澄みきつたお国を思ふ一念が燃えたち、廣瀬中佐の死には、もったいなくて、くやし涙がこぼれた。

鷹野つぎの「娘と時代」の一節「日露戦争」はさらに続けて女学校生活を綴っている。

「私の女学校では開戦以来、生徒に対しては絹物の使用を絶対に禁じていたので、友達はみな更紗染めや、二子縞やらの木綿ものを着込んで、これだけは許されていた黒色の絹リ

ボンを廂髪に着けて集まっていた。

それがまた、お互いに鵜の目、鷹の目で、絹物と木綿ものを見分けようとするので、お洒落をするよりも、うつかりはしていられなかつた。なかには爪で布地をガリガリとこすつてためしに来る者さへあつた。

ある朝、うかつにも、私が紅絹の襟をつけた襦袢を着て登校して行つたら、よつてたかつて、忽ちその紅絹をはぎとられてしまつた。

かういふさわぎはその実は、ことに楽しい団欒で、みんながみな、一様に質素にするといふ一心一体の報国心をわづかな不注意をも正して、高唱しているやうなものであつた。

学校では、出征遺家族の持参してきた千人針をさかんに結んだ。私のくみの者は、多くは寅年であつたから、みなが十五の歳のかずだけ結んだ。途中で糸を繋がないやうにと。……町では明治三十四年に創立されていた愛国婦人会の会員たちがめざましく活動しはじめた。

汽車で征途に上る兵隊さんたちの、途中下車の休憩駅にあてられた浜松駅前の広場にバラック建の歓迎ホールが急増され、私たちも級を分つて、交々声援に出向いて行つた。

このホールには大きなオルガンが備へつけられ、休憩の兵隊さんたちに、茶菓をさしあげ、くつろいでいられる間に、私たちはオルガンに合わせて、征途を送るにふさはしいいろいろの唱歌をうたつた。

文中の女学校は浜松町立尋常高等女学校のこと、現在の浜松市立高等学校である。つぎ等女学生は二月三月の寒い日も、戦地に行く兵隊さんを思うと寒いなどとはいえず、自然と襟巻きも手袋も取り去って見送りをしたという。

同じころ十湖は冬日が差し込む縁側で、ぼんやりと庭の落葉した樹々を眺めていた。
「藤吉から手紙が届きましたよ」

十湖の妻佐乃がうれしそうに郵便を手にしながら廊下を走ってくる。

十湖は佐乃が差し出した手紙の封を切り、急いで取り出し読み始めると妻に云った。

「そうか。藤吉の奴元気にやっておるか。満州へ出征し遼東で激戦に参加とある」

「激戦ですか。あぶないですね。無事でよかったのはいいですけど」

「そればかりではない。台湾の戦いでは功労賞を貰ったと書いてある」

佐乃は別段嬉しそうな顔はせず耳を傾けて、手紙を読み聞かせる十湖を見つめている。

「手紙の最後に俳句が添えられているぞ。やっぱりわが子だ。野戦でも風流の道は忘れてはいない」

「どんな句ですか」

「三句ある。」

結ばれぬ露営に夢や時鳥

血を払ふ太刀の光の寒さかな

いさましく我もちりたし白牡丹

少しばかり勇ましい句だ。軍人らしい一面も忘れてはいないようだ。無理をしなればいいが」

「そんなに死に急がなくても、早く生きて戻ってくればいいのに」

佐乃は十湖の側に寄り添い、手紙を覗き見しながら小声で言った。

「いや軍人は常に生死を彷徨っている。俳句が奴の慰めになっているのだろう」

いつもなら大きな声でわめき散らすところだが、心なしか神妙な顔つきをして穏やかな声の十湖であった。

次男藤吉は十湖自慢の子供であった。

小さい頃から俳句に興じ、めきめきと頭角を現した。

十湖が引佐龜玉郡長として赴任中の明治十八年のこと、旧気賀の領主徳川家の旗本近藤家に子供がなかったため嗣子がなく、家が断絶しそうだという話を聞き、思案の末に養子として藤吉が近藤登之助を世襲した。

藤吉は俳人の子として育っていたため俳句にも精通し、のちに四時庵友月と号し俳句を作っていた。すでに近藤家の養子に相応しい文化的素養を身に付けた自慢の子であった。

だが悲しいことに、日本は戦争へと突入していく時代であった。

明治三十年、藤吉は二十一歳で軍人に志願し、翌年には歩兵二等軍曹となり静岡第三十四連隊付けとなった。浜松駅が出征兵士で賑っている頃には既に満州の地へ向かっていた。こうして手元に彼の俳句が届くのも、戦地からだと思うとなんとも言われぬ寂しさ悲し

さに襲われる。

——藤吉は不憫な奴だ

十湖はひとりつぶやきながら、頭の中ではなにやら思案をしていた。

「そうだ、戦地の俳人友月を応援してやろう。奴の好きな句会を開き、皆で励ますのはどうだろうか」

これなら自分の藤吉に対する不安な想いも紛れるのではないかと。さて具体的にはどうやるかが問題であった。

それから程なくして、十湖は一風変わった行事を心に忍ばせていた。

定例会の準備のために朝から庵に来ていた隨處を、大きな声で呼びつけた。

「今日の句会は敵国降伏祈念祭とする。各人に烏帽子、垂直の装束で来るように伝えてくれ」

「え、今からですか」

隨處は怪訝な顔付きで聞き返した。十湖は一度言い放したら云うことを聞かない。

今回は息子の生死を左右しそうな戦況を黙って見過ごすわけにはいかなかったのだろう。隨處は十湖の性格を知っており、唐突な指図はいつものことだと自分の怒りを抑えていた。

「そうだ。正午までには時間がある。明日二十日にかけてやるのだから、まあ揃わなければ仕方が無い」

「わかりました。出席予定者のところへ弟子と一走り回ってみます」

そういうと隨處は弟子を一人連れて、下駄を鳴らして外へ出て行つた。会の運営は十湖が自ら考えた。

会場の笠井往還沿いの旅館山形楼には神前を用意した。供え物には饅頭に鯉節、そして栗を並べた。

供え物にしては変つた取り合わせだが、十湖にとっては大きな意味のあることだつた。まず、戦勝にちなみ饅頭、これは満州の代わり。鯉節これは勝男節。栗は同じく勝栗のたとえとした。

句会の各章には、いずれも軍歌を仕込んだ百韻歌仙を興行した。

誠に奇妙な句会である。これを新聞屋が逃すはずがない、当然のこと翌日の新聞たねとなつた。十湖の狙いは見事に当たつたのである。

五月、バルチック艦隊の全滅で各地では戦勝提灯行列が行われた。連日の新聞はこの記事で埋まっていた。

浜松駅周辺では笹竹に紅提灯を付け、頭上に振りかざして戦勝を祝う市民らが集まつていた。その光景を十湖は句に詠んだ。

提灯にてらす世界や夏祭

このころ日本軍が九連城を占領すると、浜松地方の学校では祝賀行事が生まれ、学生も参加した。

戦地の藤吉は八月十八日からは遼陽に向かって前進し、首山堡壘に対して攻撃を開始した。

日本軍の死傷者二万三千余人をだしたが、ロシア軍が退却を開始。九月四日日本軍が遼陽を占領した。

十湖の元でも戦勝に沸いていた。

「遼陽が陥落したか。遼陽占領祝賀祭だ。早速連歌会の開催支度だ」

十湖は機嫌良く囃し立てていた。感情の高ぶりで句は考えずとも自然に口から吟じていた。

蜻蛉や百万の蚊をとり尽くす

この最中の八月三十一日、登之助がロシア軍との大激戦を交え、敵弾に当たり若い命を落としたことを知らない。九月四日になっても十湖のもとには訃報は届いていなかった。

九月十七日夜、十湖は同吟会主催の連歌会に出席した。

「宗匠久しぶりだ。ますます元気なようだな」

掛川在住の宗匠が十湖の座に近寄ってきた。かつて農学社の活動でも顔見知りの男であ

る。

「ところで、宗匠の甥の八木吉平が戦死したよ。知ってたか」

「いや知らん。いつ亡くなった」

「八月三十一日遼陽で戦死したと聞いた」

十湖はたしか籐吉も同じ隊にいたはずだと思った。だが死んだのは籐吉ではなくて胸を撫で下ろした。

三日後、連歌会で同席した掛川の宗匠から十湖のもとに急な連絡が入った。

「お前の息子籐吉である近藤登之助が首山堡墨付近でどうも亡くなったらしいと言う話を聞いた。八木が死んだ三十一日に大隊長の身代わりとなつてね」

そのことを裏付けるように翌二十一日、気賀町役場から「出征者が自宅へ送った手紙に二中隊近藤軍曹殿には名譽の戦死をせられたり」とあったとの知らせがあった。

同日、役場より公報が入る。もはやうそではない。戦死は事実であった。

よく死んだ出かしおつたと魂迎ひ

我が家にも戦死者ありてあきのくれ

見上るやくれてのあとの秋の空

十湖にとって近藤登之助こと次男籐吉の死は、あまりにも衝撃的であった。

口では誉めて見せても、内心では生きていて欲しかったというのが本心であった。人前では涙は見せずとも、夜になると悲しみが押し寄せてくるのであった。

明治三十七年八月三十一日十湖は五十六歳になっていた。その次男藤吉は二十七歳という若さの戦死であった。

地元の浜松新聞は登之助葬儀前の状況を記事として掲載するとともに、同日鈴木藤三郎氏と十湖氏と題して次のように報じていた。

——東京深川小名木川の日本精製糖会社社長にして衆議院議員なる鈴木藤三郎氏と松島十湖氏途は昵近の交わりある事なるが今度近藤曹長の戦死を聞きて先ず取敢えず香典として金五円を送付し尚葬儀の事については金一円以上と十湖との関係上巨額なる寄付を為すいうまでもなく十湖と鈴木藤三郎との関係は盟友の何物でもない。十湖の悲しみに対し藤三郎ができる最大の弔意を示したものだっただろう。十湖にとってどんなに慰められたことか。

続けて同新聞は八日の近藤曹長葬儀の光景として

——地域の有力者ほか一般会葬者一万人、葬儀会場として十湖宅、菩提寺を当て何れにも大アーチを作り衛國門の額を掲げた。楽隊が「哀の極」を吹奏し笠井町内を出て葬儀会場へと向かう。

葬儀会場では四時庵友月の発句や門人等の弔を集めて句集「友月集」を作成し配付した。

のちに登之助は戦功により勲七等に叙ぜられ功七級金鵄勲章を賜った。

魂祭り家門の光ります日かな

十湖は次男藤吉こと近藤登之助の名誉のために、後世に残そうとそれを祝って詠んだ。だが、どうしても胸にぽっかり空いた穴は埋まることなく、日々が空しく過ぎていった。翌年、十湖は自らの俳号「七十二峰庵」を弟子の隨處に与え、自らを「大有庵」と号しはじめとした。

娼捨紀行

このところ十湖の毎朝の習慣は、庭の四つ目垣に絡む朝顔が徐々に蕾を付け始めるのを眺めることであつた。

妻佐乃が植えたもので大半は青紫の花が咲くが、なかには突然変異で白い縞のある赤い花が咲いた時がある。

もともとは花を見るためより、葉を絞った汁が虫刺されの時の薬になることから植えたものだが、今ではどんな花が咲くのか楽しみであつた。

明治三十八年六月十六日次男藤吉の戦死から一年近くが経とうとしていた。

十湖は書斎から涼風が吹きぬける邸の植え込みを見つめながら一通の手紙を認めている。宛先は信州の和楽園欽采こと瀬在多之助、長野県埴科郡五加村である。十湖同様地元の俳諧師で名が通っている。

桜の散り始めた三月の末に欽采から句会招待の手紙が届いた。しかし、未だにその返事を出してなかつたため漸く書き始めたところだつた。

愛用の細筆で宛先まで書いたが、その先が進まない。

昨年の初めは町中が日露戦争の戦勝に湧き、次男藤吉(俳号友月)の出征も祝つた。だが

それは長続きせず、夏の終わりには藤吉戦死の悲報が届いた。

十湖は衝撃を受け、戦争の無慈悲に腹が立って、その年は藤吉の供養をするのが精一杯で俳句どころではなかった。

年明けて欽采から手紙が届いたのは、落ち込んでいるであろう十湖を慰めるがためだったかもしれない。

この時、欽采二十七歳、年の頃なら次男藤吉と同じである。今、その招待に応えるべきか迷っていたのだった。

朝顔のつるは、一雨ごとに延びていく。十湖は、何の屈託も無く柔らかい新緑の芽を陽にかざしているつるを見て、筆が動き始めた。

——貴殿からの心遣いに感謝し、招きに応じて信州を訪問してみたい

同年九月十日、庭の朝顔は蕾から大輪の青紫の花を咲かせている。

朝顔や夏から咲て秋の花

この日、朝顔を詠んだ句を残して大木随處、柳園成佳、冬至庵閑里ら三人を伴い信州・信濃地方へ向けて旅立った。

今回は言うまでもなく吟行行脚である。

長野方面をめざし招待してくれた俳人仲間のとこに連泊し、そこを拠点に周辺地域の吟行を重ねるつもりだった。

夜は人の集まりそうな旅館や俳人宅で連歌の会や句会を開き、地方の俳人たちとの交流を重ね、弟子を増やしていこうとの野心もあった。

とかく、これまでの旅は浮名に流され、酒をしたたか飲んで奇行ぶりを発揮し、周囲の者を驚かせることが多々あった十湖だが、これでは戦死した藤吉こと友月に面目が立たぬ、大いに発句に専念しようと思っていた。

庵の月心信濃に通ふなり

信州へ向かう十湖一行は、名古屋で中央本線に乗り換えた。

目指すは長野の篠ノ井駅である。

駅で買ったちくわをつまみに、冷酒を飲みながら車窓風景を楽しんでいた。

やがて汽車が姨捨に差ししかろうとした頃には、十湖の頭がうなだれ居眠りを始めた。

「いつの間にか師匠が寝てしまいましたね。朝が早かったから」

十湖の向かいの席に座っていた一番若い弟子の閑里が、先輩格の随處に向かつて云った。「そうだなあ。酒はそんなに飲んでいないが、これまでの家業の苦労も一息ついてほつと

したのだろう」

隨處は、十湖の日ごろの多忙を慰めるかのように言つた。

「次男の友月君は、戦争の犠牲者だよ。生きていればきつとここに居たかも知れない。師匠は友月の供養で忙しかっただろうと」

友月と仲のよかった成佳が、口を挟んだ。

十湖にとってこの道は三年前に一度来ているはずだった。そのことは誰にも言っていない。隠しておきたい苦い体験だったからである。

三年前の明治三十五年六月、十湖が上京した折、神田区表神保町の啓発社社長高橋金作のところに厄介になっていた。

この出版社の社長とは俳句の掲載で知り合つた仲で、一時、女学生雑誌「姫ゆり」その他の文学書を発行して有名であつた。

ここに十湖の門弟で十五歳になつたばかりの柏葉が務めていた。本名は鷹野弥三郎、既に俳号がついており十湖に勧められ俳句の会に入つていた。

長野方面は俳句が盛んで、弥三郎の父も熱心でその影響があつたらしい。

弥三郎がここで働いているのには訳があつた。弥三郎の父親から息子が教員になりたいというので働きながら学ばせたい。ついては働き口を紹介してくれとの頼みからだつた。

後に浜松で十湖の伝記を書くことになるが、十湖とは長い付き合いになつていくことをこのときはまだ知らない。

高橋社長のとこで数日泊っていたが、ある朝十湖は帰り支度を整えた。

「高橋君、せっかくの機会だから、帰りは長野方面に向かい弥三郎の実家に立ち寄っていいと思うが」

「ここからなら、そう遠くではないから気をつけてお帰りください。家は旧家で大きいから近くまで行けばわかるはずですよ」

高橋社長は快く挨拶したが、十湖との用はとづくに済んでいた。やっと帰ってくれろので安どした。

十湖は世話をしてくれた御礼を言いながら、さっさと信越本線に乗り込んだ。

軽井沢から碓氷峠を越え、信州佐久を通り松原湖を目指そうというつもりだった。

松原湖畔には弥三郎の実家、豪農の鷹野今朝三郎宅に立寄り、自ら挨拶をして来ようと思っていた。

近く信州行脚を計画していたためであった。

明治末期、長野県佐久地方には鉄道路線が整備されておらず陸の孤島であった。一口に松原湖までといっても、そう容易にいけるものではない。

明治十九年（一八八六年）には信越線（現在のしなの鉄道）が直江津く軽井沢間に開通し小諸に駅が設けられ、明治三十五年（一九〇二年）に篠ノ井線、その後明治四十五年（一九一二年）には中央線が全通しており、佐久地方だけが鉄道から取り残された地区であっ

た。

当時の長野県では蚕糸業が発展しており、鉄道敷設に伴い地域産業は発展し、鉄道は蚕糸輸送で大きな収益を上げていた。佐久地方でも養蚕・製糸業が盛んであったが、鉄道網がない為に付随する他産業の発展は望めなかった。

又、豊富な森林資源も輸送手段がない為に手付かずのまま。地域民は鉄道敷設による地域・産業開発を切望していた。

鉄道業も他地区の実績を考慮すれば十分に採算が見込まれ、更に千曲川の豊富な水量を利用した発電所建設計画があり、鉄道敷設は必要不可欠と考えられていた。だがこの時期は軽便もなかった。

十湖は小諸駅で下車し馬車で湖畔の鷹野宅に向かうとするが、列車の旅は常に酒が付きもの。一人旅では酒の量が増してしまった。

馬車に乗ろうとした時には既に呂律が回らず、歩行もままならず、車夫に何度も行き先を問われた。

やっとのことで乗車した十湖は上機嫌だ。

「旦那、松原湖の高野だなんていわれても、いくらもありますぜ。一体どこのたかのさんですかい」

車夫はとがった口調で言う

「そんなことは知ったことか。いや、今日列車で来たばかりだから、えーと」

十湖はなんとか応えようとするが、名前が思い出せない。

「今朝の列車で来たんですかい。それなら憶えているはずだ」

車夫はぴしやりと言ひ張る。

「そうだった。今朝だ。今朝三郎だ」

十湖は思い出したことが嬉しくて大笑いして手を叩いた。

「豊里の鷹野今朝三郎様ですか。村でも一番立派なお邸です。よしわかりました」

だが道のりは十里以上はあるようだ。車夫が馬に鞭を入れると一頭立ての馬車は土煙をあげて走り出した。

「旦那、昼間からそんなに酒に酔つてると追い返されちまいますぜ。川の水でもかぶつて酔いを醒ましたほうがいいんじゃないですか。」

車夫は気を遣つて十湖に声をかけた。

馬車が動き出すと十湖は懷から飲み残しの酒を取り出し、ぐびぐびと飲み始めた。

それが空けば、鞆から新しい洋酒の瓶を取り出し、着くまで舐めている。

松原湖畔が見えてくる頃には、既に鼾を掻いて寝てしまつていた。

六月だというのに湖畔に吹く風は爽やかで、十湖が寝入るのは無理もなかった。この地方では梅雨はあまり関係がないようだ。

「旦那、そろそろ着きますので起きて下さい」

車夫は車の両輪の音に負けないような大きな声をかけた。

「着いたか」

十湖は、寝入りばなだったようで眼は虚ろだ。

「正面に門のある邸がそうです。この地方の資産家ですから、失礼のないようにお訪ねになるほうが・・・旦那まだ酔っているんですかい」

車夫の氣使いはなかなかである。

「馬車をこの辺に待たせておきますから、用が済んだら合図してください」

十湖はひとまず旅行鞆は馬車の中に置いて、一人歩いて鷹野邸の門に向かう。

なかなか立派な門構えである。十湖の住む中善地の村にはこんなにかい家はない。

門をくぐって庭に入り声をかけた。

中から面高だが氣品のある表情をした婦人がニコニコしながら出てきた。

「遠州浜松から来た松島十湖です。ご主人にお会いしたい」

十湖は酒に酔っているのを悟られぬよう、毅然とした態度で訪問の理由を述べ面会を求めた

「遠いところをわざわざお越しいただき、あいにくですが主人今朝三郎は不在でございませう」

丁重に婦人は挨拶をした。そのうえで一言添えた。

「たとえどんな御用でも、酒に酔って訪ねて来るなど言語道断です。主人には訪ねてきたことを伝えますので、本日はお引き取りください」

あの気品のある婦人の口から出た言葉とは思えないほど厳しい叱責だった。十湖は一気に血の気が失せ、酔いが醒めていくようだった。

肩を落として馬車に戻る。

「旦那、言ったとおりでしょう。まあ仕方がないや、今度はゆっくり寝ていって下さい」
車夫に慰められはしたが、さて今晚はこのまま帰庵できるはずもなし、車上で思案に暮れる十湖であった。

懷から酒瓶を取り出し残りの酒を一気に飲み干した。馬車は再び元来た方向へ走り去って行った。

「師匠起きてください。乗り換えですよ」

夢ごごちの中の十湖は、閑里が自分の体をゆすり起こそうとしているのがぼんやり聞こえてきた。

「もう篠ノ井へ着いたのかな」

十湖は大きなあくびをして背を伸ばすと、閑里に背を押されて汽車を降りた。

初夏の陽は真上にある。一行は乗り換えて篠ノ井線を横川方面へと向かった。

予定では碓氷峠の熊の平まで行つて再び長野姨捨へ戻つて来るつもりである。

碓氷第三橋梁は「めがね橋」という名称で知られており、碓氷川に架かる煉瓦造りの四連アーチ橋は碓氷峠の代表的な建造物である。国鉄信越本線横川駅・軽井沢駅間の橋梁の

一つとされアプト式鉄道で見ることが出来る。一行は吟行することも忘れ、この橋に見入ってしまった。いた。

折て来て見する車掌やはつもみち

再び列車は下り、姨捨駅に着いたところには陽が沈みつつあり、代わって上弦の月が東の空に浮かんでいた。

今晚の宿は姨捨の長楽寺である。招待してくれた瀬在欽采がすでに寺への手配をしてくれていた。

——芭蕉翁もこの月を見にきたのだなあ
十湖は感慨深く月を眺めていた。

姨捨や月にひもとく歌袋

長楽寺に佇んでいると、芭蕉と一体になっている感があり、句が湧いてくるような気がした。

山号は姨捨山放光院長楽寺。信濃三十三観音霊場第十四番札所にあたる。境内からは眼下の眺望がよく、芭蕉が月を眺めに木曾路から姨捨のこの地までやってきて句を詠んだと

云われていた。十湖は芭蕉の更科紀行を反芻していた。

同月十五日早朝、境内から眼下を望んでいた十湖の側に隨處が寄つて来た。

「師匠相変わらず朝が早いですね。よく眠れましたか」

隨處が眠い目をこすりながら声をかけた。

「うーむ。空気が爽やかなせいで目覚めがいい。それに」

十湖は言いかけて、長い白髭を撫でながら言葉を続けた。

「二、三日善光寺の参詣に行ってみようと思うのだが、せっかくここまで来たことだし善光寺参りはしたことがないだろう」

「それは願つたり叶つたりです。こちらから申し出ようと思つていたのですが、是非に行させていただきます。月に願いが通じたのかなあ」

隨處は他の二人にも伝えてくるといつて庫裏へ走つていた。

篠ノ井線の姨捨駅は標高五百五十一メートルの山の中腹にある。明治三十三年十一月一日国鉄篠ノ井線篠ノ井駅・西条駅間の開通と同時に開業し真新しい駅舎であつた。

一行は篠ノ井線（下り）篠ノ井・長野方面のホームに立ち、絶景の眺めを堪能していた。

先日初めて駅を降りたときは既に夕まずめで、東の空に月が薄ぼんやりと輝いていた。今朝の駅は善光寺平を見下ろす絶景が広がっている。十湖はホームにひとつだけあつた木製の椅子に腰掛け、句をひねっている様な素振りをしていた。

「千枚田の向こうに広がるのが善光寺平で、武田と上杉の川中島の合戦の場だったんですね」

同行の中で一番若い閑里が眼下を指した。

「長閑でいい景色だ。ここでも句は詠めるぞ。閑里、どうだ一句できたか」

隣にいた柳園成佳が軽く頷き言った。

「句はできませんけど、ここ嬢捨の紀行文の一節を紹介しましょうか」

「ほおう、句なら芭蕉も一茶も詠んでるが、閑里は紀行文まで仕込んできたのか」

「成佳さん、せっかくここまで連れて来てもらったのに何も知識を持ち合わせていないでは皆さんに申し訳がない。それで」

閑里は自慢そうに、おもむろに懷から綴じ本を出して読み始めた。

「姨石の上にのぼれば、日のくれかかりたるに、も々斗の人居並び在て、月のいでなんを念じて待たるに、・・・何くれと口のうちにずし、けぶりふさいで、あるは、かしらをふせて箕居し、ものかげはさしのぞきて、からうたやあらん、やまとうたやあらん、よき句やいで給ならんと、しのびやかにかたらひ、かくやいかが、こはおかし、・・・みつわざしうそぶき、みじかきつかの筆をかたにあげてねぶり・・・」

「作者は誰かな。文章はおもしろい」

成佳は納得したような顔をして聞いた。

閑里は早速質問に答えようとしていた。作者は江戸時代の漂泊の国学者菅江真澄である。

三河出身で長野から北海道まで旅をし、見聞したことを記録として残していた。閑里が読んだのは姨捨の観月描写の部分だった。日暮れ前から姨石の上には百人もの人がいて月が出るのを待っていた。いい句ができないかとささやいたり話し合ったりしているというもの。まるで花見見物のように月見をしているのを表現していた。

名月やどこに居ても人の邪魔

十湖のそばに立っていた隨處が句を口にした。

「一茶も句を詠んだ。これは俳人だけではなく庶民にとつても月見が楽しみのひとつだったことをうかがい知ることができるものだ」

一行が景色を眺め、時間の経つのも忘れていたところへ、黒煙を吐きながら列車が滑り込んだ。ホームで乗るのは十湖等一行だけだった。

長野駅に降り立った一行は早速、善光寺を目指して歩き始めた。

今晚の宿は、道中で一番良いところにしようという十湖のことばに甘えて、同行の三人は顔を左右に忙しく動かしていた。

長野駅が開業して既に十五年以上経ち、町の景観は大きく変わった。善光寺参詣の形態も様変わりして、善光寺参詣団体が各地から訪れるようになり、仲見世にも参詣団体を受

け入れる旅館が多くなつた。

いっこうに決まらない宿泊先に、十湖が突然そこが良いと大きな旅館を指した。結局今日からは犀北館へ投宿することに決まつた。

泊まるところが決まれば、腹ごしらえだ。とたんに一行は右へ左へと目が惹かれる。仲見世の賑わいに皆の心が躍っていた。

大門の辺りに差し掛かった時、鐘鑄川端にお茶屋が軒を連ね、参詣客がひと休みしている。

「この甘酸っぱい匂いは酒饅頭ですね。善男善女は皆口にするのでしうか」
閑里が鼻を鳴らして隨處を見る。

「ここらでお茶でもいかがですか」

隨處は赤い毛氈のひかれた休み場を指差して、十湖に休憩を促した。酒飲みだからといって、甘いものが嫌いではない。

一行は「つるや」と暖簾の架かった店先で一服することにした。

十湖は出された饅頭を一口頬張ると、淡泊で甘酸っぱい酒饅頭特有の風味を味わいつつ発句した。

鐘鑄川真如の月や宿すらん

隣に座っていた隨處は、閑里が残った饅頭を口いっぱい頬張っている様子を見て、まだ子供だなど苦笑いをしていた。

この日から一週間は犀北館に逗留し句会を催した。

この地域における俳諧への思い入れはすこぶる強く、連日盛況であった。翌九月二十一日、十湖一行は埴科郡五加村瀬在周平宅に移動し腰を降ろした。

翌朝、瀬在周平宅の広間で朝餉を迎えていた。

「皆様、昨夜はお疲れでしたでしょう。あちらに朝餉の支度をしてお待ちしております」主の瀬在周平が一行の前に膳を置きながら挨拶をした。

十湖一行はきまり悪そうに頭を垂れて聞いていた。

昨夜は善光寺からの移動中、したたか酒を飲み、瀬在宅に着いた頃には皆ご機嫌なほど酔っており、夕餉もとらず眠ってしまった。

「昨夜は大変迷惑をかけた。つい心を許してしまつて皆ご機嫌で辿り着いた」十湖が代表して詫びをいった。

「いえいえそんなことは気にしなくても。今朝は新米を炊いて、皆様の膳を用意いたしました。お召し上がりください」

鄭重な主の言葉使いに十湖は背筋を伸ばしながら碗を取上げた。

「それはありがたい。飯の香りがいい」

隨處は礼を云いながら閑里の顔を窺った。閑里は既に箸を付けていた。

「先生にはこの度は大変貴重なご意見を頂き、おかげさまで今日の新米が出来るに至りました」

主の周平の隣にいた息子の欽采が膝に手を置きながら十湖に云った。

「そうか、少しは家業にも精を出したか、それがいい。俳諧師は俳諧だけしていれば上手い俳句ができるかと言えばそんなことはない。わしが若い頃は農業を奨励しながら俳句の普及を進めてきた。二宮尊徳の報徳の教えは働く事への奨励であり、俳句は芭蕉の自然への謳歌である。どちらが欠けても良い俳句は生まれまい」

「この分で行けば来年はもっと良い米ができるはずです。欽采にはこのまま家業を継いで頂き、俳句にも、好きな絵にも打ち込んでくれれば申し分がないと思っています」
周平は欽采を横目でみながら付け加えた。

今回の旅は、言うまでもなく欽采からの招待によるものだ。

招待の手紙には欽采からの悩みが付け加えられていた。十湖は招待に応ずるかどうかと言う前に欽采への悩みに答えて手紙で返していた。

欽采は便りの中でこう綴っていた。

——今年の春先に、働き手が少なく自ら家業である農業が忙しくなった。そのため俳句を作る暇も、画を描く暇もない。まして本を読むなんてできない。家を出てしまえば自らの発句も画も自由に描けるのに

と言う内容のものであった。

これに対し十湖の返事は

——俳句も大切だが、それ以上に家業も大切だ。家業を大切にする俳諧だと思ふべしと忠告していた。手紙の末尾には十湖の句をふたつ添えた。

色も香も嬉しきものは新茶かな

川中によき村ありて夏木立

十湖からの返事は欽采の迷える気持ちを揺るがしたようだった。

それから一カ月後、再び十湖は欽采宛に手紙を出し、欽采の招きに気持ちを改めて応じたのだった。まったくもって清々しい思いでの旅立ちとなった。

今こうして来てみれば、家族全員で暖かく迎えてくれていることに感謝した。同行のひとり閑里は小柄だがよく食べる。

朝餉の広間には彼のたくわんを噛む音がいつまでも響いていた。

月内はこの地に逗留し、句会を開き地域の俳人等と交流した。

月が替わり明治三十八年十月、再び長野善光寺前の旅館犀北館へ移り、連歌を巻いたりして句会を開催した。

犀北館からの眺めは、鷲尾山が良く見え十湖は気に入っていた。山は秋の気配を感じさ

せ、夕照に輝く風景は十湖に発句を促した。

手にとれば矢の根石なり夕紅葉

十月十一日、信州へ旅立つてから早一ヶ月が過ぎようとしている。

かねてから欽采が準備していた十湖の句碑建立が、いよいよ執り行われようとしていた。一行は姨捨の長楽寺へ式典のため向かった。

長楽寺では欽采はじめ地元の俳人等が、十湖一行の来るのを首長くして待っている。

芭蕉忌を兼ね十湖の句碑を建立する手はずとなっていた。

発起人は地元の俳句会衣里川社中、主幹は和楽園欽采により挙行され、欽采は未だ二十歳代だが、式は手際よくすすめられた。

建立した句碑には、芭蕉が月を見るために辿り着いたと言う、更科紀行を意識して

月の都まことに月の都かな

と十湖直筆で刻まれていた。

長楽寺の境内には多くの歌碑や句碑がある。

門脇には松尾芭蕉の句「俳や姥一人なく月の友」を刻んだおもかげ塚（芭蕉翁面影塚）

がある。陸前松崎の「松島やあ松島や松島や」、常陸鹿島の「月はやし梢は雨を待ちなが
ら」とともに日本三塚に数えられているという。なお、松尾芭蕉が姨捨山の月を眺めに木
曾路から当地を訪れた更科紀行でこの句を詠んだのは貞亨五年Ⅱ元禄元年（一六八八年）
のことである。おもかげ塚の建立は明和六年（一七六九年）に加舎白雄（かやしらお）の
手によってである。

また小林一茶は四度の来訪があつたとされている。

その塚に十湖の句碑がひとつ加わった。名実ともに蕉風の後継者を誇示していた。

建碑の後、祝いと「後の月」の句会を開く。十湖は一貫して「月」を意識していた。こ
の日の句会では総じて季語は「月」であつた。

芭蕉忌でもあり、芭蕉と一体となつて姨捨の句会に参加したかつたのだろう。

脇句俳諧の連句では、租翁が

いざ宵はまたさらしなの都かな

と発句すれば、続いて十湖は

其さらしなの後の夜の月

建碑祝吟では

清水井やむかしながらの月ひとつ

「後の月」句会では

もの凄し姨捨山ののちの月

姨捨の月は棚田の溜まり水に満月を映し、さながら「田毎の月」を演じていた。

欽采の自宅更科庵に杖をとどめること数日、連歌を巻き、地元の俳人等と対吟を愉しんだ。夕餉に少しばかり酒が進んだときだった。欽采が半紙ほどではないが短めの紙に描いたものを持ってきた。

「師匠、これは私が画いたものですが、いかがですか」

十湖が徳利から注いだ杯の酒を口に入れようとするのを、塞ぐように目の前に差し出した。

「これは誰の顔じゃ。いい男だな、美味しく描けている」

十湖は上機嫌で冷やかす。

「言うまでもなく師匠の姿ですよ。せっかく信州へ来てくれたのに去った後に何も無いの

は心もとない。私が記念に残しておこうと描いてみました」

「氣に召すも召さぬもないわい。画はうまくできている。さすが欽采だ。だが余白が淋しい。わしが揮毫しよう」

「はい、ぜひお願いします」

弟子が持ってきた筆で、欽采の画の上にあつという間に句を披露した。

山々を船に数へて月ひと夜

この句はここで発句したのではなく二十年前に伊勢へ行脚した折に詠んだものだった。今でも同じ境遇にいると信じ、この句を添えたものだった。

それに信州へ来ては、そばの味にも舌鼓を打ち何度食べても飽きないと思っていた。

更科や月にまたこのそばの味

皆で象山にも登り吟行をした。まさに心から楽しめた信州行脚だったと月に向かって欽采らに感謝した。

早いもので暦は秋へと移り十月の末を迎えていた。来月の初めには倉科村で建碑式を挙行する予定があり、ここは少し息抜きでもと、十湖は一行に声をかけた。

待っていたかのように、同行の一人最年少の冬至庵閑里がはしやぎ出した。

「どちらへ行きますか。行くなら温泉が良いなあ」

「上山田温泉はどうだ。二年前に開湯したばかりで新しい。皆はどうする」

十湖は大木随處、柳園成佳にも意向を訊ねた。

「今、この地域は米の收穫時期で忙しいでしょう。連歌を巻くといつても客が来るかどうか。評判の曲水館なら多少の客は見込めるかもしれませんが。それとも犀北館とか」

隨處が心配そうに応えた。

「それなら、犀北館を目指すとするか。閑里はいいな」

「温泉で宴会ではないのですか。玉には連歌なしでというわけにはいきませんか」
名指しされた閑里は少し怪訝そうな顔で、それでもししぶ承知した。

二晩を上山田温泉で湯舟につかり旅の疲れを養う。十湖にとって久しぶりに気分を変えての発句である。

寝心も初冬ぶりや温泉のひとり

宿の湯に延ばす命や千代の秋

このとき短冊に認めて欽采に与えた。

後日談として温泉（現上山田ホテル）に今も残るとされる「延命の湯」の句碑は、この短冊を元に彫ったもので、新潟県境の大石を運んで、長野市松代町金井在住の新井唯一石匠によって刻字された。建立は平成元年九月二十七日とある。

この年の春、地元の郷土研究家高中静美氏（祖父春雄）が十湖の孫である桐山氏と曾孫である奈雲氏を案内して姨捨長楽寺と倉科に建つ十湖句碑を訪ねた。

以下は高中氏の書いた紹介文から引用させていただく。

「よもや祖父春雄も十湖翁も、八十年も後の世にそれぞれの孫たちがつれだつて句碑を訪ね歩くなどとは思ひもよらぬことでしたらう。その夜、ひと夜の泊りに上山田ホテルを頼んでおきました。女将さんに声をかけていただき、不思議な縁の糸をたどるようにして三人旅の事情をお話しました。そして、かつて松島十湖が上山田温泉に泊つて詠んだ「宿の湯にのばす命や千代の秋」という句のあることとお話すると、女将さんが不意に「その句をウチで碑にさせて下さいな」といわれ、私たち三人は驚いて顔を見合わせているばかりでした。以下略」

明治三十八年十一月三日、上山田温泉から長野の犀北館へ戻るやいなや弟子たちはそのまま残し、欽采らとともに戸隠へ向かう。先月来、信濃毎日の記者から戸隠での吟行取材したいとの申し入れがあり、瀬在欽采等と冬の戸隠を目指す。

案内は東松露香、同行は欽采をはじめ松木一枝であった。欽采等には事前に伝えてなか

ったので草庵では驚いていた。

戸隠高原付近はすでに秋模様は過ぎ、途中の飯綱原では横風強く徒に寒かった。往く手左に見える安曇野の山は真つ白であった。

十湖はその時の機嫌で、戸隠へ吟行に行くと了解をしたものの、季節の変わり身にいささか面食らった。

松木の門下と名乗る浅川村の門沢葉山氏が居合わせ、途中で芋を肴に酒を酌み交わした。五臓六腑に染み渡る爛酒は冷えた体を甦らせた。

おかげで心地よく戸隠神社の一の鳥居へ辿り着く。

散り残る紅葉かさすや山日和

白い山青い山見る枯野かな

見上るや吹雪の中の大鳥居

中社に着くと宿坊久山館の主人の案内で大玄関を通り、八畳間に案内された。

本館は風格ある神殿造りで、存在感ある柱・梁に囲まれたゆったり広い空間である。これならくつろげそうだと思った。

広間からは、苔むした庭園が眺められ、石橋のある池の左右には小滝他七つの滝があった。

たそがれ時には霧も出て、庭の木賊にまつわり風情がある。

夕餉には待望の蕎麦を戴き人心地もついた。

翌朝、主人が短冊を持ってきて句を所望されたので、十湖は一句認めて坊を去った。

さらに奥社へ向かう。これからは道が陰しく肌寒い。

戸隠神社は霊山・戸隠山の麓に、奥社・中社・宝光社・九頭龍社・火之御子社の五社からなる。その起こりは遠い神世の昔、「天の岩戸」が飛来し、現在の姿になったといわれる。戸隠山を中心に発達し、祭神は、「天の岩戸開きの神事」に功績のあった神々を祀っている。明治になって戸隠は神仏分離の対象になり、寺は切り離され、宗僧は還俗して神官となり、戸隠神社と名前を変えていた。

九頭龍社では天手力雄命を拝し九頭龍神に額ずいた。

男手に尾鰭を落とす紅葉かな

奥社に着いた頃には昼餉の時間になっていた。途中で俳諧師一茶翁の碑に参ろうと思つたが、さすがに疲れており、宿坊へ戻り庭の木賊を貰い下山した。

戸隠や菓子の名も亦そばの花

雲霧の深く戸さすや奥の宮

三日後、犀北館に十湖の姿があつた。

未だ五十七才だというのに、戸隠行脚は季節柄厳しかったと反省しきりであつた。花器に挿した木賊を眺め、これもいい体験だったと打ち消していた。

十一月十五日、これまでせわになつた衣里川社中の人々と別れるにあたり、瀬在欽采が送別の句を披露する。

見送りや汚れぬ橋の霜踏て

それに対し十湖は留別の句を詠んだ。

内川に心を残す時雨かな

四箇月に及ぶ信濃行脚の旅は、十湖一行が癒される日々でもあつた。招待してくれた欽采の心配りとその家族をはじめ衣里川社中の仲間たちが暖かくもてなしてくれた事への感謝の気持ちを留別の句に託したのである。

内川に寄せる一行の未練は、降り出した時雨がそつと流してくれているのであつた。

十湖一行は暮が押し迫つた十二月二十六日、すべての日程を終了し帰庵した。

芭蕉忌

昭和十一年東京の市立サナトリウムの病室では、鷹野弥三郎が妻つぎを見舞いし、お互いの過去の出来事を紡いでいた。

「僕は君に出会う前は義父のところによく足を運んでいたが、そのたびに君との出会いが何度となくあったね」

弥三郎は、つぎの顔色を見ながら話した。

つぎは未だに鷹野との出会いが結婚に結び付くとは思っていなかったらしい。

結婚に至るその年、弥三郎は最後の取材で十湖宅を訪問することになっていた。

「最初から俳諧の手法を訊ねようと意図しながらの訪問だったが、義父には見抜かれてしまい、挙句に四、五日も庵に滞在してしまったよ。おかげで句会にまで顔をだすことができたのさ」

「私は俳句のことは知らなかったし興味がなかったわ。でもあなたにとっては貴重な体験だったのね」

再び弥三郎は当時の模様を反芻していた。

新朝報なる新聞に連日三回執筆してきた鷹野は、その一節に「十湖をして平凡なる眼より見るときはさほど孝者たり、忠者たりと思わず、されど十湖はりっぱなる孝子にしてま

た忠義の国民なり、その勤王心厚く我がままにして真心一途の忠義を貫き曲げない人物である」と評した。

このとき、出版社からの依頼は「社会の風潮は日々文明を取り入れて物質的実利主義へと移り変わっていく中であって元禄時代から続く趣味の延長上の平民文学ともいえる俳句の世界に正岡子規らによる新派集団が生まれたという今日、彼らの蕉風いわゆる月並み派を排斥しようとする動きが起こったにもかかわらず、今日でもひとり純趣味の月並みを持續して少しでも動揺することなく、平然として古人の遺作を脱せざる純月並みの俳人たちがいるので取材せよ」とのことだった。その対象者の中に十湖の名があった。

明治四十年十一月、体調がすぐれぬ柏葉だったが、老体に鞭打って閑詠自適を貫き俳句の選評に忙しい十湖を思えば、訪問することが自分の慰めになると足を向けた。

汽車を天竜川駅で降り市野町を経て中善地に向かう。まだ陽が傾くまでには時間があつた。

十湖宅の玄関を入り奥に向かって「ごめん下さい。柏葉です」と大きな声をかけると、その家の主十湖自身が出てきた。

「来たか。まあ上がれ」とそっけない返事。

家の中には妻も弟子の姿もない。どうしたものかと思案していると書斎へ通され着物姿のままの十湖が

「遠方よりよく来てくれた。ごくろうだったな」

柏葉はすかさず恐縮しながら

「お忙しいところわざわざ時間をとっていただき、すみませんでした」と切り出し、早速、訪問の要件を説明した。

しばらく黙って筆を動かしていた十湖だが、おもむろに灯火を点じ始めた。

「新派俳句の最も嫌う蕉風純月並みによって句を作るといえども、古色極まる一派の月並み連のように、いたずらに古人の残り粕を褒めつつあるものとは、わしはその趣きを異にする。古俳聖の趣味をたとえ、いわゆるその調べは一種のクラシックなれども、これに新しき時代思想を合せ、決して思想陳腐にして蕉風を脱せるごとくのものにあらず。

富贍なる新思想と奇異なる人生観によつて、みだりに利口ぶらざる句をものとし、余韻できたる如くにして一句は一句ごとに独特の俳味あるものを尊び、俗を化して俳となし味をして俳味に化せしむるの天才詩人、むしろ天才なる。かかる偉大な俳人、あえて自ら曰く、蕉派の隊長月並みの棟梁なりと」

十湖は一息にして柏葉の要件に応えてきたのである。

その夜は十湖宅に宿泊し夕餉を弟子たちと懇談しながら過ごす。午前二時ころ降り出した雨の音で目を覚ますが、そのまま寝入る。

早朝、十湖より百人塚、一基一句塚を見物していけと弟子を伴い十湖の庵を出た。東南に向かい数町歩み天竜川の堤を超えると御嶽神社に着く。

その西隣に摩利支天の小さな堂があり、そばに百人塚があった。これらは十湖および門人の手によつて建てられたものにして凡そ百五十基あり。みな自信作の俳句が記されていた。

さらに弟子の案内で次に向かったのは天竜川を眺めつつ七、八町上がり左に折れて豊西小学校の前を過ぎ十湖の檀家寺である源長院に至る。寺は屋根の吹き替え中で取り乱されていたが、十湖の次男近藤登之助の句碑をはじめ門人らの句塚を見学する。ここを去り北西に向かい笠井の町に至ると福来寺の観音堂を拝し、そのそばに建つ百数十の一基一句塚を見た。

これ等は十湖の力によつてできたもので、以上三個所の句碑は都合三百基であつた。柏葉は十湖の俳句に対する意気込みを知つたようであつた。

庵へ戻りそろそろお暇を乞うつもりでいたところ、十湖から明日は芭蕉忌を催すので見て行けと促される。

以下その見聞録を記す。

明治四十年十一月十七日大有庵の芭蕉忌

瀟々（しゅうしゅう）と降り連なる時雨は実に翁忌を偲ばれて去る十七日一層の風流さ、みやびやかさを増し、いともよき日和なりき。

十湖主催の会は各地、各国の俳人から送り来られる朗詠佳吟が去る七、八日より引きも

切らず集まり積みて山を成し、献詠千余句に及ぶ。

当日午前九時ころより雨の中を三々五々集まり来て十時半ころには五十余名と多数なり。祭文を送りし俳人は細江の野末寸穂ほか十数名。同庵当忌のため数日前より俳人らが入りふけり、立ちふけり下俳諧を成しつつあり。

当日の来賓中には抹茶の佳雅堂、書家司馬老泉、山下青城の二氏、伶人には竹石、隨處、如鶴の三名なり。各俳士は十時ころより数日来のごとく下俳諧に努め、庵主は喜悦満面に溢れていたり。

降り連なる雨は正午に近づくころより止み朦々たる雲はいずれにか去りて碧空高く、清く、陽は輝きて小春日となれり。それより来会俳一同庵主が自慢の蕎麦の饗応に大いに腹を肥やして午後一時より翁の追善となり。

正式俳諧連歌に移り各々翁を拝して着席せり。

執筆隨處、宗匠十湖、脇宗匠起雲、朝山、通義、訂鷗の四名、座見成佳、鶴眠の二名、香司春雄、にして皆よく吟詠し、なかなか盛況にして佳句多く、六時ころに至れり晚餐となる。また庵主が粹を凝らして数日前より用意せられたる献立の酒肴の饗を受け、各々生酔心地となり。悠々俳胸湧き、そう一層の賑やかとなれり、時しも善いかな、雨後の月は遠き滄溟（そうみよう）より煌々として輝き出で、十二日の今や満たんとする月は庵りを照らし、俳筵の羽客が面影は高々しうなり、香は細く煙を引きて薫り芬々（ふんぶん）として鼻端を衝くがごとく奥ゆかしき、而して俳諧連歌の終わるや、伶人は黄なる綾羅の格衣

を装い、笙、箏、篳篥、竜笛を手にする三人相並び越天楽の譜を合奏し、歎楽極まりなく、奏
終わりて各国俳人の千余章を朗吟し夜は沈々と更けて九時に至るのころ式は全く終わり、
一同に十湖編深見草第四編一部、奉書紙石版摺りの菊日和九歌仙、各一部及び書画敷葉を
分頒ちたり。

ここに於いて成れるの俳諧は数日来のものを合わせて百韻二卷、俳諧連歌七卷なり、それ
より又月を眺めつ吟詠せんと勅題「社頭の松」「水仙」及び「なし即興のを雪月は斜にな
り詩も結ぶ五更の頃ばい、暁告げる鶏の鳴音と相まち、歎呼聲裡に散会せり。

なお、当日庵主十湖は門人二十余名立ち合ひの上、大木隨處氏へ長く用い来りし七十二峰
庵の庵号を譲興せり。しかして十湖は爾後大有庵と号するなりと。

以上が柏葉の「芭蕉忌」の見分記録である。

養女つぎ

草庵にも桜が散り始め、代わって牡丹の花が咲き誇っている。草庵を通りかかる百姓たちが、挨拶がてら垣根越しに邸内を覗き込み、

「珍しいのう、十湖様が家の中の片づけをしているなんて、こりや午後は雨ずら」「こりや早くに用を足さんといかんのお。草取りは時間がかかりや」

とニヤニヤしながら冷やかし半分で話していく。

十湖は開け放した邸内で揮毫用の筆を洗ったり、散らかった半切の書を机の片隅に畳んで整理している。自慢の白髭をなびかせ、下がりかけた丸いめがねをあげながらせつせと手が動いていく。時折考え事でもしているのか呆然と立ち止まり作業の手が止まった。

妻佐乃は廊下で雑巾の水を絞っているが、十湖の仕草を気にかけていた。しかも不断な弟子達の声でにぎわっている草庵なのだが、この日は春の温かい日差しが差し込みながらも人影が無い。

皆で服織神社を通り天竜川河畔まで吟行しているようだ。十湖は朝の陽が玄関の上に差し掛かった頃、着替えを始めた。紋付に前袴を穿いて、白足袋に変えた。もうじき、養女つぎが長男を抱いて来るはずだった。

身支度を終えた十湖の動きもしだいに忙しくなってきた。十湖は先日、つぎ宛に手紙で草庵の様子を書き記し道順を案内しておいた。豊橋から来るつぎにとつて子連れでは遠い道のりに違いないが、今日は穏やかな天気になってよかったと十湖は天に感謝した。

つぎの結婚相手鷹野弥三郎は、明治三十九年十湖との縁で長野佐久新報をやめ、遠江新聞の記者となり浜松へ移り住んだ。

翌年、新聞社で「十湖伝」を編集することになり、その編集主任に抜擢され十湖の取材でよく中善地の大蕪庵を訪れていた。

文学好きの好青年でこのとき二十八歳、市内で文学同好会を作り活動もしていた。

一方、つぎは少女時代から読書が好きで、兄から薦められた雑誌「少年」を愛読し、文芸雑誌にも傾倒していた。つぎがこの同好会に入ったのをきっかけに記者の鷹野弥三郎と出会った。

弥三郎は身長百七十一センチの当時としては珍しく長身でしかも好男子、住んでいたところも同じ町内であった。

やがてふたりの交際が深まり両親に結婚を申し出るが、つぎの父親岸弥助の猛反対を受け弥三郎とともに家出同然浜松を去った、明治四十二年、岸つぎ二十歳のときである。

その後も父親の反対行動は留まる兆し無かった。

弥三郎は困り果て、しかたなく十湖に相談をかけた。結局、十湖の養女とすること入籍をすることができたのである。

明治四十三年弥三郎が名古屋新聞豊橋支局長になったため、豊橋に移り住み、翌年には長男誕生を迎えることになった。

十湖は弥三郎が取材で家へたずねてきたときに結婚までの一連の経過を聞いており、この年の暮れには長野の弥三郎の父親にさりげなく縁談のことを手紙で伝えていたのだった。あとはつぎの両親の理解だけである。

玄関先から佐乃の来客を迎え入れる甲高いが優しい言葉使いが聞こえてきた。十湖は奥の間に控え身支度を整えた。

直接、つぎ本人に会うのはこの日が初めてである。

つぎの顔は色白く、輝いているようだ。

つぎは、養父に会ったら何から話せば良いのか迷っていたが

「はじめてお目にかかります。この度はいろいろご迷惑をかけてすみませんでした」
頭をぺこっと下げた仕草があどけなかった。

そのとき生後四ヶ月に満たない赤子の顔がつぎの懐からみえた。

「長男の正弥です。一月に生まれました。おかげさまで健やかに育っています」

十湖は幼子の顔を覗き込み、自分の指をその頬に当て

「そうか良い子だ。可愛いもう」

厳めしい十湖の顔が、何時しか目尻は下がり好々爺になっていた。

「奇人ではなかった」

と胸を撫で下ろすつぎだった。はじめて十湖の顔を見た時は義父が師父という感じで少し怖かったと後に自著で回想しているが、話してみると人懐っこく十分理解しあえる義父だとしだいに心を許していった。

妻の左乃は、傍らで二人のやりとりを楽しんでいるようにも思えた。

夕餉は積もる話をするつぎであつたが、子供が生まれてからは父親の痛癢も次第に和らいできていると報告し、これまで以上に両親には償なわなないと申し訳がないとも言つていた。父は浜松町下垂（現在の尾張町）に住み岸弥助といい、商家の主で町会議員を務める浜松の名士にも数えられていた。

昨年は十湖の計らいで養女にしてもらつたつぎだったが、父親の同意が得られず家出同然、鷹野と名古屋へ旅立つてしまった。

その間の実家の様子をつぎは自分を訪ねてきた義兄から聞いていた。それによると父親の怒りはとても収まる気配はなく鷹野の腹をかつさばいてやると豪語していたという。

ところが今年の一 月長男が生まれた事で事態が急変してきた。父親から生まれた子供のためにと産着やお七夜の重ねや襦袢など一揃いの着替えを送ってきたのだつた。

以後養女つぎは、後に新聞記者鷹野弥三郎と結婚し、島崎藤村に師事し女流文学者として大成していくのである。

出雲の風

十湖には、いつも金がない。

かといって、まったく収入がないわけではないが、巷では貧中翁とも呼ばれていた。余り喜ばしい綽名ではないが、それにはそれなりのわけありであった。

あるとき句会の座が盛り上がりご機嫌の十湖は、その時の気分次第でご祝儀を弾み、自筆の書の提供とともに大盤振る舞いをするこゝろがあった。

そればかりか道を歩いている時でさえ金に困っている人が居れば事情を聴き、必要があれば金を与えてしまう。それも有り金全部が入った財布までも差し出してしまう。だがこの程度ならまだましであった。

明治四十四年の夏には十湖の地元に警察の官舎がないから困っているとの話を聞きつけ、多くの住民と寄付を集め建設計画を進めていた。

ところがこの話は県から待ったがかかり、首謀者だった十湖はやむなく寄付金を協力者に戻す必要ができてしまった。

既に工事は進んでおり今更寄付金は返せれないから、自分の家、田畑を売って返そうと決意する。

これを知った住民らは

「十湖様にすべてを押し付けて、責任をとってもらおうというのは申し訳のないことだ。皆で何とかしなければいかん」

と動いてくれたおかげで、売りに出した田畑、屋敷に買い手もつかなくなった。

この一件はこれで解決したものの、万事において金の使い方は無頓着そのもので、様々な事件を引き起こしている。要するに天衣無縫の成せる業でもあった。金が貯まるはずはないのであった。

翌年、鳥取県の俳人仲間から十湖のもとに句会の招待状が届く。

予てより楽しみにしていた出雲行きが実現しそうなのである。

行きたくて仕方がないのであるが、妻をはじめ弟子らから金策は困難だと云われればあきらめざるを得ない。この時は金の工面もつかず、やむなく中止にせざるをえなかった。

十湖自身は旅の準備をしていたので、行くことができなくなったとはいえ出雲への未練はある。

「金さえあれば行けたはずなのに」

ひとり悔やみながらも、諦めは速い。

気晴らしに笠井の町をぶらつくかと歩き始めた。

菩提寺でもある源長院の参道に差し掛かったとき、ふと閃いたことがあった。

「座禅堂に籠もり、出雲に行ったつもりで心に見える風景を吟行してみてはどうか」

少しは気休めになるのだろうと思った。

住職に声をかけ座禅堂に足を踏み入れると、新緑の木々の間を抜け涼しい風が頬を撫でていく。

足を組み半眼にして今日の出来事を振り返っていた。これでは眠くなってしまうではないか。

本来曹洞宗の坐禅は只管打坐(しかんたぎ)でただひたすらに坐ることであり、何か他に目的があつてそれを達成する手段として坐禅をするのではないはずだ。

今の十湖の心境は動機が不純である。自問自答し自らの心を律した。

坐禅をすること一時間を過ぎて座を崩したとき、出雲にいききたいとの切なる希望が句になつていく。

万代や神の出雲の風薫る

涼しさや見ぬ橋立の眼に浮かぶ

この様子を俳人仲間が知ることとなり、自らの耳に届いたときには随分と嘶に尾鰭がついていた。まもなく支援の輪が広がり、出雲までの行く先々となる現地から次々と句会への申し入れが届くこととなった。座禅のおかげで仏様まで味方につけてしまった。さすがに油の乗った頃の十湖である。

やがて月末には金の都合がつき、念願の出雲地方へ出かけることが決定した。
源長院と氏神様に参詣し、祖先様にも出発の報告した。
十湖にとって、よほどこのことが嬉しかったのだろう。ここでも句を詠んでいた。

夕立や断食の僧山を出る

夕立や神ありてまた人ありて

出雲行きの決意のほどがうかがわれる十湖であった。

鳥取の俳人仲間から招待状が届いたのは五月だったが、出発の日は既に六月になっていた。

当時の浜松日報はこの時の様子を次のように読者に伝えていた。

——十湖翁出杖 出雲の門人たちの招きで出雲路行脚行き、約一ヶ月の予定——

明治四十五年六月一日浜松発午後二時十一分の急行に乗り込んだ。

首尾良く旅立てることに気を良くし、鬱陶しい梅雨時でも心涼しい十湖であった。列車内では流れる景色を見ながら、珍しく短歌を口にしていた。

神風の誘う出雲の初たびに心涼しく首途するかな

いつもなら同行者が二人は居るはずだが、単身の旅は妙に心うき立ち、車窓から入る風に自慢の白ひげを靡かせていた十湖であった。

同日、京都に着く。京都の句会へ招待してくれた半仙ほか俳人等数十人の出迎えを受ける。

丹波の木公もわざわざ京都まで出迎えに来ていた。

対する十湖はこの時六十四歳、俳人として絶頂期にあり自身満々の態度であった。

翌日は京都嵐山に遊び、初なすびで酒も少しばかりいつてしまった。

三日目以降は京都千本五社下る米沢亭にて滞在し、京都の俳人ら五人の案内で去来翁の墓をたずね落柿舎、愛宕山へ行く。

小倉山の麓に行ったときは、報徳精神の農業者らしく広がる田んぼを見て句を披露した。

色紙形短冊形や苗代田

浜松を出立して以来五日も京都に逗留していた。京都には名残惜しいが、出雲へ向かうこととした。

今回の旅の始まりを振り返ってみると、鳥取の仲間からは以前から招待の予想はしていた。だが、なぜこの時期に門人たちは自分を招いてくれたのか。

東海道線は開通して既に二十年以上経過している。山陰線は途中の区間が開通してい

も、全線開通までには至っていなかった。それが開通したのが明治四十五年三月。

その前年の二月には高さ四十一・五メートルの餘部橋梁が完成している。

十湖を慕う門人たちはこの開通を大いに喜び、十湖にも是非にと招待するのに及んだではないかと思われる。持つべきは友である。

六月五日城ノ崎で途中下車し日和山にて吟行を楽しみ、出雲安来の門人木村芙蓉方へ向かった。その夜因幡屋へ投宿する。

宿は出雲大社の近くで、小泉八雲やラフカデオ・ハーンの宿としても有名なようで、當時は現在でいう五つ星クラスの旅館ではなかったか。

出雲では連日、当地の門人たちが名所、旧跡を案内してくれて句を詠んでいる。

風雅を愛し蕉風を名乗る十湖宗匠にとつて出雲地紀行のクライマックスには、安来港、出雲清水寺、出雲大社、その先の大山へも立寄り、山陰の富士山である伯耆富士を愛でている。

ところが、季節は梅雨真っ最中で大山駅（現在の大山口）へ降り立つても霽でその先が見えない。

どうしたものかと思案に暮れていたところ、十湖の祈りが通じたのか霽の一部が少しずつ切れてきた。

大山の頂上がくっきりと眼前に現れたのだ。

大山が富士山に似て見えるのは、米子方面かここらあたりしかない。それを承知で駅を

降り立ったのか、それとも単なる偶然だったのか。

靄の中にさぐりあてたり伯耆富士

大山を目の当たりにした雄大な景を十七字に収めた。

旅の途中に京都の新聞で「出雲路から」と題し宗匠の記事、俳句が紹介される。

出雲大社に詣でて詠んだ句は

万世や神の出雲の風薫る

この句をどこかで聞いたことがあるだろうか。

出雲への句会の招待状が来たときに、金の工面ができずに座禅堂で行ったつもりで詠んだ句のひとつだった。

出雲を出たのが六月二十三日前後、帰路はそれぞれの招待者宅へ寄つての句会挙行である。ここへきて忙しい日々となる。

浜松の自宅を出て既に二十三日を過ぎ、疲れを知らない十湖宗匠六十四歳の時である。少し行く先々を列記してみると、

二十四日、亀岡町の内藤木公宅を訪ねる。

これより但馬鶴山、天橋立、鶴民園、玄武洞と周り、とびうおをはじめ海の幸を堪能した。

二十八日、亀岡町にて吟会を挙行する。

翌日は保津川を舟で下り、亀岡の人々の送迎を受け、六月三十日午後七時、京都へ到着するその夜、米沢亭へ泊まる。六月三日泊まって以来半月で同宿に戻ってきた。

どうもここでは十湖のいつもの癖が出て大はしやぎの感あり。宴会は盛大に執り行われた。十湖につられて米沢亭の主人自ら、狸踊りでもやらしたのかと思いきや、なんと、十湖は主人を多芸多能で楽焼の名手と褒めたたえた。

句まで詠みあげ

うて聞かん月に狸の腹つづみ

これより先は足取り不明だが、七月四日午前十時豊橋の鷹野宅で俳人有志主催の句会に出席。

翌日、自宅浜松中善地へ帰着した。

約一ヶ月以上にわたる長旅は無事終了した。出雲の紀行で万代の平和と幸福を句にこめてきた十湖だったが、まさか豊橋で幸せに暮らしていた鷹野一家の主に事件が起こったとは思ってもみなかった。

二人の貧乏神

十湖には、他人から「貧乏神」だと云うことばが当てはまるほど金には縁がない。ところが、自分の周囲にもそんな神様が居座っていると、さすがに人前には出て威張れないと思った。

出雲の帰りには豊橋で新居を構えた鷹野一家を訪問した。

つぎの様子を知りたかったこともあるが、それ以上に長女の顔を見るのが楽しみであった。一晚泊まって一家と話をしていた時、つぎの夫弥三郎の額に治りかかっていた傷の跡を発見した。十湖は早速夫婦喧嘩でもしたのかと弥三郎に訊ねてみると、つぎが代わってその事情を説明しはじめた。

「私がいけないんです。私のひとことがこの事件を引き起こしてしまったのです。この人は何も悪くありません」

つぎは今にも泣き出しそうな顔をして、長女を抱きながら弥三郎を庇って弁解した。

「まあまあ過ぎてしまったことだ。今更愚痴を言ったところでどうにでもなることではない。しかしその事情とやらは聞いておきたいところだな」

十湖は金以外の事なら何とか力になれるかもしれないと事情を聞くのはやぶさかではなか

った。

「それなら私が一連の経過をご説明します」

弥三郎がこの夏に起こった出来事を話し始めた。

「この額の傷は喧嘩をしたときのものです。どうにも相手が強く喧嘩慣れしてしまして返り討ちに逢ったようなものです。つぎには別に害はありませんでした。それにしてもこの時は二人の貧乏神に負けたようなものです」

弥三郎が苦笑いし十湖にお茶を注ぎなら話を続けた。十湖は貧乏神に負けるくらいなら、それより悲劇はない。あるのはどん底だけだと冗談を言いながら夫婦喧嘩でなくて良かったと胸をなでおろした。

「貧乏神の一人は今では売れない小説家の小栗風葉です。もう一人は酒で貧乏を招いた佐藤垢石、自称新聞記者です。私は新聞社で支局長をしていますので何かと付き合いがありました。垢石は昼間から酒を飲んで社までよく来ていましたね」

弥三郎は付き合いとはいえ彼ら二人は仕事欲しくてやってくるので、仕方なく話を聞いてやっているのだが、回してやるべきものはなかったという。

「小栗風葉か。こいつは聞いたことがある名だ。紅葉の門下にいたのではないか。小説こそ読んだことはないが文化人の風上にもおけんな。垢石は何者か知らん」

十湖にはあまり縁のない名であった。弥三郎は興味なさそうな十湖の様子に話を続けるのをよそうと思った。だが十湖が喧嘩相手にも程がある、どうせやるならもつと有名人と

やれと云わんばかりに言い放った。

しかたがなく一連の経過は説明しておこうという気になった。

弥三郎には支局長という立場でこの事件の事は新聞に書きたてていたので、十湖がどこでその記事を読むとも限らないし、豊橋方面の門人たちの中から風評として出て来るともわからない。十湖が後で知って怒り心頭に達しても困ると思つたからだつた。

弥三郎はお茶を一口啜り話を続けた。

それによると垢石と風葉は豊橋の地で知つた仲となつた。垢石は仕事がなく豊橋に都落ち、一方で風葉は尾崎紅葉死後自然主義文学が流行せず郷里の半田市に戻つてきた。こちら也都落ちで二人は酒屋で意気投合したのか以来酒友となつていた。酒の上の話はろくなもんじやない。自慢話もあれば嘘もある。意気投合した二人はある日こんな話をした。

「佐藤君、僕は女弟子が一人ほしい。女弟子兼可愛がるのを世話してくれ。君は新聞記者で諸方を歩いているので何か心当たりはないか」

「ないこともない。あんたのためなら、ひとつ考えてみようか」

ということになった。垢石は名古屋支局で会つた女のことを振り返つていた。

当時名古屋支局長であつた鷹野の妻である。何度か出会ううちに顔見知りになり、ある日支局へネタの探りに行つていたところ、ばつたりつぎと出会つた。つぎの美しさに垢石は酒の勢いを借りて言葉をかけようとしたら、つぎの方からこういつてきたという。

「私、小説書きになりたいんです。誰か適当な師匠があつたら、それに就いて小説書きを

やりたい」

これを聞いた垢石は

「ご亭主があるのに、なかなか大変だぞ」

「亭主を捨ててもかまわない決心です」

「ノラの真似をするつもりか」

この頃は”人形の家“が流行っていたので、そういつてやったら

「そんなつもりじゃないけれども、亭主より文学の方が面白い」

「じゃ、どうしようもない。師匠を見つけてやろう」

ということになった。垢石はこのやり取りを気にして風葉に紹介することになったという。

「実はこういう女がいる。子供が一人ある。非常な美人で、同人雑誌に載ったものを読んでみるとなかなかうまい」

といったら、風葉は膝を乗り出した。

「ぜひ世話してくれ。弟子ということでもいい。あとは俺の手腕だ」

「よからう」

というわけで世話をするようになったという。

ここまでは垢石の述懐によるものだが、当時のつぎの生活状況をみればあまりにも無謀なことまで到底本気でやるとは思われない。

つぎは一歳になる子を抱え一年前にやつと籍を入れたばかり、若干二十歳を過ぎたばかりのつぎは美しい。

しかも夫とは家出同然の形で家を離れ自由結婚をやつてのけた。明治という時代に女性が家を捨てて自由結婚をするというのはきわめてまれなことであつた。夫弥三郎の収入は支局長という立場で経済的にも安定し精神的にも充実した幸福の時期であつたはずだ。垢石のいう”ノラの真似をする“という話などとは全く無縁の彼女であつた。

垢石は作り話で風葉に紹介した自らの行動が咎めたのだろうか。後日鷹野に逢つてこう云つてゐる。

「実はこういうわけで、君の細君から適当な師匠を頼まれたが、小栗風葉ならいいと思うから、ひとつ弟子入りさせてみたらどうだ」

「厭だ」

鷹野は言下に断つた。どう考えても垢石の独壇場の筋書きで、垢石の日頃の行動を見れば根っからこの男を信用してゐない鷹野である。

このことを新聞に書き立てた。

——文学者（風葉）だとか東京の新聞記者（垢石）なんていうのは碌な奴じゃない。婦女誘拐をしたがる奴だ

これを知つた垢石は怒つた。彼は次の行動に出たといつてゐる。

——ひっぱたいてやろうと思つて、ステッキの太いのを持つて鷹野の家へいったらいな

いんだ。夫婦で散歩に出たというからきつと夜店の方へいったんだろうと思つて、僕も夜店の方へいったら、奴さんが子供を抱いて、奥さんがステッキを持つて歩いてた。それが僕の姿を見ると、女房に子供を渡して代わりにステッキを受け取つて、僕の方へ来るんだ。奴も悪口を書いたもんだから覚悟してしていたんだね。僕はツカツカと進んで奴の向こう臍をひっぱっていた。野郎がヨロヨロッとしたところを滅多打ちに二、三十殴りつけたら野郎伸びちゃった。それから宿屋へ帰つてしばらくしたら警察が来たよ。

「傷害罪で逮捕する。警察へ来い」

翌日、垢石は風葉と共に警察へ出頭する。そこには身体中真つ白に包帯した鷹野がいた。包帯は既に血がいつぱい滲んでおり痛々しい。

十湖は静かに鷹野の説明を聞いていた。要するに事件のきっかけは都落ちした尾崎紅葉の弟子小栗風葉が美しいつぎと近づきになろうとして、酒友の新聞記者佐藤垢石に助力を頼んだのが事の真相だったらしい。鷹野には十湖の顔に怒りを押し殺しているのがわかった。鷹野は事の真相はともかく今回の自分の軽率な行動を反省していた。

その後の垢石の足取りはどうだったのだろうか。

貧乏神はなおいつそう垢石に付きまとうようになり、借金取りに追い詰められて夜逃げを敢行する。地図を出して睨んだら四国の国が一番遠い。九州が最も遠いけど鉄道が通じている。四国にはそれがない。ただそれだけで豊橋の地から姿を消したのであった。

一方、風葉は前年に豊橋へ隠棲してきていたので、亡くなるまで同地で過ごしたという。

俳句の盟友

明治四十五年七月三十日午前零時四十三分天皇崩御の悲報が伝えられた。

各新聞は一斉に号外を発行し、

——大行天皇聖寿六十一歳にて崩御され皇太子嘉仁親王が即日踐祚され年号は大正と改元された

十湖は自邸でこの号外を手にしていたところ、このまま家の中にじっとしていることができない衝動に駆られた。

足は自然と笠井往還の方に向いている。

軒並みには黒布で竿先の玉を包んだ日の丸の弔旗が立てられ、ひっそりとしていた。当てもなく歩きながら今日の有様を想い、句に詠んでいた。

明治天皇陛下の御崩御悼み奉りて

天津日の雲かくれして夏寒し

新皇帝陛下の御踐祚を祝し奉りて

延長の皇威をふくや初あらし

明治という年号の最後の日であった。

以来、十湖邸には来訪者も少なく、淡々と二か月が過ぎた。そんなある日一通の手紙が十湖の心に灯をともした。

「あなた、お手紙です」

佐乃が分厚い封筒を書斎で筆を持っている十湖に差し出した。

最近の手紙があまり来ない。天皇陛下の喪に服していたこともあって国民は活動をしていない性だろう。

差出人は茨城県岩瀬の石倉翠葉からだった。

「ほお、盟友からの便りじゃ。どうかしたかな」

久しぶりに明るい表情で、妻の顔を見て軽い口を叩きながら封を切る。十湖六十四歳であった。

石倉翠葉との付き合いは十年以上前に遡る。

はじめて翠葉と出会ったのは東北の旅であった。

このとき新聞記者だった石倉が同行取材を申し込んできて一週間ほどの吟行取材を許した。それがお互いの親交を深める旅となった。

当時、石倉については記者であるとの認識しか持ち合わせていなかった十湖には、あえてそれ以上の要求もしなかった。ただ順調に旅をすればよかったことだった。帰庵後、石倉がまさかと思われる抱負を持っていることに初めて気づいたのである。

庵へ戻ってからの十湖には、あまりにも多忙な日々が待ち受けていた。これからは俳句三昧の生活に戻ると思っていた矢先、二俣町の地域紛争の仲裁依頼が舞い込んできた。この解決に至る経過は自らの郡長時代の交渉事項よりも厳しく、俳句どころではなかった。それでも解決の糸口が見つかり我家へ帰って来れたものの、主が不在の間は我家への収入は途絶えていた。

世間では十湖のことを貧中翁と呼び噂となったほどだ。

妻と弟子たちはこれを逆手にとって、全国の門人、弟子たちに活命料の名目で生活費の援助を願った。

やがて、効が奏して年が越せた。

その頃、翠葉から手紙が届く。翠葉二十八歳の時だ。翠葉は俳人の号で、この時は花笠庵翠葉こと石倉重継であった。

石倉はもともと文学志望で和歌の道を目指していたが何かの縁で日日新聞の記者となった。

手紙には

—— 社会人生活も一区切りがついたので今後は俳句の道に進みたい。いずれご指導をお願いしたいことがあるので、その時にはよろしく

と依頼の言葉が添えられていた。

かつての東北の旅が二人の間を俳句の友として取り持っていたのだ。

何度か弟子になれと言つては見たが、翠葉は一向に動じなかった。

翠葉の言いは

「俳句だけは地元でコツコツ学んでいこうと思つてゐる」

と断られていた十湖はいったん言い出したら聞かない男である。

手紙には即、返事を書く。盟友である翠葉の依頼になんの躊躇う理由があるうか。

十湖は翠葉を盟友と呼んでいた。

「俳句をするなら、今後は一生わしと共に歩め。いつでも力になる。そうだ、お前とは俳句の盟友だ」

この言葉で翠葉は納得した。

その後、彼が俳句のことで悩むと手紙を書いて寄越した。

字は丁寧で文は簡單明瞭、感情の起伏はなく、十湖とは全く反対の性格のように思えた。

だが、選者としての十湖のことは素直に受け入れていた。何れ俳人としても大成していくことだろうと期待していた。

十湖にとって盟友と呼ばれる友に、もう一人東京に住む鈴木藤三郎がいた。財界人であり政治家である彼は報徳精神が人一倍強く出世頭であった。

十湖の人生の大きな柱は俳句と報徳の普及である。報徳の盟友が鈴木藤三郎なら、俳句の盟友は石倉翠葉であった。

それから八年後の明治四十二年八月、翠葉から俳誌「とちの葉」を発行するのでその選

者になってほしいという話が来る。郷里岩瀬に俳句結社「つくし会」をつくり、『荊城吟社』を興すなど俳句の興隆にも努めていた。

翠葉はまだ若い。伸び盛りである。この頃には子規の門にも彼の俳諧活動は影響を及ぼしている。と有って俳諧の将来を託すには盟友以外の何物でもない。十湖にとって、それだけに期待も大きかった。

明治が終焉した今日、日本はどう進んでいくのか、国民世論には様々な面で不安があった。しかし、こと十湖に限っては、今回の翠葉の便りはその暗い心を払拭するにふさわしい出来事の知らせであった。

手紙には石倉翠葉が明治二十八年に執筆発行した『櫻川事蹟考』が国に認められ、五月に侯爵徳川頼倫公一行が桜川視察を行ったときのこと書かれていた。手紙は長いので要点のみを記す。

——侯爵徳川頼倫公は三好学博士の講演と戸川残花先生の推賞並みに庵主(重継)の旧著二種を終日細読され、かか　る名所を等閑に付す(なおざりにする)べからずと為し、俄に前記二氏を案内し、橘井南葵文庫掌書、家従を従え杖　曳杖、同侯の快調たる史蹟名勝天然記念物協会の名を以て保存金若干を櫻川磯部稲村神社へ奉納せられたる旨、戸川残花先生及び神社氏子総代より詳細庵主(重継)のもとへ報告せらるることとなった。

このことは翠葉が著書で紹介した桜川という桜の名所を将来国指定にするという内容で

あつた。

桜川は石倉翠葉の故郷であり、かつて紀貫之が

常よりも春辺になれば桜川

波の花こそ 間なく寄すらめ

と詠じてから、桜の名所として広く知られ、関西では吉野、関東では桜川とうわれるほどで、後花園天皇永享十年（一四三八）桜川磯部稻村神社宮司磯部佑行氏が鎌倉に上り、時の鎌倉公方足利持氏に「桜児物語」一卷を献じ、これを幽玄能の大家世阿弥元清に作らせたのが謡曲「桜川」と言われている。

このように調査し紹介したのが、翠葉の著書『櫻川事蹟考』であつた。

明治二十八年五月十日、翠葉は事蹟考出版のため、両親が田畑を売り払って用意してくれた金と、親族入江菊次郎氏から提供してもらった資金の合計二百円を持って上京。

まず名勝地顕揚のためということで、「桜川和歌集」広告三千枚を印刷、各地の歌会や歌人へ配る。

その際の選者を歌人佐々木信綱氏に委嘱、集まった和歌を「櫻川事蹟考へ掲載すること」として資金にした。

同年九月三日、『櫻川事蹟考』は自らが編集兼発行人となり、西茨城郡西那珂村大字西飯岡（現桜川市西飯岡）幽調館を発行所として千部発行した。

この『櫻川事蹟考』の題字題詠は維新期の元勳元老院議官枢密院議長従二位伯爵東久世通禧、東大古典科教授内務省出仕小中村清矩、東大歴史科教授栗田寛、東大古典科佐々木信綱の三博士、前茨城県知事の高崎親章氏など、錚々たる人物の揮毫が巻頭を飾った、装丁については竹馬の友であり、当時美術学校四年の木村武山こと信太郎が筆を揮った。

木村は岡倉天心の弟子で菱田春草や横山大観、下村観山などと共に日本画の発展に寄与した画家である。

翠葉若干二十歳にして刊行を実現したのであった。

その後桜川の宣伝活動を強化し、明治四十五年四月史蹟名勝天然記念物協会幹事戸川残花氏が、同協会評議員で理学博士の三好学氏による、侯爵徳川頼倫公（旧和歌山藩主）の内葵文庫の桜の会開催にあたり、『櫻川事蹟考』を推薦し前述のとおり五月現地視察の運びとなった。

長い手紙の文中から十湖は翠葉の並々ならぬ苦勞と、その結果がもたらした桜の園の華麗な舞台を想像していた。

大正元年十一月、十湖は二か月前に翠葉から届いた手紙の返事を書いた。彼が地元桜川の花の顕彰に務めた功を讃えて、十湖が詠んだ句を添えた。

名馬あり伯樂ありて桜狩り

花に来て涙そそぐや桜川

花笠の雫や落ちて咲く桜

翠葉が泪やこりて桜の実

今年は暗い気持ちまま年を越してしまうのかという心配を他所に、翠葉の手紙で十湖は甦った。

十湖の事件帳

遠州地方の夏の暑さは、七十歳近くになった十湖の体にとつても厳しいものがある。早朝こそが唯一気を許せる時間帯であつた。

白緋の寝まきのまま縁側から降り立ち、玄関先に新聞を取り行くのが最近の日課となつた。

いつものように新聞をとりに行くが、この日は自慢の長く垂れた白髭がなければ、どんなに涼しいことかと悔やんだ。

縁側に腰を掛け新聞の紙面をめくりながら、最近の記事は戦況と自殺か軽便の事故ばかりと一人ぼやいている。

自分に関わる記事が載っていると機嫌の良い十湖だが、そんな記事は見当たらない。

先月は何度か紙面を賑わす出来事があり、記事を切り抜いては十湖の日記帳である「随筆」に貼り付けご満悦であつた。

その中の一つ大正四年七月二十七日付けの切り抜きは、歩兵隊六十七連隊が中善地内八雲神社に行軍の休憩で立ち寄った時の記事であつた。

その折、十湖は村長と校長、青年団とともに、暑さと疲労の兵隊をねぎらうため休憩所

を設け、青年団は草刈をして彼らのために水を汲んでおいた。

十湖は私費をもってビール、酒正宗、タバコ、カステラなどの菓子類を用意した。このことが新聞の紙面を飾っていた。

翌々日は同神社の境内で大祭があり、神楽、浪花節、義太夫、相撲、大弓が行われ、甘酒の接待があったことを報じていた。

だが、八月二日の朝は少し様子が違っていた。自分に関する記事はないものの社会面に氣に懸る大きな見出しが踊っていた。

——画家汽車より墜落生命危うし

続けて記事は

——大正四年七月三十日午後五時五十分興津駅を発車した上り列車が由比町字西倉澤地先進行中俄然線路外へ転落せる乗客あり、年齢三十五から三十六歳ぐらいの画家風の男とあった。

よくある事故だなと思いつながらも「画家風の男」というのが十湖の脳裏から離れなかった。

——「画家風の男」とは

十湖は朝食の蜆の味噌汁をすすりながら、呆然と考えていた。

佐乃が、十湖のいつもと違う仕草をみて、心配そうに小さな声で

「おかわりはいかがですか」

十湖に声をかけた。

それが引き金となったのか、はっとして、十湖はさっきまで読んでいた新聞を寄せ、箸を持ったまま忙しくめくり、社会面の列車墜落事故の記事を繰り返し読んだ。

長く垂れた白髭が新聞にかかって邪魔らしく時折首を振っている。

突然、新聞を指差して佐乃に大きな声で言い放った。

「この記事を読んでみる。列車から転落したのは画家風の男とあるが、お前には心覚えがないか」

佐乃は目で新聞の記事を追っていた。

「三十五、六歳で酒を飲むとあるわね。まさか、あの木崎さんではないでしょうね」

木崎とは昨年十一月にふらっと十湖邸へやってきた青年画家である。東京から来たと言い木崎九皐（きゅうこう）と名乗った。

画は東京の日本画家で有名な島崎柳鴻に師事し学んだという。この年の二月まで十湖のもとで画会を開いたり、句会にも同行しては門人らと寝起きをともにしていた。画家としても成長しつつあり、将来を嘱望されていたところだった。

その木崎が二月の某日、京都へ行ってさらに上を目指したいと、意気揚々と中善地の十湖のもとを後にしたらしい。

だが今、木崎が新聞記事となって掲載されている。いや、そうとは一概に決め付けられない。

「わしも同じことを考えていた。しかし」

と言いかけて、十湖は着ていた寝巻きを放り出し着替えを始めた。

「小野田屋へ行つて来る。たぶん詳しい話が聞けるだろう」

着替えを済ませた十湖は急いで小野田屋へと走った。六十七歳とはいえ腰はかくしやくとしてゐる。少しくらいのことなら早歩きは氣にならない。ただ暑さだけには弱いところがある。

小野田屋は豊西町の旅館で、木崎が笠井にいたとき、絵描きに集中したいとかで、しばらくは身を寄せていたことがあった。十湖の邸からは眼と鼻の先だ。

「おーい、女将いるか十湖だ。聞きたいことがある」

といいながら、すでに旅館の廊下に立っていた。

「何ですか。こんなに早く十湖さまは」

と言いながら奥から出てきた女将ひでに十湖は手にした新聞記事を見せるなり

「朝早くから悪いな。ここに、ほれ載っているが、これは木崎に間違いないか」と問いただした。

女将はその記事を一語一語噛み締めるように読んでゐる。

いらいらしながらそばに立っている十湖の様子を伺いながら

「三十五、六歳の男が車中で酒を飲み、室外の風景を写生していて誤って墜落せしものがあるわね。年恰好といい、画家といい、木崎先生によく似ているわ。それに着ているもの

があのとときと同じ」

といつて十湖の苛立ちが収まるのを待った。

女将ひでは、十湖の呼吸が落ち着いたところを見計らい、話を続けた。

「関西方面へ旅立つと云つてここを發つた二月は元氣がよかつたねえ。でも先月京都辺りからふらりと戻つてきてね。ちよつと話し方が尋常でなかつたので近くの中安医院へ診察に連れて行つたわ。本人はおとなしく従つたけどね」

「それで事故当日の服装と同じだったというわけか。木崎は何だつて、七月二十五日に浜松に現れたのか。何の用があつたのだ。わしには内緒で」

十湖は怪訝な顔でひでを見た。

ひでは十湖の怒り口調に押されて

「ほら十湖様のいつもの癖が出た、後生だからそんなに厳しく問い詰めないでくれ。私のせいじゃないからさ」

ひでは悪顔をして言い返した。

十湖の性格を知っているひでにとつて、十湖との会話は極力言葉使いに氣を付けて話す。今日の十湖の口調は自分本位でうんざりしていた。

それでも氣を取り直し、声を低めてこれまでの経過を話した。

ひでの言うことをまとめると、二月にここを發つまでは十湖宗匠の厚意に甘んじていたが、関西を旅しながら古美術に触れてくると、ほんとうの日本の美を知ることができた。

十湖のもとでの体験を通し、よい機会を与えて貰ったと喜んでいたという。七月になり東京へそのまま帰る予定であったが、ぜひ、もう一度浜松へ立ち寄りお礼を言って行きたいと下車したらしい。だが、あまりに久々で心も高ぶっていたらしく、ひではその言動、行動が異常に思えたのだろう。医者に診てもらったところ、精神衰弱だといって薬をもらってきたという。

浜松を出発する前日、木崎画伯はひで等に向かって

「自分は到底画家では飯を食っていけない。むしろ自殺でもしようか」

と口走り、二、三日経ったらこの手紙を東京へ送ってくれと女中に見せたのだ。

ひで等家人は色々と慰めたが翌日出発してしまった。ひでは木崎に関する情報を多分に持っていた。

十湖はひでの話を聞いて一連の経過は理解できた。

しかし木崎のとった行動には不審な点がいくつか残った。自殺をしようと思っている人間が、なぜ列車の中で丁寧なスケッチを画く必要があったのか。

遺書めいた手紙を女中に見せたというが、再びしまいこんでしまったことは自殺が本位ではなかったのではないか。

列車の車掌が車内で木崎を見た時の様子では、身なりも良く到底自殺するような人物には見えなかったという。

十湖には木崎画伯の自殺する動機が見えてこなかった。

しかし、とるものもとりにあえず東京の実家へ連絡すること、そして未だに身元不明の事件となっていることに対し、真相を明らかにするべく新聞社に連絡しようと思った。

十湖が今できる精一杯の行動であった。

十湖は女将ひでの話を思い浮かべながら、列車から転落したのは木崎画伯であると確信していた。

自宅へ戻るなり急いで新聞社へ電話をした。

「今朝の画伯転落事故の記事だが、意識不明とあり、まだ氏名が公表されていないが、東京の木崎九臯画伯ではないか」

と伝えた。新聞社ではもっと詳しく説明してほしいというので、ひでの話したことを簡潔に説明し、木崎は有望な青年画家であったと付け加えた。

受話器をそっと戻したとき、十湖の目頭が熱くなった。短い日々であったが木崎画伯が初めて豊西町中善地の十湖の元を訪れた日のことを振り返っていた。

木崎が来たのは一年前の大正三年十一月十七日である。

暦では夏はとうに過ぎ去っていたのだが、残暑がいつまでも留まり秋には程遠い感じがした。

その月の初め信州の俳人春雄翁が客人として十湖に招かれて来ていたが、自分は忙しいからと木崎に天竜川までの案内を頼んだことがある。そのときは木崎が快く対応して、初めて会った翁にもかかわらず、二人は意気投合して邸へ戻ってきた。

木崎には違った魅力があるのだなあと感心した。

木崎の少しでも滞在費の足しにと画会を開いたこともあった。若いのに言葉使いが丁寧で参会者からは親しまれていたようだった。

今回の事件はそんな男が何の不満があつて自殺を願望するのか十湖には理解できなかった。

東京にある木崎の実家にも連絡した。

既に地元の警察から連絡が入り、死体を確認後、東京で画家仲間が集まって追悼式を挙げる手はずになっているという。

十湖はここでも供養をしてやらないわけにはいかないと地元の俳人仲間や俳句の協力者に声をかけ、地元の寺で追悼会を開くことを決めた。

死因こそ迷宮入りだが、十湖には彼が自殺ではないと確信しており不慮の事故であつたことが悔しくて仕方がなかった。

画伯の死について十湖は合点がいかなかった。旅館の女将の話では自殺する理由が見当たらない。

女将のひでをもう一度訪ねてみた。廊下で掃除をしているらしく頭に白い手拭いを巻いていた。

「そう言えば木崎さんがうちに宿泊していた時、仲居女中の八重がいたけど、八重に聞けば、もう少し事情がわかるでしょうね」

ひでは手拭いを取りながら、十湖に穏やかに話した。

「その八重が今どうしているのか。知っているのか」

十湖の声は大きく廊下に響いた。

「木崎さんが京都へいくと言った時には既にここをやめていて、伊勢へ仕事を探しに行くと言っていましたっけ」

「伊勢へ行ったか。伊勢からの便りはあったのか」

「ここを出てからは何の便りもないわね。あの子は少し変わっていたところもあったけど。気だてのいい子だったから、きっと幸せに暮らしているのではないかしら。便りがないのはいい便りっていうでしょ」

ひでは自慢そうに十湖に答えた。

「そんなことはどうでもいい。八重と木崎には何か変わったことはなかったかと聞いているんだ」

まだるっこいひでの話に少し苛立った。

「あの子は、誰にでも親切に接するから恨まれることはないし、木崎さんが長く逗留していたから仲良くなつたけどね」

「まあ、よくある話だ。すると木崎が八重を追っかけて行つたとも考えられる。」

十湖は一人納得をしていたが、ひではすこし怪訝な顔をして

「十湖様悪いわね。あまり役に立たなくて。もう仕事をしなくちやあね」

と十湖の顔色を窺いながら頭を下げ、遠ざかっていった。

十湖は自宅への道を目指しながら、この真相を知るためには八重に会うのが一番の早道だと知った。十湖は、なんとしてでも口実をつけて伊勢へ行ってみようと考えていた。

翌日、十湖は既に車中の人だった。

伊勢には自分の門弟がたくさんいる。誰を訪ねても快く泊めてくれる。

今回は目的が違うので俳人仲間のところに腰を降ろし、一応句会を催すことを通じて木崎と八重の情報が収集できることを期待していたのだった。

伊勢神宮前まできたところで地元俳人大主耕雨を訪ねた。

大主から今晚市内の油屋旅館で句会を開くので、宿泊はそこにしたらどうかと勧められ、二つ返事で決めた十湖だった。

その夜、地元俳人が八人ほど集まり夕食をとにした。大主は顔色もよく八十歳を超え、ますます盛んな身振りに、句会が盛り上がった。

女中からお茶が入ったところで、大主にさりげなく尋ねてみた。

「この旅館は、随分と年季ものですなあ。よく句会で利用されるんですかな」

「ここは江戸時代に遊郭があったところで、その名残が今でも残っている。なかでもここが老舗中の老舗じゃ。ここでやると人がよく集まるのでう」

といって気持ち良さそうに笑みを返した大主だった。

「そう言えば雪が降った二月の日にちは忘れたが、今日と同じく句会を開いていた時、こ

の旅館で妙な事があった。出入りする客は旅人が多く伊勢参りを目的としている様子のものが多い中、この日はなぜか単身者が目立った。階下で大きな声がするので覗いてみると若い男が一人、警官にしょつ引かれていった」

「その男が何か悪いことでもしたのかな」

「いや、そうではない。朝から何度も旅館前を彷徨っていたので、不信に思った宿泊客が警官を呼んだらしい」

と大主ではなく主客の坊主頭の俳人が横から口を出した。

「詳しい理由はわからないので、警察で聞いてみれば真相がわかるだろう。男は画帳のようなものを持っていて、おとなしく警官に従っていた」

別の俳人が話を繋いだ。

大主が妙なことだと言ったのは、翌朝、自分の身の回りの世話をしていた仲居に、この話をしたら旅館から飛び出して行っただった。

「それは妙ですな。仲居の名前はご存知ですか」

「本名かどうかは知らんが、やえと名乗っていたようだ」

八重は別に悪いことはしていないから名を変えている必要がない。十湖は、この二人が木崎と八重にちがいない。警察へ行けば全てがわかると直感した。

句会は総勢八人程度で夜半まで盛り上がった。

翌朝、十湖はいそいそと一人で警察へ向かった。受付で事情を説明したところ当日の警

察関係者と面会することができた。

面会した警官は人が良さそうな性格で、四十がらみの大柄な男であった。

「その日の持ち物をみると、決して不審者という程ではなく、すぐにも釈放しようとしたのだが、今晚のねぐらも決めていないという。外は雪がひどくなるばかりで、本人の希望により一晩警察で保護したのだが」

「その男ですが、木崎と名乗りませんでしたかな。画家のはずですが」

「よく分かったね。そのとおりだ。画帳を持っており、これから京都に勉強に行くと云っていた」

「わしは浜松に住む俳諧師だが、先日この男が死んだと新聞報道があつて、その真相を知りたくてここに來たのだが、手掛かりが見つかつて良かった。警察のご協力に感謝します」
十湖はここにきた理由を説明しながらこう付け加えた。

警官は驚いて

「とてもそんな死ぬような様子ではなかったが、本官は木崎が旅立つとき頼まれたことがあった」

警官は空を仰ぎ、頭を掻きながらその日のことを仔細に十湖に語り始めた。

木崎は油屋旅館で仲居として働いている八重という女に、後生だからこの風呂敷包みをわたして欲しい。中には封筒と画帳が入っているという。警官は封筒の中身を木崎に聞いたところ便箋と僅かな金だった。

それだけ云うと木崎は警察を出ていった。

すると入れ替わるように八重がやってきた。

「こちらに木崎さんが保護されていると聞いたんですけど」

「さつきまでここにいたよ。今出て行つたばかりだ。君に渡してくれと頼まれたものがあ
る」

そう言つて警官は机のわきに置かれた紫色の風呂敷包みを八重に手渡した。

八重は風呂敷包みを解くなり画帳を見つけて、木崎のものに違いないと警官に礼を言つて外へ出た。

警察署の前の道は昨夜来の雪で真っ白くなつていた。朝が早いせいか人通りもなく足跡も少ない。

その中に真新しい靴跡が点々と駅方面へと向つていた。

八重は木崎から預かつた風呂敷包みを大事そうに抱えながらその跡に従つた。

八重の下駄の跡は恰も木崎の足跡に寄り添うように残つていく。

だが止んでいた雪が突然吹雪に変わり、風が着物の裾を、袂を煽る。

顔をあげられないままに駅へ向かつて駆けた。

——会えれば良いのに、駅で待つてくれれば良いのに

と一縷の望みを託しながら八重の足取りは早まつた。

そのとたん、プチッと片方の下駄の鼻緒が切れた。

吹雪は容赦なく八重が追う木崎の足跡を消していつてしまった。

季節が変わり蟬の声が降りしきる八月三十一日午前九時、十湖の菩提寺である源長院において木崎画伯の大法会を開かれた。

本堂に集まった参加者は百余名に及び鈴木笠井町長や高林豊西村村長の姿もあった。受付には参加者の奉賀帳が置かれ記念品も用意されており故木崎画伯の遺墨、遺作も陳列し、画帳もそこに展示されていた。

追悼法会の席上、十湖が弔辞をよみ故人の逸話を追懐していた。

受付係の男が十湖の弔辞に見いつているときであつた。

突然、スーと風のように白袴の青年が現れ、展示されていた画帳を懷に入れ門外へ消えた。

一瞬の出来事だったので受付係は気がつかなかったらしい。

参加者が木崎の思い出を振り返りながら会はしめやかに進行し、夕刻には散会した。

十湖は参加者の去った本堂に佇み、西の空がいつしか真つ赤な落日になっていくのを見送っていた。

次の日の朝、いつものように縁側に降り立ち新聞を取りにいく十湖の姿があつた。

大きなあくびをして庭で新聞を広げ昨日の記事を貪り読む。

木崎の法会には新聞記者や報道関係者だけでも七十人ほど集まっていた。それだけに今

朝の記事は各紙に載っているはずだった。

ある地方紙の隅に

——木崎画伯の追悼法会で画帳紛失。不心得な参会者か盗人かと小さな見出しの記事があつた。

十湖はこんなことがあつたとは知らなかったが、今更問題にするようなことではないと他の記事を読み進めていた。

夏の早朝とはいえ太陽が顔を出せば暑い。新聞を読み終えて邸の中へ足を向けたそのときだった。

一陣のさわやかな風が十湖の頬をなでるようにして過ぎていった。

十湖がいなくなつた縁側には、大法会するとき無くなつたはずの画帳が、いつの間にか朝の陽を浴びている。風がページを繰ると、笑顔の八重と木崎が描かれていた。

この日、十湖の日記帳である「随筆」には、切り抜いた木崎の新聞記事がところ狭しと張られ、恰も事件帳である如く克明に画伯死亡の詳細が綴られていた。

俳人の礼

大撫庵に放し飼いにされている鶏が大正四年十月二十三日の朝を告げた。とはいえ白々とした空があたりを照らし、未だ陽は昇ってこない。

いつもよりも早く目覚めた十湖は、陽が上がるであらう方角に向いて手を合わせている。台所では竈に火が点され、炎が上がり始めていた。

弟子の一人が門先で掃除を始めている。

かさかさと落葉を掃く音が響く光景はこれまでめつたにないことであつた。

言い換えればこの日だけは非日常の朝である。

「おい、いいか。今日は遠方からの友が訪ねて来る。粗相のないようにしてくれ。ただ、来る時間がわからないので、客人がいつでも朝飯が食えるように用意しておくように」

十湖は手拭いで顔を拭いながら、穏やかな口調で佐乃に云つた。

「今ご飯を炊いていますから、いつ来られてもけっこうです。それに」

妻は後の一言をいわずらかつた。

「それにとはなんだ。また金の工面のことか。ツケにしておけ」

十湖には今日に始まつたことではない。いつもの事だと云わんばかりに怒鳴つた。句会

を開けばその度に出席者から祝儀が入るので、それほど金のことは苦にはしていない。ツケにしても近所の支払いはいい方であった。

「もうそろそろ一番の汽車が浜松駅に着くころだ。連絡をくれれば迎えに行くのだが氣を使っているのだろう、翠葉は律儀な男だ」

十湖は玄関柱に飾られている時計を見ながら、間もなく来るであろう訪問客に胸を熱くして待ち望んでいた。

同じころ浜松駅に旅行鞆を持った一人の男が降り立った。

東京在住の花笠庵翠葉である。

四十二歳の俳句の宗匠である。烏打帽子にグレーの背広姿がよく似合っている。

上りの急行列車に乗って午前五時三十分浜松駅に着いている。

まだ朝が暗い。雇う人力車の車夫も見えず、道を尋ねたくても起きている人はいない。

駅前は閑散としていた。

仕方なく駅へ戻り駅員に笠井までの道順を訊ねた。

「すみません。笠井方面へはどうやっていけばいいでしょうか」

「笠井町ですか？それなら軽便を利用すればいいでしょう」

駅員はそういつて、駅を出て右方向にしばらく行くと二俣線の軽便鉄道の駅があると教えてくれた。

しばらく行くとはいえ、いくつかの角を曲がりやつのことで駅に辿り着くが、その道

のりは遠く旅行鞆が重かった。

天神町村の駅は二俣町西鹿島までの軽便鉄道の起点であり、二俣線として明治四十二年に開通した。

笠井町まで行くには西ヶ崎の駅で乗り換えなければならない。昨年五月に二俣線の支線として西ヶ崎笠井間の笠井線が誕生したばかりである。この間わずか四駅、軌間七六二ミリの軽便鉄道だ。

ここまで歩くのに時間がかかったせいも既に夜が明けていた。停車場で待つことなく七時発の軽便に乗り込み笠井へ向けて出発した。

それにしても鈍い汽車である。まるで玩具の汽車で人が歩むのと変わらない速さだ。

車窓の風景は二つ三つの町を通過してきたが、すぐに田畑ばかりの風景に変わっていた。爺さんに早く会いたい気持ち先んじて、じれったくて仕方がなかった。それでも浜松から二時間以上かけて無事笠井に着いた。

周囲を見渡すと車窓風景とは打って変わって、通りは浜松駅前と同様開けていた。

ここから十湖の住む大撫庵までは半里程度である。朝が早かったせいもある。腹が減ってきた。歩く気力も失せ、車を探してみたが一向に見つからない。仕方なく歩いていくことに決めた。

翠葉は歩きながら今回の旅のはじまりを振り返っていた。

——俳諧は誠である。誠なき俳諧は真の俳諧とするに足らぬ

常々、花笠庵の弟子たちに言い含めていたことばである。こういうようなことを唱えれ、ある人は時代遅れの説だと笑うであろう。道徳にとらわれた意見として卑しむであろう。けれども人は人だ。自分は自分である。たとえそれが価値のない意見としても、自分では価値あるものと認めた以上はどこまでもこれに服従し、これを実行すべく、努力し奮闘するところに人の人たる生命がある。自分の自分たる権威がある。

平生心がけているが、さて、こと志と違つてなかなか実行はむづかしい。ややもすれば我が俳壇の潮流に引き寄せられ真面目にするのは馬鹿馬鹿しい、御座なりでさえやつていけばよい、こういう心がむらむら湧き立つてくる。と同時に一面においては不安の感想が燃えたつてくるのである。

果たしてわれ等にかかる態度を以つて永久我が俳壇の一角を占め得るだろうか。

誠に似せたすべての行為を具眼の俳人はおそらく許しはしまい。齢するだに汚らわしいと必ずや叱咤の声が頭上にふりかかるであろう。

こう思い返しては再び元の冷静の心にかえつて、誠なるかな。誠ありてはじめて誠の友を得るのである、誠の友を得て、もつてわが俳諧を楽しむ。無上の幸せであろう。こう考へては更にさらに数段の勇気を奮い起こしては奮闘し、修養し来れることここに七年に及ぶ。

幸いにして我がこの微衷を諒とせられ、誠を以つて風光去るる俳人が沢山にある。このゆかしい、この尊い、この楽しい誠の友と、親しく膝を接しての物語、恐らくは又これ天

下無上の樂天地と云わねばなるまい。

去年信州小諸の同人を訪ねたのも、今年岩代の同人を訪ねたのも、皆この樂天境に浸る快感をあじわいたいが為であつた。今またさらに關西の同人を訪ねんとするのもまたこの意味にほかならん―

翠葉は十湖のもとを訪ねるのも、同じ意味であると反芻していた。

だがどうしても、もう一人の自分がそれでいいのかと問う。

翠葉にとつて十湖とは十六年来の付き合いである。天下百千の宗匠があるけれども、誠のあることは多年の風交によつてよく知り又心服している。

したがつていつも懐かしく思っているし、生前に一度は必ずお訪ねすると約束がしてあるので、それをこの機会に果たそうと思つたためである。

そんな矢先に突然十湖から今月十日に來いと長文の誘いの通知があつた。だがこれは丁重に辞退した。

来月はなんとなれば、このときの旅は各地の支部を慰問するのが大きな目的であつて、十湖の大撫庵を訪ねるのはむしろ第二の問題だが、まず大撫庵を訪ね、帰途關西等の同人会を訪ねることもできると迷つていた。けれども、そうしてはこの旅の本義に背く。

おそらく今回の十湖からの誘いは、去年の春六十日間翠葉の自宅に滞在されたことへのお礼であらうと思つた。それでも今いかなくは十湖の誠心を裏切ることになると思ひに駆られ、帰路でも立ち寄ることを決定したのだった。

同月七日、午後八時の汽車で東京駅を出発した。このとき同行者はなく翠葉一人であった。

雨のため車中からは窓の外を見ることは叶わなかった。幸い前日来の準備で疲労が一気に出て肘を枕に寝てしまった。

目覚めた時は汽車が大阪に着いていた。

翌日、名古屋の稲沢駅で下車。名古屋の門人たちと交流し、以後関西へ立ち回り二十一日岡山へ。

二十二日には琵琶湖の夕景を眺めつつ車中の人となり、翌二十三日午前五時三十五分、車掌に揺り動かされて目をさまし浜松駅に着いたのだった。

旅行鞆を肩に掛け、田んぼの中の道を十湖邸を目指し足早に行く。

翠葉は十湖が歓迎してくれるだろうかとふと心細くなった。到着する時間も伝えてないし、この様子では突然の来訪でしかない。

腹の虫も泣き出し、少しばかり後悔の念に駆られた。

それでも、爺さんが喜んでくれるだろうと思うと矢も盾もたまらず、一刻も早く会いたくてびっしょり汗をびきながら道を急いだ。

爺さんと呼ぶのは十湖公認である。これまでの付き合いから敬意を失うような振る舞いは未だしたことがない。

竹林を抜ければ十湖の邸だ。十五年ばかり前に青木画伯と来たことがあったが、今日は

自分が独りで訪ねている。

「ごめんください」

中からどかどかと大勢の人が玄關に出て来た。

その真ん中に十湖と佐乃の顔があつた。皆笑顔で迎えている。

十湖の目は既に潤んでいた。

「お久しぶりです。お変わりありませんか」

翠葉は胸が一杯になり、語尾が聞こえたかどうかからぬまま立ち竦んでいた。

「さぞ遠かったでしょうに。まあ、おあがりなさいな」

佐乃の案内で座敷へと上がった。

翠葉はこの歓迎ぶりに、考え迷っていた不安から解放されたような安堵感で、肩から力が抜けていくような心地よさを感じていた。

こうした出合いをどう理解すればいいのだろうか。不思議な縁だろうか。逢うも涙、別れるも涙、それを師弟の関係とでもいうなら何の不思議もないが、十湖との関係は師弟ではない。それどころか、十六年前に門人名簿なる物が送られてきたことがあつた。中を開いて見れば自分は弟子として掲載されていた。

これには翠葉も若かつたので、すぐにも抗議したところ撤回することができた。自分にとっては慈父のような感じの爺さんが自分を見ているのだろうと思っていた。

今となつては笑い話に過ぎないがこんな逸話もある。

大正三年五月、十湖が東京に住む翠葉のもとを訪ねて来たときの句会での挨拶のことである。

「わしは、もはや老境に近づいたから、再び東京に来れるかどうかわからない。したがって今生の思い出として東京の重なる俳人と百歌仙を巻いて帰りたいと思う。それにはわしの事をよく呑み込んでいる花笠庵の厄介になりたい、当地には倅もある、弟子もいる。厄介になるに不自由はないが、しかし真にわしの事を理解してくれるのは花笠庵だ。同じ厄介になるならあんたの厄介になって帰りたい」

男として、ましてや俳壇に身を置くものが、十湖からの信頼を疎略にすることができらるうか。翠葉は快くこれを引き受けた。

一には俳人としてこの上の名誉があるだろうかと感じたからである。十湖の難し屋、飲んべい、暴れ者など十湖を知る人のすべては、だれでもこの間の消息を知っている。天下の奇人と歌われつつある位で、十湖を怒らせずに一週間待遇し得た人は、少なくとも十湖の気性を飲み込んでいる人である。十湖には皇室を除いては貴顕豪傑も眼中にないのである。その例とすべき逸話は数え切れないほどにある。したがってある方面の俳人たちからは蛇とかげのごとく忌み恐れている、それほどにしたたか者の、冒頭第一の口上がこれであった。翠葉には感激の至りであろう。

「よろしゅうございます。ご存知の通りの貧乏世帯、これと云ってご馳走も出来かねますし、また私は種々の方面に関係していますから、一々お相手は出来かねますが、それでよ

ろしくばご遠慮なくゆるゆるご滞在ください」

翠葉は自分の胸が高まるのを抑えて、淡々と答えた。

「ご馳走はいらないが朝一合、晩二合だけは振る舞ってもらいたい」

翠葉の返答のおかしさを忍びながら、承諾の旨を笑顔で答えた十湖であった。

このとき翠葉は後妻を迎えてわずか十日ばかりしか経っていない。

妻の理解が必要だった。だが俳人の交際や生活などはよく呑み込めていないはずだ。その夜、妻に云った。

「俺は爺さんから頼まれたのだから、爺さんを親のように仕える了見でいる。お前もどうかそのつもりでいてくれ」

「そのつもりでいてと云われても私はわかりません」

妻は泣きそうな顔をして答えた。

「頭を蹴られたら親に蹴られたと思って、いかような問題が突発しても、じつと辛抱して、あの爺さんがめでたく百歌仙を巻いて帰国するまでは断じて悪い顔を見せてくれるな。それに俺はあの爺さんと松島見物に出かけて、やたらに荷物を持たせにかかるので大喧嘩をおっぴじめた事があつた。けれども今度と云う今度は下駄も持てば、場合によつてはケツも拭いてやるつもりでいる」

「私はまだこの家へ来たばかりです。あなたの気性さえよくわからないのに、あのお爺さんの性分なんてわかるはずがありません」

「そりやもつともなことだ。いや、それどころか、ともかくも何を仕出かすかわからんが、何事も夫のため、別けて俳壇にいる夫の顔を立てると思つて我慢をしてもらわねばならぬ」と嚙んで含めるように言い聞かせた。妻は驚きの目を光らせて

「そんなにむずかしい人ですか」

「もちろんむずかしい。ただし無意識に乱暴をしたり、むずかしいことを云つたり、ごねたりするような人ではない」

「それなら何でもありませんわ。心配いりませんもの」

「よく手を胸にあてて考えると、はあ、あれだなときつと思ひ当たることがある。その呼吸を呑み込んでいれば、あんな頼もしい爺さんは、おそらく天下俳人多しといえども滅多にあるまい」

「それは、それは貴重なお方ですね」

妻の口からやっと笑みが毀れ同時に白い齒が覗いた。

翠葉はこの夜、妻がかわいくさえ思えた。

「何せそんな具合で、人はいつも腫れ物に触るようになっているが、俺は時によると余計に触る。いやぶつかつて踏みつぶす事がある。腫れ物扱いにされる爺さんにわざとぶつかつて膿を出すのだから、お互いの心持ちの好さは格別だ。お前もその腫れ物にぶつかつても痛いと呼ばずに、好い気持ちだと、あの爺さんに嬉しがられるようにせねばならない。ともかく爺さんは俺に今生の思い出に厄介になりたいといったが、その代わり嫁に来たばか

りのお前に俺は一生の頼みとして爺さんを頼む」

翠葉の新家庭における密議はこれであつた。

さて十湖はと云うと、そんな事とは露知らず平氣の平左で翠葉夫婦を玄關の三疊に寝かせておいて、自分は六疊の書斎兼客間を一人でわが物顔に占領して勝手に云いたい放題である。

夜は十二時過ぎまでも起きていて家内中をこき使う。

そのくせ、朝はきちんと四時には起き出して、がらがらと戸を開けて床柱を背にして煙管で吐月峰をカチリカチリと叩きつける。妻は嫁に來たてである。氣兼ねをしては起き出してしまふのである。

ある夕刻、句会から十湖が、ぐてんぐてんに酔っぱらつて歸つてきた。

しばらくすると廊下の向こうから

「助けてくれ」

と呼ぶ声が聞こえた。若い夫婦は急いで飛び出した。

厠の方から声がする。なんと十湖が厠にはまつて、今まさに黄金仏となつてゐる。

悪臭をもとめせず二人で引き揚げ、庭へ連れ出し水をかけた。匂いはなかなか消えない。なんとか着ているものを脱がして洗濯し、新しいものを着せ足袋を穿かせたことがあつた。

そのうち翠葉も外の集まりに一緒に連れ出されることがあつた。十湖の荷物や下駄など

翠葉自身が進んで持つようにした。十湖が行き先で何を起すかわからないので着替えも含め自衛策をとった。

かつて十湖と連れ立って行つた東北漫遊の再来だとあきらめていた。

こうしていつの間にか六十日間を経過したのであつた。

十湖がいざめでたく百歌仙を巻き上げて国へ帰ろうとしたときは、別れを惜しんで妻も泣いた。姪のよし子と云う女学生も泣いた。翠葉も泣いた。

十湖も両目を真っ赤にしていた。おそらくこのときの十湖には翠葉のもてなしを余程うれしく思ってくれたのであろう。

「最後にひとつ頼みがある。はさみを持って来てくれ」

十湖にいわれて翠葉は、はさみを差し出した。

すると十湖は一尺ほどに伸びた白い顎鬚をひと思いに切ってしまった。

「もし、わしが死んだということを聞いたら、庭内の句碑のそばにこれを埋めてもらいたい」

翠葉は切った顎鬚を小瓶に詰め預かることにした。以上は後に翠葉が自著で述懐したものである。

今、翠葉が十湖邸を訪れている。まさに家中が下へも置かぬ待遇で奥の座敷へ案内してくれているのだ。

「よく来てくれた。何もご馳走するようなものはないが、座敷は皆畳替えをして、庭は申すまでもなく槇の下から竹藪までも掃除をした。布団も新調しておいた。それをどうか、わしのご馳走と思ってもらいたい」

開口一番の十湖の歓迎の辞であつた。

俳人と生れてこれほどの名誉があろうかと、翠葉は今回の大旅行の打ち止めとして、意外なる光景が演出されつつあることをしみじみ有難く思った。

むしろ昨年五月の十湖滞在中の翠葉一家の待遇が、心もとなかつたような恥ずかしいような気がした。

ただし誠意に適するものは何ものもないと弟子たちに断言できるはずであつた。

一応の挨拶が済むと十湖は門人、弟子たちとともに天竜川の後の月を見ようと翠葉を誘つた。

後の月とは「のちのつき」とよみ、陰暦九月十三日の月を意味し、秋の季語である。

云われるままに元氣よく田を越え、藪を抜け、堤を過ぎて天竜河畔へ案内された。

翠葉は十湖の後姿を見て

——この分では後十年位の命は大丈夫だろう、どうか長生きをさせたいものだ
と願っていた。

川上はただ漠として後の月
瀬音寒う山は黙して後の月

天竜川の堤防において対岸の布引山に顔を出した「後の月」を見つつ、寂鮎を肴として酌めたと共に詠んだ句である。

左方に遠く秋葉山の暮れかかる頃には、十湖は大分ご機嫌で茶屋の女将や娘たちをからかい始めていた。

こうして帰庵したところ大撫庵には二、三十人の来客があつた。

翠葉は何かあつたのかと不審に思いながら自らの部屋に戻ると、代わるがわるの来訪がある。

豊西村の村長、学校長をはじめ地区の名誉職の肩書を持つお歴々が挨拶に来た。
なかでも村長の挨拶が振るつていた。

「いつだったか貴殿のところでも宗匠が随分と世話になったようで、しかもご夫婦で下の世話までしてくれるなど誰にでもできることではない。村を代表してお礼申し上げる」

笑みを浮かべながら翠葉に頭を下げた。かつて翠葉のところに十湖が滞在した時の礼を述べていたのだ。話はどうも噂話から誇張しているようだ。翠葉は傍に十湖がいないので胸をなでおろしていた。

別室では門人ら十余人が十湖の歓迎句を立句として歌仙を巻き始めた。

すると翠葉にその捌きをせよという。

一旦は未熟のためと辞退したが、十湖から頼まれると心もとなく思いながらも引き受けた。

一方には連句の捌きをする、また一方には明日の歓迎会用の短冊挟み百本の題句と短冊をしたためる。

おかげで最初の一日目は寝たのが十二時ころであつた。

翌二十四日は六時起床、天晴れ渡る。だが秋の空模様は変わりやすく、ややもすれば曇りがちである。

十湖は例のとおり四時には起き出して今日の歓迎会の準備を指図している。

翠葉が起きたのを確認して十湖が寄つてきた。

「花笠庵に謝らなければならんことができたよ」

「それは何ですか？」

「実は九州の田中自生から、花笠庵の歓迎会に飲んでくれと、あの土間にある酒をわざわざよこしたが、来るのが遅いのでみんな飲んでしまった。匂いだけはするだろうから嗅いで貰おう」

十湖は笑いながら土間を指さした。

「花の露」と書かれた薦被りの四斗樽が土間に置かれている。

酒を送ってくれた田中自生とは翠葉には心あたりがない。おそらく十湖の門弟の一人だ

ろうと軽く受け流した。

そのうちに十湖から歓迎会の準備ができたと促され、またしても天竜川へ行くことになる。

翠葉のためにわざわざ地引網の催しを用意してくれていた。

既に河原には漁夫数十人、船五隻が待機している。

この費用だけでも並大抵ではないと心苦しくて、せつかくのこの豪遊も真実つらかった。後日翠葉は述懐している。

会場には参会者やそれを見ようと集まった者、また数十人という賑わいである。

折柄降り出した秋雨の中に網を引くこと数回、四五尺の大鱸が澁刺として網の中に跳ねている。

「どうだ、翠葉すごいだろう」

と、十湖はご機嫌で何度も翠葉を取持ってくれる。

その間に門生や参会者が、代わるがわる歓待してくれるのだ。

興半ばにして一人の青年が翠葉の傍に寄って来た。

いかにも温厚そうな頼もしい人物と見えたので、少しばかり話してみると富田翠邦という「つくし会員」であった。

つくし会員とは花笠庵翠葉が創設した俳句の会である。わざわざ同郷の会員をも、この場に招待していたのである。

十湖の細かい心配りであつた。

後にこの青年は花笠庵の門生となり花笠庵を名乗って行くのである。

時刻には一茶亭に引き上げて酒宴を開き、大撫庵に引きかえして三度宴を開く。

七時ころになつて参会者は記念として十湖より送られた短冊挟み、常滑焼徳利を片手にして三々五々帰途についた。

それでも残っている門生、参会者二十数人が、そのまま談笑しつつあり時間は静かに過ぎていった。

すると俄然

「馬鹿野郎、帰れ」

という十湖の怒鳴り散らす声が翠葉の耳を脅かした。

何事かと思ひ外へ飛び出してみると、男が独り十湖に対し手について謝っている。

最前まで翠葉の机の傍に来て、俳句談義をしていた大阪の行脚の男である。

何か爺さんの氣に障つたな、せつかく自分を歓迎してくれているのに怒鳴り散らさなくともいいものを、困つたことをしてくれる。

翠葉は内心つぶやきながらも、爺さんの氣性はよく呑み込んでいる自分だ。非道の怒り方は断じてしない人である。仲裁すれば尚と怒り出すに違いないと口は出さずに控えていた。

怒鳴つた理由は明白であつた。

——今日の歓迎会は行脚のお前のために開いたのではない。花笠庵のために開いたのであるから、散会を告げたなら一応暇乞いをすべきである。それが俳人の礼である。わしは行脚を泊めることは何とも思わない、年中四、五人の行脚を養つておる。一飯を振舞い、一夜を貸すのを惜しむのではないが、お前は俳人の礼を知らぬから帰れというのだ。花笠庵の部屋には門人さえも通させない、膝行させて出入りさしている。来客へも敷居の外で挨拶させている、それなんだ、無断で花笠庵の上座を占め、芭蕉翁の像を後に悠々話し込むとは不作法千万の野人である。辞し去ると云わばこの方から引き止めるが、居座るとは不埒の奴だから即刻たちのけ

こういう理由から行脚の男を叱つて怒り出したのである。

いかにも十湖の説はもつともである。行脚というものは厨の音を聞いてさえ門を叩くのを止めよというくらいである。

世の多くの俳人は磊落の履き違いをしている。酒々落々たる間にも礼節を忘れないのが尊いのである。

翠葉はまさに爺さんの怒り出しそうなことだと、はらはらしていたが、むしろ痛快に感じていた。

こうも爺さんは自分の事を思つていてくれるのかと胸が一杯になつてしまった。外を見ると叱られた行脚がうな垂れて、すごすごとあてどなく帰っていく。

それはそれ、これはこれと翠葉は行脚を追いかけて門前まで出て行つて見送った。

「東京に来たら訪ねてくるように、今回はあなたが悪かった、十湖宗匠の云うことは正理である」

こう慰めて袖を別った。

行脚を見送って座敷に戻ると、十湖が未だ怒りが収まらずにいる。

翠葉は十湖の肩に手をかけて

「爺さんの志はよく胸に納めて忘れない、だからもう大人しく休んでください」と涙ながらに頼んだ。

十湖は唯々諾々として寝室へ去ったのだった。

この日十湖らが詠まれた挨拶吟は

無二の友迎へて嬉し庵の秋 十湖

これに雪城が脇を詠む

待ちに待たれし月の輝き 雪城

第三には淵澄宗匠が

萩芒同じ野もせに匂ふらん 淵澄

これに挨拶吟

お顔さへ仰げば袖の時雨哉 翠葉

これに十湖が脇をせられた

寒さ忘れて突合す膝

十湖

鶴眠宗匠が第三をされた

鯛一荷一尾残らず買入れて

鶴眠

十湖の挨拶吟の脇は何と情感が籠っていたことかと述懐しながら、翠葉が眠りについたのは午前一時であった。誠にもって大変な今日一日であった。

同月二十五日は、いよいよ翠葉が大撫庵を辞し去る日である。一生の記念としようとした今度の旅も今日で終わるのである。

五時に床を出て十湖に逢う。昨夜の嵐は知らぬ顔である。お互いに別れの盃酌み交わし、佐乃夫人のおもてなしの朝餉を頂戴した。

八時、惜しき別れを大撫庵に告げた。

玄関には馬車が二台横づけにされている。

「さあ、乗ってくれ。浜松駅まで見送るよ」

翠葉は見送りだけは辞退したが聞き入れない。十湖は笑顔で翠葉を馬車へと導いた。

もう一台の馬車には雪城、鶴眠、水野以文画伯、山下淵澄等が乗り込んだ。彼らも見送るという。

二台の馬車は嘶きとともに駆け出した。車中での会話はしめやかで、やっと浜松駅に着く。

改札を抜けたところで十湖から土産を渡された。

大荷物が三個、そのほかに手荷物の合札もあった。それらはすべて翠葉への土産として贈られたもので品数は百余点である。

汽車に乗り込もうとすると、十湖の万歳の発声と見送りの人々の声に送られた。

汽車は一路、東京を目指した。車窓に映る風景の中には家族の顔が浮かんできていた。

あくる日、大撫庵はいつものように、庭に放し飼いの鶏の声が朝を告げた。だが、庵からは誰も出てこない。朝日に向かって手を合わせる者もない。ただ竈で飯を炊く炎がボーボーと呻っている。

台所では佐乃がまな板を叩く包丁の音が心地よく響いている。

昨夜の酒が利いたのか、眠気眼の十湖が庭を見てひとり呟いた。

「誠をもって風交する俳人は世の中には沢山いる。その中で楽しい誠の友と親しく膝を接し、楽天境に浸ることができるものがどれだけいるだろうか。わしは果報者よ、誠の付き合い方を翠葉に教えられたわ。良き盟友を持ったものよ。俳人としての礼はあいつのためにある言葉だな」

鳴門の旧知

大正七年七月二十一日、街道から一步東に入り小道を抜けたところにある源長院本堂は田園風景の中にあるせいか木の間を抜ける涼風が心地良い。

ここでは先ほどまで十湖の古希を祝う祝賀式典が開かれ、地元の老若男女二百余名の出席者で賑わっていた。

その人並みを見送っていた和尚と十湖が境内を臨みながら、和尚がほっとした様子で十湖の顔を見る。

「翁も七十を数えましたか、そんな風には見えませんがのう」

と和尚は剃ったばかりの頭を撫でながら、呆然としている十湖に声をかけた。

「やらねばならんことはいくらもあるのです、歳の事など構ってはいれん。大体好きなことをしていると時間の経つのが早いものだ」

十湖は自ら揮毫した扇子で、ばたばたと胸元辺りに風を送っている。

「それに、これから富士登山への旅支度をしなければいかん。これは俳諧新聞の主催による俳人登山に参加するためだが、三日間の行程なのでさほど体には無理がない。秋には近江行脚だ。そして今年も暮れるというものじや。年が替われば念願の伊勢路の行脚が待つ

ている。しかし伊勢は招きがないと行きにくいという事情もある」

「富士登山とはこの暑いのに大変なことだ。足元には十分気を付けて行ってきたくれ。伊勢へはこれまでも何度か行っているようですが招待がないといけないというのはどんな事情がおりですか。まして俳諧は相変わらず向うは盛んなはずでしょうに」

「伊勢は相変わらず俳諧は盛んだ。たとえ自由律の俳句が流行ってきたても、江戸時代からの俳諧は風流が人を和ませる。伊勢人にとつての楽しみは変わらない。しかし一部では着実に変化してきている。それは時世のせいじゃ」

「自由律の俳句の横行ですかね。正岡子規の提唱した俳句は文学でなくてはいかんと云う」和尚は袈裟の袖をたくし上げ数珠を持った手を出しながら、持ち前の好奇心から十湖に問う。

「それだけではない。むしろ俳諧宗匠のことを月並宗匠ということばで罵倒する用語として使われ始めている」

明治二十六年、子規は新聞に「文界やつあたり」と題して旧派の宗匠が俳句愛好家を利用して、点料や入花料の収入に汲々とするばかりでその他に益はなく、近時俳句界が活況と進歩を現し始めたのは多少の学識と文才のある書生仲間の功績であつて、月並宗匠連は学識も佳句も節操もないへつぽこ連であると痛罵した。

これに対し宗匠らは彼らをして書生俳諧と軽蔑の念を込めて呼び返されていた。こうした状況からして地元俳諧宗匠らが句会を開くのを自重しているようなのである。

「わしは俳句が文学でなくてはいかんとは思わぬ。子規の弟子たちが自らの句会を俳三昧と呼んで日常の様々な情景を詠んでいる。わしのすることと大して変わらん。三昧とは仏教用語で禅を意味し心を一時に集中することで俳句を練るという意味に通じる。わしが常々弟子に用いる格言に俳は禅なり禅は俳なりというのがある。つまり俳禅一味というのと一脈通じておる」

「翁らしいことばだ。せっかくだから涼風に吹かれながら、その辺をご教示いただきたい」
うんうんと頷きながら和尚は膝を乗り出し云った。

「俳は禅なり禅は俳なりとは、昨年俳友の雲林居一哉の碑除幕式でしゃべったことだが」と十湖は前置きし、持ち前の持論をさらに続けた。

二人とも顔は境内に咲く百日紅の花に向いていた。

「俳句も禅もどちらも理解し得ないと、俳味を理解したとは云えないのだ。雲林は荻野という徳のあった和尚の下に参禅することで、俳風を一変して基礎を確立したと聞く」

「要するに原点に立ち返って、基礎から学び始めたということですか」

「うーむ。こんな句が残っている」

蚊のいくら来ても動かぬ柱かな

雲林のこの一句は、俗を脱して禅に入らなければできなかったものだ。俳風一変したこ

とで門人は百にも達し、雲林の薰陶によつて名を為すものが少なくなかつたようだ」

十湖は和尚に顔を向けるとお互いに眼が合った。

「俳禅一味とは心に響く四文字ですな。後世に残したいことばですが」

「かつて宮本武蔵は自らの剣の道を「剣禅一如」といつていたそうな。わしの俳句の道も同じようなものじゃ」

十湖はそういつて高笑いをした。

和尚には俳禅一味の十湖の思いが伝わつたらしい。

「わしはすでに門人知友と謀り、俳禅一味の碑石を浜名郡北浜村貴布祢の寺に建立した。もつて不朽に伝えようとな」

と十湖は云いながら腕組した手を解き、庭に向かつて両手を広げ大あくびをしたのだつた。

「雲林居士は地下にあつて翁の古希を祝い、俳句の道一筋の宗匠に破顔一笑していることでしょうな」

笑う和尚の声が、境内の蟬しぐれにかき消されていた。十湖の心は既に伊勢路の旅に跳んでいた。

大正八年三月七十一歳になる十湖は再び伊勢路を行脚することになった。伊勢の門下生の招きで来る七日から出発する。同行は門人奇峰と常春である。

いつものことであるが旅立ちの一句

神風に向こうて春の門出かな

伊勢へ着けば何より先に伊勢神宮を参拝する。

その後は各地で句会を開催し、鳥羽では拓殖鶴屋亭において霞峰、常春と三人で連歌を巻く。

橋本は果報ものなり柘植の春

翌日は鳥羽広楽園に遊び無尽庵志舟、下村健蔵の立机を許す。

これまで同行してくれた奇峰と常春とはここで別れ、十湖はひとり岡山へ出て四国へと渡った。

かつての報徳の同志と会う予定である。市野村出身の富田久三郎のことだ。十湖より三つ下だからこのとき六十八歳になっている。

明治十八年頃、十湖は引佐・亀玉郡長として公務に専念し、一方で農政改革のために西遠農学社を設立した。その活動をともしにしていたのが、市野村出身の富田久三郎であった。

富田久三郎は一八五二年に遠州長上郡市野村（現、浜松市東区市野町）で生まれた。生

家は姫街道の要衝で代々鋳屋（かざりや）鍛冶職を営み、祖父保五郎は火術家（火薬に精通した技術者に対する江戸時代の呼称）として近隣で有名であった。

久三郎はこの祖父の薫陶を受けて青年期より舎密（化学）を学んだ。

二十五歳の時に当時高価な薬品であった炭酸マグネシウムを苦汁から製造する方法を確立し、地元市野や浜名湖周辺で製薬業を拡大していった。

そんな折、引佐龜玉郡長であった十湖から農家の副業についての相談があり、それに応えたところから久三郎との親交は深まっていった。

青年期から壮年期にかけては、郷里遠州で金原明善と十湖の思想や行動に大いに感化されている。後年、久三郎がドイツ兵俘虜から技術を学び「工農一体化」を推進しようとしたのは、この二人の先輩の影響によるところが大きい。

やがて、久三郎はさらなる事業拡大のために苦汁の大量供給地に進出すべきと考えるようになり、瀬戸内十州塩田の中から適地として撫養塩田を選び、遠州から阿波への移転を決意した。一八九二年久三郎四十歳の時に、風光明媚な小鳴門海峡沿いの、板野郡瀬戸村明神に富田製薬工場を開設した。

今回の旅は四国へ渡り、旧知の富田久三郎の案内で香川を巡る。

はたしてどんな旅になるのか、十湖には旧交を温めることがなにより楽しみだったのである。

岡山から四国へ渡り、真っ先に行ったのは琴平の金比羅宮である。

八乙女やいよいよ神の風光る

途中鹿島や壇ノ浦を巡り、発句にも熱が入る。

老いの眼に霞む屋島壇ノ浦

続いて高松栗林公園に遊び高松の俳誌の発行元を見学した。

春や春その高松の鶴の声

徳島に入ったときから久三郎が案内し、その夜は富田宅に泊まった。

十湖は酒が進み、余興に乗じて句を揮毫したりした。久しぶりの再会で話が弾み、少々脱線した様子ではなかったか。

青葉若葉匂ふや阿波の大鳴門

翌日、阿波の鳴門を見物し、四国八十八ヶ所第一番札所靈山寺を参拝する。

春風や渦をよけよけ進む船

朝晴や春を耕す塩熊手

引き立や鳴門若布の酒の味

続いて同町内にある富田のつくった牧舎を案内される。

ここではドイツ式牧舎と第一次世界大戦時のドイツ兵捕虜の指導を得て行なう酪農を見た。

この時の写真が今も残っている。

十湖を囲んでの記念撮影で、十人のドイツ人に囲まれて居心地が悪そうな顔をしている。そういえばここでの発句が残っていないのは、見るものすべてに心を奪われその余裕がなかったのかもしれない。

それに引き換え久三郎は白髪で口髭を伸ばし、着物の袖に両手を入れて腕組みをしている姿は、流石に大物の貫禄を見せている。

淡路からの帰路は再び伊勢路へ戻る道を辿る。伊賀から大和月ヶ瀬に入り、梅の香にホツとしたのか発句は梅づくし、伊勢から淡路へめぐる三週間の旅は終わった。帰庵しての一句は安堵の様子が窺える、まだ春浅き大蕪庵であった。

訪ふ人に春のあふるる庵かな

再会

大正八年四月、桜が散った草庵の庭はそぼ降る雨で風情を高めている。

縁側に座ったままの十湖は、手に短冊を持ちながら筆が動かず、じつと外を眺めているだけだ。

先月阿波の鳴門で視察した富田畜産部ドイツ牧舎と、第一次世界大戦時のドイツ兵捕虜の指導を得て行う酪農状況と富田久三郎の顔を思い出していた。

——彼奴は奇異なる人生を生きがいをもって歩んでいる

十湖は彼の人生に嫉妬を抱くわけではないが、自分との違いを悔やんでいるようだった。月並宗匠だと云われても自分の歩んできた道は正しい。

俳諧を通じて全国に多くの門人を育て、句会を人の交流の場として広げ、報徳の道も説いてきた。

酒を飲むと脱線して時に自暴自棄になることもあったが調子がいい。それがいつも人と人との繋ぐ懸け橋になったことも事実だ。

富田がしたことはそれ以上に大きな事業を通じ世界へ羽ばたいている。

十湖は世界中に知られなくてもいい、功績の積み重ねが銅像となって後世に伝わること

を望んだ。

やがて雨が上がり始めたころになって、十湖の筆が動き二句認めた。

雨もよし牡丹の花の酔味噲和
やよ蛙口さがなしと笑はれる

二日後、京都より枯魚堂嵐更宗匠が草庵に来る。庵には門人常春老人が奇遇中で十湖の代わりに出迎えた。

「道中はいかがでしたかな」

「弁天島は絶景でした。魂を奪われましたよ」と嵐更は称賛した。

浜松駅で下車後は軽便笠井行に乗り換え、笠井へ到着してからは人力車で十湖の庵を訪問することになったらしい。

十湖と面会后、既に正午になり歓迎の昼食を出す。

食事も半ばを過ぎたころ十湖は台所に酒肴の用意をせよと指示し

「それじゃ、これから天竜河畔の風光を紹介するので皆で出よう」といいだした。

当日の模様は後日枯魚堂が書き記していた。

——春の日ながら蟬の声する松林を過ぎ、小流の橋を渡り、里道を抜け河畔に辿りつく。
河はさすがに著名の大流、帆を張りて上がる船、筏を連ねて下る木材、悠然として大景を
成す。快晴ならば対岸左方に富士の雄姿を認め得べしと聞く。そのうえに酒盃を重ねつつ
雅談数刻にして帰る。夕餉又酒盃を交換しつつ常設の揮毫場にてそれぞれ一句ずつ書き付
けたり

朝酒をひらく庵りの牡丹かな 常春
山吹や師に相応しき古土蔵 応声

主の翁過る日伊賀柘植の里に遊び足りとて祖翁遺跡の一句を示さる

いざ汲まん産湯の井戸の春の水 十湖

予もまた大撫庵の所為一句なかるべからずと折節庭園の牡丹花盛りなりければ

世の中の垣は許さぬ牡丹かな 嵐更

十湖の庵での日常風景をそのまま嵐更宗匠が書き綴ったもので、彼らの俳諧行動こそが

月並宗匠といわれる所以でもある。だが十湖にしてみればここにこそ風雅の極みがあるというのである。

あくる日午前六時、早くも一台の馬車が草庵の前に止まっていた。嵐更宗匠を駅へ送りながら十湖も旅立つ予定だ。

朝餉の支度を整え、駅へ行く一行は皆同乗する。その車上でも吟あり。

朝霞明日の日和も確かなり

十湖

首途の馬車を吹きおくる東風

嵐更

藤の花枝もたははに咲栄へて

常春

途中天王村の石津氏宅に藤花の盛りを見ようと下車をする。藤樹は四、五百年の齢を経たもので延長百尺以上におよび、その幹枝を支える棚を用いず木材を杖として四面に花広がっている。まさに雨龍の紫雲が横たわるようであった。

咲ながら伸びすすむなり藤の花

十湖

垂れかかる色一式や藤の花

常春

池水を撫でるや藤の花たれて

応声

情気みちて藤ただ長き真昼かな

嵐更

皆が花を大いに愛でるせいか石津氏が酒肴を饗し、しばらくは藤花を静かに鑑賞して再び馬車上の人となった。

浜松駅に着くと、十湖の馴染みの蕎麦屋へ寄り一行は馳走になる。十湖はこの後嵐更一行とも別れ、駅で弟子とともに花笠庵翠葉と合流した。

尾張稲沢の木村卯月の立机披露会へ一緒に参加するためである。

まさか、それからの十湖の足取りが消えるなんて誰が考え及んだだろうか。

十日たっても帰庵せず弟子たちを困らせる。稲沢への用はその日に終わる。たとえそのあと宴が開かれても、その晩は泊り翌日には戻れるはずだ。

弟子の随處らは日頃の十湖の行動から想定するとあり得ないことではなかったので、花笠庵が一緒なら万事うまくやって呉れていると、都合の良い方に解釈していた。

二週間後の五月六日になって突然、金沢の門人から十湖の邸に連絡が入り单身金沢に現れたという。

それを知ったのは地元新聞の記事だったのである。

記事には京都で詠んだ十湖の句が二題掲載されていた。

大宮の静さ名残れ時鳥

朝眼よし若葉の中の十万戸

一旦京都へ出て北陸へ旅したものと思われる。

五月六日 金沢駅へ着く。京都まで一緒だった弟子の姿が見えない。実はこれからの日程は弟子がいても邪魔になるだけと勝手に思い込み、旅館を一人抜け出して来てしまった。十湖を迎えてくれたのは宮崎仏南宗匠と出版社の一人である。

「十湖宗匠よく来てくれました。これから先は私とこちらの社員の方がご案内しますのでよろしく願います」

と仏南が挨拶しながら二人揃って頭を下げた。

仏南は恰幅のいい五十歳を出たくらいの男で背広をきちんと着こなしている。もう一人は金沢の俳誌「沢の光」を発行する出版社の社員で鶴井といった。三十歳ぐらいでおとなしそうな痩せ男だ。十湖の眼には独身かと見えていた。

仏南宗匠とは、十湖が尾張稲沢で開かれた木村卯月の立机披露会の席上、たまたま意気投合し懇意になった。

「日程はいつまでと決めてありませんが、出版社の方で一応お付き合いさせていただくのは今月二十四日の永平寺追弔大法会までということです。あくまでもこれは予定でして、十湖宗匠にはお好きなように各地の句会にご出席するなど北陸の旅路を心行くまで満喫していただければ幸いです」

仏南の説明を聞きながら、十湖は今回の旅の始まりが過去にも似たようなことがあった

と記憶していた。

「それで今夜の宿ですが、私の弟のところへ宿泊をお願いしてありますので、よろしいでしょうか」

「わしはどこの宿だっていい。酒さえ飲めれば木の下だつてかまわないさ」

十湖は今回もお任せである。

句会の流れ旅なら懐具合で決めてしまうのに、仏南には少々気を使っているところもある。

この日は移動の疲れもあったせいか早くに宿泊場所へ向かう。

宿泊場所は仏南の弟のところだと云っていたが、今向っている先は金沢監獄である。まだ陽が高いので西洋式の外壁から上へ延びている看守所上部の見張り櫓が見える。

仏南が笑いながら

「驚きましたか。私の弟はこの看守所です。ここに泊めてもらおうとしましたが宗匠では持ちこたさだと感じ、看守長の官舎としました」

「・・・・・・」

いつも饒舌な十湖でもあまりに意外な宿泊場所にことばも出なかった。

数日後、地元新聞はこのことを十湖の動静と題し、金沢の吟行の俳句とともに紹介していた。

翌日の日程は十湖の希望で芭蕉翁高弟の墓を詣でることと市内の宗匠宅を挨拶回りし、

それぞれの草庵で句会に参加する。

官舎で迎えを待つて、十湖ら一行はまず卯立山山麓にある心蓮社をめざした。

同社は浄土宗の寺である。金沢出身の芭蕉の高弟立花北枝の墓に向かう。

いつものことだが十湖は旅をするとき、必ずその地の芭蕉の高弟の墓に参ることを一義としていた。今回もその例に漏れず、心の準備をしていた。

金沢ではほかに桜井梅室、成田蒼虬の門弟がいる。

まず向かった先の心蓮社では、ご丁寧に墓を弔い供養を営み、住職の独経が山麓に響いていた。今では北枝の墓のそばに句碑が建立され地元の俳人に親しまれているようである。次に向かったのは同地内にある慶覚寺で桜井梅室の墓である。香花を手向けながら十湖は、ふと蒼虬の事が頭に浮かんできた。

昼の蚊や机の下のかくし酒 蒼虬

蒼虬は酒が好きだった。十湖は同酒相親しむだとあつて、直ちに徳利を提げて墓参りする。

住職と話をして夕刻となり、再び十湖は墓の前へ現れた。手には徳利を持っている。すると墓に徳利の酒を惜しげもなく半分以上かけ、「蒼虬の友はわしだけだったのか」と感慨深そうであった。

その夜は地元宗匠連への挨拶回りである。

先月末の地方紙に十湖動静が掲載されたこともあって、宗匠連たちは手ぐすねを引いて挨拶に来るのを待ちかねていた。その中には金沢の骨董屋も何軒が含まれていて、行く先々の草庵は多くの客で賑わっていた。

客のそばを通り抜けるとき、ある客から

「大隈さんのようですね」

声をかけられると、十湖は笑みを浮かべながら

「なに大隈だと。あれは百二十五まで生きるだろうが先が見えている。わしは死ぬまで生きているんだ」

と応じていた。

このころ巷では年寄りを見ると皆「大隈に似ている」というと喜ぶそうで、客らは十湖を喜ばそうと声をかけてみたが客らはあてがはずれたのだ。この爺さんは只者じゃないなと思っていたらしい。

十湖が酒を飲むと頗るご機嫌になることも知っていて、行く先々で酒が用意されている。

「こんなに歓待されるとは思わなかったな。仏南君のおかげだ」

大分酒がまわり十湖はご機嫌である。

「えーと、これで最後ですかね」

仏南が今夜最後の宗匠宅を指し示す。遠く明かりが見えるのは二階建ての立派な旅館で

ある。

駅近くの旅館に陣取り待ち構えているようだ。

玄関に入るや否や階段が続いている。会場は二階の広間で行われるらしく出迎えた女将が二階を案内する。十湖の後には仲居が続いた。

十湖が何気なく後ろを振り返ると、丸顔のどこかで見たような仲居がにこにこしながら頭を下げた。

「足元に気を付けてくださいね。よかったら私の肩に掴まって階段をお上がりください」
仲居は十湖の耳元で囁くような声で云った。

十湖は既に酩酊状態である。云われるまま仲居の肩に手を掛け階段を上がる。

「お前は小野田屋旅館にいた八重ではないのか」

十湖は驚いたように仲居に云った。

「十湖様お久しぶりですこと。今はここで働いていますけど、あれから四年になります」
仲居は別に深い感慨の様子を見せず応えた。

「宗匠とお知り合いなんて良かったわね。この娘は一年程前からここで仲居として働いています。氣立てのいい子で八重と呼ばれてお客様に可愛がられているんですよ。今晚はゆつくり金沢の宴をお楽しみくださいな」

女将が愛想笑いを浮かべながら八重の近況を紹介した。

広間では多くの参会者で賑わっていた。いくら酒を飲んでいても句会ともなれば、しゃ

んとする十湖だが仲居でも知り合いがそばにいますといふ盛り上がりつつあるのである。

挨拶も終わって宴に入り、十湖の膳の前には次々と盃を重ねにやってくる。そのうち在席していた地元の骨董屋連中が十湖の揮毫を求めてくる。

「よしよしわかった。筆と墨を持ってこい。紙もだ」

十湖は少しばかり呂律が回らなくなってきたが、書く意気込みは決してなくなっていない。

仲居の八重が急ぎ階下へ降りて、頼まれたものを用意してくる。

十湖の前に差し出されると、参会者の眼は十湖の手元へ吸いつけられている。

「おい八重、早く墨を擦れ、鶯箋紙をおけ」

やにはに命令口調で八重に支度をさせる。

骨董屋から揮毫を頼まれると当然謝礼が出る。十湖は俄然張り切りだすのが常である。しかも書き出せばその早い事はいふまでもない。

枚数が多くなればそれだけ謝金も増える。貧乏旅ならこれで旅の費用を賄うことができるのだ。

用意された紙はすぐに消費され

「無くなってしまったか。それじゃ今から一番いい紙を買って来い」

と十湖は八重に頼む。すると代金はどうしようかと八重が心配すると、骨董屋の一人が私が出すと云って多額な金を持たしてくれた。八重はその金をもって駅頭まで走る。

懐かしい人へのお世話だとあつて足取りは軽かった。

紙が用意されると会場は車座になつて十湖の筆に見入っている。

早い、勢いがある、書いて書いて書きまくる。

書きながら十湖は腹の中でこう囁いていた。

——骨董屋という商売は大政治家だろうが文豪でも何でも構わず少し豪いと云われる人間には片っ端から値段を付ける。相手が金釘流でも、よしんば書けない人でも頓着しない。その骨董屋がわしに書いてくれといつて来れば、いくらでも書いてやる。骨董屋は値踏みをして謝礼を出すはずだ

「宗匠この辺でいいでしょう。たくさん書いていただきました」

骨董屋はこれ以上書かれては謝礼金を多く包まなくてはいけないことに心配してのだ。揮毫したものを手にすると、骨董屋はやがて恭々しくも一封を盆にのせ十湖に差し出した。

中を覗くと猪が二三匹白い眼で収まっていた。猪紙幣一枚が十円札であるからして二三十円と云う額である。

十湖がそのまま懷に収めるかと思っていたら、盆に置いたまま、手伝っていた仲居の八重に渡した。

八重は恰も越後獅子のような顔に、札を出した骨董屋は鯪のような眼で盆を白んだ。会場にいた客連の眼は一度に笑いだし、句会の座は円満のうちに終了した。

十湖と仏南は満足そうに帰っていく客たちに頭を下げながらその場に控えていた。

八重はその背後で客たちを見送っていた。

やがて会場に客たちがいなくなるのを見届けて、十湖はおもむろに八重に声をかけた。

「八重、画伯が死んでしまったのは辛かったのう」

八重が好意を抱いていた画伯を追って、豊西村を後にしたのは四年前だった。十湖も二人の足跡を辿り、画伯の死因を究明したところ伊勢で途切れ、警察側の発表どおり自殺であることを容認してしまった。八重の心境を知りたかったが、今なら聞くことができる。八重は静かに語り始めた。

「十湖さま、私辛かったです。まさかまさか死んじゃうなんて思ってもみませんでした。最後に別れたとき画伯は嬉しそうに、旅立ちを喜んでくれて言っていましたから」
涙もろい十湖はこのことばに涙ぐんでしまった。

翌日からの日程は沢の光社の意向に従い金沢市内での歓迎句会、吟行で過ごす。

十日後の二十一日、十湖は福井にいた。目の前の大火の惨状を見て呆然と佇んでいた。

「ひどいのう。わが町でも大火はつきものだが、これほどまでに焼失するとは悲惨だ」

ちょうど十湖ら一行が訪れる前に焼失家屋五百六十戸という大惨事があり、昨年もちょうど同じ月に四百三十戸の大火があったという。

取材のため付き添っていた福井新聞の記者に

「わしからも義捐金を届けたい」

と十湖は告げ、直ちに金五円を渡した。

焼跡や素建のいえのさみたれて

この日は一日中沈痛な面持ちで市内を回っていた。自らゆかりの神社、仏閣を訪ね吟行に努めていた。

あくる日十湖が心待ちしていた永平寺に入る。福井の宗匠や十湖の地元門下生らが後に続き、付き従う一行の総数は日ごとに増していった。

十湖が来たことを知った寺側は般若湯を持つて歓迎したところ、「わしが酒を好きだからと用意してくださったのか。申し訳ない」いささかご機嫌で十湖は丁重に挨拶をした。

法会は二日後の事なので、今日はゆつくり座談を楽しもうということになった。すると寺側からひとつの提案があった。

「宗匠に俳諧に関する講話でもお願いできるかどうか」

「せっかくだから般若湯を傾けながらなら、やるしかないのう」

十湖は寺側の同行者を含め、「俳禅一味」の妙を説いた。

二日後永平寺僧衆百五十余名をお願いして、芭蕉翁をはじめ百余名の俳人らのために盛大な追弔法会を営む。翌朝の各新聞は、盛大の催しが十湖の手で行われたと報道していた。

芭蕉の道

かねてから北国行脚をしたいと思つていた十湖に、思いがけなく地方の俳人仲間から誘いがかった。大正十一年五月のことだ。

それも旅費前金で送つてきた。八十円という大金である。

二日の夕刻、十湖はいそいそと身支度を済ませ、自宅近くの大村智恵三郎宅へ歩いて向かう。

門弟有志が北国行脚の送別会を開いてくれるというのだ。邸には既に隨處をはじめ二十人程度が十湖の来るのを待ち構えていた。

隨處に案内された十湖は所定の場所に座ると、直ちに進行役の男が

「十湖宗匠も七十四歳を迎え益々意氣軒昂だが、今回は長い道中である。しかし、この齡では何が起るかわからない。ついてはこの旅に同行者を付けたいと思う」

と座敷中に通る大きな声で云い放つた。それまでざわついていた会場からは一瞬ため息が漏れた。

「同行は春雄、黄鶴、愛影の三人をお願いする」

春雄はこれの中では一番先輩格で、あとの二人はまだ弟子になって日が浅い。

名を呼ばれた黄鶴は、自分が選ばれたことに戸惑い気が重かった。

今から三年前の大正八年五月に京都への吟行に同行した者から聞いた話を振り返っていた。十湖が京都での吟行中に、突然単身で金沢に行くと言い出し、同行者は置いてけぼりを食ってしまった。そのうえ帰るに金がなく辛かったと聞いていた。

宴がたけなわになったところ、隨處が北国行脚の祝い句を参会者に向かって披露した。

くみかわす新茶を糧の首途かな

同年五月四日早朝、浜松発午前五時四十五分の下り列車で、十湖と同行者三人は富山へ向けて出発した。

車内ではみな大はしやぎであつた。それというのもいつもと違い、門弟たちが旅費の工面の苦労もなく、金に心配しなくてはいけない場面はなさそうだという樂觀から身も心も軽くなっていたからだつた。

小一時間も過ぎた頃、十湖が席を立ったのを幸いに、黄鶴は愛影に前回同行したときのことを話していた。

「宗匠は金のあるなしには無頓着で、気がつけば金がなくなってしまったということが多々あつた。そのため、車中では帰りの旅費を工面するため客に揮毫したものを売ったり、お芝居の指導をして日銭を稼いだ」

気弱そうに小さな声で話す黄鶴であつた。

やがて十湖が席へ戻ると、十湖は赤ら顔をしており、どこで飲んだのか酒が大分回っている様子である。

富山までの車中は十湖の独り舞台で毒舌会の様相を呈していた。それでも句は詠んでゐるから頼もしいとも云える。

我と我が首途祝ふや初裕

再び北国への行脚に喜びが隠せない十湖であつた。

四日に浜松を發つた十湖一行は、夕刻には富山へ着き駅前にある旅館に宿をとつた。朝が早かつたことや連日の酒宴で疲れたこともあつて皆早くに床に就いた。
あくる日四人は市内をぶらぶらと見学し吟行することにした。

六日にもうれし富山の菖蒲風呂

十湖が早速詠んだ。ほかには誰も後に続かなかつた。

春雄は十湖の顔を見ながら、今度は市内でも一番良い旅館に泊まろうと決めた。昨日の

駅前旅館は早く寝てしまったので料理も風呂も気にしなかった。だが十湖の期待は脆くも崩れてしまったのだった。今度こそ菖蒲風呂をと。

富山公園での発句は

夕立やみどり滴る呉羽山

呉羽山の標高は百メートルを悠に越す。山中にある呉羽山公園展望台からは富山市街・立山連峰の眺望が素晴らしく「立山あおぐ特等席」を実感することができた。

八郡の夏見下すや呉羽山

夜景見ぬうらみや夏の呉羽山

呉羽丘陵は、「呉羽山断層」の西側が持ち上がってきた丘陵で、その西側はゆるやかな斜面になっているのに対し、東側は急斜面となっている。この呉羽丘陵によつて富山平野は二分されており、かつては言葉や風俗の境界とされていた。呉羽丘陵よりも東側が呉東（ごとう）、西側が呉西（ごせい）と呼ばれていた。

富山という地名の由来について、かつて越中国の国府のあった現在の高岡市から見ても、呉羽丘陵の外側にあった事から外山（とやま）と呼ばれ、それが変化して富山になったと

いうらしい。

このことを知ってか知らぬか、十湖は呉羽山を対象にした句を次々に詠んで行つた。そのつど呉羽山に語るかのように大きな声を発していた。

その脇で今回の旅の財布持ちである黄鶴が一番若い弟子の愛影になにやら指図をしていた。

春雄から今晚の旅館の世話を頼まれて、愛影に市内の本多旅館に走らせた。

この日旅館では三人の芸妓を挙げてのドンちゃん騒ぎ、といつても十湖だけが盛りあがつて

「芸妓を総揚げしても必ずしも寝妓を買うという意味ではないぞ。女房一人佐乃しか愛していないでも、女が好きであれば仕方があるまい。大勢の女を知ることだけが好きと言う条件にはならんからな」

と一人気炎をはいている始末。

旅はこれからだというのに、黄鶴にとつては財布が軽くなるのを心配していたのだが。

次の日、一行は魚津へむかう。これまでもそうだが十湖の旅は風の吹くまま気の向くまま。十湖の機嫌しだいで行き先が決まった。

同行する春雄にとつて目的地は富山、金沢方面の北国を行脚することだったので別に驚きもしなかった。いつものことだと思つた。

魚津では

眺望に見惚れて居れば蜃気楼

五月のことであり海岸線から偶然見える天候にあたった。
滑川に戻り

見る人の心も照らせ螢烏賊

有磯海の富源はこれぞ螢烏賊

開国を富ます光や螢烏賊

滑川の宿での夕餉は、地元門弟らも呼び十人程度の男衆が共に食事をしながら句会を開き、十湖の詠んだ句が披露された。

春雄はこの様子を見て、ここまでの行程を振り返りながら、宗匠が昨夜の芸妓をあげての大騒ぎとは打って変わって句作りに専念しているのがわかった。

明日からの立ち寄り場所は決まっていけないが、詠みあげている句を聞いていると「奥の細道」を意識していると思っていた。

なぜならばこれからの旅程は市振、親不知と北上することになり、芭蕉が北国へ入った時の逆に進むことになる。

芭蕉は北国へ入ってからは高岡方面へ向かい、金沢、山中温泉、能登へと周ったので、十湖の旅は途中で引き返し高岡、金沢へ戻るはずだ。

とても今の金遣いでは高岡までが精一杯だ。黄鶴には何と伝えようかと思案した。翌日早朝に宿を立ち、さらに北上し泊駅宮崎へと向かう。

泊駅宮崎にて

早稲の香の碑を拝みけり田植前

芭蕉が通りかかった時は既に富山の米は穂が出ていたはず。その野面の先に有磯海が広がる。有磯海は「荒磯海」で富山湾の海で歌枕。ただし、芭蕉一行はこれを右に見る道を一路金沢へ目指して歩いていく。

滑川市を出発してから富山には行かず、常願寺川・神通川・庄川を渡り、高岡市へと旅を続け、宿をとった。

しかし、十湖の旅はまだこれからが田植えの時期だ。芭蕉の「早稲の香や分け入る右は有磯海」より季節は早い。十湖はこの句を基本にしながらも、滑川の螢鳥賊、泊駅宮崎の田に芭蕉を意識した句作りをしていた。

旅は親不知まで行って引き返し、富山には寄らず高岡方面へと向かう。途中で十湖が何かを思い詰めたようにして言った。

「春雄、前回は来ていないところがある。駅から離れるが井波町の翁塚へ寄りたい」

翁塚とは芭蕉の三塚のひとつで井波町の浄土宗の浄蓮寺境内にある。

かつて、芭蕉の弟子が芭蕉の墓から、小石三個を持ち帰り、浄蓮寺の境内に塚を建て

芭蕉の遺髪も納められた。

翁塚は、伊賀上野の故郷塚、義仲寺の本廟とともに芭蕉三塚とされている。

境内には小さな庵があり門人ら俳人数百名が寄進を行い、文化七年（一八〇一年）に建てられて黒髪庵と名付けられている。

明治十五年（一八八二年）には地域の俳人たちによって芭蕉堂が建てられ、堂内に芭蕉像安置されたという。

春雄は黄鶴に眼をやり、翁塚へ回ることの了承を求めた。

「しかたないですね」

黄鶴はやり切れなさそうな顔で答えた。

井波町に入り、浄蓮寺方面を目指していると、壊れかけた茅葺屋根が見える。

「どうもこらしい」

一行は寺の境内に入ってみると傷んでいるのは芭蕉堂のようである。これを見た十湖の顔色がみるみる変わり

「これは劳しい、何とかせにやいかん。寺の者に金を渡して修繕をしてもらえ」

いつもの癖が出たと春雄は思った。だがそんな余計な金はない。黄鶴にどうしたもんか

と訊ねた。

「どうせ旅費を除けば今日の宿泊分で終わりだから、少ないが残り全部寺に寄進して置いていきましよう」

「それができるか。申し訳ないなあ」

春雄は心配そうに云いながら頭を下げた。

そんなこととは知ってか知らずか十湖は句を詠むのに専念していた。

ぬかっけば雫するなり夏木立

鳴け聞かん黒髪庵のほととぎす

まったくもって同行者の嘆きを句にしているようだと春雄はあきれた。

駅に戻り越中一の宮、雨晴し、高岡へと向かう。

春雄の不安をよそに奥の細道を逆に行く十湖一行であった。

高岡の地にはその日の午後に着く。

ここでは不問庵主人が一行を迎えるため夜具、座布団の新調そして湯殿の改造までしてあった。その厚意にお礼をしたくても一行には何もなかった。

しかたなく十湖は、せめてものの礼を句に託し詠んだ。

我が心洗ひ清めん夏座敷

見よ遊へ五月つつじの不問庵

高岡公園にて

葉桜の隧道越えて宮詣

あくる日、目的地である金沢に着く。

今回の旅行を仕掛けてくれた地元の俳人小杉氏宅に客人として宿泊する。

その晩、黄鶴は春雄に相談を持ちかける。

布団の上に寝間着姿のまま胡坐をかいている春雄に、ため息まじりに小声で黄鶴が云った。

「もうここまでですね。我々には帰りの金はないと思っていたが、昨日高岡で金は使わなかったため、帰路の金ぐらいは残っています。我々だけは帰りましょうか」

「それを私も考えていたところだ。だが招いてくれた小杉氏に申し訳が立たない」
腕組みをした春雄は、黄鶴の意見に同調しながら答えた。

「それならいい考えがある。かつて芭蕉に同行した曾良が、このあたりで体調を崩し芭蕉と別れたといいます。曾良と同じく誰かが体調を崩し帰国するというのはどうでしょうか」

黄鶴が両手を叩き口元をほころばせながら提案した。

「だれが病人になるのかな」

「愛影ではいかがですか」

「それでは役者不足だ」

「ふむ」

「やっぱり黄鶴しかない」

「えっ、自分ですか。そんな」

黄鶴は春雄にまんまと丸め込まれてしまった。

ふすまの向こうでは十湖がまだ起きているようだ。

「いい年をして未だ弟子等にこんな心配させているなんて、我ながら情けないわい」

この二人のやり取りを聞きながら十湖は殊勝にも枕元に涙していた。

さて、そんなこととは梅雨知らず、いつこの狂言をするのか春雄は一晩考えていた。

——小杉氏に金がなくなつたので同行を止めるといえば、心配しなくていいというだろうし、帰るといえば、きつと餞別をくれるだろう。どちらもそれは心苦しい。かといって無断で帰国すれば宗匠の顔が立たない。

どちらも快く収まる方法はないか。思案しているうちに夜は白々と明けてきた。

そのときである。

「どうしました黄鶴さん、熱でもあるのですか」

と隣で寝ていた愛影が声を押し殺して黄鶴の体を揺さぶった。

「ううむ・・・」

といかにも気だるそうに声を出す黄鶴。

「愛影の奴め、こんなところで一芝居をうつてきたか」

しょうがないがここで大芝居を打つかと黄鶴は腹を決めた。

この日は早朝から小杉氏の俳人仲間が一行を案内して吟行の予定であつた。

だが今日の一行は、用意された朝食には一切手をつけず黄鶴の看病をしていた。

「小杉様、申し訳ない。仲間が病人になつてしまったので、しばらく滞在の許しをいただけないだろうか」

春雄が黄鶴の看病をしたいと申し出た。さらに続けて

「少しでも動けるようになれば黄鶴を連れて三人は帰国をしたいのだが」

心からの謝意をもつて伝えると小杉は微笑みながら

「病人を残して吟行に行くなんてことはできないでしょう。わかりました。皆さんで看病してくれるなら私どもも安心です」

小杉はいたって冷静に答えた。

「それでは些少ですが、これを 宗匠との吟行の足しにしていただけませんか」

春雄は懷から二円出し、小杉に渡そうとした。

「いやいや心配はご無用。これは皆様の帰りの旅費に当ててください。それにこれだけで

は足りないでしようから」

小杉が金を入れた封筒を用意していた。

小杉邸の庭には五月とはいえ既に初夏の白い花が咲いている。十湖はいつの間にか空を見上げて句を詠んでいた。

夏嬉し是から能登の鹿島立ち

「涙もろくなったわい」

泣いていた昨夜の十湖はもう笑っていた。

吟行に行く俳人仲間が玄関に続々集まってきた。

やむなく小杉氏等は、十湖だけを連れて市中を案内し、吟行することにした。

一旦、邸を離れば一週間は俳人仲間に客人と招かれ句会が催され、昼も吟行で帰らないはずである。

春雄らは玄関で吟行に行く俳人仲間の一行を送り出したあと、三人で身支度を始めた。

このまま帰路につくつもりである。

「それにしても小杉様には申し訳のないことをした」

春雄は気まずいひとことを口にした。

「でも、この人たちは皆いい人たちですね。宗匠がいつものようにわがままを言わなけ

ればいいが」

黄鶴は苦笑いをしながら、十湖のことを心配していた。

さて、春雄らが帰路の列車に乗り込んだ頃には、小杉氏一行は山中温泉を目指していた。そこは芭蕉が曾良と別れた場所でもある。

十湖は機嫌よく匂づくりに励んでいた。

谷間や見渡す限り桐の花

山中温泉芭蕉堂に詣り

新しき御像もよしや夏木立

昼は芭蕉堂のわきの環翠楼で川魚料理に舌鼓

川魚のもてなしもよし若葉かけ

七尾では老舗菓子店で銘菓に遭遇

能州の銘菓に添ふや古茶の味

能登へ回ってからは北陸本線寺井駅へ出た。

ここからは自動車が用意されており駅から佐野まで走る。

十湖には初めての体験である。

その自動車は屋根がズックを張ったもので、エンジンがかかると横揺れした。

「おいおい、この車は大丈夫かね。どっちへ向かって行くのか。前から人が来たぞ」

後部座席で体を丸めて十湖が叫んだ。

国道は日ごろ馬車が走っているためかデコボコで、乗り心地はいまいちだ。疾走する先

から馬車が走ってくる時はぶつからないか不安がよぎった。

それでも十湖はいたって上機嫌だ。

車の窓を開け風を切って走っている時などは、匂がいくつも浮かんできた。

自動車の風薫るなり夏木立

自動車や田植えの中を風切って

長かった北国行脚も五月の末には終えて、ひとり帰庵した。

帰宅して昼寝もならず高胡坐

まだ体のどこかに自動車のクッションの居心地を憶えているようで、腰の落ち着かない十湖であった。

雨の訪問者

大正十二年四月、新聞記者小原が浜松駅へ降り立った時、朝からの雨は上がる気配はなかった。

駅前で車に乗り込んだ小原は、三つ揃いの紺の背広に帽子を被るスタイルで、この天気具合ならこの格好が最適だと安堵した。年格好は四十歳を超え、背が高く髪を七三に分け案外甘いマスクの男である。

車のワイパーが不規則に動き、前方の景色はまるで見えない。忽ち暴風雨に変わってしまった。

「まさかこんな日に訪問してくるとは、相手が思っていないだろう」

小原は一人呟いた。

今日、これから会う相手は奇人だという。それなら、この天候が相手を怯ませてくれようと鷹を括っていた。

小原を乗せた車が東へ向かう。進む道はぬかるんでいる。そのうえ穴ぼこが多く車は左右に揺れた。四十分程度で着くと運転手が言っていたが、この道もしばらくの辛抱だった。

その頃、自宅で待つ十湖は、妻佐乃と雨の庭を眺めながらお茶をすすっていた。

「この天気でも来るだろうかのう。新聞社の編集局長だと聞いているが、どんな男かなあ。わしもそろそろ伊勢へ参ろうと思つていた矢先に取材の申し入れがあつた。世間でいうわしの奇人ぶりを取材したいとは、まあ、いい度胸をした奴だ」

「今日は雨でお客様が来ても来なくても接待の準備はできていますから、心おきなくお話したらいかがですか。でも余り変人振りを發揮しない方がいいのではありませんか。そのとおり新聞に書かれてしましますよ」

佐乃は来客が来るのを待ちわびている十湖の顔を見ながら、いつものようにたしなめた。一方、小原の乗っている車が市野村辺りへきた時、近道を行こうと笠井往還から脇道へ反れた。それがいけなかつた。

「お客さん、すみませんね。車が泥の中に嵌ちやつて動けません。ちよつと後押ししてくれませんか」

初老の運転手が申し訳なさそうに声をかけた。

「困つたなあ。なんとかありませんか。この雨じゃ濡れて一張羅の背広が台無しになつてしまう」

「替わつてやりたいですが、運転するのは私ですので、お客様にはすみませんが」

「仕方ない。やりましょう」

しぶしぶ小原は傘を差しながら車を押すが、到底びくともしない。

しかたなく傘は諦め両手で押す。

自分の体がずるずると下がり始めタイヤが泥を跳ね返した。

やがて、泥穴から車が出た時は、小原の足元が泥まみれのうえに、背広がずぶ濡れ状態になってしまっていた。

十湖の邸の前へ着くと、車は警笛を鳴らした。今来たぞと合図をしているようだ。家の中から佐乃が傘を持って出迎えた。

「遠くからお疲れ様でした。それにしても何でこんなに汚れたのですか」

車から降りた小原に、佐乃は腰の手ぬぐいを差し出しながら訊ねた。

「車が泥に嵌ってしまつて雨の降る中を押し出したんです。まったく災難でした」

小原は気の毒そうに頷く佐乃の顔を見つめながら恐縮していた。

邸の庭はこの雨で藤も芍薬もすべての木々の新緑がそよぎ立ち、酷くあやめられていた。廊下越しに見える十湖の着物姿は、滝のように落ちる軒先の雨を書斎から見つめ、銀髯を撫で下ろしつつ黙想しているようだ。

小原はこの古い俳人にして新しいものはロイド眼鏡かなと思った。

「始めてお目にかかります。新愛知新聞の記者の小原と申します。この度はご多忙中時間をおとりください、ありがとうございます」

通された部屋は十湖の崇拜する偉人や門弟などの書画で隈なく占領されていた。障子には書の書き古しや書き損の紙が張られ破れた穴を塞いでいた。芭蕉の木像や天竜川大氾濫の当時拾った川流れの大黒や恵比寿さんなどが床に祀られていた。

福神像は頬が欠けたり顎が落ちたりしていて根っから福福しくはなかった。

小原は様々なものが陳列された部屋の光景に啞然としていると

「わしが氾濫から救い出してやったのだ。その奇特を褒めて福の神が迷い込むだろうと思つて待っているが、一向にやつて来ぬ。恩知らずの神様だ」

と福神像を手にして十湖は笑い飛ばした。小原も合わせて苦笑いをしていた。

佐乃が熱いお茶の入った湯飲みを二つ、盆に乗せて戻ってきた。

「早速ですが、翁のこれまでの人生をお聞かせしてくれませんか」

小原は改まって本日の用件を切り出した。

「し切り直されると話にくいな」

十湖はそういいながらも、これまで何度か天竜川が氾濫し田畑、自宅も何度か流されたこと、そのたびに自分の事より隣人の救済にあたってきた事を縷々話した。

当時の十湖は丸裸同様になつても構わず、蔵の中の米麦を一俵も余さず潔く投じて奉仕した。喜んで母うも協力したのであった。

明治時代の実業家金原明善が、河川改修に奉仕し始めたのもこのときである。

以来今日に至るまで「明善と十湖」を並べて、世間はその人と成りを評してきた。

したがって亡き明善翁の事を最もよく知っているものはこの十湖であり、両翁の間には人の知らぬ面白い話もたくさんあると続けた。

「わしはいつでも貧乏している。だが、しかし大正の二宮（尊徳）といわれた。そんなわ

しが故明善とは向うを張って社会のため競争したことがあるから面白からう」

十湖はいつの間にかふんぞり返っていた。

とかく記者が相手となると、十湖は気が大きくなつて口が軽くなる。弟子の中には記者も多く特別な人間だとは思っていないからだろう。

小原は鞆から取材帳を取り出し、十湖の口述を書き始めた。眼はいつも十湖を見つめていた。

十湖が語るのには年少時代は寺子屋の漬垂れ小僧をして小笠郡横須賀へ通い四書五経を読んだり文字を手習わされていた頃、七夕の短冊の古いやつを解いて、習字をしたこともあった。

本を買うのに金がないため、祖父の使い古しの虫の食った本を裏打ちしてまで、明善を真似て金原流の節約をしたことがある。

もとより、そう極度の儉約をしなければならなかった訳は、いずれも天竜水災で数次に亘り祟ることがあったからだだった。

明善が天竜治水に尽し始めた折、十湖もまた明治元年先帝の江戸東上に際して、自村堤防の急策にあたり、五月その竣成を告げ無事通過を図ることができた。

こうしたことが故明善の向うを張った話の一例として伝え、最近「嗚呼金原明善翁」の印刷物を出したと豪語した。

十湖は明善の事となると、やけによく喋る。

小原は十湖のペースで話が進むのを恐れ、話題を変えてみた。

「ところで聞くと、翁は日本に初めて伝わった西洋式の軍学をやったところがあるようですが、それはどんなことをやったのですか」

「横須賀藩の若いやつらや田原の藩士とともに、その頃デンデコデンと称した軍隊教練をやったのだ。その後（陸軍編成）鎮台が各地にできたが、引き続き兵隊をやっていれば今頃は大将ぐらいにはなっているはずだぞ」

熱っぽく語る十湖だが、性格としては到底軍人の畑に居座っていることはできなかっただろう。

「寡婦になった母りうが、懸命に家のことをやっていると見ると忍びなく、わしは軍服を脱いで百姓姿になった。田地の整理に汗を流した結果が荒無した河原の十四町歩を元の田に帰り、やれやれと一安心することができた」

父親の源左衛門は十湖が十六歳のとき病没しており、それからは母親がひとり十湖を育てて来た。十湖はしんみりと語っていた。

小原は十湖が時に大きな声で話したりするが、非常にまじめなる性格の所有者だと思った。決して奇人とは思えない。

「わしを生んでくれたのは母親だ、母親だけは孝行せねばならぬ。父は亡いからせめて一人の親の生きている間は滅多に外出もできぬ」というふうに優しい一面も見せていた。さらに、もって生まれた風流味から、芭蕉の句の

間仮名、隙仮名を耽読した。

「俳句の道は床しいものだ、芭蕉逝きて芭蕉なく、其角逝きて其角に対する蕪村あり、といえども遠く芭蕉に及ばず、それならわしがひとつ芭蕉になるまでやってみよう」

十湖のこんな負けん気が心の倦んだ時も奮闘心の起こった時も、悉くこの俳句の微妙と味わいが基礎においてなつたらしい。

東海道では名古屋を第一として、遠州はそれに次ぐ俳道盛んなところである。

十湖はついにこの俳諧に入らんと決心し、夷伯、嵐牛の両師匠について学びはじめた。両師匠は共に逝きさらに春湖の門弟となり十湖を号するに至つた。

小原は翁の生活のすべてが、俳諧によつて出発していると知つたのだった。外は陽が落ちかかつて雨が降り続けている。

今日小原が十湖に会うため、事前に調べておいた十湖の記録によれば

俳諧を基礎におく風流生活に没頭しようと決心した十湖にして、これは不似合いなる官界の飯の味を知っていることもあつた。

十湖は明治二十三年府県制のしかれた年に戸長・県官の実績を当時の大迫県令に見込まれ、引佐龜玉郡長にすえられた。

以来八年間に亘つて勤続したが、八年後法改正があり辞任、官界から足を洗つた。

小原はこの辺のところを詳しく訊ねてみたところ

十湖がいうには在職中はいかなる上司をもあえて恐れず、年に一回は郡内の各町を輪番

にその町の芸者を総揚げして大騒ぎをしたものだという。

今ならばたちまち綱紀の紊乱問題を引き起こすであろうが、十湖は平気な顔をして部下の吏員に慰労の大宴会を張った。二升八合の酒を徹夜して、ゆうゆう傾け尽くした記録を持っていた。

——我が好きは酒と女と山と水早起き俳句吉のため

これが十湖翁の標語であり主義であつたのだ。吉のためとは「吉平」自身のため、即ち十湖自身のためであると、この狂歌をものにして信条としていたのである。

さらに十湖は言う。

「芸者を総揚げしても寝妓をかうという意味ではないぞ。女房一人今わしの傍に座っている。佐乃（七十二歳になる）子一人しか愛していなくても、女が好きであれば仕方があるまい。大勢の女を知ることだけが好きという条件にはならんからな。今でもやらしてみよ。きつと芸者を揚げて遊ぶくらいの事をけっこうしてみせる。早起きかそれも毎朝しているよ。どんな日でも電燈の消えぬまに朝飯を食ってしまわんと、そう一日不愉快でたまらんからの、まて、好きなものにもうひとつとろろ芋があるぞ。郡長時代にもとろろ郡長とあだ名されたくらいだ。宿屋でもわしの顔を見るとすぐに芋を買いに走るほどだからな」

ところが郡長時代にあれば飲んだ酒を、この六年間は一滴も飲まないでいる。「どうして酒は飲まないのですか」

と小原が糺すと、

「それは貧乏が身にしみているから飲まないのだ。世の中に怖いものはこの貧乏神よりほかはない。これからは明善が遺したほどの金ができないものかと思っているのだが」

十湖は口髭の周りを撫でながら

「しかし、おい、君は酒を飲むだろう。他人の酒までは儉約しないさ」

と云いつつ妻佐乃を呼び、酒を持ってこさせた。

十湖は杯を取り小原に差し出した。

「いえ、私だけが飲むんでは申し訳がない。翁も一緒にどうか飲んでください」

「うーむ、今日は客の接待だから。ひとついたただくか」

十湖は他人に飲ませること、他人に食わせること、他人にものを与えることは屁のように思ってもおらん。

だから年中食客が絶えたことがない。乞食で御座れ、渡り者の壮士で御座れ、一切その差別はない。

多いときには十人も二十人もゴロゴロ食客が十湖の墨摺りをしている。

こうして十湖の家は日一日と貧しくなっていくのであるが、十湖は平気なもので他山の石のごとく眺めている。

その夫人もまたいやな顔一度だつてしたことがない。食客大歓迎の家は天下広しといつても十湖の大蕪庵以外にはないであろう。

やがて、酒が入った為か座が開けてきた。

佐乃は夕食の準備で席をはずした。

小原は三つ揃いの背広は脱ぎ、ネクタイも緩め胡坐をかい、メモを取り続けた。

十湖は小原が話しかけなくても回想して話を進めている。小原が時折口を挟むが、そのたびに大きな声で笑う。

小原には十湖が根っから人と話をするのが好きな性分のように思えた。

「今はわしが年を取ったので食客が少ないが。訪ねてくればいつでも引き受ける、その代わりに俳諧を語るに足らぬやつは叱りつけてでもこれをやらかしてやる」

「これをやらかすとはどういうことですか」

小原は言う意味がわからず口を挟んだ。

「これとは墨を摺らせることだ」

つまり俳句のハの字さえ知ってさえいれば、何十日大蕪庵に寝転んでいても、出て行けと迫られることはない。

主人も食客も同じ食べ物を一室に摂り人間の平等に生きていくことを痛快としているのだ。

かつて国勢調査が行われた時、十湖は「営業」の欄に俳諧、報徳、農業改造と記入して届け出たことがある。

俳諧業というものもあるいは農業改造業と称する稼業もおそらく天下一品のものであったろう。

「百姓は改造せねばならぬ。鋤をコチコチもっているようじゃ日本の農村は発展せぬ」

それは大農法を達観しての主張であり、またその実行するをもつて業務と心得ているのだ。農業政策は十湖にとつて郡長時代に報徳仕法を取り込んで実行していた経過があり、さすがに詳しい事を小原は知った。

次に報徳の精神について十湖に訊ねてみた。

「報徳業か、ハハハ、実は今小田原と野州とにある報徳社のそもそもは、このわしが祀る事を許された。品川弥二郎さんが内務大臣のときに一人で出願したところ、いやはや各方面から苦情が出て、神社を建てるくらいならなぜ相談してくれぬ。仲間に入れてくれるかとの談判にあい、とうとうわしは許可を得た膳ごしらえだけで引つ込み、それから後は例の明善なんか世話を焼いて今日に至らしめたのだ。おれのこの話はマア品川さんが知っているだけでね、とにかく報徳宗の繁昌をなよりのなじみにしていることもわしの稼業のひとつなんだ」

さらに続けて報徳仕法を実践するには人との交流のために俳諧が必要だという。

「俳諧業かこれはさすがに盛んだな」

と十湖は笑顔をちらつかせながら言い放った。

「たとえばお寺で授戒があつたり血脈などのというふうには、わしの弟子になりたいというものは皆弟子にしている。数えてみたら、わしの血脈がかかっている門弟はまず一万二、三千人、生きている確かなところで一万人かな。何しろわしのように下手な俳諧師だから、

これとて立派な門弟ができないが、大木隨處、藤田如月、内藤木松、など俳人仲間に相当知られているのも出ている。門弟のおかげで今度計画している俳諧行脚も無銭旅行ができるわけだ。もつともこの貧乏老父のことだから金の要るところには行かないと決めている。困ったものだ、この貧乏病はこの付近の藪医者とても治してくれぬ。死ぬまで全快の見込みはないと悟っているので血脈がかかつていて門弟が迷惑してくれてはわしもあの世に行つて楽往生ができない。そうだ、今の達者なうちに破門状を印刷しておき、いざという場合にその破門状を郵送する考えもいい」

十湖一流の奇人的言辭である。

死ぬ前に破門状を出すという十湖には、大日本製糖の取締役をしている松島保平氏をはじめ、二三の子女がいるが

「子のものは一つも貰わぬ、親ともあるものが子の家にニヨコニヨコ行けるものか。用事があれば呼びもする、又子の方から来れば良い」

と言つて、ただの一度だつて孫の顔を見に行つたことがない。

「わしが死んだ後も倅の厄介になろうとは思わぬが、ヨクヨクこのわしに惚れている門弟、遠州生まれで現四国の板野瀬戸村にいる富田高吉（号一鷹）というのが来て先生の死なれた時には葬式をやらしてくれ、費用は一万円くらい浜松の銀行に供託して置いてもいいと申し込んできている。愛いことを言うのでこれだけは破門させまいと考えている」

いよいよ歳に似ぬ大きな声で、十湖のご機嫌顔が良い。

外は相変わらず暴風雨は治まらず閉められた雨戸が悲鳴を上げていた。小原はここで取材のペンを置いた。

数日後、十湖から新聞社の小原あてに手紙が届いた。心勇んで封がなかなか切れない。中には去る五月三日浜松の西来院に徳川家達公が築山御廟に藤見の為招かれた折の詠句と故明善と二人で撮った写真が同封されていた。

小原は十湖との訪問記事の冒頭にこう記した。

——十湖翁は語るところは奇人、行うところはいずれも妙、しかも稚拙に富んで世人の度胆を抜き、あつと驚かせることがしばしばある。而してまた翁は贅沢を言わず、散財することは知って蓄えることは知らぬ人であり超然として家計の傾くことなどお構いなし。そこに翁の面目が窺われ同時に奇人的俳味の横溢していることを認めうる。……

こんな書き出しで記事は特集を組み六回掲載し、その最後に、送られた一枚の写真と詠句を載せた。

ありがたや風の若葉の下遊び

浜松は風日和なり青葉吹く

写真は金原明善と十湖が二人一緒に座っている記念写真であり、どちらの顔にも笑みはなかった。

遠陽市場大火

大川の堤防沿いにある豊西尋常小学校の昼の鐘が鳴る。

子どもたちは一斉に学校を飛び出し、我が家を目指そうとしていた。各自の家で昼食をとるためだ。

突然、男子生徒の一人が西の方を見て大声で叫んだ。

「炎が上がってるぞ。火事だ。俺の家のほうだ」

学校の西といえば遠陽市場のある方角である。

火は立ち昇り黒煙が舞い上がっていた。

燃え方が生半可ではない。まるで天をも焦がす猛火である。

大正十三年三月六日午前零時、生徒たちはあわてて市場のある方角へ走った。大人たちも足早に向かっていた。

皆、火事の野次馬である。

現場では手押しポンプの消防隊が消火に当たっていたが火の勢いは治まらない。

大人たちが綿屋の前で必死に綿をちぎっては外へ放り出している。火が襲ってきて類焼するのを避けるためだ。

これを見た生徒たちは野次馬どころではない。大人に交じって手伝った。

やがて、火災は十二棟以上を焼失して午後一時三十分鎮火した。

焼け跡には女の子が裸足のまま人形を抱えて泣いていた。市場の長屋に住んでいたらしい。

この騒ぎに十湖は気が気ではなかった。

若いころならすぐにでも飛び出し人を束ねて消火に当たるのだから、既に七十六歳になっている。

口先だけは相変わらず達者を取り柄とあって、地元の消防隊をけしかける。

弟子とともに駆けつけて見る惨状に、焦げ臭い匂いを嗅ぎながら今自分がやれることは急がねばと思った。

その日のうちに被災者には金品を配り、援助活動を指揮していた。

焼け落ちた遠陽市場とは、浜松の中村藤吉を中心とする商人たちが笠井に隣接する恒武町地内に新たに商店街を建設したものだった。

「遠陽市場」と名付け明治二十三年十月二十日打ち上げ花火とともに開設式が行われた。

笠井には江戸時代以前から笠井市場が発達し流通が盛んで賑やかな土地柄であった。

それに目をつけた浜松の商人たちが入り込もうとするが、既に店舗の入る余裕がなく、しかも店賃は余所者には冷たく高かった。

それでも浜松と比べれば取引は盛んであり、ここは何としても商人らは引き下がれなかった。

不満は燻つていても商人たちが一つにまとまれば何とかなるとの決意で、浜松の財界中村藤吉が立ち上がった。

中村藤吉は職業小間物商、事業家。報徳仕法をもつて明治時代に浜松地方に財を築いた財界人のひとりだ。

中村家はもともと農家だったが、永禄十二年家康が浜松に城をかまえるとともに商売を始めた。

天秤棒や背負籠などを販売していた。そこから「棒屋」の商名が生まれたという。

天明五年に分家したのが初代藤吉で、今の藤吉は安政元年浜松宿田町の棒屋中村商店に誕生した次男中村清助が棒屋六代目を名乗ることになった。

明治六年肴町間淵酒屋のはな子と結婚。

明治十二年には浜松町会議員に当選、明治二十年奥山の富幕山に林道を作り、山を買って杉苗を植えた。明治二十一年からは十年かけて、現在の北区引佐町をはじめ都田町にも植林事業を展開し、自費で道路修築や新道開通、橋梁仮設を行った。

明治二十五年浜松委託販売会社を設立。四年後浜松信用銀行（現浜松信用金庫の前身）の設立発起人となり、設立後は取締役就任した。

さらに明治三十五年浜松商工会議所会頭、明治四十年大日本報徳社役員、明治四十四年

浜松市会議員等を務め活躍したが、大正十二年七月十三日逝去した。

こんな逸話が残っている。

——商売をする事は、どこかで人のためにならなくてはいけない。人を困らせて自分だけ儲けようなどは、商業の道ではない

藤吉は不良田を買って良田にすることが大きな楽しみだったという。

同年七月十四日は暑さ真っ盛りの中、藤吉の葬儀は地元財界人の大物等で弔辞が延々と続いた。

十湖も列席していたが、自分の出番の頃には列席者は皆疲れ切った表情をしていた。いや、むしろうんざりしていたというのが正解だろう。

十湖は立ち上がると霊前に向かって一句、大声で捧げてひきあげてしまった。

われひとり冷たい国へ行かしやるか

笠井の南の外れは畑ばかりで、街道は笠井の本町から西へと延びていく。この畑に突然家並みが出現した。

浜松から出店する四十店舗が店を構える。

笠井市場が手狭になっていて、当然のように新しい市場には人の波が押し寄せる。市の日には周辺町村のみならず、遠方からも繰り込む商人らで活気があった。

笠井はもともと木綿織物の集積地であり、小物の販売だけでなく織物の取引が圧倒的に占めた。

この時代、戦争へと突入する時期でもあり、織物の取引は一段と活況を帯びた。

笠井の歴史を振り返ったとき、以後大正の初めころまで遠州織物産地として景気が沸騰していった。

十湖ら俳諧師にとっても市場の開設は文化の交流にもつながり歓迎した。

鳴らす手が市の景気よ朝夷子

遠陽市場の出現は古来からの街道にも影響を及ぼした。

笠井二俣街道通称笠井往還はやがて市場を通り抜け南へ延びていくのである。

だが、いつまでも戦争に依存した景気は長続きせず、やがて活況に陰りが見えてきた。

大正時代になり、産業の近代化とともに物流は変化して、市場の店舗も流通の拠点は浜松町に移しはじめていった。

笠井は交通の不便さもさることながら、主要産業の織物の需要も減り、店舗の歯抜けが目立ちはじめ、市場は長屋群として形を変えつつ笠井往還に残った。

大正十三年、折からの西風を受けて火は瞬く間にその長屋を総なめにした。

火災による焼失は十四軒。これにより明治二十三年に開設して以来、三十四年間続いた

遠陽市場は完全に機能を失っていた。

まだ火災の臭いが残る焼け跡で、十湖はひとり自らの人生と重ね合せていた。

栄華はやがて没落し、人は立ち向かわなければならぬ。

悲惨だと思うより未来への足掛かりを探し求めている。

石楠花の人

霧雨が大蕪庵の庭を濡らしている。

いつもなら縁側で新聞を開いている十湖だが、今朝は腕組をしながらぼんやりと庭を眺めている。

その先には、石楠花の淡く赤い花が映っていたはずである。

七十七歳の老境に入った十湖にとっては、うつとうしいどころか気持ちが悪く着くのに一役買っている。

初夏には高野山方面への吟行行脚を計画している。

いま、その同行者を決めかねている。

七十歳を越えたからといって足腰が弱いわけではないが、事をうまく運ぶための細かい段取りをするのが億劫になってきた。

しかも、旅先で迎えてくれる俳人仲間に無作法があつてはいけないと、心配りをすればするほど同行者を誰にすればいいのか気にかかる。

人数はいつも三人を同行させる。

それぞれに役割があり、毎日の生活分担をてきぱきと処理してくれれば、自分は発句す

るだけでよい。

それでも吟行に出れば付き合ひの細部にまでこだわりの同行者の態度に激怒し大きな声を張り上げることがこれまでに何度もあった。

今回の旅が自分にとっては最後になるかもしれない。

発句も後世に残るものを作りたいとの思い入れがあった。

庭の石楠花は、自ら目立とうとはしないが、十湖の目には何か訴えかけているようにも感じた。

この花木の苗は、今から七年ほど前、弟子の鈴木黄鶴が持ってきた。

「この庭に自分の好きな花を植えてもよろしいでしょうか」

小さな声で十湖に申し出があった。

「男の癖に花作りに興味があるのか。最近の家業にも熱が入らんようだし、いったいどうしたのか。もっと句作りに専念できないのか」

十湖は一蹴したい気持ちで怒鳴った。

だが、その理由を聞いて無下には断ることができなかった。

黄鶴が初めてこの大蕪庵にきたのは十九歳のころである。

それから六年で立机を許した。若いのに案外筋がいいと感心していた。以後、楽転居淡水と号した。

大正十一年のときに初めて北国行脚の同行を許した。そのときは旅の金銭勘定を初め、

現地での折衝など、事細かに先輩春雄との意見を交えながら、順調な旅を展開した。

十湖が今でも胸につかえているのは、同行していた黄鶴を旅の途中で帰してしまったことだった。

今回はそれを償い、同行を許してしまおうかと思っていた。

そんな矢先に、世間の風が十湖のもとに黄鶴の不評を送ってきたのである。

北国行脚に同行させる二年前、黄鶴は平口不動寺周辺の辺田原地区に桃の果樹園を経営していた。

その傍ら地域の青年たちに、俳句を披露し指導した。

その気のある者は自分の弟子にしていた。その数、十数人に及んでいたという。

併せて画の道も盛んで翌年には画会を開催し、その売上金を不動尊の改築の資金にと不動寺に寄付をしたこともあった。

彼に画の道の指導をしたのは、天竜龍山村の大石黄梅だった。きっかけは黄梅がまたまた大蕪庵に画会開催のため立ち寄った時のことだ。

黄鶴が自分の植えた石楠花を縁側で画いていた時に黄梅の眼にとまった。以来黄梅の手ほどきにより画に専念することが多くなったのだった。

おかげで画も売れて羽振りが良かった。

しかし、いいことは長続きしない。二年後には果樹栽培は儲からないと断念し、小松に瀬戸物店を開業した。その傍ら印刷を副業としていた。

「いらつしやいませ。今日はこれがよく売れていますよ」

「そうですか。ご主人は店に出てこないけど、いかがですか」

俳句仲間の客に言われて、妻はむつとした表情を隠しながら

「印刷業もやっているものですから、そちらで仕事をしています」

妻が甲斐甲斐しく店先で客と対すること、商売はしだいに上向いていった。

十湖からは印刷の仕事を廻してくれ、俳句から遠避けないよう配慮してくれていた。

そのため俳句の方にも力を入れ、翌年二月には春雄、隨處らとともに市内の北浜館で早春風雅会を開いた。結果は盛況であった。

その上、十湖が弟子を大切にするという態度を見て奇人にして人に優しいと、十湖の名声を一段と高くした。

新愛知新聞の編集局長が十湖のことを連載で掲載したいと訪ねてきたこともあった。

四月二十日には黄鶴が発起人となり、不動寺境内に十湖の句碑を建立した。

果樹園経営していたころに不動寺へ世話をかけてきたことと、十湖への黄鶴からの償いであった。

山の月心も高う眺めけり

既に芭蕉の句碑は弘化二年に地域の俳人たちによって建立されていたが、そのそばに十

湖の碑が添う様に建てられた。

除幕式には十湖自身が出席し、満悦であった。黄鶴の望みどおりの結果となった。だが店を切り盛りしていた妻が、病気で入院したとたん瀬戸物店の客が減少し始めた。仕事がかまうまいかなとなると、身辺では疎んじられる。

「俺は何をやってもうまくいかない」

黄鶴は自らを責めた。

そのうち本人の奇行も目立ち始め、変人との噂も絶えない。

家庭生活面では酒びたりの毎日に変わっていった。

不評は彼の経済面から出たものであり、だからといって俳句や画に素質がない訳でもない。持前の偉才は生きているはずだった。

庭を眺めていた十湖は、やはり黄鶴を同行させようと決めた。

いろいろと思案に暮れたが、十湖は今回の旅への同行者三人を一番弟子の随處に告げた。

「黄鶴に決めましたか。私もそれが良いと思っていました」

随處は、心から十湖を労った。

大正十四年、十湖七十七歳の六月一日早朝、紀州からの招待を受けて、一行は高野山へ向けて出立した。

門人鈴木卓曙、小田松陰、鈴木黄鶴の三人が同行した。

予定では高野山から山陽方面に向かい、神戸に滞在して六月十五日帰庵するはずであった。

出立の日は既に梅雨入りしていたが、この日は正に梅雨の晴れ間といったところか。首途にあたり

梅雨晴の不二を後に首途かな

十湖も年のせい、浮き立つ様子もなく淡々と静かに旅立った。

同行者の一人に加わった黄鶴は、三年前に十湖に同行した北国行脚の時を振り返っては、あの時のような自分本位の行動は十湖が懲りているはずだ、今度ばかりはないだろうと鷹を括っていた。

それに交通機関もめざましく進歩して、汽車は一旦乗れば目的地まで連れて行ってくれるとあって、行く先への不安もなくなつた。

だが今の自分には一緒に行く資格はないはずなのに、十湖が同行を許してくれたことに感謝した。

黄鶴は汽車の窓に顔をよせながら、十湖に弟子入りした頃を振り返っていた。

十湖は今の自分を必要としている。うぬぼれではないが弟子中でも中堅になり、十湖が常に何をしようとしているかが分かるようになった。

本当は画人として大成したいが、俳人としても十湖についていこうと思っていた。
高野山へ向けての汽車の中では、十湖が少しばかり窓を開け外の空気を楽しんでいた。

すれ違う汽車より風の薫りけり
涼風をのせて走るや汽車旅行

やがて、汽車は名古屋駅に煙を吐きながら滑り込んだ。

早朝に浜松を発ち名古屋に着いた一行は、無事目的地に着いた安ど感から解放され硬くなつた体を伸ばしていた。

涼しさや中京の名も広小路

その日は名古屋に泊まり俳人仲間の接待を受けた。

翌日は案内役一人を連れに加え、関西線に乗り込み紀州和歌山へと向かう。

伊賀の柘植駅付近は旧伊賀街道とその宿場街が残っており、車窓には田園風景が広がっている。

窓を開けると田植えが済んだ田園から颯爽とした初夏の風を運んでくる。

芭蕉が生まれた地でもあり十湖ら一行には感慨深い。

「いい天気になりましたね。これなら秀逸な句が生まれそうな気配ですよ」
口をつぐんだまま外を眺めている卓曙に向かって黄鶴は声をかけた。

「そうだなあ。それより少し腹が減ったぞ」

卓曙は句作りのことより食い気の方が気になっている。

駅で買った柿の葉すしの包みを解き昼食とした。鯖を柿の葉で包み、押しをかけた鮎で柿の葉を剥がして食べた。

柿の葉は食べないが随分と葉がやわらかい。産地によっては、塩漬けにするとところもあるがここのは違った。酢の匂いが心地よい。脂ののった鯖のまつたりとした旨みがあった。暫く汽車は駅に留まり、反対車線の汽車が来るのを待つ。

心して聞かうよ伊賀の田植え唄

そのうちに発句も交わらん田植え唄

などと十湖が詠んでいるうちに一行の腹が寿司で満たされたのか、向かい側の座席からいびきが聞こえてくる。

友五人汽車の昼寝もまたおかし

吉野口を過ぎ、まもなく高野山への入口、高野口駅へ着く。

やっと、かねてより期待していた高野山にたどり着いたのだ。まさか七十七歳にしてくるとは十湖自身でもおかしかった。

いつでも来ることができたはずなのだが、過去を振り返ってみるとなぜかその時間が見当たらなかった。いやそれより、常に目の前にある課題に挑戦し、それが生きがいであった過去に後悔はなかった。

高野山の空気に触れ、十湖は自らの人生にそろそろ幕引きの時が来たのかなと大きな息をついた。

高野山は、平安時代の頃より弘法大師空海が修行の場として開いた高野山真言宗である。比叡山と並び日本仏教における聖地であり、現在は「壇上伽藍」と呼ばれる根本道場を中心とする宗教都市を形成している。

一行は高野山の境内を参詣して後、地元門人の紹介で今晩の宿泊地である極楽橋方面へ向かった。今では極楽橋駅があり、下車するとケーブル駅となっているが、十湖一行が訪ねた時代はその駅を作っている最中であつた。

極楽橋は明治時代には不動橋・板橋とも呼ばれて橋のたもとは銅像（現在は石造）の地藏尊が祀られている。

橋の向こう側には「極楽茶屋」と呼ばれる茶亭があり、旅姿の男女が休んでいた。

十湖一行は宿泊場所を極楽橋付近にとると、極楽橋を渡り不動坂を歩いて高野山まで向

かった。およそ二キロ半ほどの道のりであった。

その夜、月を見ながら十湖はいくつもの句を詠んでいた。

橋越すや空に真如の夏の月

山の上の都に聞くや時鳥

時鳥我も拾わず落とし文

数日ここで滞在し、伊勢へと向かうことになる。

初期の目的であつた高野山への参詣を終え、六月十五日予定どおり帰庵するも黄鶴は以後十湖の前に顔を出すことはなかった。

一行の中では門人として中堅の立場なのだが、自ら画人としての道を進むべく去つていった。

大正十五年には経営していた瀬戸物店を廃業し、以後の生き方はさらに波乱万丈に富み、短歌を詠み画家の鈴木三朝との交友が始まり、地域の画家としての地位もしだいに固まっていく。

一方、十湖の側は同行した鈴木卓曙、松陰が中心になり、大蕪庵を守り立てていくことになる。

十湖の旅も今回の高野山紀行が最後になるとは誰も思つてはいなかった。

十湖不器

桜も散り果てた鴨江寺の境内には、昼の煙火の音が轟き渡った。

大正十五年四月二十五日、かねてから十湖の門人等で計画されてきた十湖の銅像除幕式の当日である。

高野山の管長を導師に招請し、十湖の銅像が現れたときには既に冷酒の振舞は底を尽き、出席者の手には記念の絵葉書があった。

銅像建設計画は二年前、県外の門人ら二名が主唱者となり、寄付始めから建設業者までの決定を進めてきた。

一年後には建設寄付金の累計が三千二百四十六円に至り予定の額まではあと二割程度に迫った。

弟子の随處と江山は上京し県選出国會議員の岡田、一木両大臣に会い建設への協力を求め、さらに最大の協力者として申し出のあった阿波の富田久三郎を訪ね、銅像建設の特別援助を願い意見を聞いてきた。

翌月には寄付総額三千九百二十五円となった。

銅像の製作者は高村光雲の弟子で静岡県出身の山本瑞雲と決定し、建設予定日も十湖の

誕生日である大正十五年三月十七日とした。

だが後日、建設予定日は変更になる。

まだ建設資金が足りない。随處等弟子たちは寄付集めに奔走した。

結局、予算を大幅に上回る八千四百八円となり、そのうち二千元の大金が徳島の富田久三郎の篤志によるものであった。随處は十湖の交遊の篤さに感激した。

この時十湖は七十八歳、口を出すことなく弟子等の行動を見守ってきた。周囲では十湖の性格が寄る年波のせい或少し丸くなってきたかなと思わせるほどだったに違いない。

銅像に我霊入れん千代の春

銅像にとりまかれけり春の人

鴨江寺境内に立った十湖像は、以後この地で安息の日々を送ることになる。

しかし、この後十湖自身の身に不幸が無い込んでくるとはだれが想像したことだろうか。

銅像建立から三月も経たない七月九日、十湖は前日以来から食が進まず、体調の不良を訴えて 朝から床に臥せたままだ。

「おい、サイダーをくれ」

十湖は力ない声で台所にいた佐乃を呼ぶ。

「はい、ただいまお持ちします。でも今朝からサイダーしか口にしないけどよろしいので

すか」

十湖の返事はなく、ただ呻くばかりである。

枕元へサイダーを届けた佐乃は医者に見せることを決意する。

しかし、医者と薬は大嫌いという十湖には診療に来てもらうとはいえない。

佐乃は一計を案じ近所の神谷医院を訪ねた。

「神谷先生、どうか暑中見舞いという口実で我が家までお越し願えませんか」

常に懇意にしているので、神谷は簡単に承諾し佐乃の想いに同情した。

昼ごろ医者神谷を訪ねると、床に伏した十湖を見て声をかけてみた。

「毎日暑いね。そこまで来たので顔を見に寄ってみたが、具合はどうかね」

十湖からは返答がない。

神谷はおもむろに懷中から聴診器を出して診療すると、十湖は観念した顔で呻いている。

神谷は十湖に心配かけないように

「まあ、暑いこの頃だから体を大事にせんと。うまいもの食べて、しばらくじっとして
いるがええ」

といつて床から離れた。

「非常に心臓が悪いから近親者や門人の主なる者へ通知した方がよいだろう」

神谷医師は別室で佐乃に小さな声で告げた。

三時ごろまでには随處、春雄、鶴眠ら門人が駆けつけてきた。

「なんだお前たちは、わしの見舞いか。老骨を如何せん」

このころには十湖は病床で平然としている。

だがそれは長くはもたなかった。

容態が悪化し夜七時ころ神谷医師が来診し、注射二本打つことで安静と見受けられた。今月に入り、中元の依頼で多くの書を書くなど、多忙が過労に繋がったのか。周りが注意すればよかったと反省しても後のまつりであった。

随處はもはや時間の問題だと、弟子たちで作った自転車隊を招集し各方面へ十湖の危篤を知らせた。

明くる十日には十湖の呼吸が忙しく重体を医師に告げられ、午前八時眠るがごとく逝去した。

享年七十八歳であった。

その夜は各地から門人等が集まり通夜に永の別れを惜しみつつ、十湖の遺吟を立句として連歌を行った。

大正十五年丙寅七月十日於大撫庵興行

十湖翁登化御通夜脇起俳諧の連歌

海も見す山も眺めず月一夜

十湖居士

皆腸にしみる秋風

枕水

雁の声行方はるかに偲はれて

竈のけふり低う地を這ふ

冬構何不自由なき暮しふり

立働きの寒い顔せて

軍跡大きな穴を埋めかねて

正直ものゝ拾ふ小財布

廓より又も禿のとゝけ文

すいも甘いも知り会た仲

空蟬の縁切り榎高々と

月の出汐の夏はことさら

朴訥な薩摩訛りの玄間番

時計の針はいつも正確

何くれて飼ふやら馬の肥え太り

神苑廣う塵ひちもなし

今少し花の盛りの長ければ

只徐ろに春の暮れ行く

杵張の続の光りの麗かに

餌をまく鳩の物怖もせず

豊水

風哉 拙誠

鶴眠

応声

卓曙

隨處

松蔭

可伊

勤堂

金令

如山

守中

文友

隗古

草雨

江山

一童

一聞で十を知るものいち悪く

勘當してのあとの心配

年の尾の迫れと昼夜酒ひたり

焰も吐かん龍のあら彫

僧正が出たのは姫の命乞ひ

契りはせしな夫ならぬ夫

相乗りの船も油断のなかりけり

掛引多き羅紗の商

笙の音のいよいよ渡る月さやか

殊勝氣になく虫は何やら

笠寺の其笠松の色替えす

族は情けといふは最

よしあしはとまれ嘶をよくまとめ

水を流したやうな静さ

炷の薫りたたよふ花の庵

暮れ行く春を惜しむ友垣

満尾

以道

夢跡

冬扇

夢谷

文邦

蒼壽

知新

春雄

淵澄

精神

富水

竹石

翠光

醉雨

秀甫

知新

十一日近親者で密葬を行い、天竜河畔の火葬場で荼毘に附した。

これより一週間後の新聞には十湖の葬儀のことを伝えていた。東京の地でこれを見た十湖の盟友石倉はひとり手を合わせた。

その刹那、走り出して自宅の箆笥の奥に仕舞つてあつた小瓶を取り出した。

なかには長い白髭が入っている。かつて十湖から手渡された十湖自身の髭である。約束されたどおり、庭にある句碑のそばに埋め、村葬への想いをつのらせていた。

二十五日村葬が地元の源長院で行われる。

正午までに千五百人余の会葬者が食膳を供し一時より葬儀が開始。

参加した寺の数は五十寺におよび葬列は笠井の町から寺まで村道を延々と続いた。翌日の新聞は各紙が前代未聞だと報じていた。

それにしてはあつけない最後であつた。春には自らの銅像の除幕式で意気揚々としていたのに、銅像に十湖の霊を自ら入れたためか、あの世へとひとり旅立った。大往生であつた。

淡々と式が進む様子を境内の片隅で見ていた石倉は、ふと、ひとり泣いて別れるのは十湖の葬式らしくない。俳名高く門人の数も万を数えると豪語した十湖は、常に人の意表に出て常人に外れた行動をすることが多かった。

これが人呼んで奇人と呼ばれていた翁の翁たる所以だが、思えばそれは彼の過去に由来する。

石倉は自分が彼の死を讃える記事を書くならどう書くのか、時代を遡りながら反芻した。今、手に数枚の原稿をもっている。

隨處から手渡された十湖の経歴文であつた。

それによると

十湖翁は嘉永二年三月一七日遠江国浜名郡豊西村中善地に生まれた。

幼名を吉太郎と云つた。

父は源左衛門、母は龍子という村内の旧家である。

ある日隣村羽鳥村源長院の住職西尾恵全師が私用をもつて訪ねて来た。

母の膝で眠る嬰兒を見て

——この子は将来必ず名を成さん、大切に養育して怠るなと云つた。

両親の愛は一方ならず、五歳の時には源長院に入り恵全師について読書、習字を学び、彼の成長は非常に早く、師を驚かせたほどだった。

安政六年十一歳の時、同国小笠郡横須賀町の撫要寺に入り、住職戒誉玄當副住職釈真友の二師に就いて習字、仏典及び漢書を学んだ。

その記憶力と才智は、はるかに群集を押して賛嘆する者少なからず。

万延元年十二歳の時、郷里中善地は天竜川の西岸にして洪水氾濫して伝来の田畑数町歩一夜にして悉く荒れ地と化してしまった。

十四歳の時、弟が若くして亡くなり、学業をなげうって一時帰郷するに及んだ。

それより両親の元に在って日々荒れ地の復旧事業に精励し、夜間及び休日には読書と習字に勉めた。

当時この地方では俳諧が流行していたことから興味を持ち、この道に入る雅号を十湖と称した。

同郡下大瀬村年立庵夷白と称する宗匠がおり、その門に入り学ぶ。

彼の持つて生まれた才能と学識によって忽ちにして驚くべき進境を示した。

師匠をして後に託すべきはこの少年なりと感想を漏らすほどであった。

元治元年十六歳の時父親が病にて没す。

孝行息子であつた彼の悲しみに対し、親戚縁者らにより慰められ月日の経過とともに漸く愁眉を開くに至つた。

慶応元年十七歳の時、衆人に推され師に許されて判者披露の式を挙げ、新進有為の宗匠として世にその名を謳われた。

その後幾何もなく師翁が逝かれ年立庵の号を継承して活躍する。

さらに掛川町在の俳人伊藤嵐牛に就いて一層研鑽を積み、嵐牛死後東都の俳哲橘田春湖に従いて学び、その他国学、漢学、詩文、佛典を当時名のある有賀豊秋、小栗松露、西有穆山、松山関應の諸家に学びいずれもその道を極めた。

これより前相模の人安居院庄七、浅田勇次郎の両氏がこの地方に來た折二宮尊徳翁の報

徳の道を鼓吹するや四方の篤志家競つてその説を聞いた。至誠、勤労、分度、推譲の四綱領を主とし、いずれも実学にして経世上に利することの少なくないことを知り、次第にその門に入り教義を広め隆盛を極めた。

慶應二年一九歳の時深く心に期するところあり、この道の大家に就いて疑問を解き奥義を極めんと相模の国小田原町に福山瀧助翁を訪ね教えを乞ひ、精励刻苦一か年その要領を習得して帰つてきた

以後この道のため尽力した。

このころ徳川幕府は政を失して内外多事、物価は騰貴し民衆は疲弊した。

東西の志士は憤然立てあるいは勤王攘夷を云いあるいは倒幕復古と云い、国中に殺伐の風が吹き安堵の日はなかった。

やがて明治の新天地を見るに至つたが、住いする地は不幸にも天竜川の氾濫、決壊の繰り返し。

付近一帯の地は一夕にして泥土と化した。衣食に窮する者数百人、彼は報徳をもつて母とともに自家の蔵を開放して、貯蔵していた米麦八十俵を悉く拋出し窮民の救済を全うした。

明治六年二五歳の時、衆に推されて戸長の職に就く。

二八歳にして縣會議員となり、三二歳の時縣令大迫貞清氏の着目するところとなり拔擢されて縣吏となる。

明治十四年七月、三三歳の時遠江国引佐龜玉郡長に任ぜられ、事務は公平にしてかつ速やかに実践し行政に貢献した。

その例を挙げれば橋梁架設すること大小五十余箇所、道路の修理広狭八十二箇所、神社仏閣の修繕、学校役場の新築三、農学社の設立、図書館建設、堤防増築、共進会の開設、殖産興業の勧誘、農事改良、報徳碑の建立、勤儉の美俗の勧め、忠孝篤実者の褒章など枚挙に暇あらず。

これらの事業に対しては多くの資金を必要とするが、概ね賦課に頼らず有志の義捐によるものであった。

これこそ十湖の異彩として評価できよう。

明治十九年三十八歳の時、母が病で危篤になったとき職を辞して郷里に戻りその看護にあたる。間もなく逝かれる。

このころ前自由党の党首板垣退助が民権の運動に勉めれば、自由の旋風に共鳴して大いに活動する。

だが自由なる語は誤解を招く。自ら戒め句を詠んだ。

伸ばすとも手足は出すな蚊帳の外

明治二十三年第一回衆議院選挙の際は立候補をするも、国家の大局面から同志である他

候補に譲るため辞退するに及んだ。

その後政界を遠ざかり専ら俳諧と報徳の二道に力を傾注し後進に道を譲った。

俳諧の奥義はただ雪月花を詠じてその感動を表出するという浅はかなものではない。

大宇宙間に存在する森羅万象の整斎として、敢えて序次を失わず時期を違えず、真正なる美を感じて人として悉くあるべし社会としても斯くあらざるべからずという。

清明なる意を寓して讚賞嘆美するものこれをこの道の神髓にして要するに大を知り小に勉め、真に就き美を表し善に止まり徳に入り、道に遊び和を楽しむものにしていわゆる誠意誠心も修身齋家も治国平天下の道このなかにある。

されど儘に十七文字というが如き中に高遠微妙な意を含めてこれを人に知らしむるものは決して容易なことではない。

満を去りて謙につき恭敬にいて儉素を持し天命を奉じて人事を尽くすを貴ぶと。

さてこの高潔なる徳風を慕いて諸国より漫遊し来れる俳人韻士書家が畫工あるいは行脚の僧と云うが如き一二の食客はかつて絶えたることなし。

かかる状態ならば一時は生計も困難にして、先祖伝来の不動産も多くは人手に渡さざるを得ざるがごとき窮境に陥ることもあり。されど磊落奇偉なる主人は清貧をもつて自ら任ずればあまり苦にもせざりしものと見え燕の子に告げて云う

巢立ちせよ燕　我が家を売らぬうち

妻女は佐乃という同郡蒲村伊藤家の出にしてもつとも貞淑にして温雅なり。

年中間断なく来訪するところの食客に対しても少しも厭い嫌うことなく食前より衣服に至るまで何くれと世話をして倦怠の気無きが如きは実に夫人の模範として推奨すべきである。

家には三男三女あり長男を吉平といい撫松庵枕水と号して画才に富む。

次男藤吉は一路の戦役において奮闘して名誉の死を遂ぐ。

三男保平は実業に従事し某会社の経営者である。

十湖翁には多くの庵号あり、年立庵、白童子、撫松庵、七十二峰庵、大菩庵などがある。

年立庵は高弟吉川為龍が継ぎ、その没後は倉島、白童子は上村紫桜が受けた。七十二峰庵は大木隨處に、大有庵は備後の人で藤田如月に授く。

そのほか交友が厚かった名士に渡邊興鳳、河野廣、田中正造、頭山満らにして全国に散在する数千の門人はその徳を永く後世に伝えんとして銅像建設に奔走した。

大正十四年喜寿の賀筵を開かれ本年五月二十五日浜松市鴨江寺境内に銅像の除幕式を挙げ、悠々自適の余生を大撫庵に送り七月十日七十八歳の生涯をとじた。

隨處から手渡された原稿を一読した石倉は、以上をもつて十湖の全貌を伝えたとは思えなかった。

ただ翁の報徳仕方の足跡を辿ってみたに過ぎないと感じていた。

境内の片隅で参列者の行列を眺めていると、十湖の晩年は俳人として門に集う者の数も増し、決して失意のものではなかったと確信していた。

「石倉さんお久しぶりです。よくぞ遠くからお越しください義父も喜んでいることでしょう」

そう云って近づいてきた初老の男性がいた。

「・・・」

石倉はこの男に見覚えがない。

「私ですよ。鷹野です。鷹野弥三郎です。今では記者ではなくて小説家に足を突っ込んでいますからね」

「思い出しました。つぎさんのご主人ですね。奥様のお加減はいかがですか」

石倉は懐かしそうに言放った。小説家なら妻の鷹野つぎのほうが有名である。だが義理の父の葬式だというのに姿が見えないのが気になった。

「それが今日は私だけが参りまして、つぎは子供の具合が悪く、家を離れることができないのです」

「さぞお困りでしょうね。葬儀が済めばただちにトンボ返りですか」

「そうなります。夜行の列車の時刻を今確認しようと思っていたのです」

鷹野は家のことが心配らしく、懷中時計を取出しては落ち着かない様子であった。

「鷹野さん、私は今十湖翁の人生を振り返って、記事にして紹介しようと考えていたところですが、あなたの持っている十湖像の一端をご教示いただけませんか」

石倉は鷹野に対し自らの足りない部分を示して欲しかった。

「私が翁の伝記を作り始めたきっかけは翁に対する世評に興味を持ったことでした。当時翁のことを人として俗物、英傑にして愚鈍、野心家にして世捨人、聖人にして小人、大欲にして無欲、剛胆にして小心などと世間ではたった一人の人間に当てはめ評しています。これは悉く矛盾だらけです。私が翁に照らしてみると奇とは思えません」

鷹野は真剣な表情で、まるで何か得体の知れないものと対峙しているような顔つきで云った。一息するとさらに話を続けた。

「翁の行動は人の意表に出て混乱しているように見えても、その裡を透かして見ると秩序整然たるものでした。翁の英傑にして剛胆なる所以です。時に軽薄で世間の笑いものにされるときは翁の愚鈍にして俗物なる所以です。常に道徳を口にしてひそかに善行し、自庵にて俳諧を楽しむ姿は真の聖人にして雅人であることを認めるでしょう。だが酒色に嵌り財産を失いかけたり、無益なことに狂奔して喧嘩を買ってしまうことを見れば翁は確かに小人であり、むしろ狂人ともいうべきでしょう」

鷹野は十湖を世間がどう見ているかを淡々と話す。

「なるほど世間の評価はさまざまだ。鷹野さんご自身ではどう結論付けたのですか」
石倉は冷静に語る鷹野の十湖像を知りたかった。鷹野の次の言葉を待った。

「かつて、私が翁の伝記を作っているとき、翁にいかなる先人を崇拝するかと問うてみたことがあります」

「それは興味深い。ぜひお聞かせください」

石倉は両手を叩き喜びを隠せなかった。どうしても聞きたいことがそこにある。

「その答えに二宮尊徳、松尾芭蕉、渡辺崋山、林子平の四名を挙げてくれました」

「四人もいたのですか。その理由はお聞きになりましたか」

「ええ、今でも覚えています。尊徳は知行合一、言行一致、道徳家にして理財家なるがゆえに、芭蕉翁はわが風流の祖にして、津々つぎざる超然顔なるがゆえに、渡辺崋山は節操高く清々球のごとく汚濁に汚れず忠孝兼備の奇士なるがゆえに、林子平は憂国の士として拳々として節を守り稜々たる俠骨千古の士なるがゆえに、と、一人一人に接するように説きました」

鷹野はまるで十湖翁がそこに居るかのようによどみなく話した。

「この四人とは翁が目指していた人物像の一端であり、十湖像そのものではありませんか」
石倉は少し興奮気味に鷹野に迫った。

どう考えても十湖が向かおうと努めていた性格の、四方面を語ったという風に思われた。この四人の特徴を一丸として併せ持つとしたら、実に他の多数の名を挙げるにも等しく感動を覚えたに違いない。

この答えにより十湖の内面に熱望した一端は知られるものであり、その熱望をもって十

湖の生涯に実践し得た報徳仕方の業績の裏打ちとしては、褒めすぎではないと思われたのである。

「石倉さん、君子不器という言葉をご存じですか。荻生徂徠によれば容器には容量という限界がありますが、君子はそのような容器ではありません。言い換えれば君子は自由に、目的に応じ様々な人を使いこなすことができる人物の意だそうです。十湖翁が奇人とかいろいろな冠で云われてきた根源は、人の使い方にも政治手腕にも定まった容器はなかったからではないですか」

鷹野が云う君子論は十湖に繋がっている。石倉は鷹野の意見に共感し感動さえも感じた。

昭和十一年初夏、東京郊外にある市立サナトリウムで療養中のつぎは、開け放たれたガラス戸から入ってくる風に冷たさを覚えた。

「硝子戸を閉めて下さらない」

つぎはベッドの傍にいた弥三郎に、肩をすぼめながら細かい声で頼んだ。

弥三郎は木製の介添え者用の丸椅子から立ち上がりながら

「義父は俳句を友にして人生を謳歌していたね。僕の人生は後悔の連続だったけど君はまだまだ生きなくっちゃ、子供のためにもね」

弥三郎はつぎの視線の先にある凜とした花菖蒲を見つめながら、そっと硝子戸を閉めた。

後に十湖の実績と性格を評して郷土研究者の岩崎鐵志氏が自己の論文の中で次のように語っていた。

——郡長時代に培った政治手腕と報徳仕法をもつて農業改革をして、疲弊する農民を救済する努力、俳人として宗匠として弟子を育て、その成果を情報として社会に広めた力、これらを併せ持つ十湖は奇人変人など様々な冠をつけて呼ばれるが、その言葉の奥には人心を集め良好な人間関係を構築した十湖像が窺える。この人物を君子と讃えるなら、まさに十湖不器といわんやと

(完)

あとがき

十湖の人物像を調べることは、筆者の生まれ育った郷土の歴史を遡ることへと繋がり興味が膨らんで現在に至っている。

幸い十湖に関する地域資料が多く存在し、十湖像は俳人というだけではなく奇人とか狂人、はたまた聖人などの冠がつく存在であることがわかってきた。

あるとき「奇人俳人松島十湖」という本人の自叙伝に巡り合い、生涯が前半生で完結していた。そこでこの後を知りたいと自叙伝の裏付けを年表とともに試み、晩年までの足跡を辿った。資料中、十湖のお孫さんの故松島勇平氏が作った「十湖関連年表」は大変役に立った。

併せて記された現地を訪れ確認すると、奇人や狂人などと冠が着く理由は、足跡を調べれば調べるほど時宜にあった。パフォーマンスではなかったのかと思うこともしばしば。人間十湖を描き切るためには、その表裏の事実をもって明らかにすることが必要であった。常に十湖の行動に疑問を抱きつつ共感もして、結局、本書のタイトルは「十湖讃歌」となったのだが、決して十湖を英雄に仕立てたものではない。

あくまでも歴史資料に基づくフィクションであることを念頭に整理し書き綴ったもので、十湖と関係する人々との出会いと、資料の提供をいただいたことが大きな力となった。

近年、浜松市では十湖の遺徳を称え、十湖の名を冠した「十湖賞」俳句大会などを行っている。本書が若い人たちに十湖像を知っていただくきっかけとなり、イベント等を通じて郷土の歴史を理解し愛することへと導かれることになることを期待したのである。

なお、本書中懇切丁寧にご指導くだされ、ご協力いただきました関係者の皆様には、この場を借りて熱く感謝申し上げます。

令和三年三月 コロナ禍の情勢下において

著者

(主な参考文献) 敬称略

奇人俳人松島十湖	大橋亦兵衛
十湖発句集	松島勇平
尊徳の森	佐々井典比呂
尊徳の裾野	佐々井典比呂
松島十湖の生涯	神野志保子
遠州偉人伝	御手洗 清
浜松市史	浜松市
静岡県史	静岡県
浜北市史	浜北市
細江町史	細江町
近代静岡の先駆者	静岡新聞社
わが町文化誌笠井	浜松市
東区文化誌東方見聞録	浜松市
明治俳壇史	村山古郷
遠州報徳の夜明け	西遠合報徳社
東区俳句の里	句碑整備委員会

句碑集吟遊遠江

隨處物語

草土日記

春夏秋冬

遠州画人伝

細江のあゆみ

松島十湖翁の句碑と遺墨

西遠の句碑

六枚の肖像画

松島十湖の推譲

浜松市

池田充義

瀬在有年

鷹野つぎ

中道朔爾

細江町

牧田守弘

西原勲

美尾浩子

岩崎鐵志

【著者プロフィール】

秋童子

本名 秋山俊行（あきやま としゆき）

住所 浜松市東区笠井町

俳人十湖讃歌会 代表

（表紙画）

人去つてすみわたるなり庵の月

書・句 松島十湖
画 司馬老泉

